

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XX —

福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群の調査

1978

福岡県教育委員会

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-88-正誤表

頁	行	誤	正
15	25	(M [○])	(M ⁵⁴)
15	25	(Y [○])	(Y ²)
19	17	石原	石宗
25	3		29 (文献欄)
26	10	時代:史蹟	時代:史蹟
26	25	古代文化	古文化
27	7	報告書	報告書
27	8	石器 [○] 組合	石器 [○] 組合
27	14	現在発掘	現在発掘
28	22	築削	築削
38	3	(縮尺 1/40)	(縮尺 1/40)
40	8	灰褐色土層	灰褐色土層
40	9	灰褐色土層	灰褐色土層
42	25	二条	二条
43	15	床面上り	床厚上り
43	30	周堤	周堤
47	1	第12号	第14号
47	2	第14号	第16号
47	20	第12号	第12号
55	12	N80度N	N80度W
55	14	54.0 cm	54.8 cm
55	18	N84度E	N84度W
63	5	梁間柱間 107	梁間柱間 146
66	25	N3度W	N37度W
66	26	行間 66 cm	行間 606 cm
81	15	骨蔵器	骨蔵器
81	19	黒色土	黒色土
84	7	52 cm x 55 cm	52 cm x 55 cm
86	11	通室	通室
86	18	000室	000層
87	9	墳场内	墓场内
87	10	5枚以上	5枚以上
121	22	福采由陶器長胴壺	福采由陶器水注

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XX —

福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群の調査

1 9 7 8

福岡県教育委員会

序

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の調査は、昨年度をもって大牟田市から鞍手郡鞍手町までの全路線内発掘調査を終了しました。

この報告書は、鞍手郡若宮町・宮田町の縦貫道筑豊西インターチェンジ周辺で発掘調査された先土器時代から歴史時代の遺跡群のうち、歴史時代の遺跡の調査成果を主に報告するものであります。この報告書が鞍手地方の歴史時代研究の一助になれば幸甚です。

発刊するにあたり、発掘調査に参加していただいた地元各位、又整理作業に御尽力いただいた関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

昭和53年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 浦山太郎

例 言

1. この報告書は、九州縦貫自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行った事前調査のうち、昭和49年度から昭和50年度にかけて発掘した福岡県鞍手郡若宮町所在の咲花遺跡・北田遺跡・都地遺跡、若宮町・宮田町所在の汐井掛墳墓の調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の受託事業として、福岡県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に当っては、若宮町・宮田町教育委員会、若宮町老人会及び町内在住の多くの方々の助力を得た。
4. 本書の執筆は上野精志による。
5. 汐井掛第5号墳墓出土の銅銭の分析は東京国立文化財研究所保存科学部長江本義理先生に依頼しており、本報告には一部写真のみしか集録できないが、分析結果については、後日補編として出版する予定である。
6. 昭和49年及び昭和50年度に行なった九州縦貫道関係の調査は、主として山本文和主事と、栗原和彦・石山勲・酒井仁夫・副島邦弘・上野精志・児玉真一・中間研志・池辺元明各技師が担当した。
7. 掲載写真のうち遺構写真は上野精志が主として撮影し、遺物写真は九州歴史資料館技師石丸洋の指導の下に林志郎、前田次郎が撮影した。ただし汐井掛墳墓出土の銅銭については東京国立文化財研究所の江本義理先生による。
8. 実測図の作成は、遺構については挿図目次に上げたとおりであり、遺物の実測は上野精志、平田春美が担当した。
9. 製図については、上野精志、二神和子が主として担当した。
10. 本書の編集は、平田春美嬢の協力により上野が担当した。

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 一〇一
福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群の調査

目 次

	頁
I はしがき	1
II 鞍手郡若宮町・宮田町所在の遺跡について	3
1 先土器・縄文時代	3
2 弥生時代	4
3 古墳時代	7
4 歴史時代	12
III 咲花遺跡の調査	28
1 調査の経過	28
2 調査の内容	29
(1) 住居跡	29
(2) 土壇	33
(3) 掘立柱建物	36
(4) トレンチ	38
3 小 結	42
IV 北田遺跡の調査	44
1 調査の経過	44
2 調査の内容	46
3 小 結	46
V 都地遺跡の調査	47
1 調査の経過	47
2 調査の内容	48
(1) 遺 構	48
(2) 遺 物	70
3 小 結	74

VI	汐井掛墳墓の調査	77
1	調査の経過	77
2	調査の内容	78
(1)	遺構	78
(2)	遺物	86
3	小結	87
VII	おわりに	88
1	火葬墳墓について	88
(1)	墳墓の立地	89
(2)	骨蔵器と外容器	90
(3)	副葬品	95
(4)	墨書土器とヘラ書き土器について	98
(5)	火葬墳墓の年代	99
(6)	被葬者の性格と位置づけ	106
2	都地遺跡の掘立柱建物について	151
3	犬鳴川流域の奈良時代	152

図 版 目 次

咲 花 遺 跡

本文対照頁

- PL. 1** 咲花・北田・都地・汐井掛遺跡航空写真 東から
(日本道路公団提供) …… 3
- PL. 2** (1) 咲花・北田・都地・汐井掛遺跡遠景の航空写真 東から
(酒井仁夫撮影) …… 3
(2) 咲花・北田・都地・汐井掛遺跡遠景の航空写真 南から
(酒井撮影) …… 3
- PL. 3** (1) 咲花遺跡全景の航空写真 北東から (上野精志撮影) ……28
(2) 咲花遺跡全景 北から (上野撮影) ……28
- PL. 4** (1) 咲花遺跡第1号・第2号住居跡 南から (上野撮影) ……29
(2) 咲花遺跡第1号・第2号住居跡と排水溝 西から (上野撮影) ……29
- PL. 5** (1) 咲花遺跡第3号住居跡 北東から (上野撮影) ……31
(2) 咲花遺跡第3号住居跡のかまど 南東から (上野撮影) ……31
- PL. 6** (1) 咲花遺跡第1号土塚 東から (上野撮影) ……33
(2) 咲花遺跡第1号土塚遺物出土状況 西から (上野撮影) ……34
- PL. 7** (1) 咲花遺跡第2号土塚 東から (上野撮影) ……35
(2) 咲花遺跡第3号土塚 西から (上野撮影) ……36
- PL. 8** (1) 咲花遺跡第1号掘立柱建物 南から (上野撮影) ……36
(2) 咲花遺跡第2号掘立柱建物 南西から (上野撮影) ……37
- PL. 9** 咲花遺跡出土遺物 (石丸洋・岡紀久夫撮影) ……29—35
- PL. 10** (1) 咲花遺跡西トレンチ 南東から (栗原和彦撮影) ……38
(2) 咲花遺跡トレンチ出土遺物 (林志郎・前田次郎撮影) ……40

北 田 遺 跡

- PL. 11** (1) 北田遺跡遠景の航空写真 北西から (上野撮影) ……44
(2) 北田遺跡全景の航空写真 南から (上野撮影) ……44
- PL. 12** (1) 北田遺跡全景 北東から (上野撮影) ……46

- (2) 北田遺跡ピット群の状況 北東から（上野撮影）……………46

都 地 遺 跡

- PL. 13** (1) 都地遺跡遠景の航空写真 西から（酒井撮影）……………47
 (2) 都地遺跡発掘前全景の航空写真 北から（酒井撮影）……………47
- PL. 14** (1) 都地遺跡・汐井掛遺跡群航空写真 東南から（上野撮影）……………47
 (2) 都地遺跡航空写真 南西から（上野撮影）……………47
- PL. 15** 都地遺跡航空写真 北東から（上野撮影）……………48
- PL. 16** (1) 都地遺跡掘立柱建物群 南東から（上野撮影）……………48
 (2) 都地遺跡掘立柱建物群 北から（上野撮影）……………48
- PL. 17** (1) 都地遺跡第1号掘立柱建物 東から（上野撮影）……………50
 (2) 都地遺跡第2号掘立柱建物 東から（上野撮影）……………50
- PL. 18** (1) 都地遺跡第3号掘立柱建物 東から（上野撮影）……………53
 (2) 都地遺跡第4号掘立柱建物 東から（上野撮影）……………53
- PL. 19** (1) 都地遺跡第5号掘立柱建物 南から（上野撮影）……………55
 (2) 都地遺跡第6号掘立柱建物 南から（上野撮影）……………55
- PL. 20** (1) 都地遺跡第7号掘立柱建物 南から（上野撮影）……………58
 (2) 都地遺跡第8号掘立柱建物 西から（上野撮影）……………58
- PL. 21** (1) 都地遺跡第9号掘立柱建物 東から（上野撮影）……………60
 (2) 都地遺跡第11号・第12号掘立柱建物 南西から（上野撮影）……………63
- PL. 22** (1) 都地遺跡第14号・第15号・第16号掘立柱建物 北西から
 （上野撮影）……………66
 (2) 都地遺跡第14号掘立柱建物 南西から（上野撮影）……………66
- PL. 23** (1) 都地遺跡第15号掘立柱建物 北東から（上野撮影）……………66
 (2) 都地遺跡第16号掘立柱建物 南西から（上野撮影）……………70
- PL. 24** 都地遺跡出土遺物（岡・前田撮影）……………70

汐井掛 墳 墓

- PL. 25** (1) 汐井掛第1号・第2号墳墓の航空写真 北から（上野撮影）……………77
 (2) 汐井掛第3号・第4号・第5号墳墓の航空写真 東から
 （上野撮影）……………77

PL.	26	(1)	汐井掛第1号墳墓の骨蔵器出土状況	西から	(上野撮影)	……78
		(2)	汐井掛第1号墳墓の骨蔵器内火葬骨の状態	北から	(上野撮影)	…78
PL.	27	(1)	汐井掛第1号墳墓の墓壇	北から	(上野撮影)	……78
		(2)	汐井掛第1号墳墓出土骨蔵器		(上野撮影)	……78
PL.	28	(1)	汐井掛第2号墳墓の骨蔵器出土状況	北から	(上野撮影)	……79
		(2)	汐井掛第2号墳墓の墓壇	北から	(上野撮影)	……79
PL.	29	(1)	汐井掛第3号墳墓の骨蔵器出土状況	東から	(池辺元明撮影)	……81
		(2)	汐井掛第2号・第3号墳墓出土骨蔵器		(前田撮影)	……80—81
PL.	30	(1)	汐井掛第4号墳墓の骨蔵器出土状況	北から	(池辺撮影)	……82
		(2)	汐井掛第4号墳墓の埋置石組施設	南西から	(池辺撮影)	……82
PL.	31	(1)	汐井掛第4号墳墓出土骨蔵器		(前田撮影)	……82
		(2)	汐井掛第4号墳墓出土骨蔵器の底部穿孔状態		(前田撮影)	……82
PL.	32	(1)	汐井掛第5号墳墓の骨蔵器出土状況	南から	(上野撮影)	……84
		(2)	汐井掛第5号墳墓の骨蔵器内火葬骨の状態	南から	(上野撮影)	…84
PL.	33	(1)	汐井掛第5号墳墓墓壇内よりの銅銭出土状況	南から	(上野撮影)	84
		(2)	汐井掛第5号墳墓出土骨蔵器		(林撮影)	……84
		(3)	汐井掛第5号墳墓出土の銅銭		(江本義理撮影)	……86

挿 図 目 次

咲 花 遺 跡

	頁
Fig. 1	若宮町・宮田町内遺跡分布図 (縮尺1/25,000) (上野精志作成) … 4—5
Fig. 2	宮崎窯跡出土須恵器実測図 (縮尺1/3) (上野実測・製図) ……13
Fig. 3	咲花遺跡地形図 (縮尺1/200) (上野・内田始実測, 二神和子製図) 27—28
Fig. 4	咲花遺跡遺構配置図 (縮尺1/200) (上野・内田実測, 二神製図) 27—28
Fig. 5	咲花遺跡第1号・第2号住居跡 (縮尺1/40) (上野・内田実測, 二神製図) ……30
Fig. 6	咲花遺跡第3号住居跡実測図 (縮尺1/40) (上野・内田実測, 二神製図) ……31—32
Fig. 7	咲花遺跡出土土師器実測図 (縮尺1/4) (上野実測・製図) ……32
Fig. 8	咲花遺跡第1号土壇実測図 (縮尺1/40) (上野・内田実測, 二神製図) ……34
Fig. 9	咲花遺跡出土須恵器実測図 (縮尺1/3) (平田春美実測, 二神製図) ……35

- Fig. 10** 咲花遺跡第2号・第3号土坑実測図 (縮尺1/40) (内田実測, 二神製図) 35
- Fig. 11** 咲花遺跡第1号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 二神製図) 36
- Fig. 12** 咲花遺跡第2号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 二神製図) 38
- Fig. 13** 咲花遺跡西トレンチ土層断面図 (縮尺1/60)
(栗原和彦・小味山ゆり・千野祐道実測, 二神製図) 39
- Fig. 14** 咲花遺跡東トレンチ土層断面図 (縮尺1/60)
(小味山・千野実測, 二神製図) 40
- Fig. 15** 咲花遺跡トレンチ出土土器実測図 (縮尺1/3) (平田実測, 二神製図) 41

北 田 遺 跡

- Fig. 16** 北田遺跡地形図 (縮尺1/1,000)
(日本道路公団原図・上野作成, 二神製図) 43—44
- Fig. 17** 北田遺跡地形・遺構配置図 (縮尺1/200) (上野・内田実測, 二神製図) 44
- Fig. 18** 北田遺跡トレンチ南壁土層断面図 (縮尺1/60) (内田実測, 二神製図) 45

都 地 遺 跡

- Fig. 19** 都地遺跡第1号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)
(上野・小味山実測, 二神製図) 49
- Fig. 20** 都地遺跡第2号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 二神製図) 51
- Fig. 21** 都地遺跡第3号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (石山勲実測, 二神製図) 52
- Fig. 22** 都地遺跡第4号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 二神製図) 54
- Fig. 23** 都地遺跡第5号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)
(上野・赤峰義則実測, 二神製図) 56
- Fig. 24** 都地遺跡第6号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 二神製図) 57
- Fig. 25** 都地遺跡第7号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 二神製図) 58
- Fig. 26** 都地遺跡第8号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (赤峰実測, 二神製図) 59
- Fig. 27** 都地遺跡第9号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (赤峰実測, 二神製図) 60
- Fig. 28** 都地遺跡第10号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (赤峰実測, 二神製図) 62
- Fig. 29** 都地遺跡第11号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (内田実測, 二神製図) 63
- Fig. 30** 都地遺跡第12号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 二神製図) 64
- Fig. 31** 都地遺跡第13号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 二神製図) 65

Fig.	32	都地遺跡第14号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 二神製図)	66
Fig.	33	都地遺跡第15号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 二神製図)	68
Fig.	34	都地遺跡第16号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40) (上野実測, 二神製図)	69
Fig.	35	都地遺跡出土須恵器実測図 (縮尺1/3) (上野実測・製図)	71
Fig.	36	都地遺跡出土土師器実測図 (縮尺1/4) (上野実測・製図)	73
Fig.	37	都地遺跡掘立柱建物模式図 (上野作成)	74
Fig.	38	都地遺跡掘立柱建物方位, 面積比較図 (縮尺1/60) (上野製図)	76

汐井掛 墳 墓

Fig.	39	汐井掛第1号墳墓実測図 (縮尺1/10) (上野・小味山実測, 上野製図)	79
Fig.	40	汐井掛第2号墳墓実測図 (縮尺1/10) (上野・小味山実測, 上野製図)	79
Fig.	41	汐井掛第3号墳墓実測図 (縮尺1/10) (舟山良一実測, 上野製図)	80
Fig.	42	汐井掛第4号墳墓実測図 (縮尺1/10) (小味山実測, 上野製図)	83
Fig.	43	汐井掛第5号墳墓実測図 (縮尺1/10) (上野実測・製図)	84
Fig.	44	汐井掛第1号・第2号・第3号・第4号・第5号墳墓出土骨蔵器実測図 (縮尺1/3) (上野実測・製図)	85
Fig.	45	汐井掛墳墓・都地原墳墓・柳ヶ谷墳墓地形図 (縮尺1/2,500) (伊東登美子製図)	89—90
Fig.	46	熊本県狐塚墳墓復原図と骨蔵器実測図 (二神製図)	96
Fig.	47	福岡県出土骨蔵器集成図1 (縮尺1/8) (二神製図)	112
Fig.	48	福岡県出土骨蔵器集成図2 (縮尺1/8) (二神製図)	113
Fig.	49	大分県出土骨蔵器集成図 (縮尺1/8) (二神製図)	114
Fig.	50	佐賀県・長崎県出土骨蔵器集成図 (縮尺1/8) (二神製図)	115
Fig.	51	熊本県出土骨蔵器集成図 (縮尺1/8) (二神製図)	116
Fig.	52	宮崎県・鹿児島県出土骨蔵器集成図 (縮尺1/8) (二神製図)	117

表 目 次

Tab.	1	若宮町内遺跡地名表 (上野精志作成)	16—22
Tab.	2	宮田町内遺跡地名表 (上野作成)	23—27
Tab.	3	咲花遺跡第1号掘立柱建物計測表 (上野・平田春美作成)	37
Tab.	4	咲花遺跡第2号掘立柱建物計測表 (上野・平田作成)	37

Tab.	5	都地遺跡第1号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	50
Tab.	6	都地遺跡第2号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	50
Tab.	7	都地遺跡第3号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	53
Tab.	8	都地遺跡第4号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	53
Tab.	9	都地遺跡第5号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	55
Tab.	10	都地遺跡第6号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	58
Tab.	11	都地遺跡第7号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	59
Tab.	12	都地遺跡第8号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	61
Tab.	13	都地遺跡第9号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	61
Tab.	14	都地遺跡第10号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	61
Tab.	15	都地遺跡第11号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	62
Tab.	16	都地遺跡第12号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	64
Tab.	17	都地遺跡第13号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	67
Tab.	18	都地遺跡第14号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	67
Tab.	19	都地遺跡第15号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	67
Tab.	20	都地遺跡第16号掘立柱建物計測表（上野・平田作成）	70
Tab.	21	都地遺跡掘立柱建物一覧表（上野作成）	75
Tab.	22	九州地方火葬墳墓一覧表（上野作成）	118—134
Tab.	23	和銅開珎・万年通寶・神功開寶出土一覧表	135—150

付 図 目 次

本文対照頁

Fig.	①	咲花遺跡・北田遺跡・都地遺跡・汐井掛遺跡周辺地形図（縮尺1/5,000） （若宮町・宮田町原図・酒井仁夫・上野精志作成，伊東登美子製図）	3
Fig.	②	咲花遺跡・都地遺跡・汐井掛遺跡群地形図（縮尺1/1,000） （日本道路公団原図・上野作成，二神和子製図）	3
Fig.	③	都地遺跡地形図（縮尺1/300） （石山勲・上野・内田始・小味山ゆり・赤峰義則実測，二神製図）	48
Fig.	④	都地遺跡遺構配置図（縮尺1/300） （石山・上野・内田・小味山・赤峰実測，二神製図）	48
Fig.	⑤	汐井掛遺跡群地形測量図（縮尺1/400） （酒井・上野・池辺元明・高田一弘・舟山良一測量，二神製図）	78
Fig.	⑥	九州地方出土骨蔵器編年試案図（縮尺1/8）（上野作成，二神製図）	99

I は し が き

I は し が き

福岡県内の九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は昭和44年度に始まり、昭和51年度には大牟田市から鞍手郡鞍手町までの全路線内の発掘調査を終了しました。

直鞍地区では鞍手郡内のみで遺跡の存在が知られ、昭和49年度より昭和51年度までの3ヶ年間に渡って発掘調査が実施された。

鞍手郡若宮町・宮田町に係る発掘調査の経過や関係者は（「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」一Ⅷ一）1977年（昭和52年）2月1日に詳しく述べられている。そこで、ここでは本報告に記載しようとする咲花遺跡、北田遺跡、都地遺跡、汐井掛墳墓の発掘調査の経過について概略に触れることにする。

（1）咲花遺跡

咲花遺跡は昭和43年に実施された九州縦貫自動車道建設に伴う直鞍地区の遺跡分布調査と、路線決定後に行なわれた第2回目の昭和45年春の遺跡分布調査では発見されていなかったが、第3回目の昭和49年1月のより綿密な分布調査が実施された時に、遺物散布地として確認され調査地点に追加されたものである。

昭和49年4月より開始された若宮・宮田地区の調査は遠園遺跡、小原遺跡の二班により進行され、遠園遺跡の班は調査終了後に比較的面積の少ない咲花遺跡・北田遺跡の調査に移行していった。他の一班は宮田町内の筒井田条里、平原遺跡の調査に入った。

咲花遺跡は山口川に掛る橋桁の建造物設置場所のために早急に調査の必要な地点でもあった。そこで山口川に近い河段段丘の先端部分にブルドーザーにより表土除去作業を行ない遺構が発見されたので本格的な調査を開始した。さらに翌年の昭和50年度には慎重を期して遺跡の拡がりを再度確認するために遺構の検出された地点と東方側の丘陵地との間の水田にトレンチ二本を設定し「だめ押し」調査を行なった。トレンチを設定した地点には遺構の拡がりは考えられず直ちに終了した。なお、昭和49年度の第1次調査における調査面積は5,325㎡、昭和50年度の第2次調査面積は301㎡で、合せて5,626㎡を調査した。

（2）北田遺跡

北田遺跡も咲花遺跡と同じく昭和49年1月の第3回目の分布調査の折に発見されたもので、土師器散布地として追加調査された。北田遺跡の位置は縦貫自動車道本線と県道若宮一福間線の進入道路に当たり、文化課としては本線内の遺跡調査をまず手がけた。道路公団側としては昭和50年年度内に若宮・宮田町内の総ての調査を終了したい旨の申し出があり、遺跡の範囲は狭く期間も多くを要しないと判断して一部咲花遺跡と合せて調査を実施した。結果によっては本遺跡の南方側、つまり山口川寄りに遺跡が存在するのではないかと憂慮したが、北田遺跡には

これといった遺構の検出がなくこれより山口川寄りには氾濫原と考えられたので調査は実施しなかった。なお、北田遺跡の調査面積は436㎡である。

(3) 都地遺跡

都地遺跡も咲花・北田遺跡と同じく昭和49年1月の第3回目の分布調査の際に遺物散布地として追加されたもので、北田遺跡と同じく本線に出入りするインターチェンジの料金徴収所付近である。咲花・北田両遺跡の調査の終了後、直ちに都地遺跡第1次調査に入る。ここでは第14号から第16号掘立柱建物が検出されたがなお遺跡は広範囲に渡ると考えられた。北側の丘陵斜面の高い方は未だ水田に利用されて刈入れ前の為、拡張できず、南側の北田遺跡方面にはブルドーザーにより表土除去作業をしたが、柱穴群の発見はなく中止した。又丘陵と丘陵の谷にもトレンチを設定し調査したが遺物の発見もなかったため第1次調査を終了した。

第2次調査は遺跡の北側の東部で第1号掘立柱建物が検出された地域である。この地域は土地買上げの問題が生じていて、調査範囲は限られていて全面発掘はできなかった。

第3次調査の時点では既に土地問題は解決されており、第1次、第2次調査の残り範囲の全面発掘が出来た。

以上、3回の調査により16棟の掘立柱建物が検出された。都地遺跡はインターチェンジ内であって調査範囲が限られ、掘立柱建物はさらに路線外の東側の丘陵上にも広がっているものと考えられる。なお、都地遺跡の調査面積は4,107㎡である。

(4) 汐井掛墳墓

汐井掛墳墓は汐井掛遺跡群発掘調査の折に、偶然に発見され調査されたものである。汐井掛遺跡群は昭和43年の時、既に宮田町上有木字高平に在る江戸時代の人で神谷武蔵墓が調査予定地になっていたものの他の木棺墓、箱式石棺墓、古墳などの存在はしられていなかった。

汐井掛遺跡の東方に在る柳ヶ谷遺跡の発掘調査を昭和49年4月より開始して弥生時代・古墳時代などの住居跡・貯蔵穴などを検出した。これらの遺構、遺物は当初の予想を上回るもので柳ヶ谷より汐井掛の丘陵が目ざれ、調査予定地でない所でも遺跡の存在することが十分考えられたので柳ヶ谷遺跡より西へ西へとブルドーザーにより表土除去作業を行なって遺構の有無を確かめた。その結果、柳ヶ谷遺跡の直ぐ西方の所では都地原遺跡の発見、さらに西方に進むと都地遺跡が在り、第1号掘立柱建物などが検出されて第2次調査となった。そして汐井掛B遺跡や汐井掛第1号から第3号古墳の発見となる。さらに丘陵全体を伐採すると古墳や箱式石棺墓などが数多く発見された。これが汐井掛第4号～第40号古墳、汐井掛A遺跡である。

以上のような経過で汐井掛B遺跡、汐井掛A遺跡発掘調査の折に汐井掛墳墓も発見され調査されたものである。

Ⅱ 鞍手郡若宮町・宮田町所在の遺跡 について

Ⅱ 鞍手郡若宮町・宮田町所在の遺跡について

福岡県鞍手郡は、福岡県のほぼ中央部を南より北へ連なる遠賀川の中流域西側に位置する。鞍手郡4町の内、小竹町は遠賀川の両岸域、鞍手町は一支流である西川流域に、若宮町・宮田町は犬鳴川流域に広がる地域である。犬鳴川流域は北方は鞍手町、西方は宗像郡福岡町等、南は飯塚市と三郡山地をもって境とし、三方を山に囲まれた小盆地とも言える地域で、歴史的には先史・原始より遠賀川流域文化圏に属しているところである。

この犬鳴川流域には古く江戸時代より古墳などが知られており、特に古墳が数多く分布していて、それらの内、国指定史跡である装飾古墳の竹原古墳は全国に著名なものである。

九州縦貫自動車道は若宮町の北方から宮田町の中央部を経て鞍手町・直方市へと連なるが、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財の発掘調査による若宮町所在の遺跡群は、犬鳴川の支流である山口川の右岸（Y59）遠園，（Y4）茶臼山，（Y67）茶臼山城，（Y5）小原の各遺跡。左岸に（Y49）咲花，（Y6M1）汐井掛，（Y57）都地，（Y58）北田，（Y8）都地原，（Y9）柳ヶ谷の各遺跡が在り、宮田町所在の遺跡は有木川の左岸に（M54）筒井田，（M51）平原の両遺跡がある。以下、犬鳴川流域でも若宮町を中心に、各時代の遺跡を概観する（遺跡名前記の番号はFig.一1の分布図の番号と同じ）。

1. 先土器・縄文時代

この地方において現在のところ、最も古い遺跡として九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査において発見された汐井掛遺跡のナイフ形石器があり、これは先土器時代の遺物である。遠賀川流域全体をみても先土器時代の遺物は2、3しか発見されていなく近いところでは遠賀川右岸の北九州市八幡西区香月の馬場山遺跡のナイフ形石器がある。

縄文時代前期になると、遠賀川河口は所謂、「古遠賀瀉」を形成していたらしく、この瀉周辺に貝塚が点在して営まれ、漁撈生活を主とした集落が出現する。「古遠賀瀉」最奥の貝塚は直方市に所在する（N1）天神橋貝塚であり、現在では犬鳴川最河口で、河川敷となっている。犬鳴川流域では若宮町の山陽新幹線関係埋蔵文化財発掘調査地点より後期の土器が出土している。石器では、若宮町鶴ヶ谷遺跡より数十点の石鏃、数点の石匙が採集されていて、他に若宮町平より安山岩製のスクレバー（搔器）1点がある。そして前記汐井掛遺跡よりかなりの石鏃その他が発見されているにすぎない。今後縄文時代の遺跡、遺物の発見される可能性は充分にある。

（Y1） 鶴ヶ谷遺跡 鞍手郡若宮町山口、宗像郡宗像町との境に鶴ヶ谷池が存在するが、

池周辺より数十点の石鏃や数点の石匙が表面採集されている。石匙は、黒曜石製の横形と、安山岩製の縦形が在り、石鏃の形態は多様で、材質は黒曜石とサヌカイト製である。他に尖頭器とみられるものも在るようである。

(M1) 汐井掛遺跡 若宮町と宮田町にまたがる遺跡で、山口川左岸の丘陵上に位置する複合遺跡である。九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査において発見された各種の石器は、宮田町内に所在する木棺墓・箱式石棺墓群、古墳群の調査の際に出土している。石器はブレイド、ナイフ形石器、その他石鏃、磨製石斧などが出土しており、先土器時代より縄文時代にかけての遺跡である。詳細は後に刊行される報告書によらるたい。

以上のように、若宮・宮田町内の犬鳴川流域における縄文時代以前の遺跡は、今日のところ、数少ない。遠賀川中流域から下流域にかけては、古くより縄文時代の貝塚が広く分布することが知られているが、山間部の犬鳴川流域では若干の石器散布地と後期の土器片一片を出土したにすぎない。しかし、遠賀川中・下流域において、貝塚以外より縄文式土器の出土地は遠賀川川底を欠いては数少なく、若宮町より縄文時代の土器が出土したことは、その土器が流れ込み、土と混じって出土したにせよ、縄文時代の遺跡の存在を知らせるには十分な資料であると言えよう。

2. 弥生時代

遠賀川下流域に比較して犬鳴川流域における弥生時代の実態は遺構の検出がなく遺物もいくつかの遺跡において出土しているが、散逸して現在見ることのできるのは数少ない。しかし、最近の諸開発事業による発掘調査、特に、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査では重要な遺跡の発掘などがあって、種々の遺構・遺物の出土があり、犬鳴川流域における弥生文化の把握が重要視されるようになった。

前期の遺跡は検出されていないが、文献などによるといくつかの遺跡において有紋土器が出土しているようであるが、現在確認することはできない。確実に時期が決定できるのは中期からである。以下各遺跡について簡単に紹介する。

(Y4) 茶臼山遺跡 山口川右岸の丘陵頂部に在り、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査による茶臼山城跡の発掘調査時に、城跡の土塁内側部の丘陵頂部の平坦部より検出されたものである。遺構は、住居跡1基、箱式石棺墓2基、石蓋土塚墓2基、木棺墓1基、土塚墓1基、土塚1基が検出された。出土遺物には、住居跡より弥生式土器の壺形、甕形、埴形等で、弥生時代後期末、箱式石棺墓より弥生式土器の甕形土器が出土していて、これら墳墓群は後期頃とされている。他に輝緑凝灰岩製の石庖丁未製品や黒曜石製の石鏃が出土している。

住居跡は4.3m × 3.4mの隅丸長方形で、ベット状遺構を伴う。石棺墓等はいずれも長さが

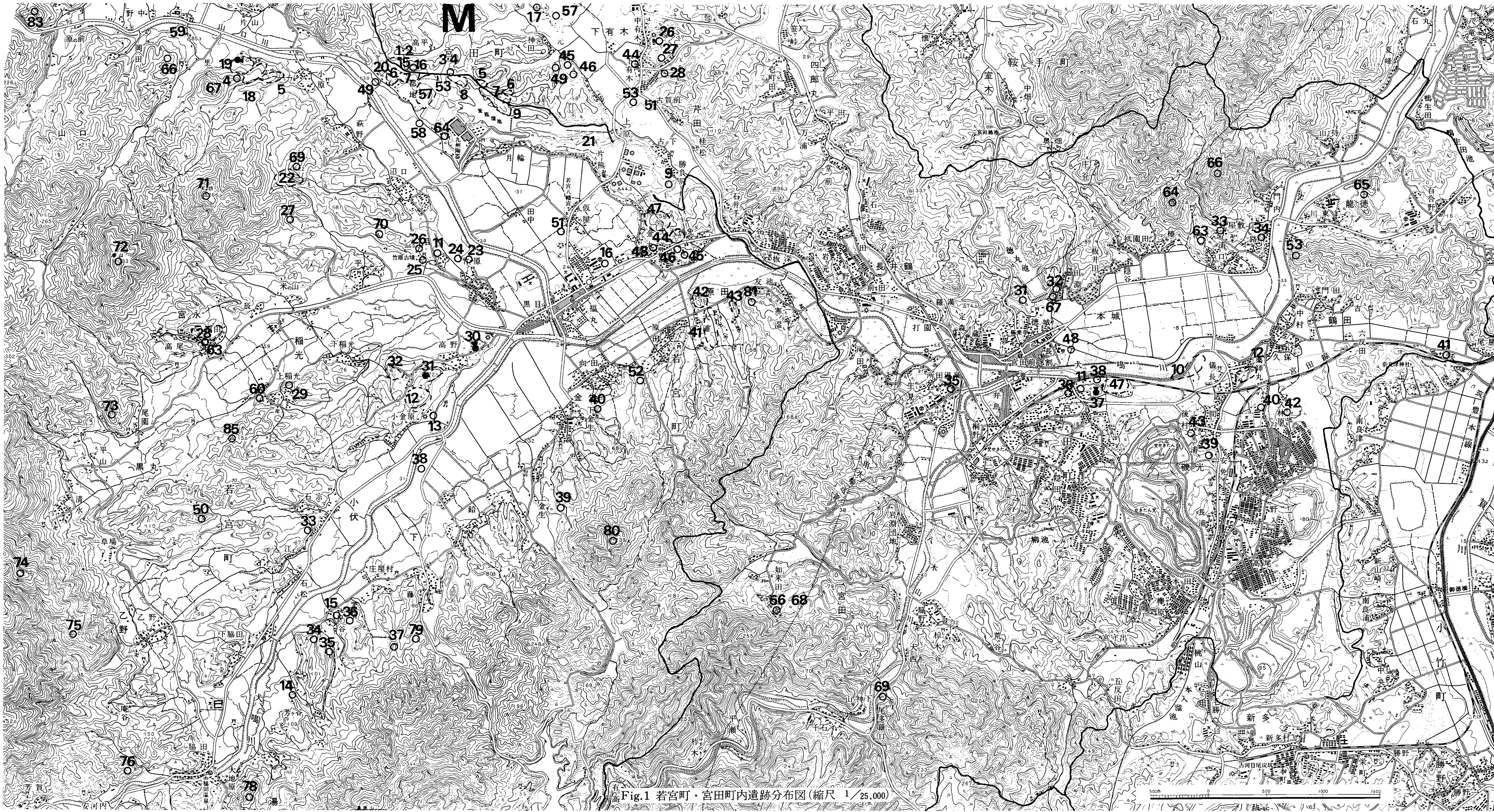


Fig.1 若宮町・宮田町内遺跡分布図(縮尺 1/25,000)

1 m未満の小型である。

(Y5) 小原遺跡 山口川右岸のやや低い丘陵上より傾斜地にかけての広範囲にあり、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査にて発見された。弥生時代より歴史時代にかけての複合遺跡であり、弥生時代関係では住居跡11基+α、貯蔵穴2基、溝状遺構1条、ピット群であり、出土遺物は弥生式土器、鉄製品（不明鉄器・鍬）、石庖丁完成品・未完成品、石斧、砥石などが出土している。住居跡は後期後半から終末、貯蔵穴は中期末以前、溝状遺構はジョッキ形土器が出土しており、終末から古墳時代初期にかけてのものである。なお、住居跡の+αは発掘調査が行なわれた九州縦貫自動車道建設地内のみでなく、道路の北側が名糖パブリックゴルフ場の駐車場予定地にあたり、表土だけを除去して遺構の確認を行なった結果、5基以上の住居跡が検出され、その内弥生時代のものは過半数をこえると推定されている。

(Y6・7) 汐井掛遺跡 弥生時代の汐井掛遺跡は、二地区の墳墓群により成り、墓地として広く利用されている。昭和49年度に調査された汐井掛B遺跡はほぼ若宮町内に属する墓地群で、箱式石棺墓4基、木棺墓16基以上、石蓋土塚墓2基、土塚1などが検出され、出土遺物として弥生式土器や鉄器類が出土している。

昭和50年度より調査を開始した汐井掛A遺跡は宮田町の地区で、木棺墓157基、箱式石棺墓18基、石蓋土塚墓12基、壙棺墓1基を検出した。出土遺物は弥生式土器、鏡（長宣子孫内行花文鏡片、飛禽鏡片、方格規矩鏡）、ガラス製小玉、ガラス製勾玉、硬玉製勾玉、碧玉製管玉、水晶製玉、鉄鏃、鉄剣、鉄刀、鉄斧、刀子、鉄鎌、鉄鍬などが出土している。

なお以上の宮田町内の地区は、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査により発見されたものであり、その後、地域振興整備公団宮田・若宮地区工業団地に伴う発掘調査により、先の遺跡地の隣接地を調査しており、木棺墓や箱式石棺墓が検出され、又、鏡などの出土遺物も発見されていて、汐井掛遺跡の宮田地区は大墳墓群として把握され、木棺墓は200基以上を越える。この墳墓群で注目されることは、木棺墓、箱式石棺墓ともに地表面に、墓標と思われる方形の配石や、その他、置石が認められることである。

(Y8・M3) 都地原遺跡 山口川左岸の低丘陵上に在って汐井掛遺跡と柳ヶ谷遺跡との間である。九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査により発掘されて、弥生時代の遺構として住居跡3基を検出し、出土遺物は弥生式土器である。2号住居跡床面には1.35m×1.20m、深さ0.65mの長方形を呈する貯蔵穴が付属する。なお、都地原遺跡の北方の同丘陵において、地域振興整備公団宮田・若宮地区工業団地に伴う発掘調査では箱式石棺墓・土塚墓などが検出されている。

(Y9・M7) 柳ヶ谷遺跡 都地原遺跡の東方、釜底池の北方丘陵上及び、傾斜面にあり地籍は若宮町（西区）と宮田町（東区）とにまたがる。東区では円形住居跡や円形貯蔵穴、西区では方形住居跡など、合わせて住居跡12基と貯蔵穴3基が検出されている。出土遺物として

弥生式土器、粘板岩製石剣、青銅製鋤先、石鏃、粘板岩製石庖丁が出土している。円形住居跡は弥生時代中期後半で青銅製鋤先片が出土している。今日のところ、犬鳴川流域で確認された最古の住居跡である。東区の方形住居跡のいくつかは丘陵傾斜面にあるため高い方の丘陵頂部を中心にして、住居跡外の斜面下方に、逆U字状の大きな溝をめぐらして排水溝としている。又、いくつかの方形住居跡には、ベット状遺構が付属している。

(Y12) 小金原遺跡・(Y13) 先尾高遺跡 犬鳴川と黒丸川に挟まれた丘陵上一帯で、戦後開拓地となり、現在では当時の地表はほとんど失われており、原形を知り得ない。昭和30年前後に石松清氏により、弥生式土器や、石斧、石庖丁が採集された。なお、昭和49年には、この丘陵の東側斜面の若宮町中央公民館建設の際に、住居跡と想定される断面が発見された。それは深さ約0.5m、長さ約4mの長方形断面で底面と思われる付近に、後期前半の土器が見られた。このように、小金原丘陵の一帯には弥生時代の遺跡が広く分布するものと推定される。

(Y16) 平田(西鞍手高校校庭)遺跡 犬鳴川に面した微高地で、昭和12年(1937年)2月発行の『北九州郷土史研究』第二輯の「北九州考古学的遺物遺跡一覧表(二)」によると、福丸実女(現西鞍手高校)新築地において住居跡。遺物として、須恵器、土師器が出土したという。

その後、昭和49年頃に、校庭内の工事があり、その際に観察したところでは、現高校校庭の正門寄りの崖工事現場の断面に住居跡と、貯蔵穴と思われるものがあり、若干の中期の土器を認めた。このことより、高校敷地内一帯には弥生時代よりの集落が存在すると見ていいようである。詳細は、発掘調査が実施されていない為に不明である。

(Y17) 金丸銅戈出土地 いつの頃かは不明であるが、金丸の丘陵より銅戈が出土したとのことであり、明治30年代より文献に出て来る。一説によると金丸の県道工事の際に出土したのではないかと言うが、確証は得られない。現物は東京大学に保管されている。

(M10) 上大隈遺跡 犬鳴川の右岸の低地に存在し、古くより識者に知られている遺跡であるが、発掘調査が行なわれていないため表面採集品のみである。土器は、前期の有紋土器や、後期の「く」の字口縁を有する壺など前期より後期全般の土器と言う。特に、絵画刻入の後期の壺は注目される。石器には、石鏃、石斧、石庖丁が出土し、土錘もみられる。本遺跡は弥生時代でも犬鳴川流域では最古のものと思われ、弥生文化がいち早く本流域にも登場したことを物語るものである。

(M12) 薬師丸遺跡 国鉄磯光駅と犬鳴川との間の段丘上に古くより遺物が採集されている。弥生式土器、石庖丁、片刃石斧、石鏃、砥石などがあり、明治時代より文献に出てくる宮田町磯光出土の石剣(戈)は、この薬師丸遺跡出土のもののようなものである。

(M14) 笠置山千石三の谷 児島隆人氏、森貞次郎氏より飯塚市立岩遺跡の石庖丁の原石産地として著名な山であり、千石峡三の谷は無数に輝緑凝灰岩が広く散布している。それらは拳大なものから手で持ち運びのできる大きさのものや、さらに大きな石までさまざまである。

その他に弥生式土器や、石剣、石庖丁、石斧などが出土したようであるが、出土状況の不明なものばかりである。遺物で特に注目されるものに、若宮町宮永発見の小型仿製鏡や、宮田町芹田遺跡の石戈などがある。

汐井掛遺跡や小原遺跡、柳ヶ谷遺跡などの調査により、住居跡や貯蔵穴の集落関係遺跡、箱式石棺墓や木棺墓の墳墓関係遺跡が明らかになり、種々の遺物も出土し、遠賀川流域でも重要な遺跡が存在することが明らかになった。

3. 古墳時代

犬鳴川流域における古墳時代の遺構は、縦貫道・新幹線関係遺跡の発掘調査前では古墳のみで、住居跡等の遺構は検出されていない。古墳は、犬鳴川の本流、黒丸川、山口川、有木川、倉久川に沿った丘陵上に数多く存在し、特に、後期から終末期古墳は莫大な数であり、所によっては、数十基の群集墳を形成している。これらの古墳は、盗掘を受けているものがほとんどで、発掘調査されたものは数えるほどしかない。

この古墳を概観すると、弥生時代よりの箱式石棺墓の伝統が根強く、高塚の古墳や、所謂、「畿内型古墳」が出現するまではもちろん、その後も併行している。代表的な箱式石棺に（Y46）西ノ浦古墳や、（Y26）竹原石棺群がある。西ノ浦古墳は、（Y44）の金丸古墳群中の天神山古墳群内にある墳丘をほとんど有しないもので、土取り工事中に発見され、調査を行なった結果、5世紀の箱式石棺に比定されている。又、竹原古墳の北西方丘陵地に存在した箱式石棺群は、記録写真によると、須恵器や、大刀などがあり、古墳時代のものである。さらに、宮田町になるが、下有木北古墳群の5基は、いずれも内部主体箱式石棺で、1号は墳丘があって須恵器を出土し、2号から5号は小さな低い墳丘のようなものである。

犬鳴川流域の初期高塚古墳の出現時期は不明であるが、古い様相を呈しているものに（Y30）剣塚古墳（前方後円墳）と（Y24）八幡塚古墳と（Y31）高野1号古墳がある。剣塚古墳は全長約58m、後円部径約28m、前方部幅約25mの二段築成で葺石が各所にみらる。現在は後円部の約 $\frac{1}{3}$ を興玉神社神殿建築のため消滅している。江戸時代に後円部より圭頭大刀と勾玉と埴輪が出土したという。

昭和37年の鞍手教育研究所の現地調査の折には後円部の丘上に半円形に15個の円筒埴輪が約15cm間隔で並列していたという。また古墳の周縁部からも発見されたと言伝えもある。この剣塚古墳は特に墳丘の後円部と前方部の関係や形状より5世紀代の古墳と考えられよう。おそらくこの犬鳴川流域における最初の畿内文化導入の「畿内型古墳」である。

八幡塚古墳は二段築成の円墳で周濠を巡らしている。内部主体は横穴式石室でも古い様相を呈している。

高野1号古墳は剣塚古墳の南西約500mの丘陵上にある帆立貝式前方後円墳で、内部主体不

明であるが、埴輪片が採集されている。

これら3基の古墳が比較的古い様相を呈する古墳であり、その他はほとんどが横穴式石室を内部主体とする後期古墳である。後期古墳も約80%以上が盗掘を受け、時期の判明するものは、発掘調査された古墳以外は皆無である。以上のように、若宮町内には数百基の古墳が存在するが、前期古墳の確認は未だないのが現状であり、箱式石棺墓の伝統の強い地域である。犬鳴川流域における古墳の出現時期については不明であるが、古い様相を呈しているものに、若宮町では(Y30) 剣塚古墳—前方後円墳、(Y31) 高野1号古墳—帆立貝式古墳(Y24) 八幡塚古墳—竪穴系横口式石室、(Y20) 汐井掛古墳群—竪穴系横口式石室、宮田町では、(M28) 下有木1号古墳—竪穴系横口式石室などがあり、犬鳴川流域における初期の古墳とされる。その後、両袖石の横穴式石室を内部主体とする古墳が爆発的に多くなる。又、複室構造の横穴式石室や、横穴式石室が小型化したものや、さらに、無袖横穴式石室や、箱形の石棺形式をとる石室など多様になり、終焉を向かえる。終末期古墳の代表的なものに汐井掛古墳群がある。

古墳以外の遺構として、九州縦貫自動車道関係・山陽新幹線関係埋蔵文化財発掘調査により、いくつかの遺跡が発掘され、住居跡や、掘立柱建物などが検出され、集落関係について、又、土師器と須恵器の関係も把握できるようになった。

(Y18) 小原古墳群 山口川右岸の茶臼山城跡が存在する丘陵頂部より傾斜面にかけて、約80基の古墳が分布しており、茶臼山古墳群とする。それは、大きく山口川に面した北部地域の里支群と、小原遺跡に面した丘陵の東斜面にある小原支群とに分けられる。九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査では、小原支群の内の8基を発掘調査したものである。古墳の内部主体はいずれも、横穴式石室で、単室と複室とがあり、出土遺物は須恵器、土師器、金環、ガラス玉、管玉が出土している。古墳の時期は、6世紀後半から7世紀後半にかけてのものである。

(Y20・M15) 汐井掛古墳群 山口川の左岸、汐井掛遺跡と同じ地点にあり、丘陵上より傾斜面にかけて約60基の古墳が、若宮町から宮田町にかけて分布している。九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査により38基、地域振興整備公団宮田・若宮地区工業団地に伴う発掘調査により2基の合計40基を調査したものである。これらの古墳は少なくとも9つのグループに分けられ、それぞれ時期を異にしており、内部主体は木棺1基の外は横穴式石室であるが、竪穴系横口式石室や、横穴式石室(単室・複室)、無袖式横穴式石室、横穴式石室系石棺など多様にわたっている。出土遺物は、須恵器、土師器、鉄器類、装身具類など数多く出土しており、詳細は正式報告書によらるたい。

(Y26) 竹原箱式石棺群 山口川と黒丸川とに挟まれた丘陵上にあり、装飾古墳で著名な竹原古墳の北西方、諏訪神社裏にあたる。昭和9年にブドウ園開墾の際に、箱式石棺群が発見されたという。その数25基というが、現在では確かめられない。出土遺物として当時の記録をみると、直刀、鉄鏃、金環、ガラス小玉、切子玉、勾玉、管玉などが出土したようである。又、

同時に弥生式土器や石砲丁も出土した由である。

(Y25) 竹原古墳 犬鳴川流域の代表的古墳であり、山口川と黒丸川に挟まれた丘陵が舌状に延びたその根元の黒丸川に面した丘陵端に位置している。横穴式石室に装飾があり、昭和31年に発見され、翌年には国指定史跡となっている。石室内の、特に、玄室奥壁の装飾は有名であり、文献も数えきれない程に引用されている。現在、前室入口付近と羨道に、ガラス窓によって密封されており、装飾を保護している。出土遺物は、文献によられたいが、現物は若宮町中央公民館に保管展示がされている。

(Y24) 八幡塚古墳 竹原古墳の東方約300m離れてあり、周濠を有する2段築成の円墳である。山陽新幹線関係埋蔵文化財発掘調査により周濠の一部と、内部主体が調査された。周濠径約40m、墳丘径約28mで、墳丘裾には裾石があり、墳丘には葺石がある。内部主体は、横穴式石室でも古いものである。遺物は、石室内が数回にわたって盗掘を受けており、若干の鉄片と土師器片、それに埴輪片が出土している。

(Y28) 宮永古墳群 黒丸川の左岸で、川に突き出た丘陵上より斜面にかけて広く古墳が分布している。以前は、宮永百塚といわれるくらい数多くあったらしいが、現在では、約20基ほどみられる。いずれも後期古墳の横穴式石室で、ほとんどが盗掘を受けて開口している。

(Y29) 稲光古墳群 上稲光の沖・杉園北方裏手に3基の円墳が在る。いずれも中央部が陥没しており、盗掘を受けているようである。その為詳細はわからない。

(Y30) 剣塚古墳 犬鳴川と黒丸川に挟まれた丘陵先端部に在る前方後円墳である。前方部は、ほぼ真北を向く。後円部の約半分を興玉神社の神殿建立の際に、破壊されているが、主体部は遺存しているようである。全長約58m、後円部径約23m、前方部前面幅25m、くびれ部幅16m、後円部高さ約3.5mを測る。二段築成であり、葺石を有するようである。『続筑前風土記拾遺』によると、剣と埴輪が出土したとあるが、昭和37年の調査によると、後円部の丘上にも半円形に15個の埴輪円筒が15cmをおいて並列していたとのことである。この古墳は、遠賀川下流域でも最大のもので、立地場所や埴輪を有している事などから、犬鳴川流域では特に重要な古墳である。

(Y31) 高野古墳群 剣塚古墳の南西約500m離れた小金原丘陵の丘陵先端頂部にあり、4基から成る古墳群である。この1号古墳は帆立貝式前方後円墳で、他は円墳である。1号古墳は長さ約40m、後円部径約30m、前方部約10m、前方部前方幅約12m、後円部高さ約6mを測る典型的な帆立貝式である。円筒埴輪の破片が採集されている。なお、この古墳群の北方に道路を隔てた丘陵上及び、傾斜面にかけて高野北古墳群がある。丘陵頂部は、工事により破壊され、斜面地にある古墳も盗掘がひどい。

(Y33) 石宗古墳群・(Y35) 床屋村南古墳群・(Y36) 床屋村西古墳群・(Y37) 床屋村東古墳群 犬鳴川も脇田付近には古墳の存在は確認されていないが、直ぐ下流の小伏、下の両

岸にはいくつかの古墳群が知られている。左岸では、町営住宅付近の石宗古墳群、右岸では上流より庄屋村南古墳群があり、4基から5基の小円墳が丘陵傾斜面の下位にある。さらに日吉神社の裏手に庄屋村古墳群があり、丘陵傾斜面の上位に数基の円墳が見られる。庄屋村西古墳群は丘陵頂部の円墳を中心に約5基、乙藤の庄屋村東古墳群は丘陵傾斜面の上位にほとんど破壊された状況で4基の円墳がある。これらはいずれも4から7基と小古墳群でいずれの古墳もほぼ同時期のものと思われるが、その内庄屋村1号古墳は群中では墳丘石室とも大規模である点が注目される。

(Y39) **上金生古墳群** 上金生の白山神社裏手の丘陵上にあり、一地域に集中して群集している。大小の古墳が隣り合せるようにまで接近しており、現在では、32基を数えるが、一部水田になっており、まだ、いくつかの古墳が存在していると思われる。実態の判明する古墳は一つもない。

(Y41) **大浦西古墳群** 犬鳴川の右岸、原田の犬鳴川に突き出した丘陵上にもいくつかの古墳群がある。大浦西古墳群は大浦丘陵の鞍部より東方傾斜面に、古墳が丘陵に沿って点在している。ほとんどの古墳が開墾により原形を留めていなく、墳丘の全くないものもある。1号古墳は横穴式石室でも複室である。

損ヶ熊古墳群は、大浦古墳群とは町道を隔てて、丘陵先端部の犬鳴川側寄りにあり、円墳5基が見られる。いずれも近世墓地によりかなり破壊を受けている。大浦東古墳群は、大浦西古墳群の東側丘陵上にあり対面している。4基の円墳が見られ、いずれも残りは良い方である。

(Y44・Y45) **天神山・金丸古墳** 県道福岡一直方線の南方、犬鳴川に面した丘陵頂部とその付近に円墳があった。頂部にある金丸古墳は昭和50年土取り工事の際に、福岡県教育委員会により緊急発掘調査が行なわれた。2段築成の円墳で内部主体は、複室の横穴式石室である。

(Y46) **西の浦古墳群** 天神山古墳群と同じ丘陵で約50m北方にあった。県道拡張の土取り工事により2基の箱式石棺が出土し、昭和44年に1基のみ調査された。人骨の遺存が良く、出土遺物として、鉄斧、鋤先、鉄剣、鉄鎌があり5世紀中葉の古墳とされている。

(Y47) **浦原古墳群** 天神山古墳群と同丘陵、県道の北方側丘陵と、小さな谷をへだてた東側の丘陵上に約15基の円墳が知られる。土取り工事により破壊されたものや、開墾により墳丘を失った石室が露出しているものなど、原形を保っているものはない。いくつかの開口している石室をみると、いずれも横穴式石室で、6世紀後半代に集中しているようである。

(M22) **百塚古墳群** 有木川の右岸丘陵上に大小約50基の古墳が集中して存在する。開墾により壊された古墳も多く、本来は、約70から80基近くはあったようである。いずれも径10から20mの円墳で横穴式石室のようである。1号古墳は横穴式石室でも「T」の字型石室で、しかも右側壁中央部に石棚を有する古墳である。33号古墳より須恵器が確認されており、6世紀後半のものである。開口している石室を見るとほぼ6世紀後半から7世紀前半にかけてのもの

のようである。

なお、百塚古墳群の周辺には、南方には百塚南古墳群（8基）さらに、南方には四ツ塚古墳群（5基）、南西方には、高平古墳群（2基）などの古墳群が存在している。いずれも横穴式石室を内部主体にしているようである。

(M17) 神田・(M18) 向の畑古墳 ともに有木川の右岸、百塚古墳群やその周辺の古墳群に対して南方にある円墳で内部主体は箱式石棺である。石棺や遺物の出土状態は分らないが、神田古墳からの須恵器が、向の畑古墳より鉄剣が出土している。神田古墳出土の須恵器は6世紀の中葉に比定できる。

(M28) 下有木古墳群 有木川の左岸、熊野神社裏手の丘陵上にあり約9基の円墳群である。土取り工事により1号古墳は消滅、他の古墳も土取り工事の為に半壊の状態にある。1号古墳は昭和45年に工事に伴う緊急調査が福岡県教育委員会により実施された。内部主体は竪穴系横口式石室で出土遺物は直刀、鉄鏃、刀子、ガラス小玉があり、5世紀後半代とされている。2号から5号古墳の内部主体は観察によると箱式石棺のようである。

なお、この古墳群の北方、町道をへだてた丘陵上に**(M27) 下有木北古墳群**があり、いずれも円墳で内部主体は箱式石棺であり1号古墳より須恵器が出土している。他に有木川左岸では地蔵院の**(M24) 中有木古墳**や小学校近くの**(M26) ハル古墳**、そして昭和52年に発掘調査されている地域振興整備公団宮田・若宮地区工業地内の**(M25) 南ヶ浦古墳群**がある。

(M36) 本白古墳群 犬鳴川の右岸、国鉄宮田線の南側丘陵上の東西に古墳群がある。西方にある本白古墳群は2基+αで2号古墳は複室の横穴式石室で鉄刀が出土している。1号古墳は不明。

(M37) 谷頭古墳群 本白古墳群の東方にある谷頭古墳群は前方後円墳1基を含む4から5基の古墳群であつたらしい。現在は前方後円墳の後円部のみしか残ってなく、他は開墾により消滅した。前方後円墳の1号古墳は全長が約22m、後円部径約15m、前方部前面幅約10m、後円部高さ約3mである。内部主体は横穴式石室で、出土遺物に埴輪と石室内より鉄鏃、管玉が検出されている。

(M38) 上屋敷横穴墓 谷頭古墳群の北方丘陵崖面に存在していた。土取り工事中に発見され4基程確認されており須恵器が今日伝わっている。須恵器より6世紀も末頃と思われる。

(M32) 亀石塚・(M31) 浦宮古墳群 犬鳴川の左岸、本城の鞍手町へ通じる道路の東側丘陵に浦宮古墳群と亀石塚古墳群とがある。西方の浦宮古墳群は2基でその内1基は前方後円墳とされているが現地では草木の繁茂はなほだしく確認することは出来ない。

亀石塚古墳群は2基で1号古墳は早くより開口しており単室の横穴式石室である。

(M34) 竜徳古墳群・(M33) 谷古墳 犬鳴川の左岸、宮田町の最も東方にあり、現在老人ホームが建っている一帯に5基の円墳がある。元は他にいくらか存在したようであるが今日で

は認めることはできない。1号古墳は複室の横穴式石室で昭和11年頃発見されたようで当時の新聞記事によると鉄刀、耳環、須恵器などが出土したようである。又他にいくつもの古墳が点在したという。2から5号墳も開口しており2号墳は複室の横穴式石室、3から5号古墳は単室の横穴式石室である。なお、この竜徳古墳群の西方丘陵斜面には谷古墳があり約5基在ったらしいが現在では複室の横穴式石室を有する1号古墳のみ見る事ができる。

(Y20・M15) 汐井掛古墳群 若宮町と宮田町に跨る汐井掛の丘陵上、及び傾斜面にかけて約60基の円墳がいくつかのグループをなして点在している。この内38基を九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査で、2基を地域振興整備公団宮田・若宮地区工業団地に伴う発掘調査で発掘をした。詳細は報告書に依らねたい。

(Y5) 小原遺跡 弥生時代の小原遺跡と同じ場所に在り、古墳時代の遺構として住居跡10基、竪穴状遺構を検出する。出土遺物は土師器、須恵器、砥石、土製模造鏡、土鈴などが出土しており、住居跡は6世紀後半を中心にして集落が形成されていたものである。

(Y8・M3) 都地原遺跡 弥生時代の都地原遺跡と同じ地点で住居跡1基が検出された。隅丸方形を呈し4本柱でカマドを有する。出土遺跡は須恵器、土師器であり、時期は6世紀後半から末頃にかけてのものである。

(Y9) 柳ヶ谷遺跡 弥生時代の柳ヶ谷遺跡と同じ地点に在り古墳時代の遺構として住居跡2基が検出され、出土遺物として、須恵器、土師器がある。時期は6世紀の後半である。

(Y51) 田尻遺跡 山陽新幹線関係埋蔵文化財発掘調査において調査されたもので住居跡1基と、溝が検出された。出土遺物は土師器、須恵器で6世紀中頃のものである。この遺跡は低位段丘上に位置しており現在は水田と化しているが山口川氾濫原より高位置の低位段丘上に在り、氾濫原似外の地は遺跡が存在すると見なければならない。

4. 歴 史 時 代

歴史時代の遺跡は火葬墳墓や経塚、中世山城などが知られていたがいずれも遺構の状態など不明で遺物のみの場合がほとんどであった。九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査では、住居跡や掘立柱建物、火葬墳墓、土塚墓、中世山城跡など9ヶ所の遺跡より各遺構遺物が検出されて、この地方の歴史時代についてもより明確にできるようになった。

(Y9) 柳ヶ谷遺跡 弥生、古墳時代の柳ヶ谷遺跡と同じ地点にある。住居跡1基+2基?で、出土遺物は須恵器、土師器である。これらの住居跡は7世紀後半から8世紀初頭さらには奈良時代のものである。なお、柳ヶ谷遺跡より掘立柱建物5基が検出されたが、明確な時代決定を欠くために不明であるが古墳時代又は奈良時代のものかと思われる。

(M51) 平原遺跡 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査によって明らかにされた。

有木川左岸の低段丘上の先端部にあり奈良時代の掘立柱建物2棟と小屋跡1棟が検出された。

(M52) 宮崎窯跡 (Fig. 2)

宮田町の遺跡分布調査中に確認された須恵器窯跡である。倉久川の左岸，春日神社の東方丘陵傾斜面で灰原が一部露出している。8世紀後半の時期のものであろう。

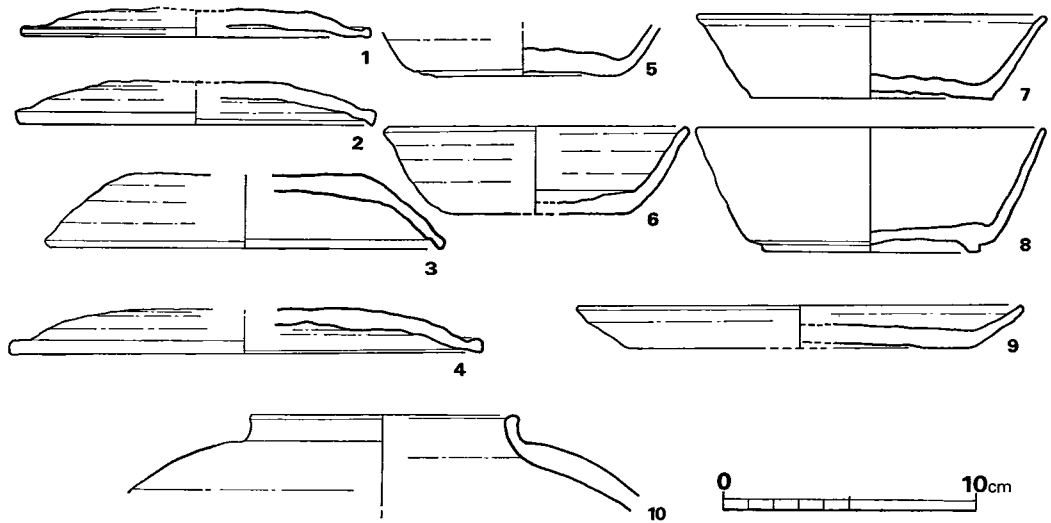


Fig. 2 宮崎窯跡出土須恵器実測図 (1/3)

若宮町内の火葬墳墓群 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査が実施される以前より約7ヶ所，約9個の骨蔵器の出土が知られていたが，今回の調査においては4遺跡合計12基の火葬墳墓が検出され，これらを合せると約21基の墳墓群となる。

水原・金丸・宮永出土の各骨蔵器の出土状態は不明であるが火葬骨が認められたという事は確かである。これらは現在若宮町中央公民館に保管してある。他に大神邦博「筑前鞍手郡若宮町出土の蔵骨器—昭和33年度西日本史学会春季大会考古学関係研究発表要旨—」（『九州考古学』5・6）1958年（昭和33年）11月による4個の骨蔵器が在る。この内若宮町山口の荒牧正義氏蔵の1個については拝見できたが他の3個については若宮町福丸の某家に在るとのことであるが拝見できなかった。これらいずれも出土状態は不明のようである。さらに九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査による4ヶ所，12個の骨蔵器が在る。

(Y 4) **茶白山墳墓** 茶白山より北東に延びた丘陵の南斜面に在るが，後世の茶白山城跡により攪乱されているようである。円形の墓坑を掘りその内の床面に川原石を敷き，その石の上に骨蔵器を埋納したと思われる。骨蔵器は須恵器の短頸壺で蓋は高台付塚のようである。副葬品などはない。

(Y 9) **柳ヶ谷墳墓** 西区第10号住居跡の発掘調査中に検出されたもので27cm×27cmのやや方形に近い不整円形の墓坑内に須恵器有蓋短頸壺を埋納している蓋は壺の肩部に寄せかけた

状態で検出されたが本来は口縁部に正しく蓋がついていたものであろう。器内には火葬骨が充填し若干の木炭片が認められ、副葬品として鉄製刀子が1個出土する。

(Y53) 都地原墳墓 柳ヶ谷墳墓と本報告の汐井掛墳墓とのほぼ中間の丘陵斜面に5基検出されたものである。これらの内明確に火葬骨が認められたのは1号から3号墓までであるが4号・5号はその在り方から火葬墳墓とした。

第1号墳墓 弥生時代と古墳時代の住居跡が検出された丘陵斜面の中位よりやや上の位置に須恵器甕の底部分が検出された。器内を調査してみると火葬骨が認められ火葬墳墓としたものである。甕は底部のみかと思われたが口縁部など周辺に飛散してほぼ完形品に復元できる。墓壇は円形で地山面を摺鉢状に掘りその内に木炭と少量の焼土塊との混合土で骨蔵器を埋置している。

第2号墳墓 38cm×39cmの隅丸方形の墓壇内に須恵器の蓋付短頸壺を埋置していて、骨蔵器の短頸壺を「ハ」の字形に石で挟んでいる。器内には火葬骨と底の部分に少量の砂が認められる。

第3号墳墓 36.5cm×31.1cmの隅丸方形の墓壇内の底面に若干埋め土がありその上に17cm×10cm、厚さ5cm程の長方形の石を置いている。その上に底部穿孔して、穿孔した底部が石の上にくるように土師器甕を直立に埋置している。器内等には火葬骨は認められないが状況より火葬墳墓とした。

第4号墳墓 32cmから37cmの不整円形の内に須恵器坏2個を口縁部が墓壇の床面に向くよう埋置している。これら2個の坏内より若干の火葬骨が認められ火葬墳墓としたものである。骨蔵器は須恵器坏2個であるが、「倒置法」である点が注目される。

第5号墳墓 21cm×21cm、深さ27cmほどの正方形の土壇で、壇内と壇内周辺に多量の焼土塊と若干の木炭層があり、土壇内には木製の骨蔵器を埋納し、焼土塊と木炭により埋置したものと思われ火葬墳墓とした。

(Y6, M1) 汐井掛墳墓については本文後述の報告どおりである。

(Y64) 都地八幡経塚 山口川の左岸、江戸時代に都地八幡神社の社殿改築の時に2基、明治19年神殿改築の時にさらに1基が出土する。経塚の遺構については不明であるが、経筒3個が伝わり県指定となっている。経筒に銘文のあるものがあり保元二年(1158年)銘である。なお、台座に湖州鏡と和鏡がある。又珍しく経巻も16巻が遺存している。

(M55) 下有木経塚 下有木字中有木の地藏院より北西の有木川に突き出た低丘陵頂部より2度に渡り出土したらしい。元永二年(1119年)の銘がある。詳細は宮田町誌によりたい。

(Y59) 遠園遺跡 山口川の右岸、宗像より若宮に通じる見坂峠に近い台地上にあり、後方の丘陵頂部は尾園城という。九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査の折に掘立柱建物7、土壇6、土壇墓1基が検出され、出土遺物に土師器、須恵器、青磁、白磁、摺鉢、石鍋、

刀子などが出土していて鎌倉時代から室町時代にかけての居館跡である。

(Y67) **茶臼山城跡** 中世の山城が犬鳴川流域には多く分布している。宗像氏、大友氏、大内氏などの勢力圏の接点である本地域は幾多の戦火に相まみれたようである。若宮町では宮永城や、草場城、宮田町では、龍ヶ岳城や、笠木城などが著名である。茶臼山城は、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査にて、土塁や、空壕が明らかにされた。12～13世紀の城砦として数少ない考古学による発掘調査のなされた山城とされる。

(Y5) **小原遺跡** 弥生時代、古墳時代の小原遺跡と同場所にあり、歴史時代の遺構として掘立柱建物7基が検出されている。出土遺物は土師器、須恵器、磁器である。出土遺物をみると奈良時代から鎌倉時代と幅広いが、いくつかの掘立柱建物は平安時代前後と想定されている。

(Y5) **小原土塚墓群** 小原古墳群の周辺に29基の土塚がいくつかのグループを形成して分布している。土塚内よりの出土遺物はないが、古墳の墳丘や、茶臼山城の土塁盛土下に掘り込まれていることや、土塚群付近の表土中より多数の青・白磁類が出土しており、鎌倉時代頃のものとなっている。土塚墓と考えるのが妥当であろうといわれている。

(Y65) **犬鳴窯跡** 若宮・宮田町内に近世の陶器を焼成した三つの窯跡が存在する。犬鳴川上流の犬鳴峠に近い峡谷に犬鳴窯跡があり、高原五郎七により開窯されたもので、高取焼の系統とされよう。なお、高原五郎七は酒田柿右衛門の師匠である。窯本体の調査はされていない。

(M69) **千石窯跡** 宮田町千石峡の手前に千石窯跡がある。高取焼系の遺物を採集でき、幸袋の白旗窯を開窯した時と何らかの関連があるものと見られる。

(Y66) **浅ヶ谷窯跡** 山口川の上流、見坂峠にさしかかるあたりの浅ヶ谷にあり、数年前に家屋新築工事の際に、破壊された。登り窯ではなく、ダルマ窯のようで、採集した陶器は江戸時代でも後期のものようである。

この他、歴史時代の遺構として、条里制による条里がある。犬鳴川流域の宮田・若宮平野でも古くより、条里制があったとされている。そこで、九州縦貫自動車道・山陽新幹線関係埋蔵文化財発掘調査において、前者は、宮田町の(M)筒井田に、後者は、若宮町の(Y)福丸において、条里制を求めて発掘調査を行なった。筒井田では、長さ100mにわたり、トレンチを入れ調査したが全く検出できず、青磁片一片が出土したにすぎない。

若宮町の調査は、8地点にトレンチを入れて行なわれたが、条里の遺構は検出されなかった。しかし、調査者の齋久嗣郎氏により、見事に若宮平野の条里復元案が示されており、道路・水路・水田の畦畔、小字界などからみて、条里制が存在したことは否定できないであろう。

以上、若宮町・宮田町内所在の遺跡について概観したが、この地域の遺跡について全般的に取り上げたものに若宮町、宮田町考古学文献の内、若宮町の11, 14, 35, 60, 74, 79, 80などがあり参照されたい。又宮田町では、現在町誌作成中であり刊行されればそれによられたい。

Tab.1. 若宮町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	遺構の種類	出土遺物	時期	文献
縄文時代						
1	鶴ヶ谷遺跡	若宮町小原字鶴ヶ谷	散布地	石鏃、石匙		89
2	若宮条里A地点	◇ 竹原		縄文式土器	後期	61
3	平遺跡	◇ 平	散布地	ブレード		
弥生時代						
4	茶臼山遺跡	若宮町山口字小原	住居跡、箱式石棺墓、木棺墓	弥生式土器、石庖丁、石鏃	後期終末	84・85 91
5	小原遺跡	◇ 山口字小原	住居跡、貯蔵穴、溝状遺構	弥生式土器、石庖丁、石斧 砥石、鈍、刀子	中～後末	77・80 90・93
6	汐井掛A遺跡	◇ 沼口字汐井掛	住居跡		中期?	77・83
7	汐井掛B遺跡	◇ 沼口字汐井掛	木棺墓、箱式石棺墓、石蓋土城墓	弥生式土器、鉄鏃	後期	77・83
8	都地原遺跡	◇ 沼口字都地原	住居跡	弥生式土器	後期	89
9	柳ヶ谷遺跡	◇ 水原字柳ヶ谷	住居跡	弥生式土器、石鏃、石庖丁	後期	14. 69. 77 81. 89
10	宮永遺跡	◇ 宮永		銅鏡		69
11	辻の下遺跡	◇ 平字竹原		弥生式土器、石庖丁	後期	14
12	小金原遺跡	◇ 高野字小金原		石斧、石庖丁		89
13	先尾高遺跡	◇ 高野字先尾高	住居跡	弥生式土器	後期	89
14	湯原遺跡	◇ 脇田字湯原		弥生式土器、石器		35
15	東禅寺遺跡	◇ 脇田字湯原	住居跡	弥生式土器、石庖丁、石鏃		89
16	平田(西鞍手高校)遺跡	◇ 福丸	住居跡、貯蔵穴	弥生式土器、須恵器、土師器		14
17	金丸遺跡	◇ 金丸		銅戈		3. 4. 5. 7. 8. 10. 13. 15 31
古墳時代						
18	小原古墳群	若宮町山口字小原	約40基 内8基発掘	須恵器、土師器		14. 69. 77 86. 90. 94
19	里古墳群	◇ 山口字里	約40基 1基は前方後円墳			14
20	汐井掛古墳群	◇ 沼口字汐井掛	約60基 内30基は宮田町内	須恵器、土師器、装身具、 馬具、工具	5C後～ 7C前	14. 77. 86
21	水原古墳群	◇ 水原	円墳、横穴式石室			14
22	沼口古墳群	◇ 沼口	15基	須恵器		
23	別当塚古墳	◇ 竹原字塚ノ元	円墳			14. 62. 75
24	八幡塚古墳	◇ 竹原字塚ノ元	円墳、周濠、横穴式石室	埴輪、中世土師器		14・63

25	竹原古墳	若宮町平字竹原	円墳、複室の横穴式石室、装飾	須恵器、銅鏡、馬具、鉄器 装身具	6C後	16.17.71
26	竹原古墳群	◇ 平字竹原	箱式石棺	須恵器、土師器、鉄器、装身具		14
27	平古墳群	◇ 平	円墳、横穴式石室	須恵器、直刀、玉類		14・78
28	宮永古墳群	◇ 宮永	円墳、横穴式石室	須恵器、直刀、玉類		14
29	稲光古墳群	◇ 稲光字沖	4基、円墳	須恵器		14
30	剣塚古墳	◇ 高野字剣塚	前方後円墳	埴輪、太刀	5C前?	2.6.9.14 55
31	高野古墳群	◇ 高野	5基 1基は帆立貝式前方後円墳	埴輪	5C?	14
32	高野北古墳群	◇ 高野	7基、円墳、横穴式石室	須恵器	6C後	14
33	石宗古墳群	◇ 小伏字石宗	約5基、円墳、横穴式石室			
34	東禅寺南古墳群	◇ 下字庄屋村	5基			
35	庄屋村古墳群	◇ 下字庄屋村	7基			
36	庄屋村西古墳群	◇ 下字庄屋村	5基			
37	庄屋村東古墳群	◇ 下字庄屋村	4基			
38	幸神古墳	◇ 下字幸ノ神	円墳	須恵器		
39	上金生古墳群	◇ 金生字上金生	32基+α			14
40	向田古墳	◇ 原田字向田	円墳			
41	大浦西古墳群	◇ 原田	14基 現存12基 複室あり			14
42	大浦東古墳群	◇ 原田	3基			
43	損ヶ熊古墳群	◇ 原田損ヶ熊	5基			
44	金丸古墳群	◇ 金丸字天神山	複室の横穴式石室	直刀		14・70
45	天神山古墳	◇ 金丸字天神山	円墳、複室の横穴式石室		6C後	70
46	西の浦古墳群	◇ 金丸字天神山	2基 1基調査共に箱式石棺	鉄斧、鋤先、鉄剣、鉄鎌	5C	49
47	浦原古墳群	◇ 金丸字浦原	16基	須恵器、土師器		
48	越後古墳	◇ 金丸字越後	円墳			
5	小原遺跡	◇ 山口字小原	住居跡、竪穴状遺構	土師器、須恵器、砥石、土鈴、模造鏡	6C後～ 7C	77.80.90 93
49	咲花遺跡	◇ 沼口字咲花	住居跡、土壇、掘立柱建物	土師器、須恵器	6C後	77
8	都地原遺跡	◇ 沼口字都地原	住居跡、掘立柱建物	土師器、須恵器	6C後～	77・89
9	柳ヶ谷遺跡	◇ 水原字柳ヶ谷	住居跡、掘立柱建物	土師器、須恵器、紡錘車	6C後	77.81.89

50	西日本ゴルフ場内遺跡	若宮町 小伏	散布地	須恵器		
51	田尻遺跡	◇ 福丸	住居跡、掘立柱建物、溝	土師器、須恵器、青磁	6C後	72・74
52	古賀の原遺跡	◇ 金生字古賀の原	散布地	須恵器		
歴 史 時 代						
4	茶白山墳墓	若宮町山口字小原	火葬墓	骨蔵器は須恵器	奈良	73・77
7	汐井掛墳墓	◇ 沼口字汐井掛	火葬墓	骨蔵器は須恵器	奈良	73.77.88
53	都地原墳墓	◇ 沼口字都地原	火葬墓	骨蔵器は須恵器、土師器	奈良	73.77.89
9	柳ヶ谷墳墓	◇ 水原字柳ヶ谷	火葬墓	骨蔵器は須恵器、刀子	奈良	73.77.89
54	水原墳墓	◇ 水原	火葬墓	骨蔵器は須恵器	奈良、平安	19.73.77
55	宮永墳墓	◇ 宮永	火葬墓	骨蔵器は須恵器	奈良	77
56	金生墳墓	◇ 金生	火葬墓	骨蔵器は須恵器	奈良	19・73
2	若宮条里遺跡	◇ 福丸	条里			61
57	都地遺跡	◇ 沼口字都地	掘立柱建物	土師器、須恵器	奈良	77・95
5	小原遺跡	◇ 山口字小原	掘立柱建物	土師器、須恵器、磁器	平安前後	90
58	北田遺跡	◇ 沼口字北田	散布地	土師器、須恵器、磁器	中世～近代	
59	遠園遺跡	◇ 山口	館跡	土師器、須恵器、磁器	中世	69.77.79 91
60	杉園遺跡	◇ 稲光字杉園	散布地	土師器		64・76
61	上金生遺跡	◇ 上金生	散布地	白磁	中世	35
62	友池遺跡	◇ 原田字友池	散布地	白磁	中世	35
63	宮永遺跡	◇ 宮永	埋銭	銅銭	中世	
64	都地八幡経塚	◇ 沼口字都地	経塚	経筒、経巻	中世	1.12.54. 96
65	犬鳴窯跡	◇ 犬鳴	窯跡	近世陶器	近世	35
66	遠園城跡	◇ 山口	山城跡		中世	91
67	茶白山城跡	◇ 山口字小原	山城跡		中世	77・91
68	都市原城跡	◇ 沼口	山城跡		中世	35
69	堀谷城跡	◇ 沼口	山城跡		中世	35
70	竹垣城跡	◇ 竹原	山城跡		中世	35
71	天の坊城跡	◇ 天の坊	山城跡		中世	35
72	宮永城跡	◇ 宮永	山城跡		中世	35
73	黒丸城跡	◇ 黒丸	山城跡		中世	35
74	草場城跡	◇ 乙野字草場	山城跡		中世	35
75	篠崎城跡	◇ 乙野	山城跡		中世	35
76	安河内城跡	◇ 脇田	山城跡		中世	35
77	熊ヶ城城跡	◇ 犬鳴犬鳴山頂	山城跡		中世	35
78	湯原草場城跡	◇ 湯原草場	山城跡		中世	35
79	下村城跡	◇ 下字乙藤	山城跡		中世	35
80	白旗山城跡	◇ 金生字餐鏡山	山城跡		室町	35
81	友池城跡	◇ 原田字友池	山城跡		中世	35

82	金丸城跡	若宮町金丸	山城跡		中世	35
83	明専寺城跡	◇ 野中明専寺	山城跡		江戸初期	35
84	浦山城跡	◇ 平	山城跡			35
85	稲光城跡	◇ 稲光	山城跡			35
若宮町遺跡参考地						
86	塞ノ湿遺跡	若宮町原田字塞ノ湿	散布地	石剣、石鏃、須恵器		14
87	金丸遺跡	◇ 金丸	散布地	石鏃		14
88	前川原遺跡	◇	散布地	弥生式土器		35
89	田圃中遺跡	◇	散布地	石剣		35
90	福丸(犬鳴川)遺跡	◇	散布地	石剣		35
91	牛谷古墳	◇ 原田字牛谷	古墳	須恵器		14
92	友池古墳	◇ 原田字友池	古墳	須恵器		14
93	古賀原古墳	◇ 金生字古賀原	古墳	鏡、金環、銀環、玉		14
94	鴻ノ巣古墳	◇	古墳群 (15基)	須恵器		14
95	塚ノ元古墳	◇	古墳群 (10基)	人骨、須恵器		14
96	金生遺跡	◇ 金生	散布地	弥生式土器		35
97	石宗遺跡	◇ 石原	散布地	石斧		35
98	原田遺跡	◇ 原田	散布地	石剣		35
99	善徳寺遺跡	◇	散布地	土師器、石斧		35
100	万福寺遺跡	◇	散布地	須恵器		14
101	稲光遺跡	◇ 稲光	散布地	土師器		14
102	金生遺跡	◇ 金生	散布地	白磁		35

若宮町考古学文献

- 1 伊藤常足『太宰管内誌(中)』天保年間
- 2 青柳種信『筑前統風土記拾遺』筑前国統風土記拾遺刊行会『筑前国統風土記拾遺』第3巻1973年(昭和48年)10月
- 3 若林勝邦「銅劍に関する考説及び其材料の増加」(『考古学雑誌』8号)1897年(明治30年)8月
- 4 高橋健自「銅銚銅劍考(Ⅱ)」(『考古学雑誌』第13巻第6号)1923年(大正12年)2月
- 5 島田寅次郎「銅銚銅劍及び其鎔範」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯)1925年(大正14年)3月
- 6 島田寅次郎「石室古墳」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯)1925年(大正14年)3月
- 7 高橋健自『銅銚銅劍の研究』1925年(大正14年)10月
- 8 森本六爾『日本青銅器時代地名表』1929年(昭和4年)6月
- 9 福岡県社事兵事課編「先史時代原史時代の史蹟」(『史蹟名勝天然記念物所在調査書』)1930年(昭和5年)5月
- 10 中山平次郎「銅銚銅劍問題再検討」(『考古学』第5巻第7号)1934年(昭和9年)7月

- 11 鞍手郡教育会編『鞍手郡誌』1934年（昭和9年）11月
- 12 田中幸夫「筑前鞍手郡都市八幡の経筒」（『考古学雑誌』第25巻第9号）1935年（昭和10年）9月
- 13 石村一男「八幡市附近の考古学概観」（『北九州郷土史研究』第1輯）1936年（昭和11年）11月
- 14 石村一男・木村芳秋・清賀義男・児島隆人・沢井一雄・田中幸夫・名和羊一郎・松本亀次・三友国五郎
共編「北九州考古学的遺跡一覧表(2)」（『北九州郷土史研究』第2輯）1937年（昭和12年）2月
- 15 児島隆人「遠賀川流域に於ける青銅器文化」（『考古学』第11巻第11号）1940年（昭和15年）11月
- 16 鏡山猛『北九州の古代遺跡』1950年（昭和31年）12月
- 17 森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳」（『美術研究』194）1957年（昭和32年）
- 18 森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」（『九州考古学』1）1957年（昭和32年）5月
- 19 大神邦博「筑前鞍手郡若宮町出土の蔵骨器」—昭和33年度西日本史学会春季大会考古学関係研究発表要
旨一（『九州考古学』5・6）1958年（昭和37年）11月
- 20 水野清一・小林行雄編『図解考古学辞典』1959年（昭和34年）6月
- 21 小林行雄編（『世界考古学大系』3 日本Ⅲ古墳時代）1959年（昭和34年）11月
- 22 森貞次郎「福岡県鞍手郡竹原古墳」（『日本考古学年報』9）1960年（昭和35年）3月
- 23 森貞次郎「竹原古墳の壁画」（『九州アカデミー』1）1960年（昭和35年）5月
- 24 斉藤忠『日本古墳の研究』1961年（昭和36年）8月
- 25 日本考古学協会編『日本考古学辞典』1962年（昭和37年）12月
- 26 金関丈夫「鞍手郡若宮町竹原古墳奥室の壁画」（『九州考古学』19）1963年（昭和38年）10月
- 27 石人石馬研究会編『九州前方後円墳地名表』1963年（昭和38年）10月
- 28 原田大六『磐井の叛乱』1963年（昭和38年）12月
- 29 江上波夫・海老原喜之助・小林行雄・土方定一「知られざる日本文化の源流」（『太陽』№8）1964年
（昭和39年）1月
- 30 小林行雄編『装飾古墳』1964年（昭和39年）10月
- 31 杉原荘介「青銅器」（『日本原始美術』4）1964年（昭和39年）11月
- 32 井上光貞「神話から歴史へ」（『日本の歴史』第1巻）1965年（昭和40年）2月
- 33 斉藤忠「古墳壁画」（『日本原始美術』5）1965年（昭和40年）4月
- 34 岡田章雄・豊田武・和歌森太郎編「日本のはじまり」（『日本の歴史』第1巻）1960年（昭和40年）4
月
- 35 鞍手教育研究所編『鞍手郡郷土史』1965年（昭和40年）6月
- 36 児玉幸多編「縄文・弥生・古墳時代」（『図説日本文化史大系』第1巻）1965年（昭和40年）6月
- 37 野間清六「日本—縄文・弥生・古墳・民芸—」（『世界美術』第20巻）1965年（昭和40年）7月
- 38 斉藤忠『日本考古学図鑑』1965年（昭和40年）12月
- 39 江上波夫「日本美術の誕生」（『日本の美術』第1巻）1966年（昭和41年）1月
- 40 佐野大和『日本のあけぼの—考古学教室—』1967年（昭和42年）7月
- 41 森貞次郎『竹原古墳』1968年（昭和43年）3月
- 42 小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」（『史淵』第100輯）1968年（昭和43年）3月

- 43 齊藤忠「日本人の祖先」(『日本歴史全集』第1巻)1968年(昭和43年)9月
- 44 箭内健次編(『北・九州』一編文より維新まで一)1968年(昭和43年)12月
- 45 齊藤忠(『日本古代遺跡の研究』総説)1968年(昭和43年)12月
- 46 鏡山猛『歴史と風土 筑紫』1969年(昭和44年)4月
- 47 増田精一・岡本太郎「古墳と神々」(『日本文化の歴史』第2巻)1969年(昭和44年)5月
- 48 森豊『日本の遺跡』1969年(昭和44年)7月
- 49 佐野一・亀井明德「福岡県鞍手郡若宮町西の浦古墳調査概報」(『九州考古学』36・37)1969年(昭和44年)7月
- 50 森貞次郎「装飾古墳の展開」(『古代の日本』3九州)1970年(昭和45年)2月
- 51 柴田勝彦『九州考古学散歩』1970年(昭和45年)4月
- 52 松本健郎「複室墳の諸問題—熊本県菊池川流域—」(『熊本史学』第37号)1975年(昭和45年)12月
- 53 森浩一『古墳—石と土の造形—』1970年(昭和45年)12月
- 54 小田富士雄「九州の経塚」(『仏教芸術』第76号)1970年(昭和45年)
- 55 浜田信也「福岡県内前方後円墳地名表」(『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集)1971年(昭和46年)3月
- 56 小田富士雄「古代形代馬考」(『史淵』第105・106合輯)1971年(昭和49年)8月
- 57 佐田茂・松本肇「九州複室構造横穴式石室地名表」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅲ)1972年(昭和47年)1月
- 58 亀井明德「九州装飾古墳の特色」(『ふるさとの自然と歴史』第12号)1972年(昭和47年)5月
- 59 亀井正道・茂木雅博「古墳主要遺跡要覧」(『新版考古学講座』11別巻)1972年(昭和47年)7月
- 60 齊藤忠「原始美術としての絵画と文様」(『日本の美術』1)1972年(昭和47年)7月
- 61 霧久嗣郎「第6地点(若宮条里遺構)の調査」『昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1973年(昭和48年)3月
- 62 霧久嗣郎「第6—2地点(別当塚古墳)の調査」『昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1973年(昭和48年)3月
- 63 霧久嗣郎「第6—3地点(八幡塚古墳)の調査」『昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1973年(昭和48年)3月
- 64 霧久嗣郎「第7地点(杉園遺跡)の調査」『昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1973年(昭和48年)7月
- 65 水野祐『高句麗壁画古墳と帰化人』1972年(昭和47年)7月
- 66 奥村芳太郎編『古墳の旅』1972年(昭和47年)12月
- 67 森浩一『古墳—石と土の造形—』1973年(昭和48年)9月
- 68 齊藤忠『日本装飾古墳の研究』1973年(昭和48年)3月
- 69 福岡県教育委員会編(『鞍手のむかし』若宮町所在遺跡の調査報告会資料)1974年(昭和49年)9月
- 70 浜田信也『金丸古墳』1975年(昭和50年)3月
- 71 酒井仁夫「付 竹原古墳出土遺物」『金丸古墳』1975年(昭和50年)3月

- 72 宮崎貴夫「田尻遺跡」『昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1975年（昭和50年）7月
- 73 渋谷忠章・上野精志「日本各地の墳墓—九州—」（『新版仏教考古学講座』第7巻墳墓）1975年（昭和50年）3月
- 74 齋久嗣郎・小池史哲・宮崎貴夫「田尻遺跡の調査」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集）1976年（昭和51年）3月
- 75 齋久嗣郎「別当塚古墳の調査」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集）1976年（昭和51年）3月
- 76 齋久嗣郎「杉園遺跡の調査」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集）1976年（昭和51年）3月
- 77 福岡県教育委員会編（『くらでのむかし』その3）1976年（昭和51年）3月
- 78 森貞次郎編『北部九州の古代文化』1976年（昭和51年）5月
- 79 酒井仁夫「遠園遺跡」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 80 酒井仁夫「小原遺跡」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 81 酒井仁夫「柳ヶ谷遺跡」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 82 浜田信也「金丸古墳」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 83 酒井仁夫「汐井掛遺跡」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 84 酒井仁夫「茶臼山城跡・茶臼山遺跡」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 85 酒井仁夫「茶臼山遺跡」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 86 酒井仁夫「汐井掛古墳群」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 87 酒井仁夫「小原古墳群」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 88 九州歴史資料館編『奈良・平安の陶磁』1977年（昭和52年）2月
- 89 池辺元明・酒井仁夫・上野精志・松村一良「平原・柳ヶ谷・都地原遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅷ）1977年（昭和52年）2月
- 90 酒井仁夫・児玉真一・副島邦弘・佐土原逸男・松村一良「小原遺跡・小原古墳群の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅹ）1977年（昭和52年）3月
- 91 栗原和彦・上野精志・亀井明德・森本朝子・松村一良「遠園遺跡・茶臼山城跡・茶臼山遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ⅩⅥ）1977（昭和52年）3月
- 92 福岡県教育委員会編『福岡県の史跡』1977年（昭和52年）3月
- 93 児玉真一「小原遺跡」（『日本考古学年報』28 1975年版）1977年（昭和52年）4月
- 94 児玉真一「小原古墳群」（『日本考古学年報』28 1975年版）1977年（昭和52年）4月
- 95 上野精志「都地遺跡」（『日本考古学年報』28 1975年版）1977年（昭和52年）4月
- 96 三宅敏之「経塚遺物年表」（『新版仏教考古学講座』第6巻経典・経塚）1977年（昭和52年）6月
- 97 赤間太郎「筑前宗像郡新原百塚の埴輪を伴う一古墳（附）福岡県に於ける埴輪出土地名表」（『考古学』第11巻第7号）1940年（昭和15年）7月

Tab.2. 宮田町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	遺構の種類	出土遺物	時期	文献
先土器・縄文時代						
1	汐井掛遺跡	宮田町上有木字高平	散布地	ブレイド、ナイフ形石器		27・31
弥生時代						
2	汐井掛A遺跡	宮田町上有木字高平	木棺墓、箱式石棺墓、甕棺墓	銅鏡、鉄鏃、ガラス小玉、管玉、土器	後期～古墳時代前期	27・31
3	都地原遺跡	◇ 下有木字坂元	住居跡	弥生式土器	後期?	29
4	天神の上遺跡	◇ 下有木字坂元	箱式石棺墓、土壙墓			
5	柳ヶ谷Ⅱ遺跡	◇ 上有木字坂元	住居跡、柱穴群		後期	
6	柳ヶ谷Ⅰ遺跡	◇ 上有木字坂元	住居跡	弥生式土器	中期、後期	
7	柳ヶ谷遺跡	◇ 上有木字坂元	住居跡、貯蔵穴	弥生式土器、石剣、青銅製鋤先	中期、後期	29
8	上有木遺跡	◇ 上有木		大型石庖丁		11
9	芹田遺跡	◇ 芹田字勝負尻		石戈		29
10	上大隈遺跡	◇ 上大隈字町屋敷・寺の下一帯		弥生式土器、石庖丁、石斧土錘、石鏃	中期	6.9.16.19
11	本白遺跡	◇ 本城字本白		扁平石斧		
12	薬師丸遺跡	◇ 磯光字薬師丸		弥生式土器 石庖丁、片刃石斧、石鏃、砥石(石戈)		1.2.3.4.5.7.9.10.13.17.28.30
13	磯光遺跡	◇ 磯光		石戈、石鏃、石斧		12と同じ
14	千石三の谷遺跡	◇ 千石		石庖丁原石		9.14.23.24
古墳時代						
15	汐井掛古墳群	宮田町上有木字谷底・高平	約60基 内若宮町30基	須恵器、土師器、鉄刀、鉄鏃、玉類、金環	5C後～7C	27・32
16	高平古墳群	◇ 上有木字高平前	3基 複室1基、単室2基	須恵器	6C～7C	
17	神田古墳	◇ 上有木字坂元	箱式石棺	須恵器		29
18	向の畑古墳	◇ 上有木字向の畑	箱式石棺	鉄剣		29
19	高平前古墳群	◇ 上有木字高平前	2基 複室1基、不明1基			
20	四ツ塚古墳群	◇ 上有木字向の畑	6基			29
21	百塚南古墳群	◇ 上有木字向の畑	8基 様式石室3+α			

22	百塚古墳群	宮田町上有木字向の畑	約60基、石棚有り	須恵器		9・29
23	井掘古墳	◇ 上有木字井掘	横六式石室	須恵器		29
24	中有木古墳	◇ 上有木字中有木	円墳、横六式石室			
25	南ヶ浦古墳	◇ 中有木字南ヶ浦	6基 単室、複室	須恵器、鉄鏃、装身具	6C後	
26	ハル古墳	◇ 下有木字ハル	?基	不明		
27	下有木北古墳群	◇ 下有木字辻	5基 箱式石棺5	須恵器		29
28	下有木古墳群	◇ 下有木字五郎丸	7基 竪穴系横口式石室 箱式石棺4+α	直刀、ガラス小玉、鉄鏃、刀子		29
29	松ヶ元古墳群	◇ 倉久字松ヶ元	2基			
30	春日神社裏古墳	◇ 倉久字春日神社裏	円墳			
31	浦宮古墳群	◇ 本城字徳城	2基 前方後円墳 ?1、円墳1			29
32	亀石塚古墳群	◇ 本城字亀石	単室1基 2基 不明1基	鉄刀?		9
33	谷 古墳	◇ 竜徳字谷	約4基 複室1基 他不明	須恵器		29
34	竜徳古墳群	◇ 竜徳字辻屋敷	約5基 複室2基 単室3基	須恵器、鉄刀、銀環		29
35	生見古墳群	◇ 宮田字生見	2基	鉄刀		29
36	本白古墳群	◇ 本城字本白	2基 複室1基、 不明1基	鉄刀、玉類		9・29
37	谷頭古墳群	◇ 上大隈字谷頭	前方後円墳1、横 穴式石室1	埴輪、鉄鏃、管玉		29
38	上屋敷横穴墓	◇ 上大隈字上屋敷	5基以上	須恵器	6C後	29
39	安免 横穴墓	◇		須恵器、土師器、鉄鏃、銀環		
40	東町古墳	◇ 磯光字久林原	円墳、箱式石棺			
41	黄金塚古墳	◇ 鶴田字尾勝		内行花文鏡、勾玉		9・12
42	二十一ヶ墓古墳	◇ 鶴田字桃山	箱式石棺			
43	堂ノ浦古墳	◇ 磯光堂ノ浦	2基			
44	下有木遺跡	◇ 下有木		土師器、須恵器	6C後	
45	草場ノ谷遺跡	◇ 下有木草場ノ谷		須恵器		
46	桶田古墳	◇ 上有木字桶田	円墳、箱式石棺?			
47	オサグ遺跡	◇ 上大隈字長田		土師器、須恵器		
48	和田屋敷遺跡	◇ 本城字和田屋敷		土師器		
49	坂元古墳	◇ 上有木	円墳、箱式石棺	須恵器		
歴 史 時 代						
2	汐井掛墳墓	宮田町上有木字高平	5基 内1基若宮町	銅銭	奈良	27
51	平原遺跡	◇ 芹田字平原		須恵器、土師器	奈良	29

52	宮崎窯跡	宮田町倉久字宮崎		須恵器	奈良	
53	塔ノ峯遺跡	◇ 竜徳字塔ノ峯		石帯		
54	筒井田条里	◇ 下有木字筒井田				
55	下有木経塚	◇ 下有木			鎌倉	6.8.20 33
56	瑞石寺	◇ 宮田如来田		宋銭		
57	坂元城跡	◇ 上有木字坂元城崎			室町	
58	上有木城跡	◇ 上有木字井堀			室町	
59	長井鶴城跡	◇ 長井鶴			室町	
60	古野城跡	◇ 古野			室町	
61	岩永城跡	◇ 山崎			室町	
62	笠置山城跡	◇ 宮田字笠置山				
63	高取城跡	◇ 鶴田			室町	
64	祇園岳城跡	◇ 竜徳字城山			中世	
65	稲築城跡	◇ 竜徳字門の内			中世	
66	竜ヶ岳城跡	◇ 竜徳字竜ヶ岳			室町	
67	亀石五輪塔	◇ 本城字亀石				
68	瑞石寺五輪塔	◇ 宮田字如来田				
69	千石窯跡	◇ 千石		近世陶器	江戸	
宮田町遺跡参考地						
70	宮田中学校遺跡	宮田町太蔵	甕棺？ 支石墓？	甕棺		
71	鶴田遺跡	◇ 鶴田		石斧		
72	竜徳遺跡	◇ 竜徳		弥生式土器石斧、石庖丁、石鎌		
73	長井鶴古墳群	◇ 長井鶴	古墳群	土師器、須恵器		9
74	碓古墳群	◇ 長井鶴碓口	古墳群	須恵器		9
75	京野古墳群	◇ 長井鶴京野	古墳群	須恵器		9
76	本白遺跡	◇ 上大隈本白	散布地	石斧		9
77	磯光古墳群	◇ 磯光	古墳5基	須恵器		9
78	磯光古墳	◇ 磯光	古墳	内行花文鏡		9
79	鶴田遺跡	◇ 鶴田	散布地	石斧		9
80	久林原古墳群	◇ 久林原	古墳群			9
81	天照宮石枕遺跡	◇ 磯光天照宮		枕付石棺身底板？		正和元年 銘あり
82	所田古墳群	◇ 所田	古墳			9
83	辻屋敷古墳	◇ 辻屋敷	古墳群	土師器、直刀、玉、太刀、金環、銀環、馬具		9
84	新川遺跡	◇ 長井鶴新川	包含地	土師器		9
85	上大隈遺跡	◇ 上大隈	包含地	土師器		

86	桶田遺跡	宮田町下有木字桶田		土師器		9
87	上大隈遺跡	〃 上大隈		青磁		

宮田町考古学文献

- 1 小川敬養「豊前小倉近傍ノ石剣」（『東京人類学会雑誌』第98）1894年（明治27年）5月
- 2 高橋健自「銅銚銅剣考(2)」（『考古学雑誌』第13巻第6号）1923年（大正12年）2月
- 3 高橋健自『銅銚銅剣の研究』1925年（大正14年）10月
- 4 梅原末治・島田貞彦「日本発見磨製石鏃及石剣聚成表」（『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第10冊）1927年（昭和2年）3月
- 5 森本六爾『日本青銅器時代地名表』1929年（昭和4年）6月
- 6 福岡県社事兵事課「先史時代原史時代・史蹟」（『史跡名勝天然記念物所在調査書』）1930年（昭和5年）5月
- 7 後藤守一「上古時代に於ける上越地方(1)」（『考古学雑誌』第20巻第9号）1930年（昭和5年）9月
- 8 橋詰武生「筑前に於ける経塚及び経筒に就て一最近四王寺山上発見に係る八百余年前の経塚と写経一」（『筑紫史談』第57集）1932年（昭和7年）12月
- 9 石村一男・木村芳秋・清賀義男・児島隆人・沢井一雄・田中幸夫・名和羊一郎・松本亀次・三友国五郎共編「北九州考古学的遺跡一覧表(2)」（『北九州郷土史研究』第2輯）1937年（昭和12年）2月
- 10 岡崎敬「遠賀川上流の有紋弥生式遺跡地」（『考古学雑誌』第29巻第2号）1939年（昭和14年）2月
- 11 島田寅次郎「石器と土器・古墳と副葬品」（福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書第13輯）1939年（昭和14年）5月
- 12 赤間太郎「遠賀川流域古墳分布の概観」（『上代文化』第17号）1939年（昭和14年）3月
- 13 児島隆人「遠賀川流域に於ける青銅器文化」（『考古学』第11巻第11号）1940年（昭和15年）11月
- 14 森貞次郎「古期弥生式文化に於ける立岩文化期の意義」（『古代文化』第13巻第7号）1942年（昭和17年）7月
- 15 後藤守一「クリス形銅戈」（『古代文化』第14巻第6号）1943年（昭和18年）6月
- 16 九州考古学会編（『北九州古代文化図鑑』第1輯）1950年（昭和25年）2月
- 17 田中幸夫『九州の考古学』—九州の大昔—1950年（昭和25年）3月
- 18 鞍手教育研究所編『鞍手郡郷土史』1965年（昭和40年）6月
- 19 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性—九州—」（『日本の考古学』Ⅲ・弥生時代）1966年（昭和41年）1月
- 20 小田富士雄「九州の経塚」（『仏教芸術』第76号）1970年（昭和45年）
- 21 浜田信也「福岡県内前方後円墳地名表」（『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集）1971年（昭和46年）3月
- 22 石山勲他（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—Ⅲ—）1972年（昭和47年）1月
- 23 中村修身「弥生時代石器製作址に関する試論—福岡県東北部の例から—」（『速見考古』第2・3号）1972年（昭和47年）9月
- 24 小田富士雄編『原遺跡』1973年（昭和48年）3月

- 25 福岡県教育委員会編『くらのむかし』1974年（昭和49年）9月
 - 26 渋谷忠章・上野精志「日本各地の墳墓—九州—」（『新版仏教考古学講座』第7巻墳墓）1975年（昭和50年）9月
 - 27 福岡県教育委員会編（『くらのむかし』その3）1976年（昭和51年）3月
 - 28 下修信行「石戈論」（『史淵』第110輯）1976年（昭和51年）3月
 - 29 池辺元明・酒井仁夫・上野精志・松村一良「平原・柳ヶ谷・都地原遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』—Ⅷ—）1977年（昭和52年）2月
 - 30 下條信行「九州における大陸系磨製石器の生成と展開—石器の組石・形式の連関性と文化圏の設定—」（『史淵』第114輯）1977年（昭和52年）3月
 - 31 池辺元明「汐井掛遺跡」（『日本考古学年報』28）1977年（昭和52年）4月
 - 32 上野精志「汐井掛古墳」（『日本考古学年報』28）1977年（昭和52年）4月
 - 33 三宅敏之「経塚遺物年表」（『新版仏教考古学講座』第6巻 経典・経塚）1977年（昭和52年）6月
- この地名表、文献は上野の『遠賀川流域遺跡地名表』第7集—宮田町—と同第8集—若宮町—を基礎に作成したものであるが、現存発掘調査中である地域振興整備公団宮田・若宮地区工業団地に伴う発掘調査関係の遺跡については調査担当者である県文化課技師池辺元明氏に御教示願った。記して感謝する次第である。

Ⅲ 咲花遺跡の調査

Ⅲ 咲花遺跡の調査

1. 調査の経過

咲花遺跡の発掘調査は、土地問題の関係上、2度にわたり実施した。第1次調査は1974年（昭和49年）5月27日から6月12日。第2次調査は1975年（昭和50年）7月29日から8月2日であり、調査団は次のとおりである。

第1次調査 1974年（昭和49年）5月27日～6月12日

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	上野精志
調査補助員		内田始
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	山本文和
	嘱託	因将太

第2次調査 1975年（昭和50年）7月29日～8月2日

調査担当者	福岡県教育庁文化課技術主査	栗原和彦
調査補助員		千野裕通
		小味山ゆり
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	山本文和
	嘱託	因将太

なお、これらの調査には地元在住各位の協力があった。以下調査日誌より経過を抜粋する。

第1次調査 1974年（昭和49年）

5月27日～6月1日 遠園遺跡の調査終了に伴い、直轄第7地点の本遺跡の発掘調査にかかる。発掘面積が狭く、表土層が比較的うすいため、ベルトコンベアーを利用して人力で表土除去作業を行う。表土層より近代陶器、若干の土師器、須恵器出土。

6月3日～6月8日 表土除去作業に伴い発見された遺構の発掘にかかる。合せて遺構内の遺物出土状態の写真撮影などを行う。

6月10日～6月12日 発掘作業により検出された遺構群の実例、合せて遺跡全体の実測作業を行う。又、遺構各々、全体写真撮影を行い、第1次調査を終了する。

第2次調査 1975年（昭和50年）

7月29日～8月2日 第1次調査の北東部に位置する水田の東西にトレンチを設定し発掘する。遺構が検出されないし、拡がりがあると思えないのでトレンチの土層断面図と写真撮影を行ない調査を終了する。若干の須恵器、土師器が出土する。

2. 調査の内容

咲花遺跡は鞍手郡若宮町沼口咲花に在り、山口川の右岸近くで20m程しか離れていない。汐井掛遺跡群が存在する丘陵が南西に延び山口川と平行して丘陵裾部がありその裾部よりさらに北西に向って発達した段丘上に位置している。山口川との比高は4mであり、標高は50mから56mのはほぼ平坦面であるが、これは近世の開墾によるものか、遺構存在以前の整地かは判明しない。(Fig. ①・②, PL. 1~3)

調査の結果、竪穴式住居跡3基、土壇3基、掘立柱建物2棟、他に大小ピットが約60程検出される。(Fig. 3・4, PL. 3)

(1) 住居跡 (Fig. 5・6, PL. 4・5)

住居跡は遺跡の北方の台地端近くと、南方の台地端とに3基を検出し、前者を第1号・第2号跡、後者を第3号跡とする。いずれも平坦地であり相互間の距離は20mである。なお第1号・第2号住居跡には排水の機能を有する溝が付属しているようである。

第1号住居跡 (Fig. 5, PL. 4)

遺跡の北方、台地端近くに在り隅円長方形を呈し、主軸方位はN95度Sを測りカマドを有している。

平面プランは3.60m×2.60mの隅円長方形であり現存壁高は10cm程で、全体的に住居跡の遺存は悪い。周溝が北側壁中央部に付属するカマドの東から南壁側さらに西壁側に認められ、北側壁下では周溝は認められない。北側壁ではカマドの西側壁下には周溝は存在しない。

カマドは北壁側にあり床面上には両袖部はなく楕円形の凹地がありそれが北側壁より突き出ている煙道となっている。凹地の大きさは90cm×50cmで深さは10cm程で中央部が一番深く凹む。この凹地内には焼土層が充満している。床面内、住居跡の周辺にいくつかのピットが存在しているが、住居跡の主柱となるものは存在しないようである。しかし Fig. 5 の P 1, P 2 は本住居跡と関係するかもしれない。

住居跡に付属する遺構として南側壁の東隅寄りに溝があり南西側の台地端まで続いていて、溝は長さ約37mで上幅20cm前後、底幅15cm前後で深さは8~12cm程である。この溝は住居跡の排水施設としての溝と思われる。

出土遺物 (Fig. 7-1~3, PL. 9)

床面上、覆土内より若干の土師器が出土している。

土師器 甕 1は小型の甕で底部、胴部を欠く。口縁部のみであり残存高6cmである。口径17.7cmで、胎土は小砂粒を若干含むも密であり、焼成は良で、茶褐色を呈す。器面の磨耗がは

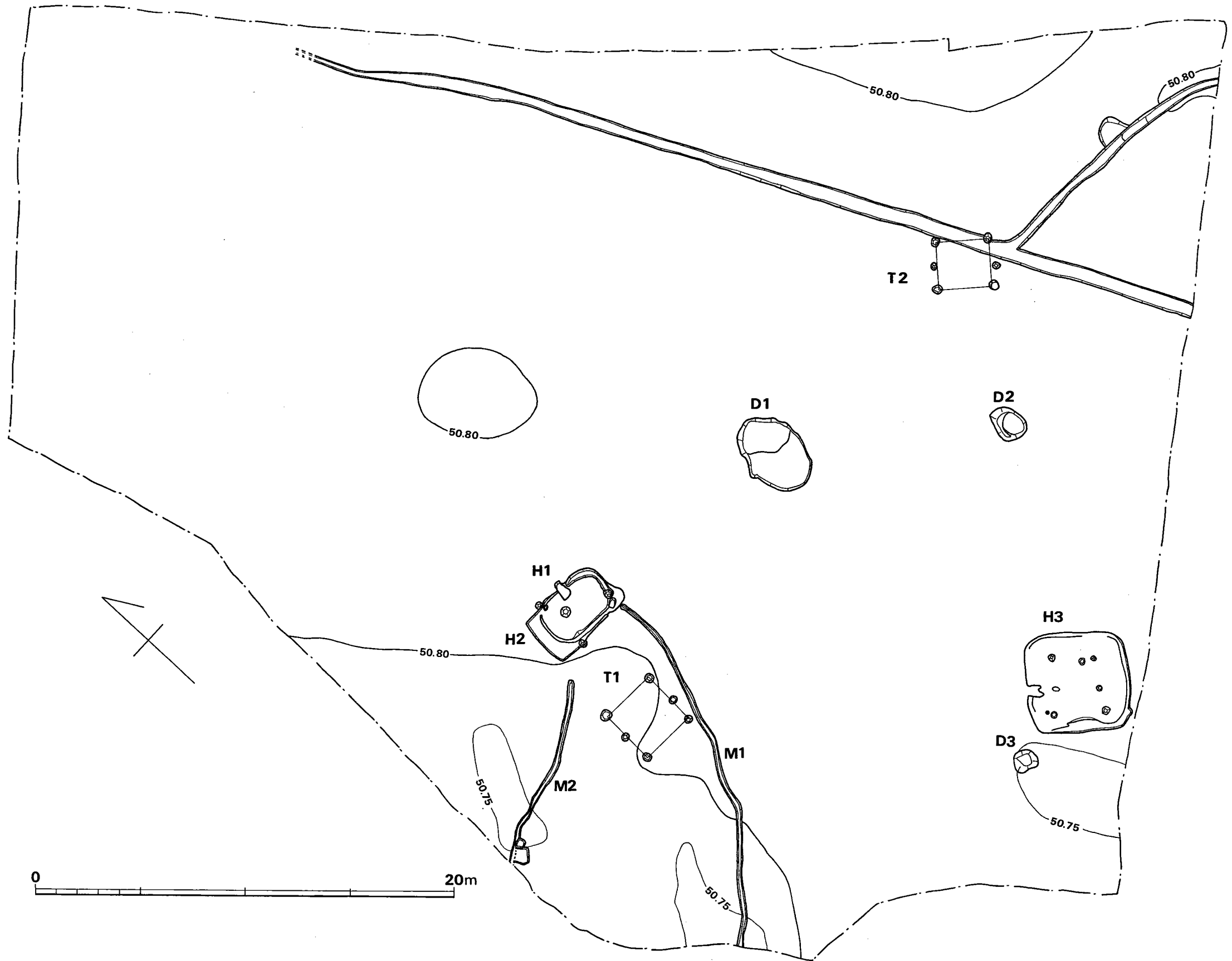


Fig. 3 咲花遺跡地形図 (縮尺1/200)



Fig. 4 咲花遺跡遺構配置図 (縮尺1/200)

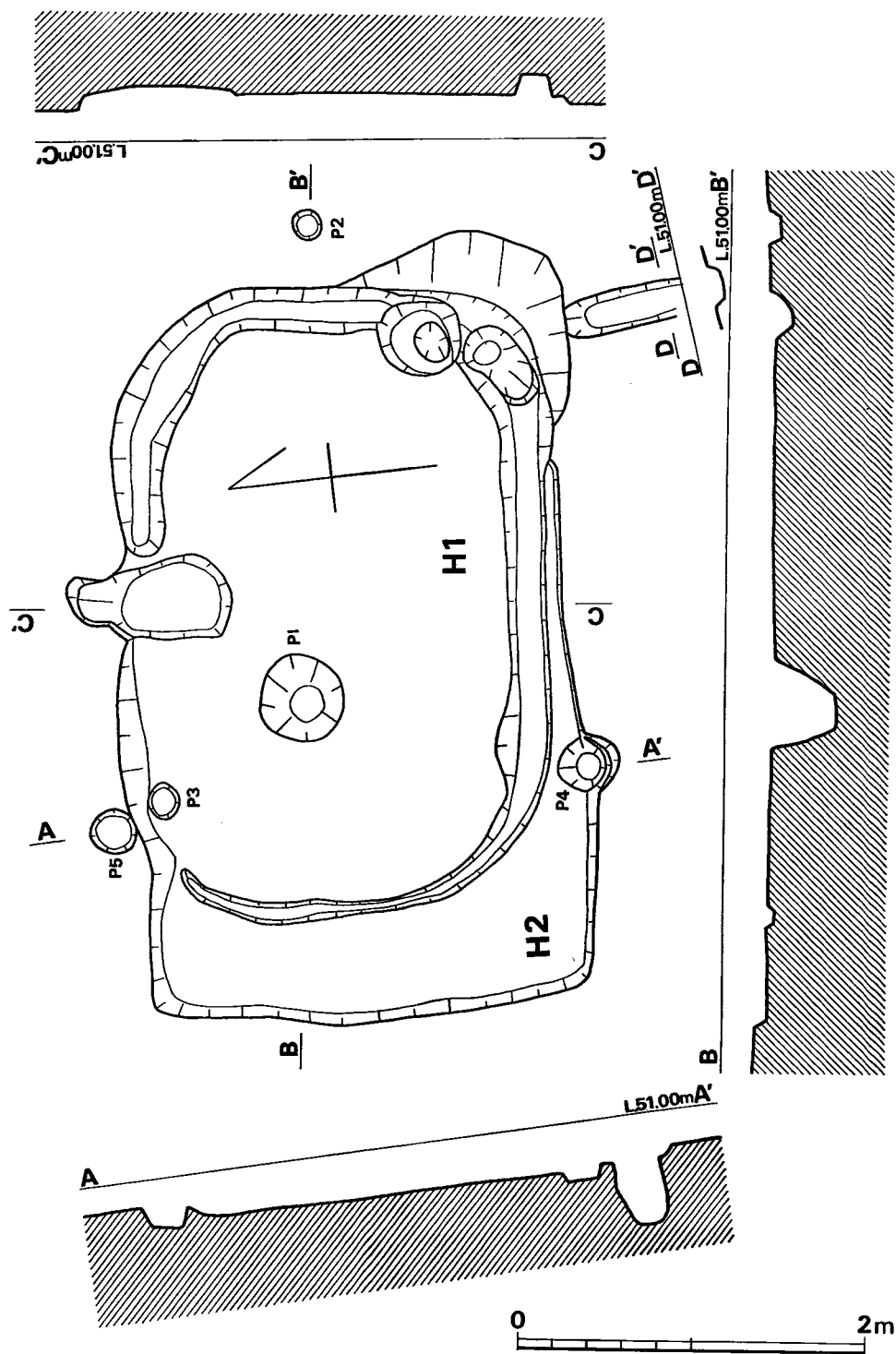


Fig. 5 咲花遺跡第1号・第2号住居跡 (縮尺1/40)

げしく調整不明である。

坏 2 は完形品である。底部は尖り気味で胴部より口縁部にかけて大きく内反し、口縁端部はやや尖り気味であり、口径11.3cm、器高5.2cmである。胎土は大砂粒を含む微密であり、焼成は良好で明橙褐色を呈す。調整は器面内外にはかすかに研磨痕がみられるようであるが剥落がひどく詳細は不明である。

塊 3 は底部を欠くが、底部は丸いものと思われ胴部へ続いて口縁部にかけて一度直立して大きく外反する。端部は丸い。口径12.6cm、器高推定5.8cmである。胎土は微密であり、焼成良好で橙褐色一部黒褐色を呈す。調整は内外面とも丁寧に磨き仕上げている。

第2号住居跡 (Fig. 5, PL. 4)

第1号住居跡と重複しており、第1号住居跡の拡張とも思われたが覆土の状況等考慮して調査したが排水溝や柱穴の関係より1つの住居跡とする。主軸方位はほぼ第1号住居跡と同じである。

平面プランは第1号住居跡の南側壁に切られているが南東隅の曲がり角が認められるので、3.10m×2.60mの長方形を呈し、現存壁高は10cm程である。床面は平坦であり、周溝・カマドは付属していなく、焼土層も認められない。柱穴は Fig. 5 の P 3, P 4 と思われ、あるいは P 5 も関係するかもしれない。

第1号住居跡と同じように家屋外に溝があり、2号溝も住居跡の南西側台地端まで続いている。住居跡の南西隅より1m離れており全長約20m、上幅25cm、下幅10cm、深さ12cm前後である。

出土遺物はこの住居跡の覆土内や、床面上には見られないのでなしとする。

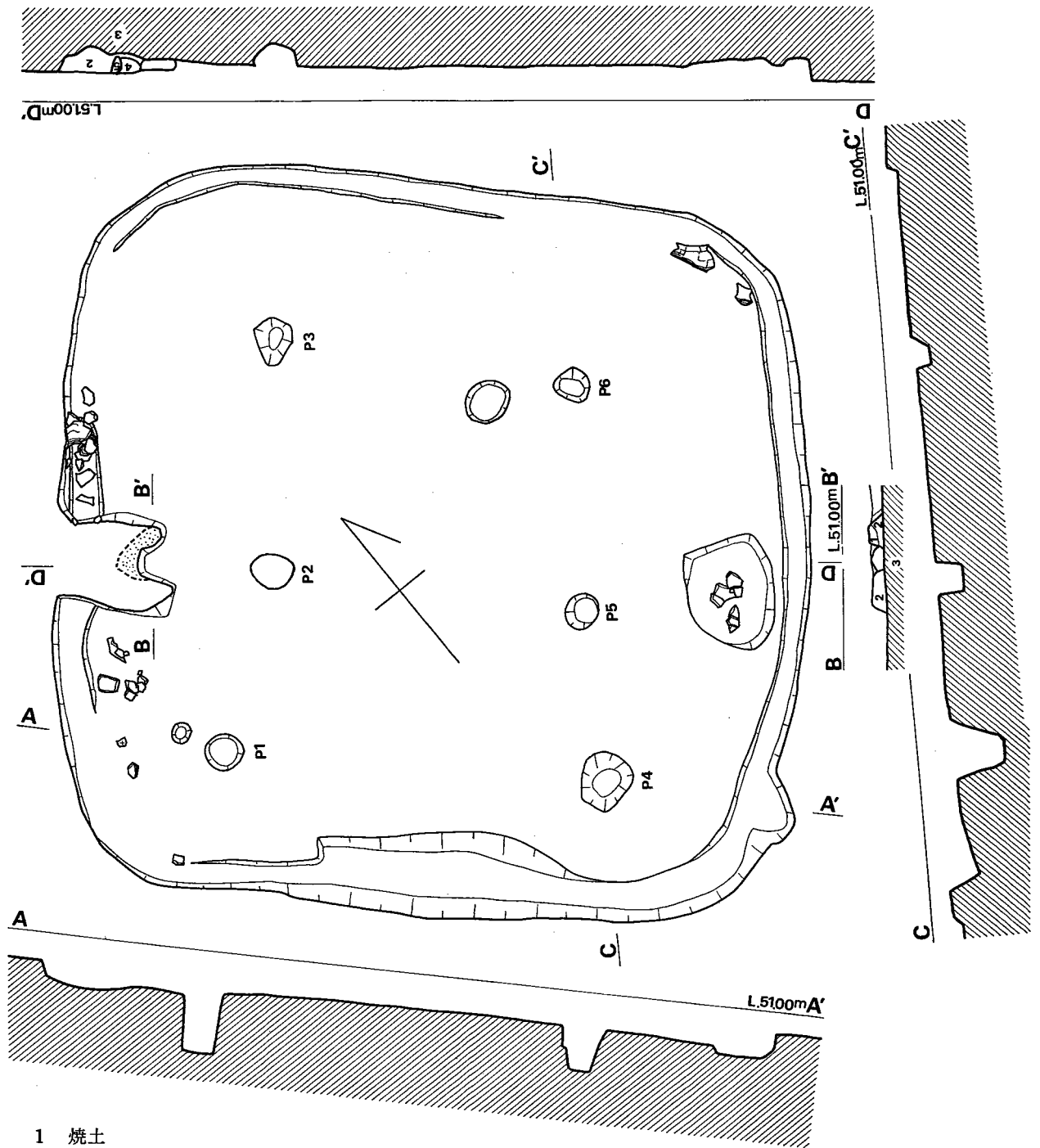
第3号住居跡 (Fig. 6, PL. 5)

遺跡の南側、台地の先端近くの隅にあり、南東壁より30cm程で崖になっている。主軸方位はN42度Eである。

平面プランは4.80m×4.80mの方形を呈して現存壁高は10cm程である。各壁下に周溝があり一部確認出来ないが本来は存在していたものであろう。幅は20cm、底面15cm、深さ6cm平均で南西壁側は一部幅広くなっている。床面は一部に凸凹があるがほぼ平坦であり、水平である。

カマドが北西壁中央部よりやや南西壁よりであり、両袖を有している。奥行き80cm、幅60cm、焚口幅20cmで、右側袖がやや左側袖に対して細い。焚口部は床面より若干凹んでいて焼土層がみられる。煙道はなく直接家屋外に排煙していたものであろう。柱穴は Fig. 7 の P 1 から P 6 の 6 本柱で北東—南西方向に梁が向く。

南東側壁のやや南西壁寄りにカマドと対応して70cm×55cm、深さ10cmの不整形の掘り込みがあり、床面は凸凹がはげしい。



- 1 焼土
- 2 茶褐色粘質土
- 3 黄褐色粘質土(地山)
- 4 茶褐色粘質土(焼土混り)
- 5 灰色粘質土

0 2m

Fig. 6 咲花遺跡第3号住居跡実測図(縮尺1/40)

出土遺物 (Fig. 7—4~10, PL. 9)

カマドの周辺や周溝, 床面より土師器, 須恵器が出土する。

土師器 甕 4は東方隅に出土した甕で, 底部を欠く, 口縁部は丸く外反していて, 口径17.8cm, 残存器高18.0cmである。胎土は微密であり, 焼成は良好で外面の胴部より上半は赤橙褐色, 下半は部分的に黒色が混っていて, 内面は黄白橙褐色を呈す。調整は胴部の外面ハケ目, 内面雑な斜めのヘラ削りである。

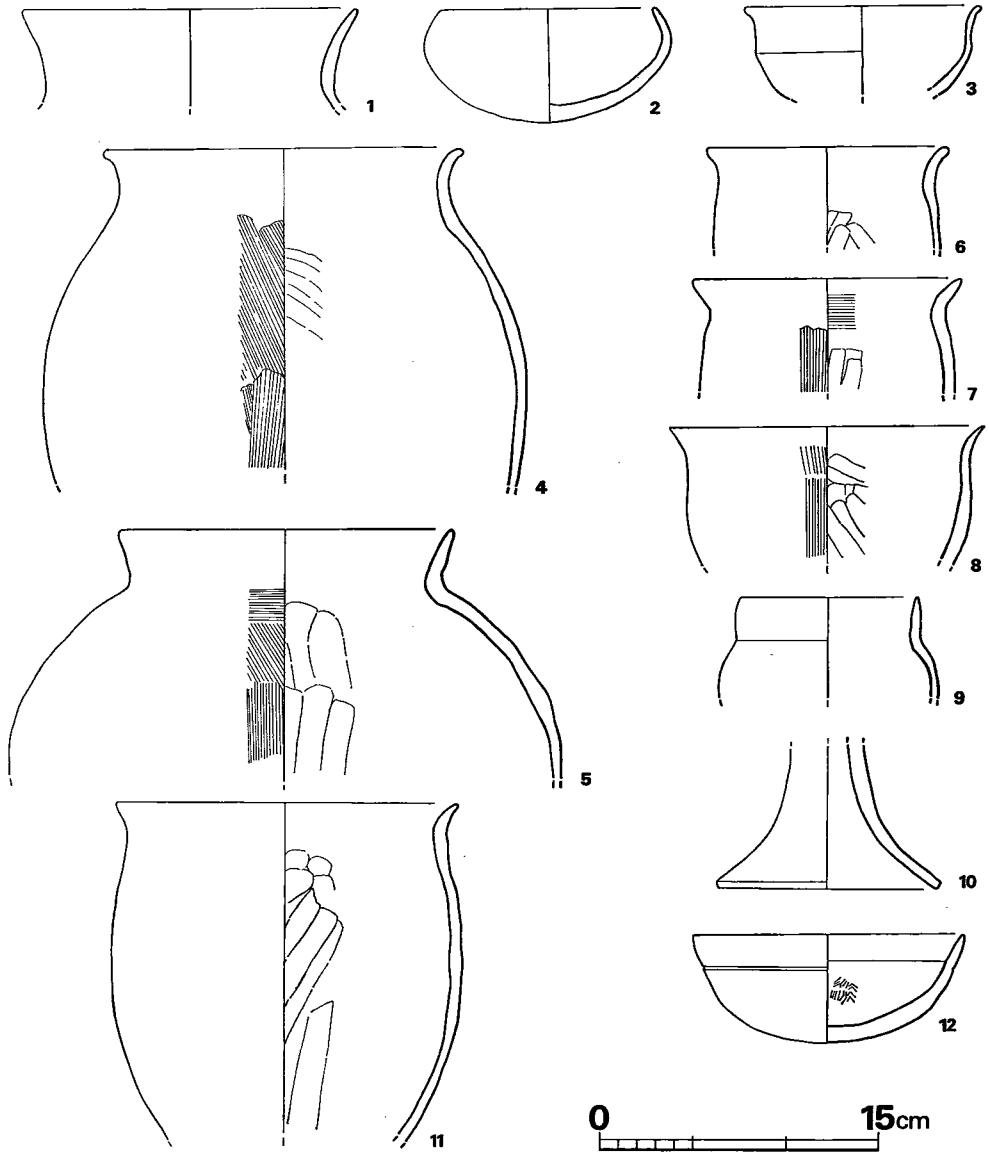


Fig. 7 咲花遺跡出土土師器実測図 (縮尺1/4)

5はカマド右側の周溝内より出土した甕で底部を欠く。口縁部は頸部より直線的にのびて外反する。口径17.5cm, 残存器高13.2cmである。胎土は小石粒を多量に含んでいてやや粗であり、焼成は良で外面は橙褐色、内面は黒茶褐色を呈す。調整は外面荒いハケ目で、内面はかるくたてにヘラ削りを施す。

6は小型のもので底部を欠く。口径12.6cm, 残存器高5.5cmである。胎土は微密であり、焼成は良好で外面の胴部は赤褐色、口縁部は橙褐色、内面は全面茶褐色を呈す。調整は外面火を受けているようで剝落がひどく不明である。内面はヘラ削りを施す。

7は小型のもので底部を欠く。口縁部は頸部より直線的にのび、口縁端部は尖り気味である。口径14.2cm, 残存器高6.1cmである。胎土は小砂粒を若干含んでいるが微密であり、焼成は良好で外面明赤褐色、内面は灰橙褐色を呈す。調整は外面にやや深いたてのハケ目、内面は口縁部の中ほどより胴部上端にかけてこまかいよこのハケ目、胴部はヘラ削りを施す。

8は浅めの甕と思われ、底部は欠き、口縁端部は細く大きく外反する。口径16.8cm, 残存器高7.5cmである。胎土は微密であり、焼成は良好で外面は赤褐色、内面は黒茶褐色を呈す。調整は外面の口縁部近くに浅い雑なハケ目、胴部は器面の剝落がひどく不明瞭であるが、やや間隔のあく浅いハケ目のようである。内面胴部はヘラ削りであるが、浅く雑である。

壺 9で底部を欠く、口径9.4cm, 残存器高5.5cmである。胎土は小砂粒を若干含むも微密であり、焼成は良好で内外面とも黒茶褐色を呈す。調整は外面の剝落がひどく分りにくい、丁寧な磨きのようである。内面の口縁部はハケ目、胴部は外面に同じように磨き上げられ、内外面とも丁寧な仕上げで精製品である。

高坏 10で坏部を欠き、脚部のみである。底径11.6cm, 残存器高7.6cmである。胎土は大砂粒を多量に含んでいて粗であり、焼成は良で内外面とも明褐色を呈す。調整は内外面とも剝落がひどく不明である。

(2) 土壇 (Fig. 8・10, PL. 6・7)

土壇は遺跡のほぼ中央に第1号土壇、南東方向に10m離れて第2号土壇が在り第3号住居跡の西方1mに第3号土壇が位置する。

第1号土壇 (Fig. 8, PL. 6)

4m×3m, 深さ20cmの楕円形で、底面からの立ち上りは直でなくなだらかに中心部が深くなる。北側半分はさらに一段深くなっている。底面には拳大の石が存在し覆土中より土師器・須恵器が投げ捨てられた状態で出土する。

出土遺物 (Fig. 8・9, PL. 9)

Fig. 8, PL. 6のように土壇床面よりかなり浮いた状態で須恵器、土師器が出土している。

須恵器 坏身 Fig. 9—1 は天井部を欠く。たち上り部の中ほどが太く、受部は水平であり

先端部は丸い。口径10.8cmである。胎土は細砂粒を多量に含んでいて、焼成はやや良で外面は暗灰色、内面のたち上り部は白灰色で体部は暗灰色を呈す。

2はほぼ完形品であり、口径11.9cm、器高5.6cmである。胎土は密であり、焼成は不良で器面はかなり剥落して内外面とも白灰色を呈す。

3も天井部を欠く。たち上り部の器肉が厚く受部の端部が先上りで、口径12.7cmである。胎土は砂粒を若干含んでいるがやや密であり外面は暗灰色、内面は灰色を呈す。

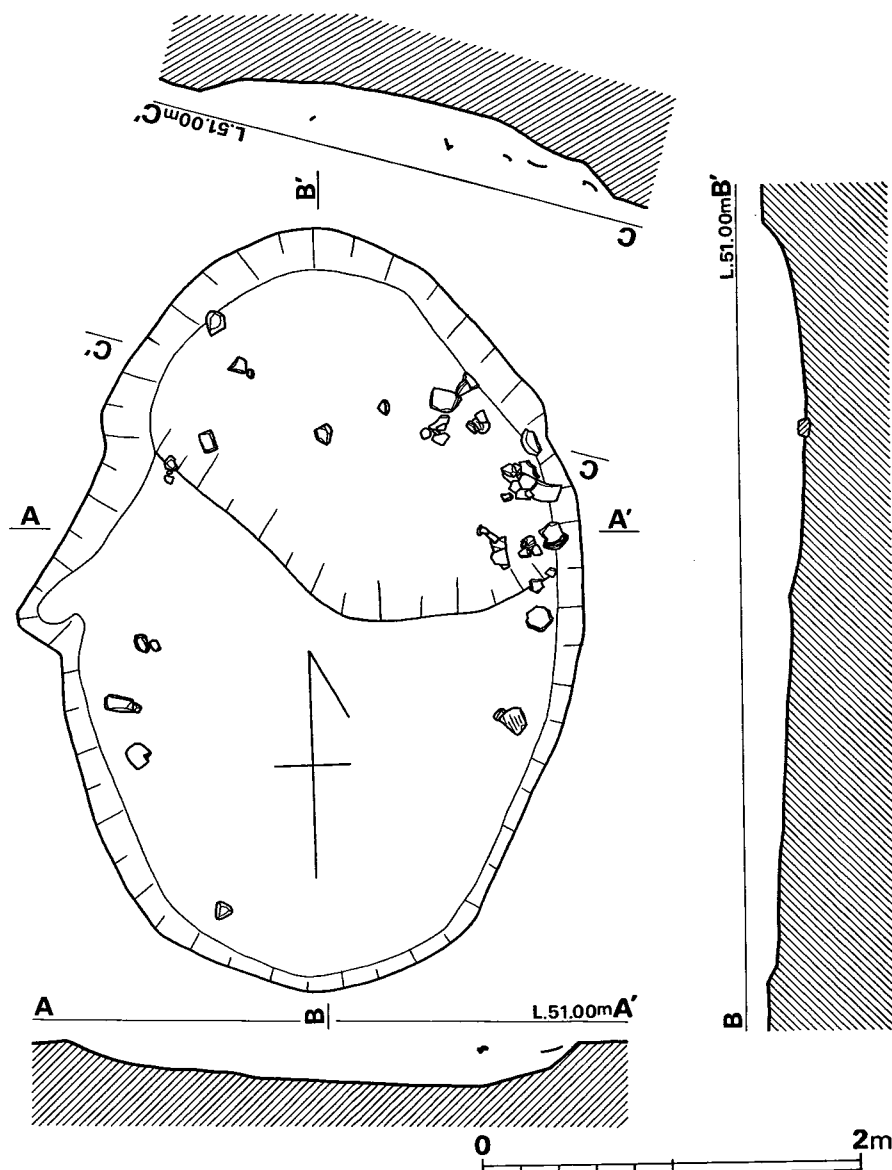


Fig. 8 咲花遺跡第1号土坑実測図(縮尺1/40)

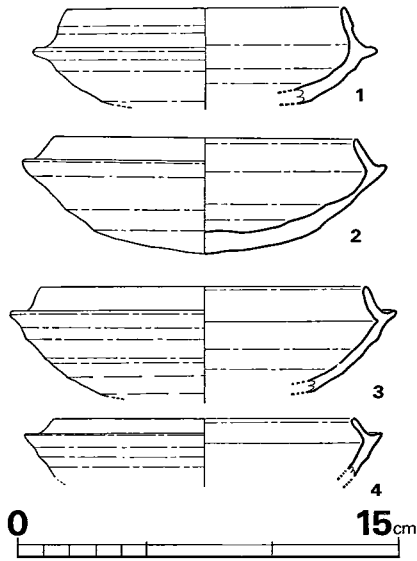


Fig. 9 咲花遺跡出土須恵器実測図 (縮尺 1/3)

第2号土坑 (Fig. 10, PL. 7)

1. 60m × 1.40m, 深さ30~40cmの楕円形で南北にやや長い。北側から西側にかけて二段掘り

土師器 甕 Fig. 7—11で底部を欠く、口径18.0cm, 残存器高17.9cmである。胎土は微密であり、焼成は良好で外面の上半は橙褐色, 下半赤褐色に黒色混り, 内面の口縁部黒橙褐色で胴部は黒褐色を呈す。

12は坑で、外面の体部に一条の沈線が巡る。口径14.4cm, 器高5.7cmである。胎土は小白粒を若干含むも密であり、焼成は良好で内外面とも明橙褐色を呈す。調整は内外面の剝落がひどく不明であるが、内面の一部に爪形か竹管と思われる押しがある。

他にこしきの把手片もある。

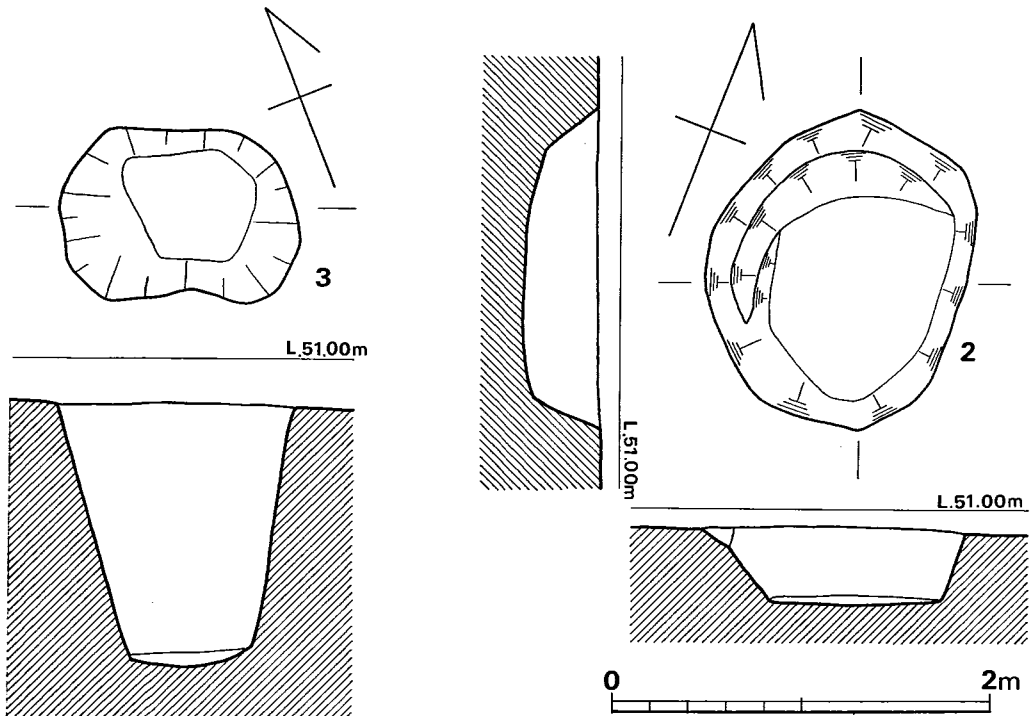


Fig. 10 咲花遺跡第2号・第3号土坑実測図 (縮尺1/40)

の様相を呈し、床面は平坦である。壁の立ち上がりは東側と南側壁は直に近く北側と西側壁は緩傾斜に立ち上る。底面は北側より南側が10cm程深い。

出土遺物はない。

第3号土坑 (Fig. 10, PL. 7)

1.25m×0.9m, 深さ1.40mの不整形で東西が長い。深いためにか底面は上幅に比べて狭く65cm×60cmであり底面は平坦でなくやや尖り気味である。

出土遺物はない。

(3) 掘立柱建物 (Fig. 11・12, PL. 8, Tab. 3・4)

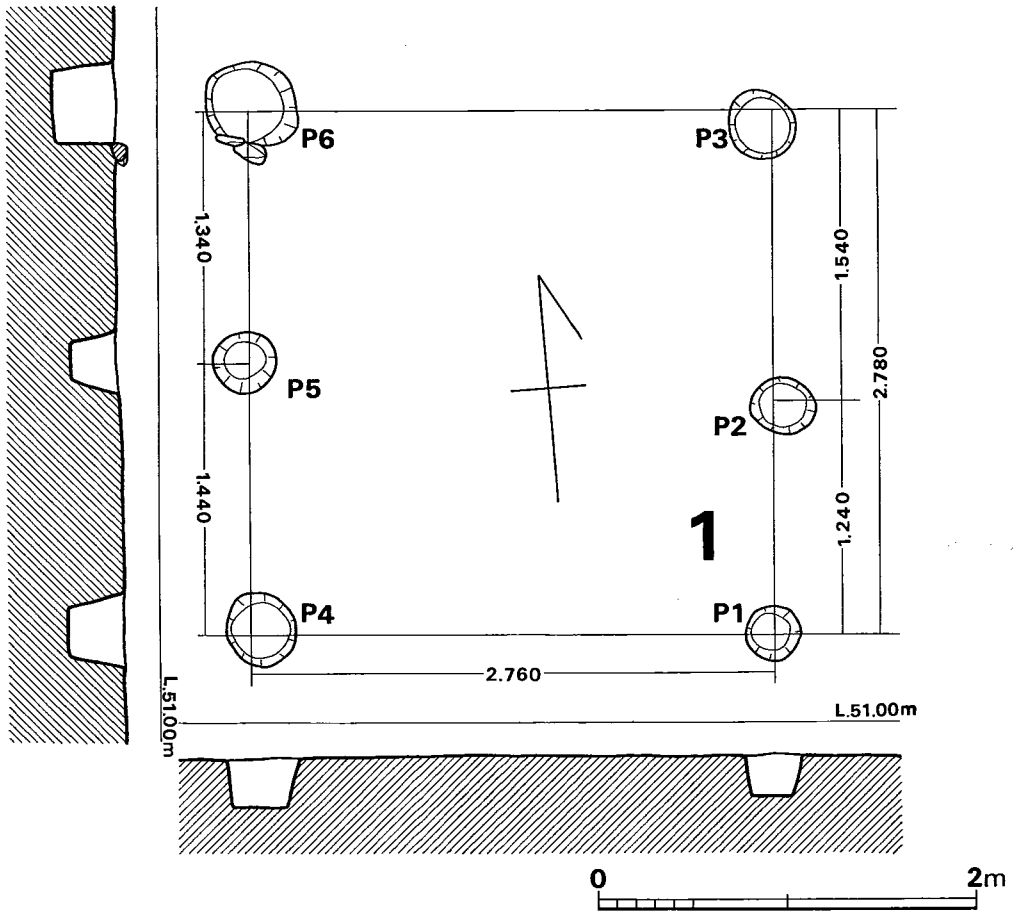


Fig. 11 咲花遺跡第1号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

遺跡の西方に1間×2間のものを第1号とし、東方の1間×2間のものを第2号とする。

第1号掘立柱建物 (Fig. 11, PL. 8, Tab. 3)

第1号住居跡の排水溝と第2号住居跡の排水溝との間にあり、第1号住居跡より南方へ7m離れて位置する。1間×2間の建物で桁行方向をN5度Wにとり、正方形のプランである。平均桁行間278cm、梁間間278cmを測る。梁間柱間はP1とP2が124cmで一番短かく、P2とP3が長くて150cmである。桁行間はほぼ平均的な長さである。柱穴掘り方は円形でP1が小さくて30cm、一番大きなP6で51cmあり、平均は36.8cmを測る。深さはP6が31cmで最も深く、P1が22cmで浅く平均は26.7cmを測る。P6には掘り方の周りに拳大の川原石2個が接してある。柱穴内には出土遺物はない。

Tab. 3 咲花遺跡第1号掘立柱建物計測表

(単位cm)

2間 × 1間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深	径
P1 \ P2	1 24	} 2 78	P1 P4		2 76	1	22	30
2 \ 3	1 50					2	28	33
4 \ 5	1 44	} 2 78	3 6		2 73	3	28	36
5 \ 6	1 34					4	28	38
平均	1 38	2 78			2 78	5	26	33
						6	31	51
						平均	26.7	36.8

第2号掘立柱建物 (Fig. 12, PL. 8, Tab. 4)

第2号土坑の北東方6m離れてあり溝と重複しているが、この溝は現代の水田排水溝であることを確めた。

1間×2間の建物で桁行方向をN138度Sにとり、長方形プランを呈する。平均桁行間は269cmであるがP2P5が棟になると思われる。梁間間は225cmを測る。P1、P3、P4、P6の関係はほぼ長方形であり、P2はP1とP3の中心的位置にはない。柱穴掘り方はP2とP

Tab. 4 咲花遺跡第2号掘立柱建物計測表

(単位cm)

2間 × 1間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深	径
P1 \ P2	1 04	} 2 24	P1 P4		2 56	1	34	41
2 \ 3	1 20					2	8	32
4 \ 5	1 11	} 2 26	3 6		2 53	3	40	38
5 \ 6	1 15					4	6	42
平均	1 12	2 25			2 69	5	10	28
						6	37	40
						平均	22.5	36.8

5が小さく径の平均30cm、深さ10cmでありP1、P3、P4、P6の径平均40.2cmで深さは26.7cmを測る。柱穴内、周辺に出土遺物はない。

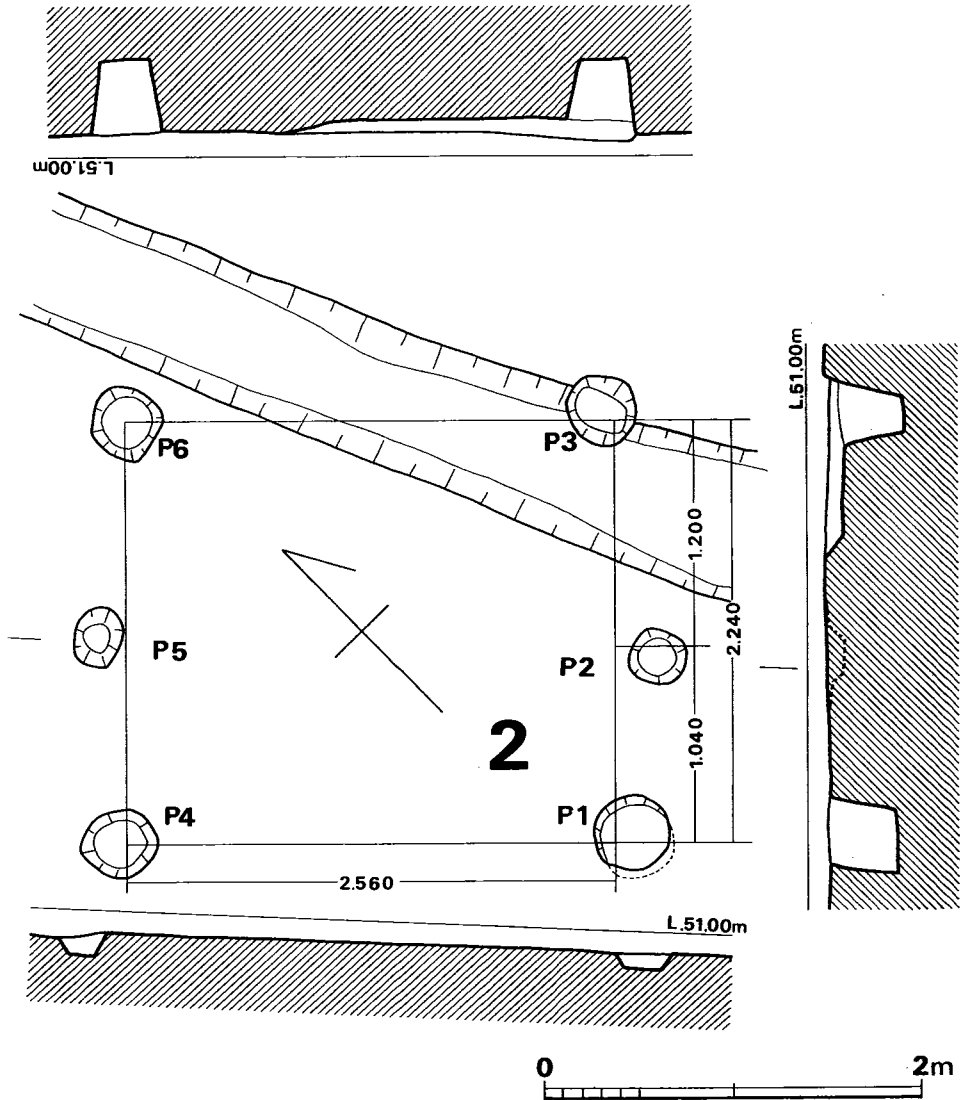


Fig. 12 咲花遺跡第2号掘立柱建物実測図 (縮図1/40)

(4) トレンチ (Fig. 13・14, PL. 10)

住居跡などが検出された台地先端部と、汐井掛遺跡群のある丘陵との間にトレンチを設定し遺構の有無を調査する。トレンチは北方側に西トレンチと、東トレンチ、南方側には西トレンチと坪掘りを行なった。北一西トレンチは長さ43m、幅2mで遺構は検出されず、北側壁の土層断面図を作成する。出土遺物は地山直上層より若干の土師器、須恵器が出土する。北一東ト

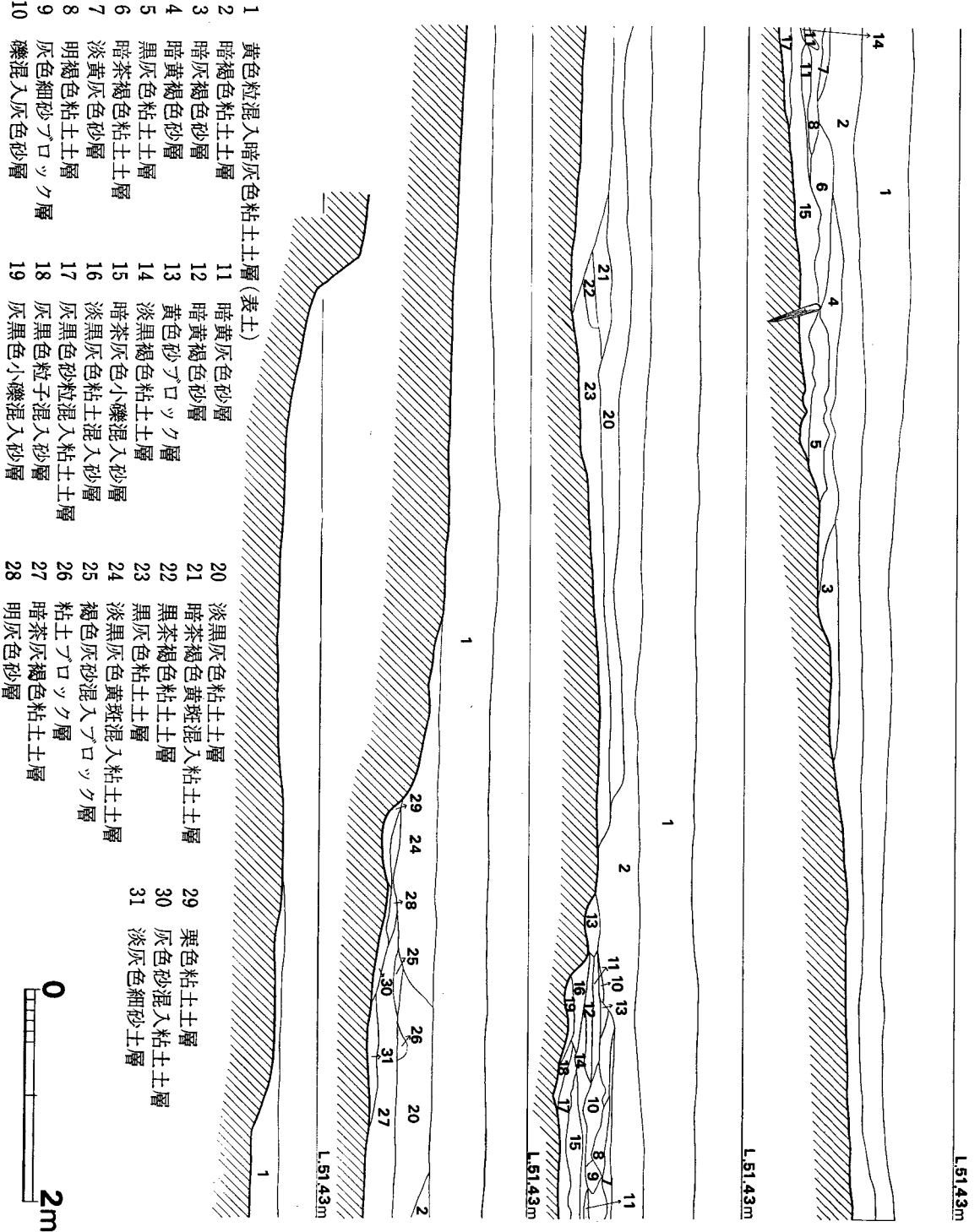


Fig. 13 花塚遺跡北一西トレンチ土層断面図 (縮尺1/60)

レンチは長さ16m、幅2mであり西方寄りでは地山が検出できたが東方では谷になっており地山まで急に下るようで遺構の検出はないものと思ひ途中で放棄する。そして西トレンチと同じように北側壁の土層断面図を作成する。出土遺物は若干の土師器と須恵器である。

南方側のトレンチは遺構の検出はなし、土層断面図の作成は実施しない。

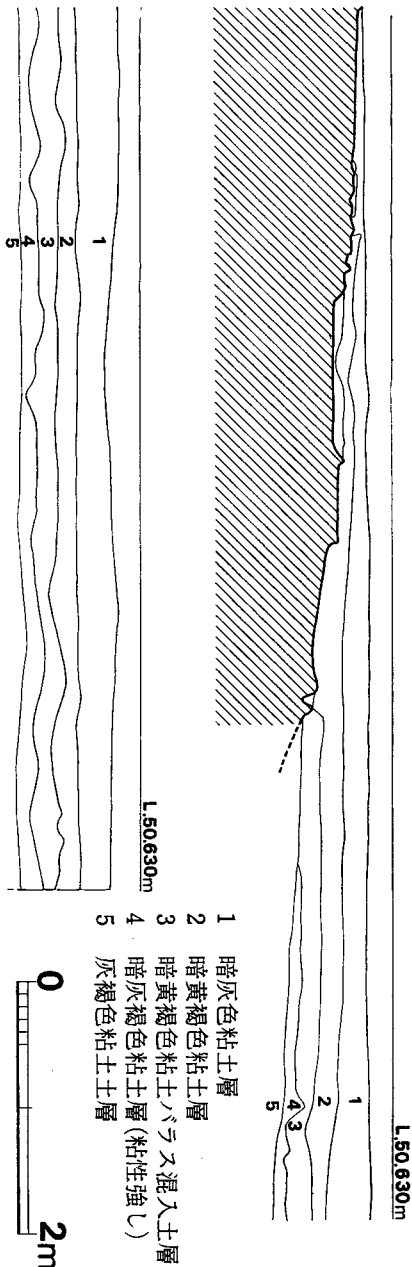


Fig. 14 咲花遺跡北一東トレンチ土層断面図 (縮尺1/60)

出土遺物 (Fig. 15, PL. 10)

北方側の東西両トレンチより少量の土師器と須恵器が出土している。1, 6, 7, 9, 11は西トレンチ灰褐土層出土で、2~5, 10は東トレンチ灰褐土層出土である。

西トレンチ (Fig. 15, PL. 10)

須恵器 坏蓋 1はほぼ完形品でつまみを有する。天井部より口縁端部にかけて大きく内反して端部は丸く、器内にかえりはない。口径15cm、器高2.6cmである。胎土は密であり、焼成は良で内外面ともに青灰色を呈す。調整は外面の天井部へら削り、その他はナデである。この土器は全体的に少し歪んでいる。

坏身 6は底部のみで、底径8.9cm、残存器高1.5cmである。胎土は微密であり、焼成は良で内外面とも青灰色を呈す。調整は体部よこナデ、体部と底部の境付近はへら削り、底部はナデで、底部内面は不整方向のナデである。

7は底部の中央部を欠く。体部より口縁端部にかけてやや外反し、口縁端部より下へ0.5cmの外面に浅く狭い沈線が一条巡る。口径14.0cm、器高3.75cmである。胎土は微密で、焼成は良であり内外面とも青灰色を呈す。調整は外面よこナデ、底部近くはへら削りで底部内外面はナデである。

8は、底部より体部にかけて、丸味をもって立ち上がり、口縁端部にかけてやや大きく外反する。口径12.4cm、器高3.7cmである。胎土は微密で、焼成は良で内外面とも青灰色を呈す。

調整は外面の体部よこナデ、底部へラ削りで内面の体部よこナデ、底部は不整方向のナデである。

9は体部のみであり、体部より口縁端部にかけて短くて大きく外反し口縁端部は細い、口径13.8cm、器高推定4.9cmである。胎土はやや粗で多量に小砂粒を含む。焼成は良で内外面とも青灰色を呈す。調整はよこナデである。

土師器 坏 11は小破片であるが土師器で図示出来たのはこれ一点である。高台が付き丸く体部へのび、口縁端部は大きく外反する。胎土は小砂粒を若干含むも微密であり、焼成は良で内外面とも茶色を呈す。調整は剥落がひどく不明である。

東トレンチ (Fig. 15, PL. 10)

須恵器 坏蓋 2は天井部を欠くが、肩部よりなだらかに口縁端部と続きかえりはない。口径13.6cmである。胎土は微密であり、焼成は良で内外面とも黒灰色を呈す。調整はナデである。

坏身 3は口縁部を欠くが高台が付き、高台は底部貼り付けで外反する。高台径9cmであり現存器高3.0cmである。胎土は微密であり、焼成は良で内外面とも青灰色を呈す。調整はよこナデである。

4は口径12.8cm、器高3.4cmで器肉が厚い。底部より口縁端部に直線的にのびる。胎土は微密であり、焼成は良で内外面とも青灰色を呈す。調整はナデである。

5は口径13.2cm、器高3.6cmである。底部よりやや丸味をおびて体部へつづき、体部の下方で大きく外反していて、口縁端部はかすかに内反して丸い。胎土は微密であり、焼成は良で内外面とも青灰色を呈す。調整はよこナデで、底部外面はハケ状の沈線がみられる。

坏身 10は破片であるが、坏身と思われる。口径推定15.4cm、器高1.4cmである。胎土は微密であり、焼成は良で内外面とも青灰色を呈す。調整はよこナデである。

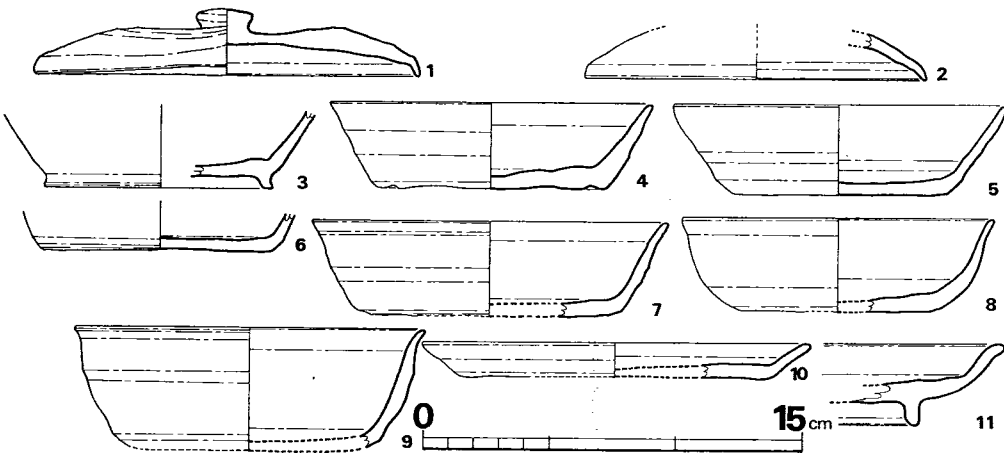


Fig. 15 咲花遺跡トレンチ出土土器実測図 (縮尺1/3)

3. 小 結

咲花遺跡より検出された遺構は竪穴式住居跡3，土壇3，掘立柱建物2，その他大小ピット約50ほどである。遺物は第1号住居跡より土師器，第3号住居跡より土師器，第1号土壇より須恵器，土師器である。

第1号住居跡と第2号住居跡は前後して第1号住居跡の方が新しいようである。調査中において第2号住居跡は，第1号住居跡の拡張か，又ベット状遺構のような施設かとも考えたが，排水と推定される溝の検出などがあり，一つの住居跡として考える。第1号住居跡にはカマドが付属して第2号住居跡には伴わない。これは第1号住居跡と同じカマドと推定できるが，第2号住居跡の規模を $3.10m \times 2.60m$ のものとするとカマドは北東壁に寄り過ぎの観もある。

排水溝については近年福岡県内でもいくつかの発見例があり確認されている。1つは同じ九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査による鞍手郡鞍手町向山の向山遺跡第3号住居跡と、^(註1) 粕屋郡粕屋町教育委員会により昭和51年度に緊急発掘調査された粕屋郡粕屋町古大間の古大間池遺跡の第3号・第5号・第6号住居跡^(註2)があり，他に近畿地方でも例が知られている。

向山遺跡の第3号住居跡は長辺約 $3.70m$ ，短辺約 $3.50m$ の方形竪穴式住居跡で，短辺壁と長辺壁の隅に台地の下方に延びる溝があり，住居跡に伴う排水溝と考えられている。溝は上幅 $20cm$ ，下幅 $16cm$ ，深さは断面図・記述がないので不明，住居跡の一番標高の底い隅にあり，それより下方に延びていて途中で切れている。住居跡内の四壁下にはカマドが付属する部分を除いて周溝が掘られていてそれらは排水溝に続いている。

古大間池遺跡の第3号住居跡は『長辺 $4.55m$ ，短辺 $4.5m$ ，深さ $30cm$ の方形竪穴式住居跡で四方の壁沿いには周溝が廻り，南壁と東壁とを結ぶ隅には，断面が逆台形の排水溝が丘陵斜面に沿って蛇行する。規模は幅 $15cm$ ，深さ $15cm$ を測る。』この住居跡は弥生時代後期のものである。第5号・第6号住居跡は円形で，やはり丘陵斜面に沿って排水溝が検出されている。これらの住居跡は弥生時代中期前半のものである。

他に小郡市の横隈山遺跡^(註3)があり，これは弥生時代後期のものである。

これらの事例によりして咲花遺跡の二状の溝も各住居跡に伴う排水溝と考えたい。

第1号住居跡の場合は，東壁と南壁の隅とは直接続いてなく，この隅には住居跡が伴うものかどうか不明であるが壁の外側よりの落込み部がある。排水溝はこの落込み部の南端より掘込まれている。この落込み部が住居跡に伴わないものとしても排水溝は直接に周溝には連っていない。

第2号住居跡に伴う排水溝は住居跡の南壁と西壁の隅より $1m$ 離れて在り，この溝も直接住

居跡の床面には連なっていない。以上よりして第1号・第2号住居跡に伴う排水溝は、前記、向山遺跡や、古大間池遺跡などが住居跡内の排水を目的にしたのとは違って住居跡外の排水を目的にしたと思われる。

竪穴住居跡の外部構造は発掘調査では明確にしがたいが、いくつかの復元がなされていて、住居跡外の周堤が検出された静岡県登呂遺跡の例より最近では都出比呂志氏^(註4)の論考がある。

周堤と棟構造の関係は判明しないが、住居跡外の壁直上に周堤が廻りその周堤の土面に棟よりの垂木がのるか、又は周堤のさらに外側に垂木が来るか分らないが、いずれにしてもこれらの周りの水を排水していた溝であると想定される。第1号住居跡の時期は6世紀後半であろう。

第3号住居跡は4.80m×4.80mのほぼ方形で一つの壁中央部につくり付けのカマドを持ち壁下には周溝があり柱穴は6本柱である。他にカマドが付属する壁と対応する壁下の中央部床面に凹地がある。出土遺跡は床面やカマド付近より土師器のみが出土している。支柱は6本で屋根を構成していたものと思われる。

土師器よりこの住居跡は7世紀ごろのものと思われる。

土壇は3基検出されたが、遺物を伴ったものは第1号土壇のみで、第2号・第3号土壇より出土遺物はないので時期については不明である。第1号土壇の遺物は床面上りかなり浮いた状態であり直接この土壇の時期決定は出来ないが、須恵器は小田富士雄氏^(註5)須恵器編年のⅢB期で6世紀後半のもので、このことより第1号土壇は6世紀後半以前とされる。

掘立柱は2棟検出されたが、いずれも1間×2間の建物跡である。第1号掘立柱建物は第1号・第2号住居跡と僅か3mしか離れておらず第1号住居跡と第2号住居跡の排水溝とに挟まれて存在しており、これら各住居跡との関係があるかも知れないが、調査においてはそれを明確になしえなかった。

北側の各トレンチ調査の結果は、遺構の検出はなく須恵器、土師器が若干出土しただけである。これは、土層の観察などからして特に東側の谷を埋めている事が判明した。咲花遺跡の続きである台地が近世のいつごろか不明であるが削られて整地が行なわれたようである。出土須恵器は、小田富士雄氏^(註5)編年のⅦ期で8世紀後半頃に比定される。

註1 中間研志「向山遺跡住居群の調査（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』一Ⅺ一）1977年（昭和52年）3月

註2 佐々木隆彦「古大間池遺跡」1977（昭和52年）3月

註3 浜田信也「横隈山遺跡」1974年（昭和49年）3月

註4 都出比呂志「竪穴式住居の周堤と壁体」（『考古学研究』第86号）1975年（昭和50年）10月

註5 小田富士雄編（『立山山窯跡群』一八女古窯跡群調査報告Ⅳ・総集編一）1972年（昭和47年）3月
小田富士雄編『天観寺山窯跡群』1977年（昭和52年）10月 他。

PLATES

咲 花 遺 跡



咲花・北田・都地・夕井掛遺跡航空写真（東から）



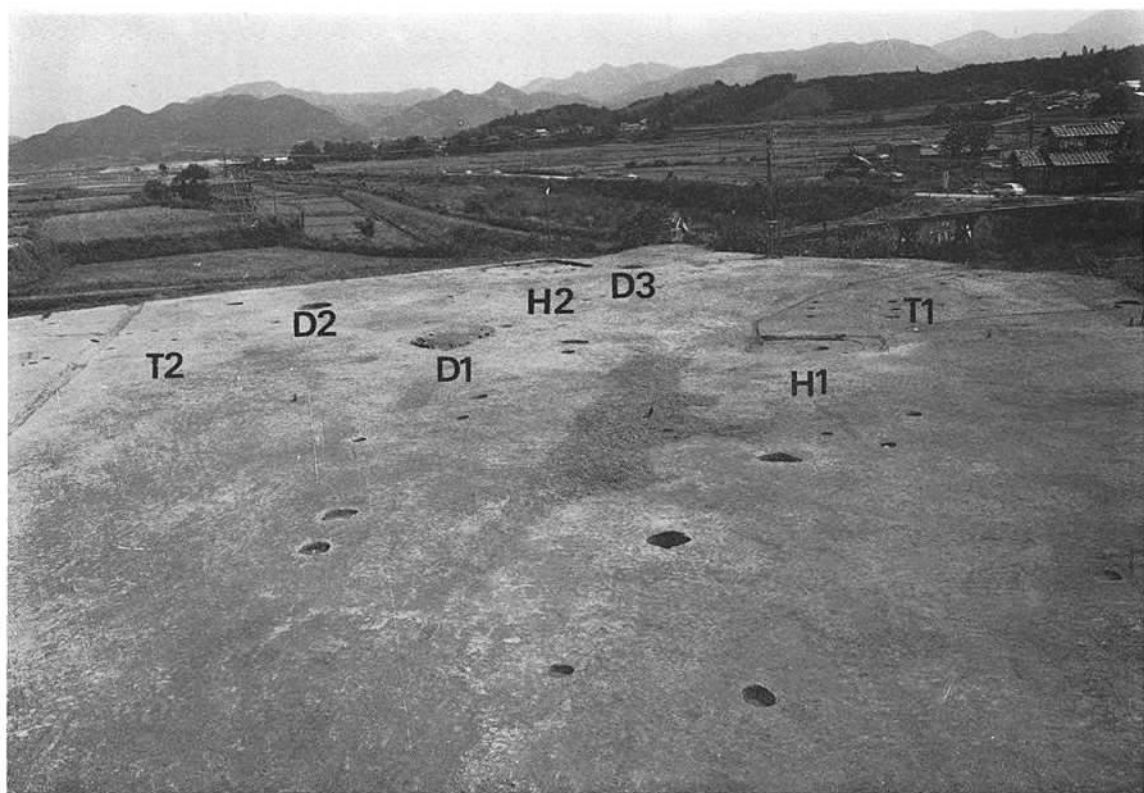
(1) 咲花・北田・都地・汐井掛遺跡遠景の航空写真（東から）



(2) 咲花・北田・都地・汐井掛遺跡遠景の航空写真（南から）



(1) 咲花遺跡全景の航空写真(北東から)



(2) 咲花遺跡全景(北から)



(1) 咲花遺跡第1号・第2号住居跡(南から)



(2) 咲花遺跡第1号・第2号住居跡と排水溝(西から)



(1) 咲花遺跡第3号住居跡(北東から)



(2) 咲花遺跡第3号住居跡のかまど(南東から)



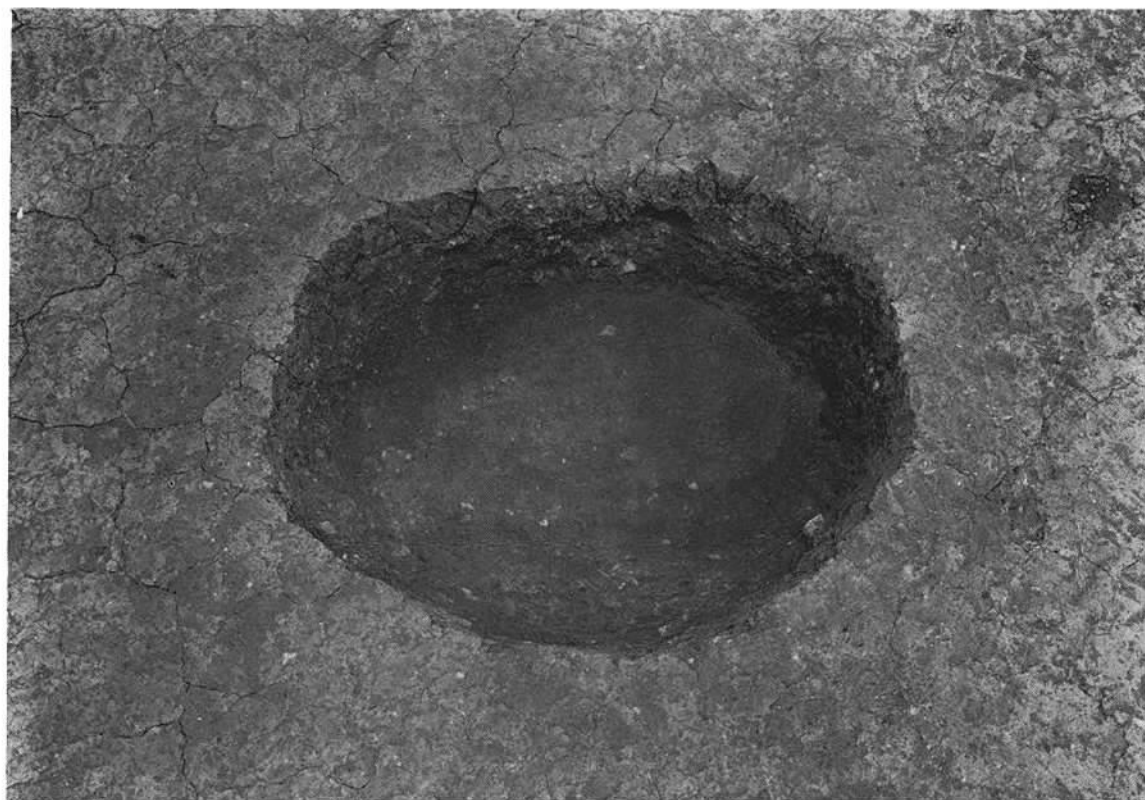
(1) 咲花遺跡第1号土塚(東から)



(2) 咲花遺跡第1号土塚遺物出土状況(西から)



(1) 咲花遺跡第2号土坑(東から)



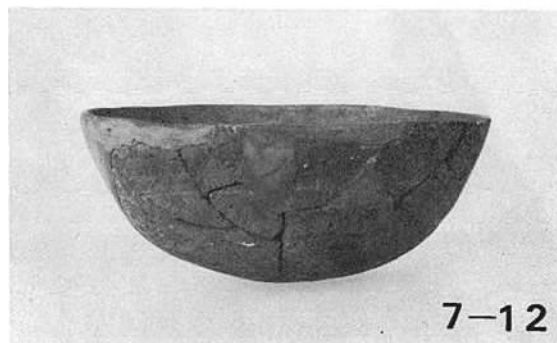
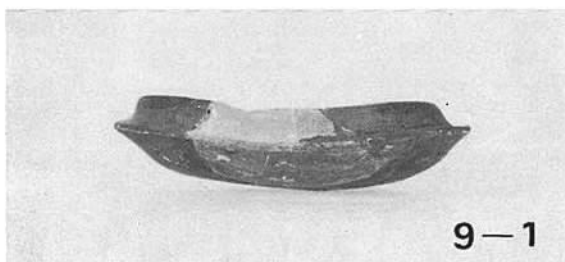
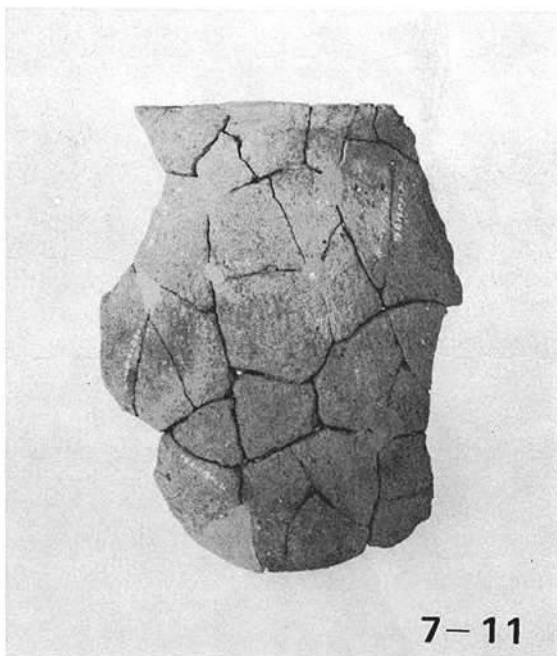
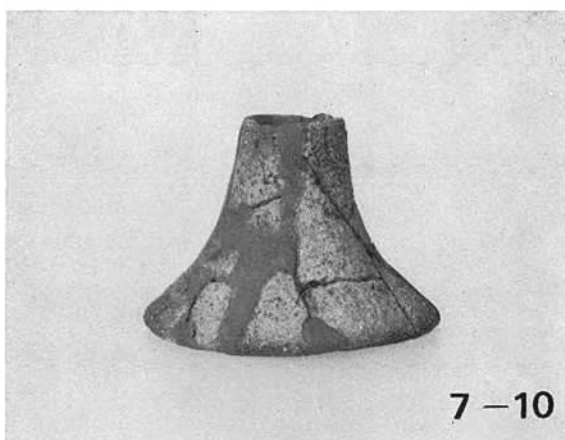
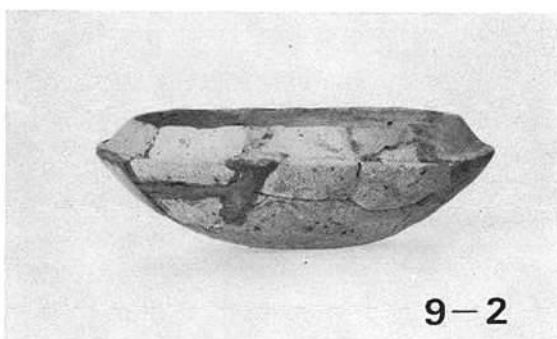
(2) 咲花遺跡第3号土坑(西から)



(1) 咲花遺跡第1号掘立柱建物(南から)

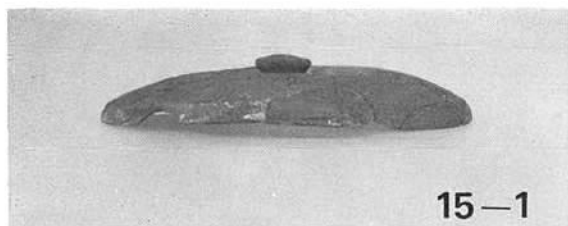


(2) 咲花遺跡第2号掘立柱建物(南西から)

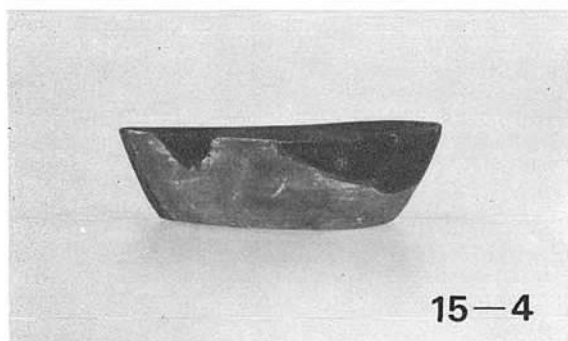




(1) 咲花遺跡西トレンチ(南東から)



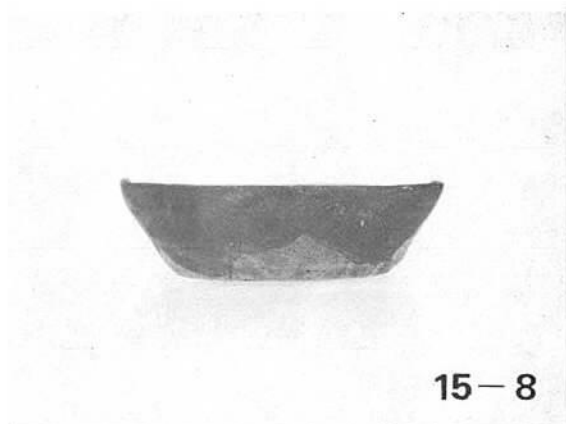
15-1



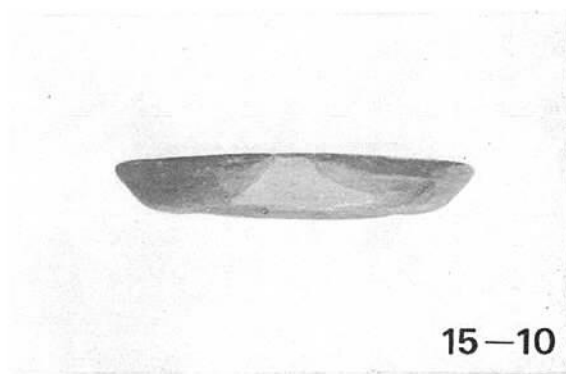
15-4



15-5



15-8



15-10

(2) 咲花遺跡トレンチ出土遺物

IV 北田遺跡の調査

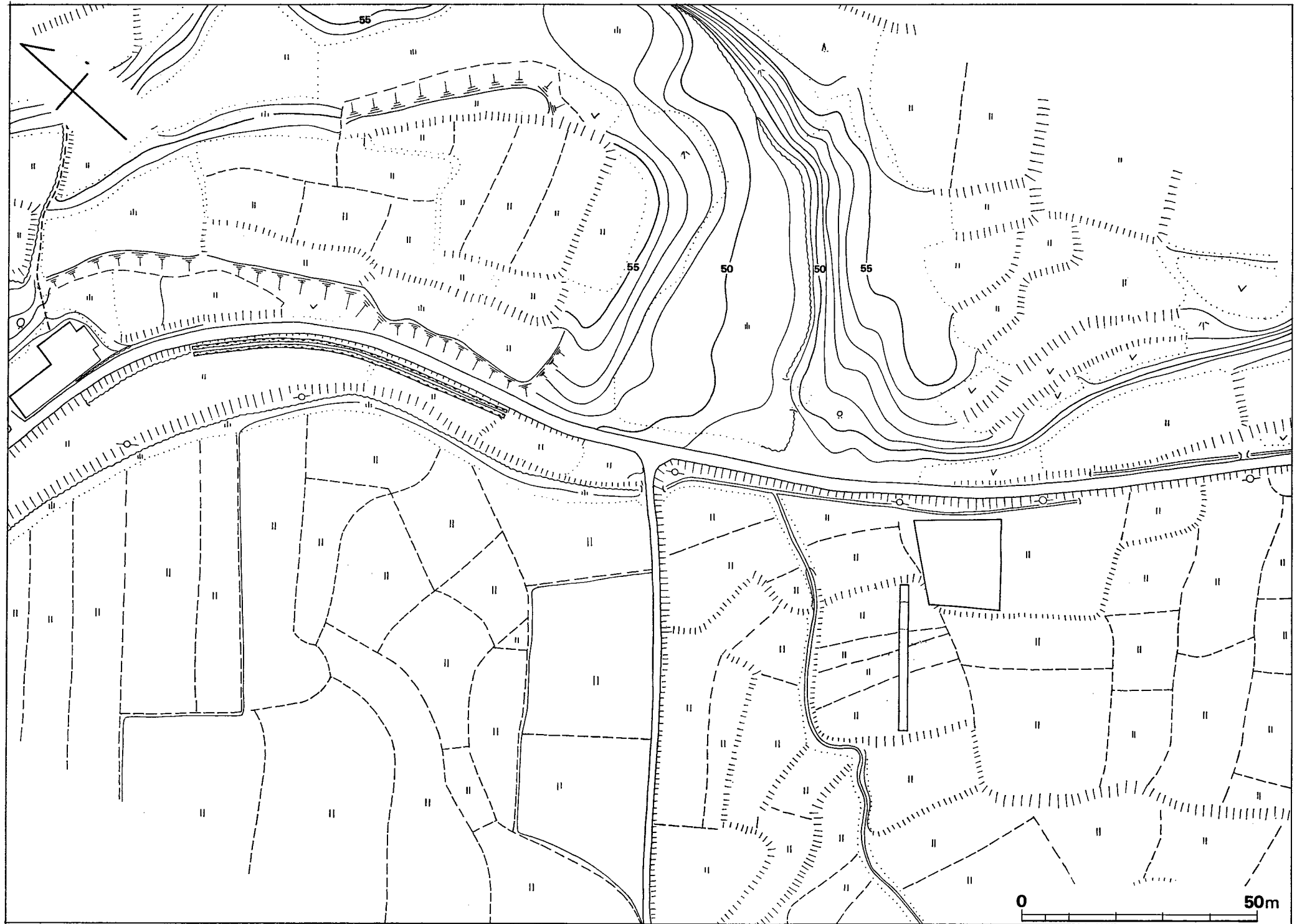


Fig. 16 北田遺跡地形図 (縮尺1/1,000)

Ⅳ 北田遺跡の調査

1. 調査の経過

北田遺跡の発掘調査は、1974年（昭和49年）6月3日から6月14日まで実施した。調査団は次のとおりである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	上野精志
調査補助員		内田始
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	山本文和
	嘱託	因将太

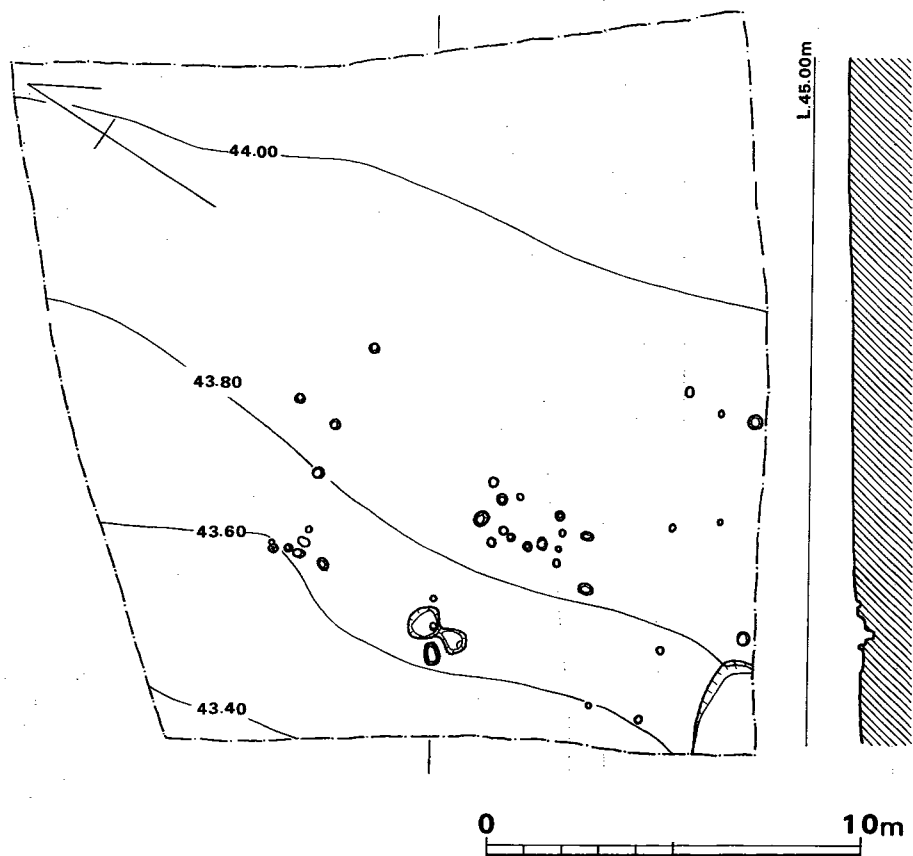


Fig. 17 北田遺跡地形・遺構配置図（縮尺1/200）

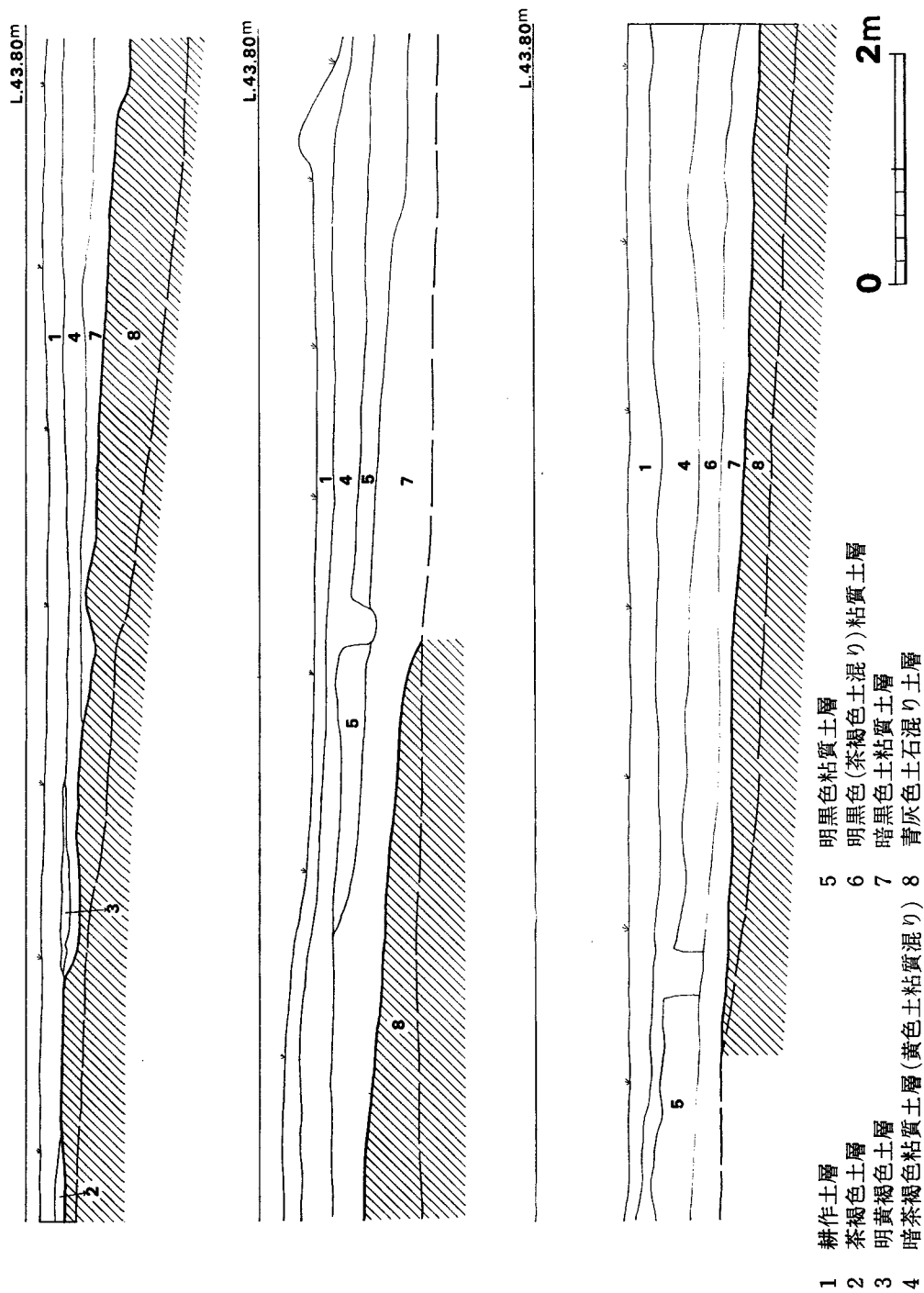


Fig. 18 北田遺跡2 トレンチ土層断面図 (縮尺1/60)

なお、この調査には地元在住各位の協力があつた。以下、調査日誌より経過をみる。

6月3日～6月6日 咲花遺跡の表土除去作業が終了したので、咲花遺跡の遺構発掘班と、北田遺跡の表土除去作業班との二手に分かれて、本日より北田遺跡の発掘を開始する。面積が極少のため表土はぎは三日で終了する。径10cmから30cmのピット約50個を検出。

6月7日～6月8日 検出ピットの発掘。合せて、トレンチの発掘にかかる。

6月10日～6月14日 ピット群の実測。及び、トレンチを発掘して断面図の作成。実測終了後をして、全体写真とピット群、トレンチの写真撮影を行う。6月8日に終了する。ピット群のみで遺構としてまとまりのあるものは存在しない。

2. 調査の内容

南北にのびる低丘陵が、水田化しているところで、中世の土師器が採集されており、低丘陵に直交するよう二本のトレンチを設定した。1トレンチの東西トレンチでは、表土層の水田耕作土より地山面の間に水田床土があるのみで、地山の黄褐色土層上面にて小ピット群の検出があり、1トレンチを同一水田面全体に拡張する。Fig. 17のように小ピット群を検出したが、組合せなど見られず遺構の検出ができなく調査を止める。南北方向の2トレンチは、やや低い小さな谷と推定されるところに、3×25mのトレンチを設定する。その断面は、Fig. 18のとおりでかなりの傾斜面を呈しており、これも遺構の検出、遺物の発見はなく調査を中止する。

出土遺物は須恵器・土師器・陶磁器・瓦器・近世陶器・黒曜石そして鉄滓でありいずれも若干量の出土である。これら破片は図示できるものはない。(Fig. 16～18, PL. 11～12)

3. 小 結

調査の結果は本遺跡が中世の土師器散布地とされていて遺構検出に務めたが小ピット群のみで遺構として把握出来ないものばかりである。遺跡の立地からして山口川に面する河段段丘上にあり2トレンチのように谷に近いところであり自然堆積土が厚く見られる。この発掘地点は谷に近い場所であり、発掘地点より南東側には平坦な水田面が続いており、そこには遺構存在の可能性はある。

PLATES

北 田 遺 跡



(1) 北田遺跡遠景の航空写真(北西から)



(2) 北田遺跡全景の航空写真(南から)



(1) 北田遺跡全景(北東から)



(2) 北田遺跡ピット群の状況(北東から)

V 都地遺跡の調査

V 都地遺跡の調査

1. 調査の経過

都地遺跡の発掘調査は、調査行程の関係より3回に渡り行った。第1次調査は、第12号掘立柱建物から第14号掘立柱建物が検出された遺跡の南方部分であり、1974年（昭和49年）6月14日から6月29日まで。第2次調査は、第1号掘立柱建物が検出された遺跡の北東部であり、1974年（昭和49年）8月19日から9月6日。第3次調査は、第1次調査地点と第2次調査地点の間全域にわたる部分を、1975年（昭和50年）11月17日から1976年（昭和51年）1月16日までにわたり調査を実施した。第1次調査から第3次調査にかけての調査団は次のとおりである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	上野精志
調査補助員		内田始 小味山ゆり 赤峰義則
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事 嘱託	山本文和 因将太

なお、この調査には、地元在住各位の協力があつた。以下調査日誌より経過を抜粋する。

第1次調査 1974年（昭和49年）

6月14日～6月15日 咲花遺跡、北田遺跡の調査に平行してブルドーザーを利用して、表土除去作業を行う。表土層より若干の土師器、須恵器が出土し、径20cm弱の円径ピットを検出する。

6月17日～6月22日 北田遺跡の終了をまって、6月17日より遺構の発掘にとりかかる。各ピット群はいくつかのまとまりを持っており、何棟かの掘立柱建物が確認される。

6月24日～6月29日 検出された第12号掘立柱建物から第14号掘立柱建物及びその他のピット群の実測、写真撮影を行い、6月29日、調査を終了する。なお、遺構はさらに北側台地上に続くと思われるので、第2次調査を必要とする。

第2次調査 1974年（昭和49年）

8月19日～8月22日 ブルドーザーによる表土除去作業。表土層より若干の土師器、須恵器を出土する。ピットがいくつか検出される。

8月23日～8月31日 表土除去後、さらに遺構確認に務めた後、遺構検出にかかる。第1号掘立柱建物を確認する。その他のピット群は遺構としてのまとまりを持たない。

9月2日～9月6日、検出遺構及びピット群の実測、合せて写真撮影を行う。

第3次調査 1975年（昭和50年）

11月17日～11月20日 遺跡の南半をブルドーザーによる表土除去作業、これにより第10号から、第13号掘立柱建物を発見する。

11月24日～12月6日 第10号から第13号掘立柱建物、及び遺跡南半より発見された各大小ピットの発掘を行う。ブルドーザーはこの間に遺跡北半の表土除去作業に係る。

12月8日～12月19日 遺跡南半の遺構実測及び写真撮影。北半の遺構検出作業は第2から第9号掘立柱建物を検出する。

12月22日～12月26日、1月6日～1月10日 北半に検出した遺構を発掘すると同時に遺構の実測、写真撮影を合せて実施する。

1月12日～1月16日 遺跡全体の平板測量を行い、合せて全体写真の撮影。

2. 調査の内容

都地遺跡は鞍手郡若宮町沼口字都地に在り、咲花遺跡の東方300mで北田遺跡の北300mのところに位置し、若宮町沼口の都市神社の北方500m離れた地点である。汐井掛遺跡群の存在する丘陵が南方の山口川に向かって延びている丘陵斜面で、調査の範囲は丘陵頂部中心部から西側傾斜面にかけてである。標高は72mから58mにかけてであり北方が高く山口川方面の南側が低い。北方の丘陵頂部は汐井掛遺跡群と接している。

検出した遺跡は掘立柱建物16棟と、他に大小ピットが約200個であり掘立柱建物群として近接している汐井掛遺跡群とは切り離して都地遺跡とした。

なお、遺跡はさらに同一丘陵の東側にも続いていると思われる。この地域は地域振興整備公団宮田若宮地区工業団地の開発地域となっていて発掘調査が実施される予定であり、さらに掘立柱建物が発見される可能性がある。

(1) 遺 構

掘立柱建物群は大きく見て北側と南側との2つの群に分けられ、北側の丘陵頂部から南の斜面にかけて第1号から第9号掘立柱建物までの北群と、丘陵斜面低地の第10号から第16号掘立柱建物までの南群とである。なお、「くらでのむかし」その3）九州縦貫自動車道関係若宮町所在遺跡の調査報告会資料—1976年（昭和51年）3月13日。では都地遺跡遺構配置図として13棟の掘立柱を記載したが、その後の遺跡全体の検討により掘立柱建物を合計16棟とした。

(Fig. ①～④, PL. 13～15)

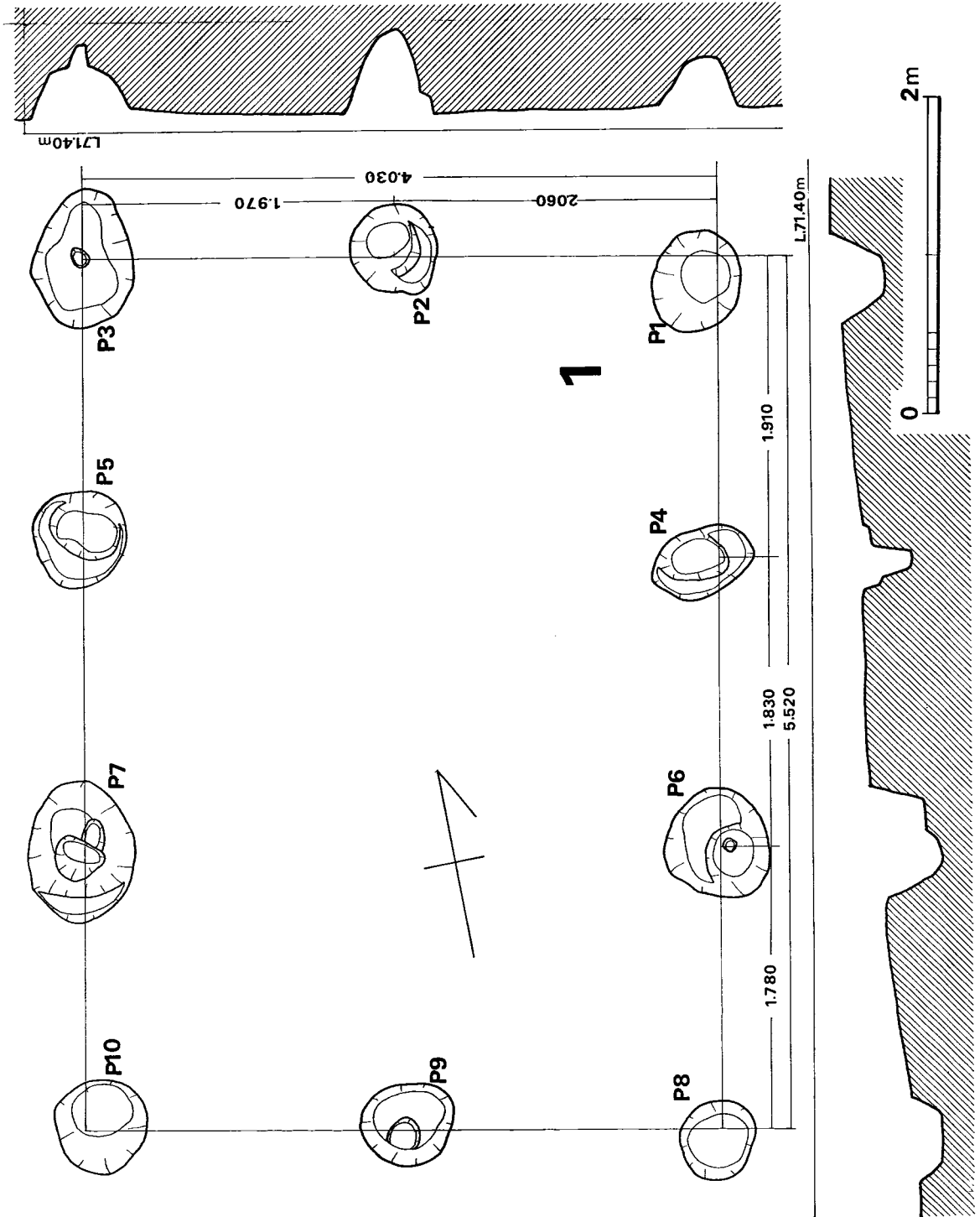


Fig. 19 都地遺跡第1号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

第1号掘立柱建物 (Fig. 19, PL. 17, Tab. 5)

北群の東側の南方にある2間×3間の建物で桁行方向をN11度Eにとり、長方形のプランを呈する。平均桁行間556cm, 梁間間は199cmを測る。柱穴掘り方は円形と楕円形で素掘りと二段掘りとがあり二段掘りの方が多い。径平均は62.1cm, 深さは32.5cmである。

Tab. 5 都地遺跡第1号掘立柱建物計測表 (単位cm)

2間 × 3間		梁間柱間	梁間間			桁行柱間	桁行間	P	深	径
P1	P2	2 60	} 403	P1	P4	191	} 552	1	32	60
2	3	1 97		4	6	183		2	56	58
4	5			6	8	178		3	32	76
6	7			2	9			4	22	56
8	9	2 03	} 393	3	5	180	} 563	5	27	62
9	10	1 90		5	7	208		6	51	68
				7	10	175		7	29	77
								8	20	49
平	均	199				186	556	9	22	57
								10	34	58
								平均	32.5	62.1

第2号掘立柱建物 (Fig. 20, PL. 17, Tab. 6)

遺跡の最北端の丘陵の頂部附近にあり第1号掘立柱建物とほぼ桁行方向を同じにする。

1間×4間の建物で桁行方向をN5度Wにとり、長方形プランを呈する。平均桁行間662cm, 梁間間347cmで、桁行柱間165cmで梁間柱間は1間であるため梁間間と同じである。柱穴掘り方は円形がほとんどで楕円形が二個ある。径平均は29.2cm, 深さ14.8cmである。掘立柱建物の現状は傾斜面に立地するため北方のP1—P2の梁間間側が高く、南方のP9—P10の梁間間が低くなっている。

Tab. 6 都地遺跡第2号掘立柱建物計測表 (単位cm)

1間 × 4間		梁間柱間	梁間間			桁行柱間	桁行間	P	深	径
P1	P2		346	P1	P3	148	} 656	1	9	28
3	4		355	3	5	148		2	11	21
5	6		344	5	7	148		3	10	24
7	8		348	7	9	212		4	19	33
9	10		340	2	4	141	} 668	5	9	25
				4	6	160		6	21	27
				6	8	174		7	12	32
				8	10	193		8	18	37
平	均		347			165	662	9	24	26
								10	15	39
								平均	14.8	29.2

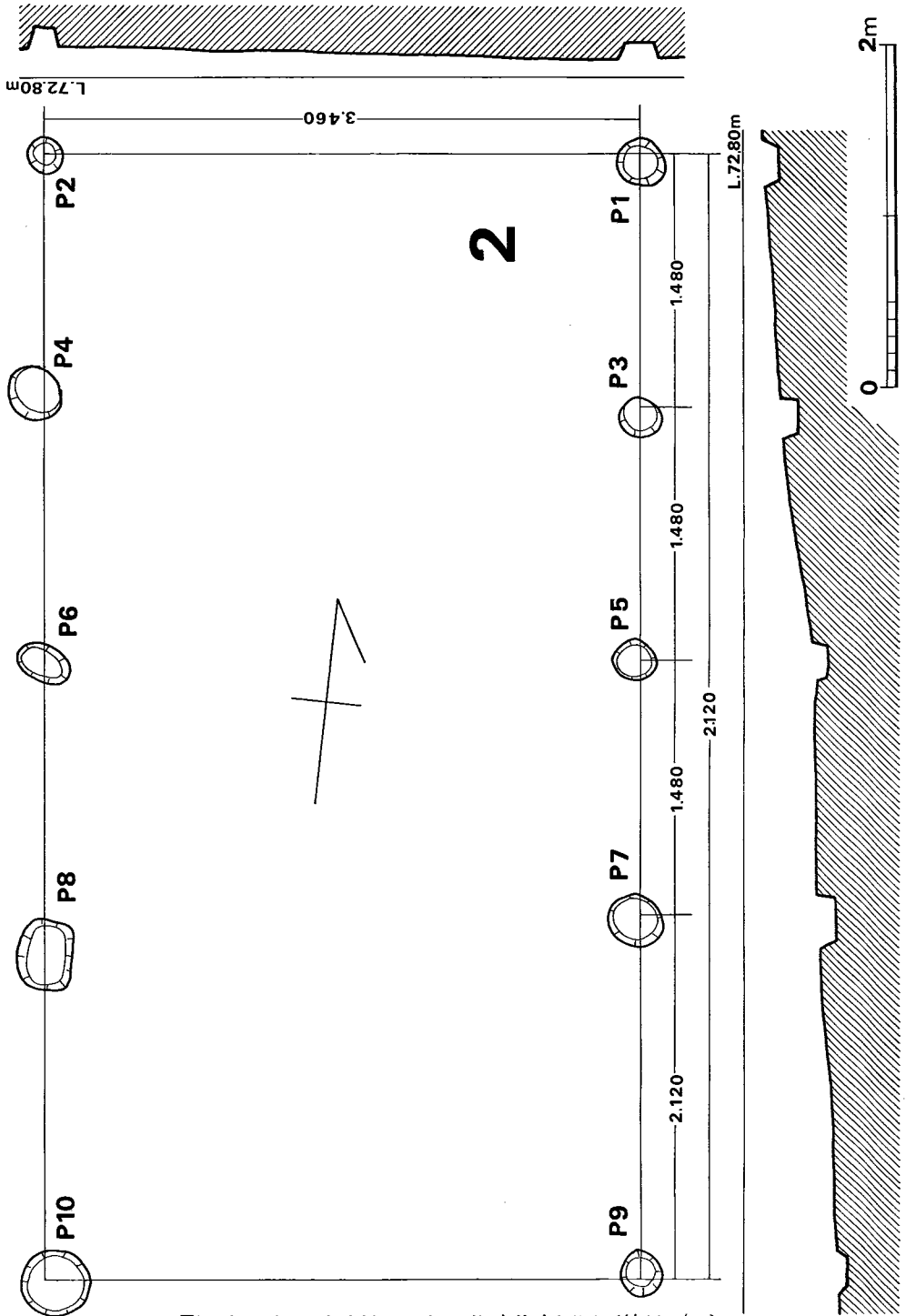


Fig. 20 都地遺跡第2号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

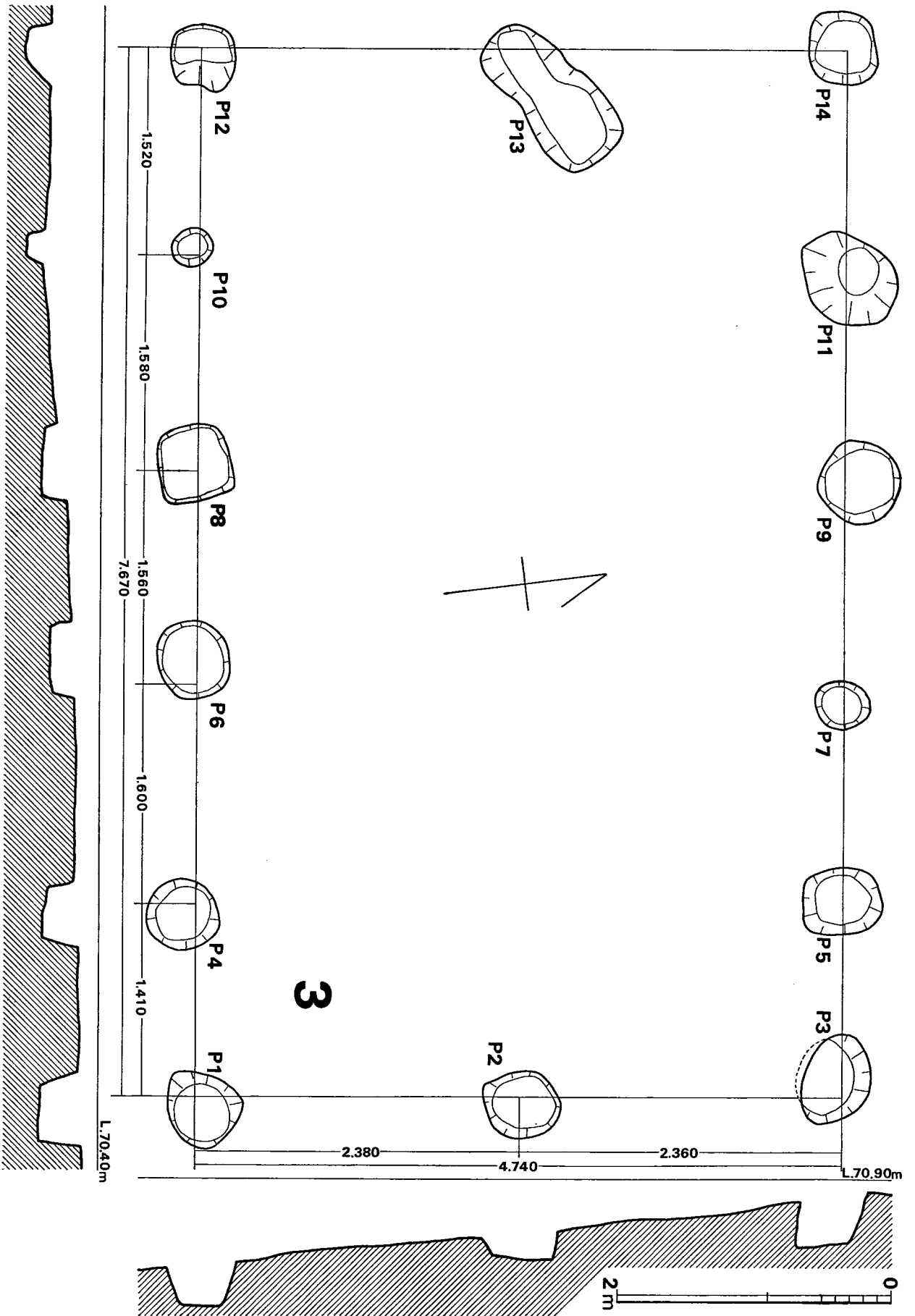


Fig. 21 都地遺跡第3号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

第3号掘立柱建物 (Fig. 21, PL. 18, Tab. 7)

北群の建物では中心的位置にあり、第1号、第2号建物とは桁行方向を約90度変えている。

2間×5間の建物で桁行方向をN83度Wにとり、長方形プランを呈する。平均桁行間761cm、梁間間485cmで桁行柱間155cm、梁間柱間241cmを測る。柱穴掘り方は円形、方形、楕円形でどれも素掘りであり、径平均は55.5cm、深さ31cmである。北方の側P3—P14の桁行間が高く、南方の側P1—P12の桁行間が広い。

Tab. 7 都地遺跡第3号掘立柱建物計測表 (単位cm)

2間×5間	梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	P	深	径	
P1 — P2	238	474	P1 — P4	145	787	1	34	55
2 — 3	236		P4 — P6	190		2	19	54
4 — 5	485	6 — 8	150	3		31	58	
6 — 7		8 — 10	160	4		27	52	
8 — 9		10 — 12	142	5		35	55	
10 — 11	488	489	2 — 13	730	6	9	57	
12 — 13	264		3 — 5		137	7	40	38
13 — 14	225	765	5 — 7	142	8	21	60	
平均	241		485	155	761	9	46	60
						10	14	29
						11	66	70
						12	22	49
					13	20	83	
					14	55	57	
					平均	31	55.5	

第4号掘立柱建物 (Fig. 22, PL. 18, Tab. 8)

Tab. 8 都地遺跡第4号掘立柱建物計測表 (単位cm)

2間×3間	梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	P	深	径	
P1 — P2	200	400	P1 — P4	196	588	1	16	52
2 — 3	200		4 — 6	196		2	30	66
4 — 5	396	6 — 8	※196	3		28	52	
6 — 7		400	2 — 9	600	4	37	47	
8 — 9		※195	390	3 — 5	198	5	26	60
9 — 10	195	5 — 7		184	6	8	56	
			7 — 10	200	7	19	41	
平均	197	396	195	590	8	/	/	
					9	6	34	
					10	12	41	
					平均	20	50.0	

※推定

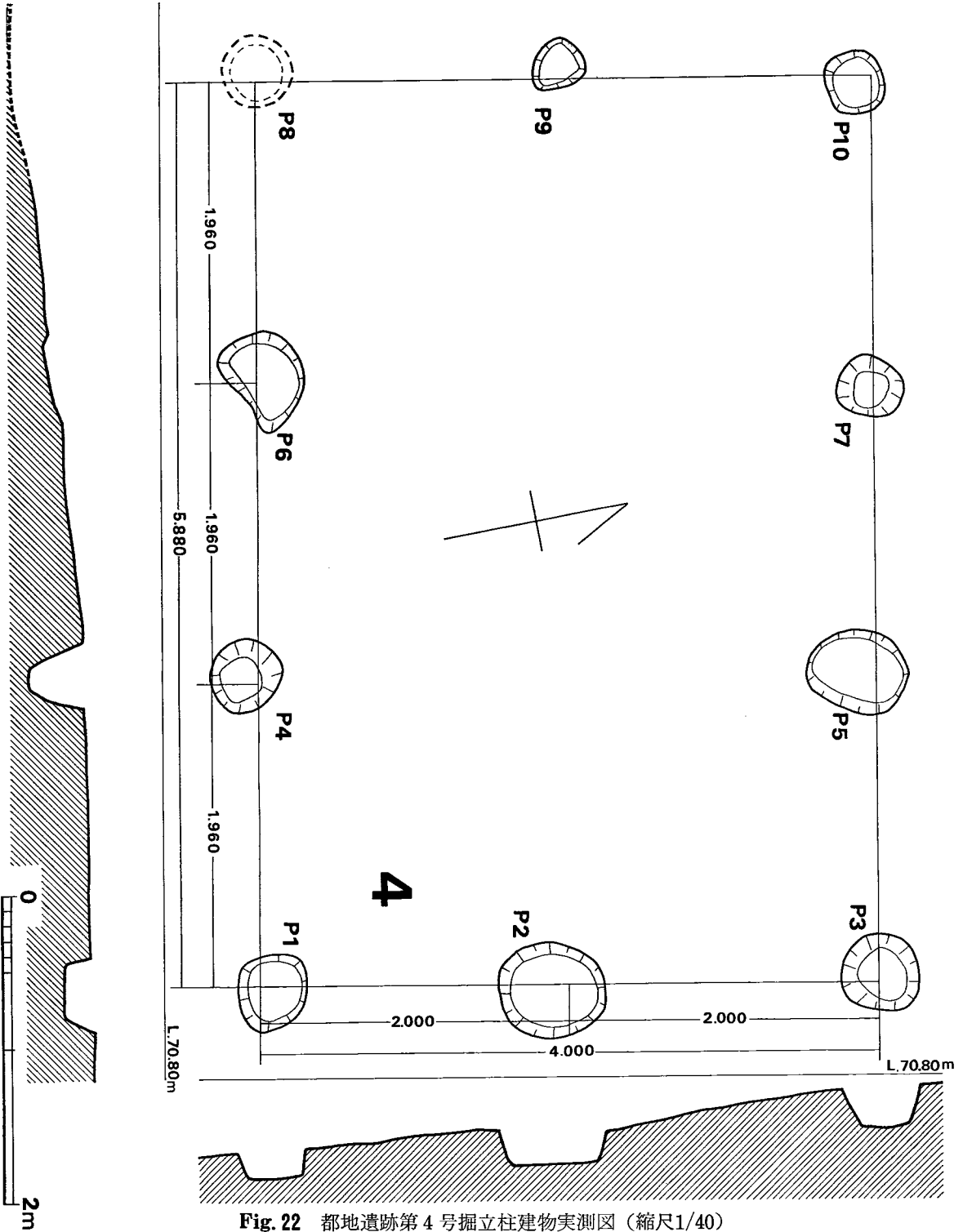


Fig. 22 都地遺跡第4号掘立柱建物実測図(縮尺1/40)

第3号建物の北西側に3m離れて在り桁行方向を第3号・第5号・第6号建物とほぼ同じくする。なお、P8附近は近世の開墾がひどく、P8は破壊されたと思われる。P6も遺存状況は悪い。

2間×3間の建物で桁行方向をN80度Wにとり、長方形プランを呈する。平均桁行間590cm、梁間間396cmで、桁行柱間195cm、梁間柱間197cmを測る。柱穴掘り方は円形と楕円形、不整形でどれも素掘りであり、平均径50cm、深さ20cmである。P3方向の地形が高く、P8方向が低いために各柱穴底面の高低差が大きい。

第5号掘立柱建物 (Fig. 23, PL. 19, Tab. 9)

第4号建物の南方側に3.50m離れて在り桁行方向は第3号・第4号・第6号建物とほぼ同じである。P1とP4は開墾により山林の地境のために段となっていて、P8、P6の桁行方向から考えて掘り方が検出出来るはずであるが検出できなかった。

2間×3間の建物で桁行方向をN80度Nにとり、長方形プランを呈する。平均桁行間493cm、梁間間338cmで、桁行柱間163cm、梁間柱間167cmを測る。柱穴掘り方は円形、方形、楕円形でP5は2段掘りであり、径平均は54.0cm、深さ29cmである。

Tab. 9 都地遺跡第5号掘立柱建物計測表 (単位cm)

2間×3間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深	径	
P1 × P2	※ 170	} 340	P1	P4	※ 163	} 490	1	/	/
2 \ 3	※ 170				4 \ 6		※ 164	2	15
4 \ 5	} 340	} 344	} 329	} 163	} 500	} 491	3	29	57
6 \ 7							162	2 \ 9	173
8 \ 9	} 167	} 329	} 329	} 162	} 491	} 491	5	29	56
9 \ 10							167	5 \ 7	162
平均	167	338		163	493		7	29	55
							8	27	65
※ 推定							9	23	47
							10	42	55
						平均	29	54.8	

第6号掘立柱建物 (Fig. 24, PL. 19, Tab. 10)

第5号建物の南側に4m離れて在り桁行方向は第3号・第4号・第5号建物と同じで、第4号建物には梁間方向もほぼ同じである。

2間×4間の建物で桁行方向をN84度Eにとり、長方形プランを呈する。平均桁行間646cm、梁間間429cmで、桁行柱間159cm、梁間柱間212cmを測る。柱穴掘り方は不整形で素掘りと二段掘りがあり、径平均は48.8cm、深さ22cmである。P8の掘り方は西側のみ二段掘りでさらに二段目の穴内には長さ15cm、幅10cm、厚さ5cmの石が底面より立てて置いてある。第5号物建

物などと同じく北方側が高く、南方側が低いために柱穴掘り方の底面レベル差がはげしい。

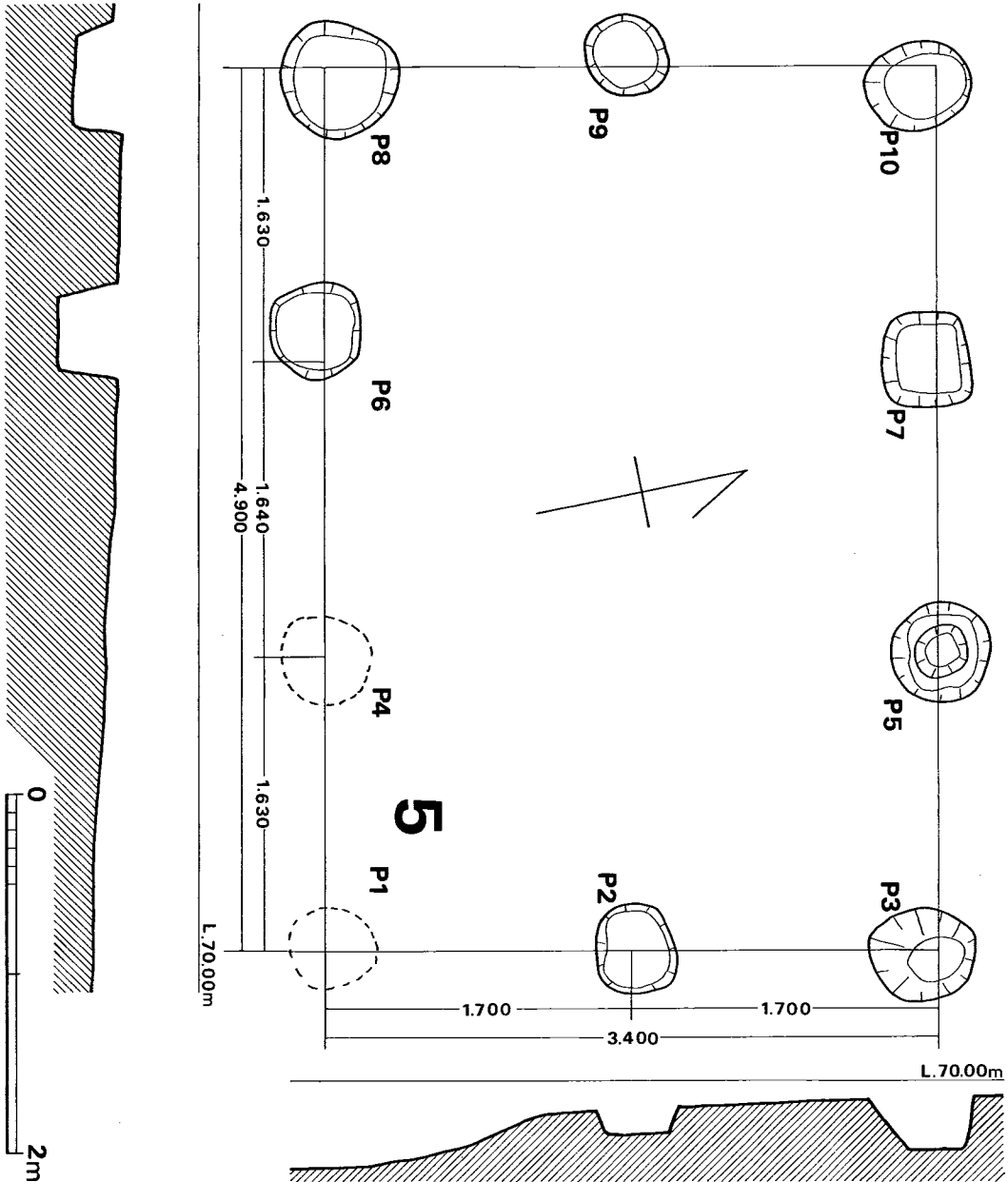


Fig. 23 都地遺跡第5号掘立柱建物実測図（縮尺1/40）

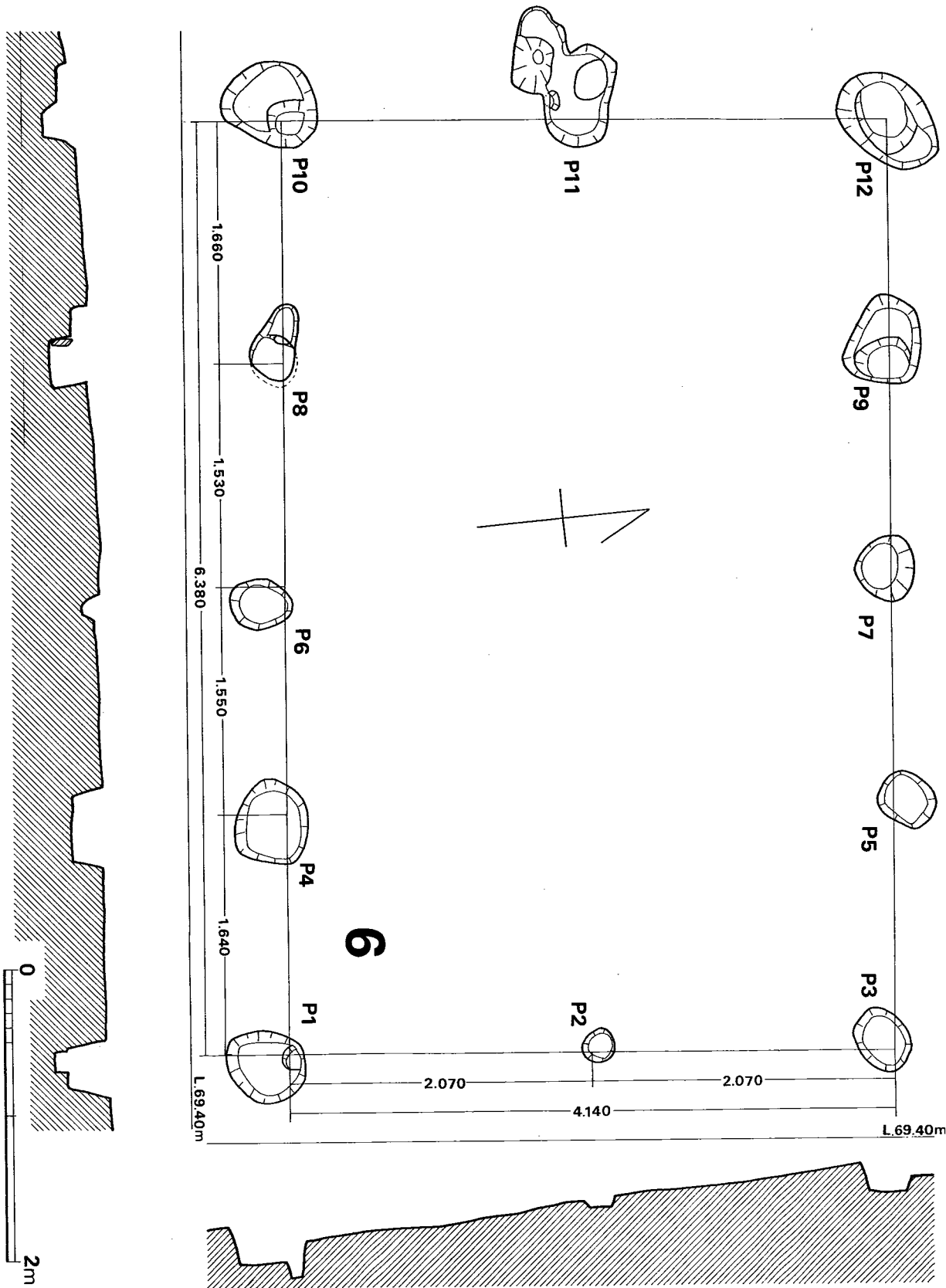


Fig. 24 都地遺跡第6号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

Tab. 10 都地遺跡第6号掘立柱建物計測表

(単位cm)

2間 × 4間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深	径
P1 — P2	207	414	P1 — P4	164	638	1	29	53
2 — 3	207		4 — 6	155		2	9	22
4 — 5			6 — 8	153		3	19	41
6 — 7			8 — 10	166		4	23	57
8 — 9		423	2 — 11		665	5	10	38
10 — 11	210	434	3 — 5	165	636	6	14	40
11 — 12	224		5 — 7	162		7	19	42
			7 — 9	155		8	26	42
			9 — 12	154		9	24	56
平均	212	429		159	646	10	22	61
						11	20	69
						12	48	65
						平均	22	48.8

第7号掘立柱建物 (Fig. 25, PL. 20, Tab. 11)

第6号建物の西側，第8号建物の北側に近接して在り桁行方向は第6号建物とほぼ直角で第8号建物と平行関係にある。

1間×1間の建物で長軸を桁行方向とするとN13度Eにとり長方形プランを呈する。桁行間240cm，梁間間120cmを測る柱穴掘り方は不整円形で素掘りであり，径平均は65cm，深さ41cmである。各ピットの径が大きいのが目立つ。

第8号掘立柱建物 (Fig. 26, PL. 20, Tab. 12)

第6号建物の南西側に2m離れて在り桁行方向は第1号・第7号建物とほぼ同じで第3号から第6号とは約90度直角に向きを変える。近世の開墾により南側をえぐられているために柱穴は5本しか遺存していない。しかし東西方向のP1とP2の両側方面には柱穴が存在していたとされず1間であることを確認したが，

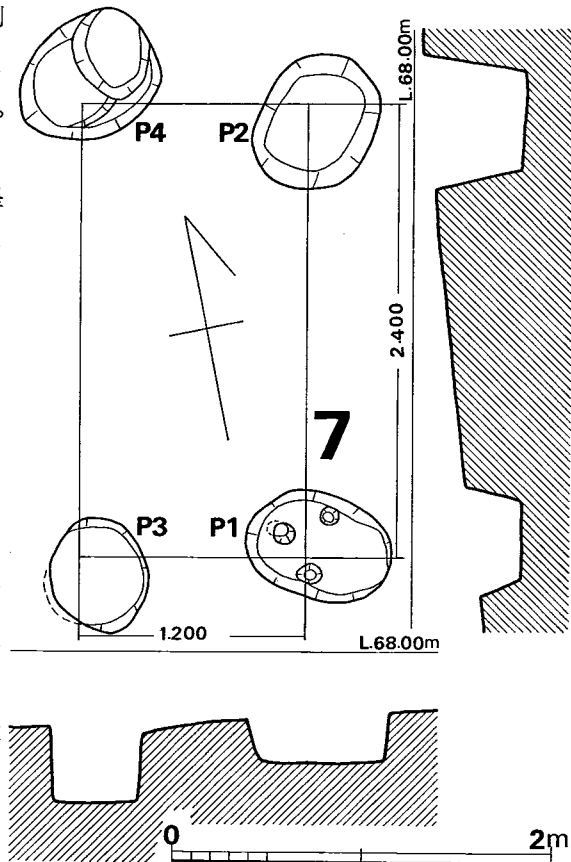


Fig. 25 都地遺跡第7号掘立柱建物実測図(縮尺1/40)

Tab. 11 都地遺跡第7号掘立柱建物計測表

(単位cm)

1間 × 1間	梁間柱間	梁間間			桁行柱間	桁行間	P	深	径
P1	P3	120	P1	P2		240	1	29	66
P2	P4	120	P3	P4		240	2	59	67
平均		120				240	3	44	58
							4	33	69
平均								41	65

南北方面の南側は何間まで柱穴が存在したかは確認できない。

1間×2+α間の建物で桁行方向をN10度Eにとり、長方形プランを呈する。平均桁行間312+αcm、梁間間268cmで桁行柱間156cmを測る。柱穴掘り方は不整円形でP1、P4は二段掘りである。径平均63.6cm、深さ33cmである。

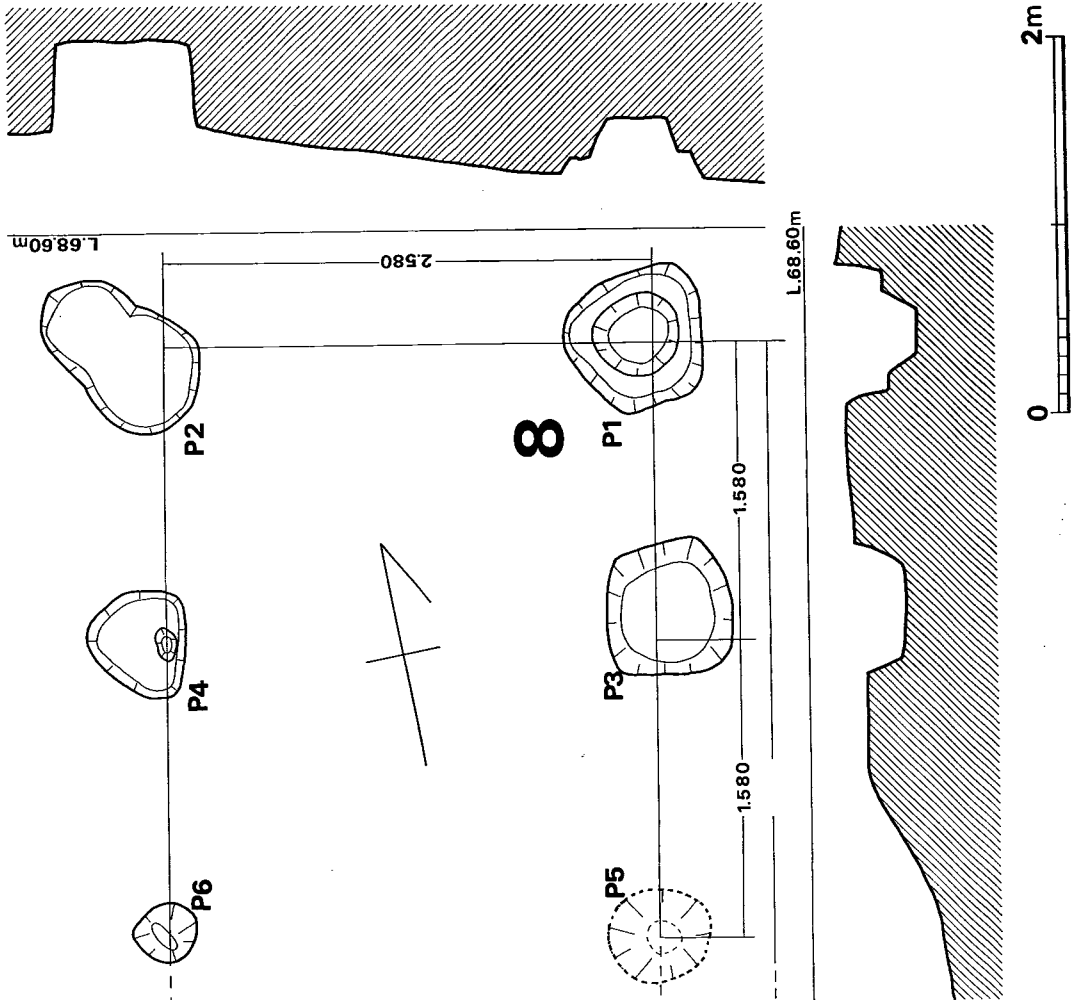


Fig. 26 都地遺跡第8号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

第9号掘立柱建物 (Fig. 27, PL. 21, Tab. 13)

第1号建物と重複して在り桁行方向は第4号・第5号建物と同一である。

2間×2間の建物で桁行方向をN79度Wにとり長方形プランを呈する。平均桁行間441cm, 梁間間289cmで, 桁行柱間225cm, 梁間柱間153cmを測る。柱穴掘り方は円形で素掘りであり, 径平均39cm, 深さ13.1cmである。掘り方は傾斜地にあるため南側が低くなっている, この方が大きく深く, 標高の高い左側が小さくて浅い。

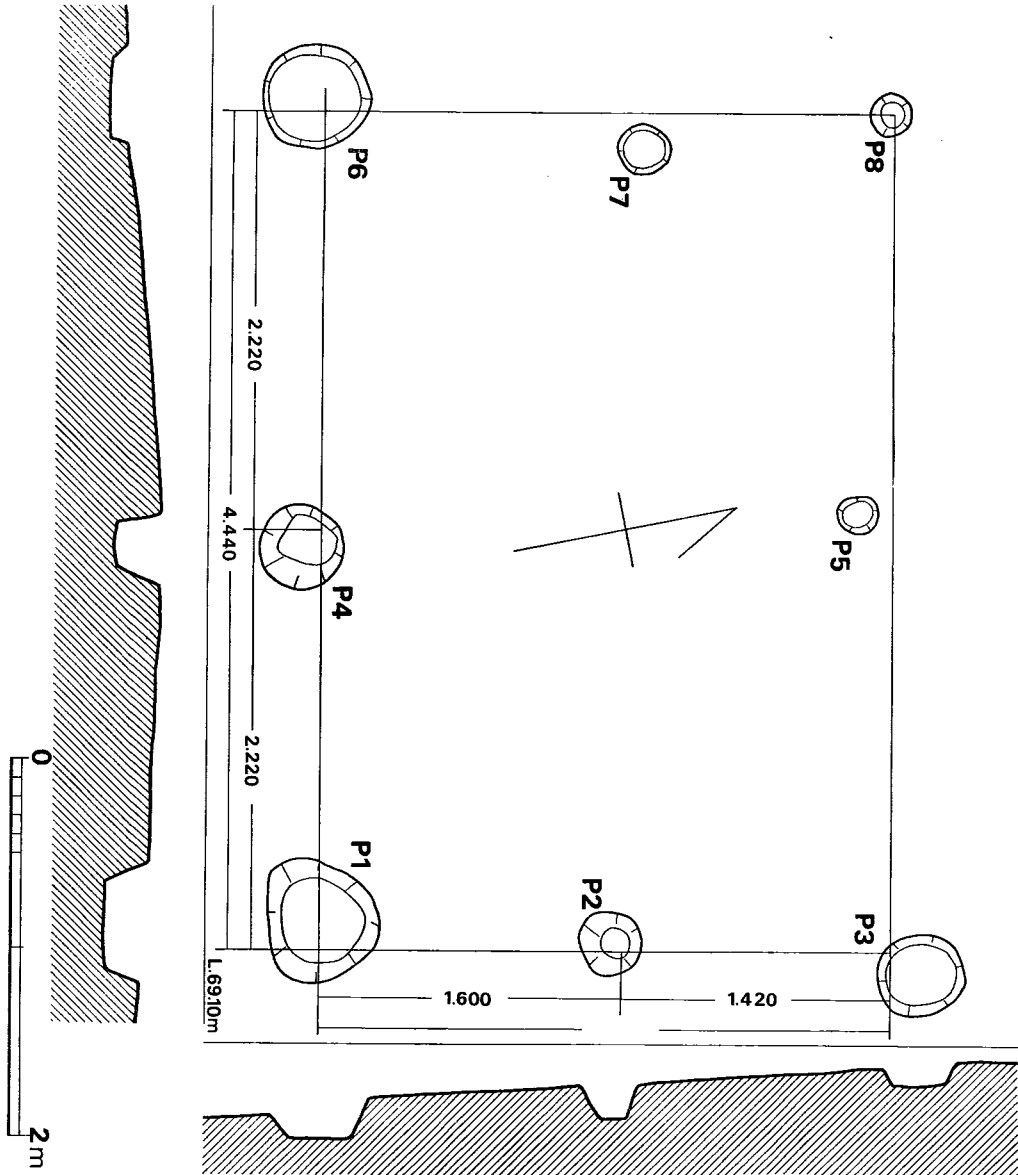


Fig. 27 都地遺跡第9号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

Tab. 12 都地遺跡第8号掘立柱建物計測表

(単位cm)

1間 × 2間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深	径
P1 P2		258	P1 P3	158	} 316	1	44	77
3 4		286	3 5	158				
5 6		260	2 4	153	} 308	3	29	74
			4 6	155				
平均		268		156	312	5	/	/
						6	13	32
						平均	33	63.6

Tab. 13 都地遺跡第9号掘立柱建物計測表

(単位cm)

2間 × 2間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深	径
P1 P2	160	} 302	P1 P4	222	} 444	1	25	63
2 3	142		4 6	222				
4 5		254	2 7		422	3	12	44
6 7	176	} 310	3 5	246	} 456	4	23	45
7 8	134		5 8	210				
平均	153	289		225	441	6	10	56
						7	8	27
						8	4	23
						平均	13.1	39

第10号掘立柱建物 (Fig. 28, Tab. 14)

遺跡の中央附近に5個の柱穴が検出されたので、建物とした。P3は、水田と水田の境に当り、排水の溝が掘られているために検出できなかったものと思われる。

1間×2間の建物で桁行方向をN10度Eにとり長方形プランを呈す。平均桁行間323cm、梁間間173cmを測る。柱穴掘り方は円形、方形の素掘りと二段掘りで、径平均62.4cm、深さ15cm

Tab. 14 都地遺跡第10号掘立柱建物計測表

(単位cm)

1間 × 2間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深	径
P1 P2		170	P1 P3	153	} 320	1	5	54
3 4		177	3 5	167				
5 6		171	2 4	154	} 327	3	/	/
			4 6	173				
平均		173		161	323	5	20	94
						6	17	75
						平均	15	62.4

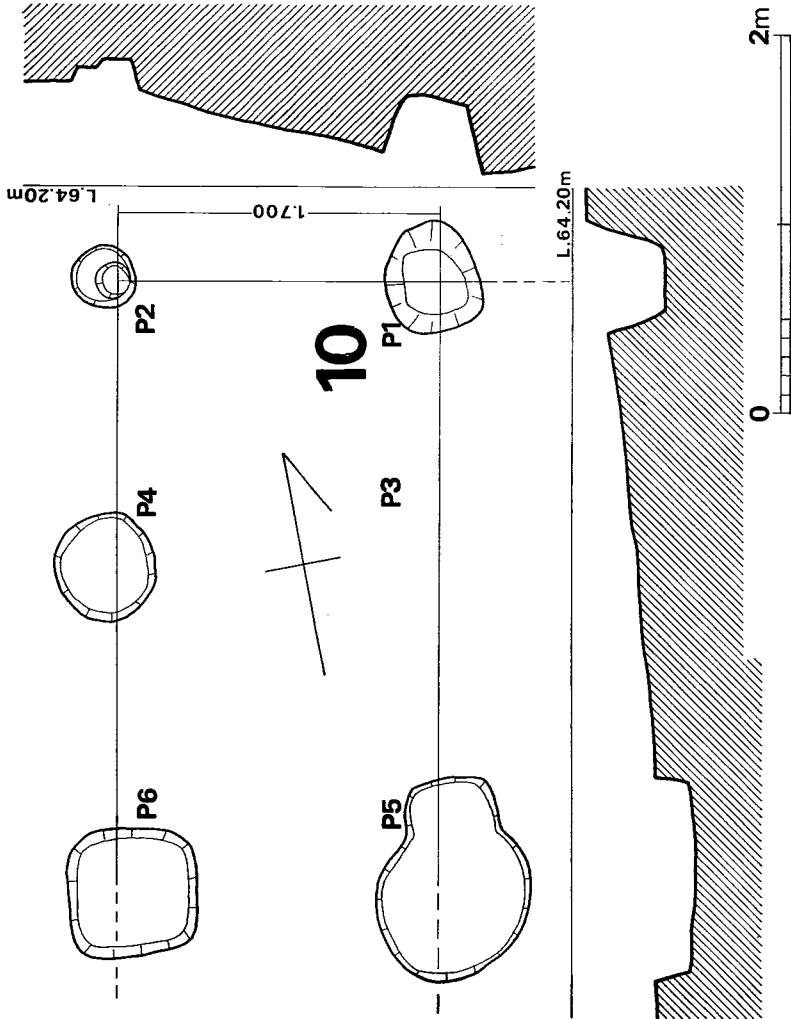


Fig. 28 都地遺跡第10号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

Tab. 15 都地遺跡第11号掘立柱建物計測表 (単位cm)

2間 × 3間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深	径
P1 — P2	146	} 292	P1 — P4	140	} 420	1	35	34
2 — 3	146		4 — 6	140		2	24	33
4 — 5		290	6 — 8	※ 140		3	26	18
6 — 7		289	2 — 9		4	48	39	
8 — 9	※ 141	} 293	3 — 5	155	5	20	38	
9 — 10	※ 152		5 — 7	145	6	25	32	
			7 — 10	135	7	25	28	
平均	146	291		142	423	8	/	/
						9	12	31
						10	18	55
						平均	26	34.2

※ 推定

第11号掘立柱建物 (Fig. 29, PL. 21, Tab. 15)

南群建物の中央部に3棟あるうちの1つで第12号建物と重複する。P 8は開墾により削られていて検出不能である。

2間×3間の建物で桁行方向をN44度Wにとり、長方形プランを呈する。平均桁行間423cm, 梁間間291cmで、桁行柱間142cm, 梁間柱間107cmを測る。柱穴掘り方は円形の素掘りで、径平均34.2cm, 深さ26cmである。掘り方がP 3のように小さいものとP 10のように大きいものの差がはげしいのが目立つ。

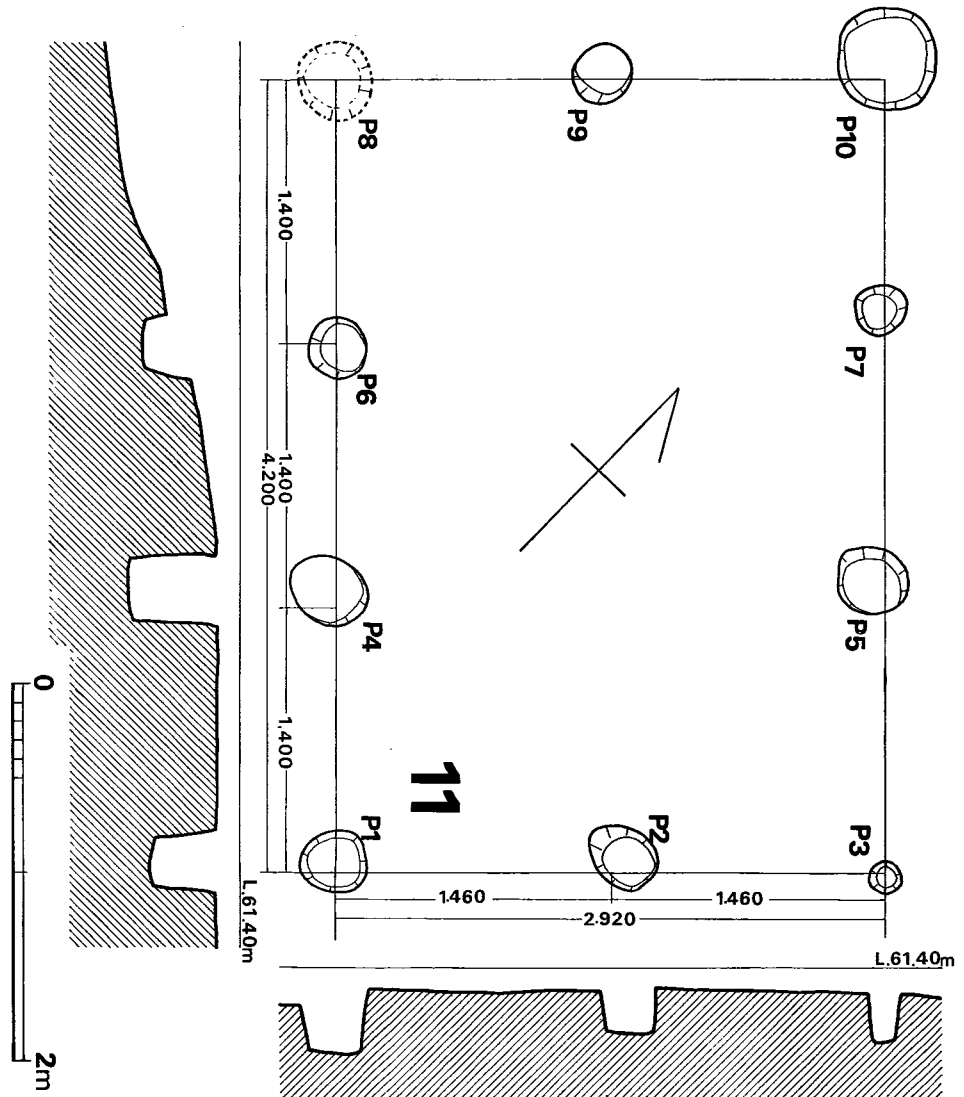


Fig. 29 都地遺跡第11号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

第12号掘立柱建物 (Fig. 30, PL. 21, Tab. 16)

第11号建物とほぼ重複しているが、前後関係は分らない。

2間×2間の建物で桁行方向をN68度Wにとり、長方形プランを呈する。平均桁行間277cm、梁間間219cmで、桁行柱間138cm、梁間柱間107cmを測る。柱穴掘り方は円形でP7、P8は二

Tab. 16 都地遺跡第12号掘立柱建物計測表

(単位cm)

2間 × 2間		梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深	径
P1	P2	108	214	P1	P4	140	1	26	22
2	3	106		4	6	140			
4	5		225	2	7		3	12	21
6	7	116	217	3	5	147	4	17	27
7	8	101		5	8	127			
平均	平均	107	219		138	277	6	16	26
							7	24	31
							8	31	37
							平均	20	26.7

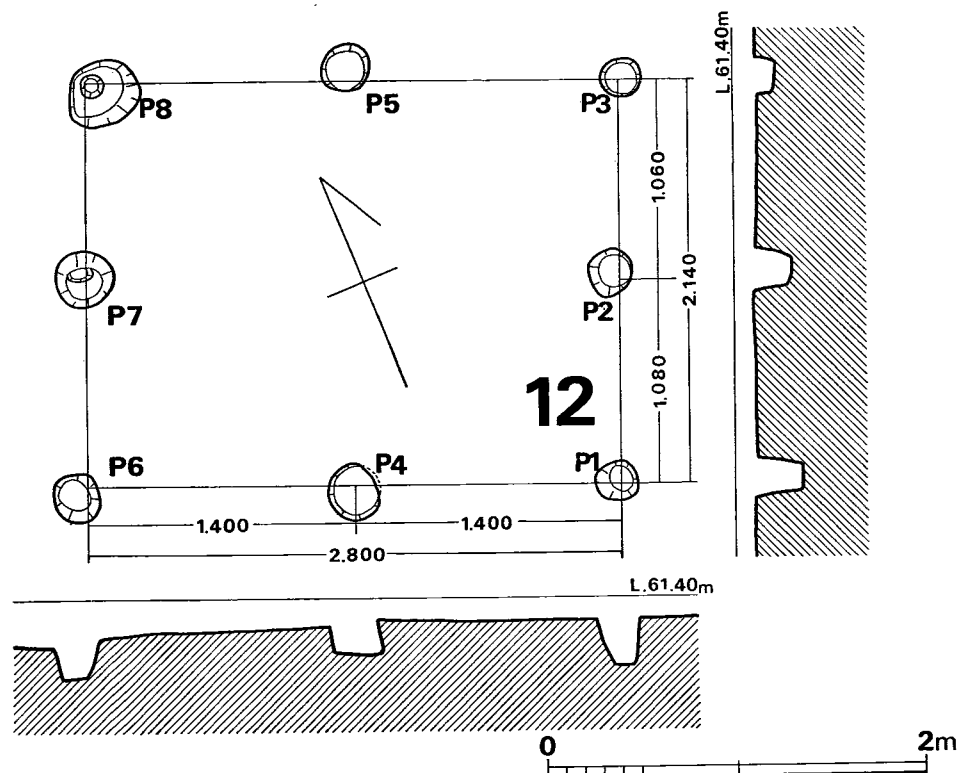


Fig. 30 都地遺跡第12号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

段掘り他は素掘りであり、これらはいずれも他の建物の柱穴掘り方に比べると径は小さく径平均26.7cm、深さ20cmである。都地遺跡の建物の中では小さく整然としている。

第13号掘立柱建物 (Fig. 31, Tab. 17)

第11号建物の西側に、接近して在って、建物の西側は農道であり調査できないが、P 2—P 8の3間であろう。南側は水田化に伴う耕作で大きく段がついておりP 1より南側は破壊されていると思われ、少なくともP 1—P 2ラインは1間以上存在したものであろう。図面上に

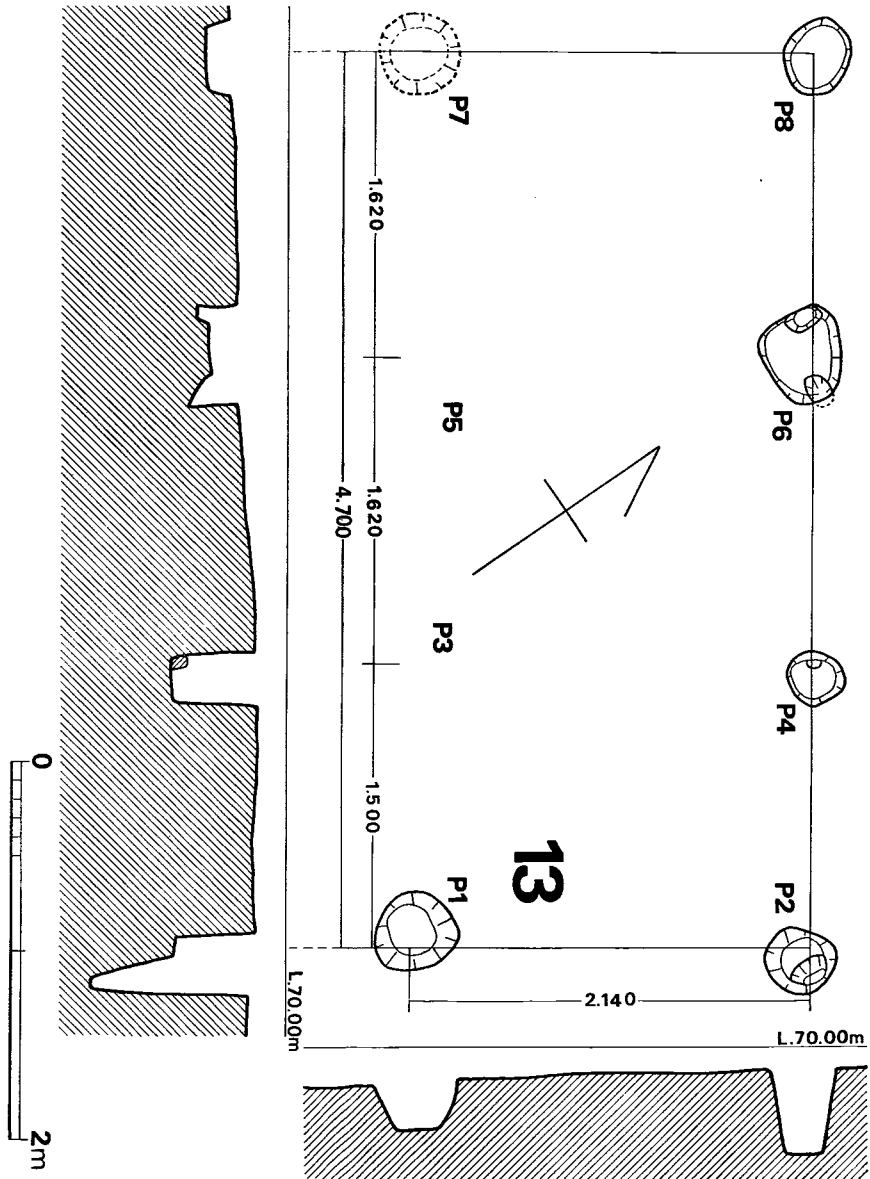


Fig. 31 都地遺跡第13号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

一応P 3, P 5を想定したが総柱の建物と思われず、関係はないものであろう。

2間×3間の建物と推定でき、桁行方向をN56度Eにとり、長方形プランと思われる。桁行間484cm, 平均桁行柱間159cm。梁間柱間222cmを測る。柱穴掘り方は不整形円で素掘りと二段掘りとがあり、径平均39cm, 深さ35.4cmである。P 4の柱穴掘り方底面には石が用いられている。

第14号掘立柱建物 (Fig. 32, PL. 22, Tab. 18)

第14号から16号建物は第1次調査において検出されたもので、南群中でも南側にある。開墾により丘陵斜面の南方を大きく削られているため柱穴は一列に4本しか認められないが他の建物跡より類推して1つの建物として取りあつかう。

4本一列の柱穴は桁行方向の建物でも北側のもので3間であり、南側に延びる梁方向は2間と推定される。桁行方向はN3度Wにとり、桁行間66cm, 同柱間平均202cmを測る。柱穴掘り方は方形の二段掘りでP 4は遺存しているのは二段目で、二段目柱穴の径平均は20cm, 深さ16cmである。

第15号掘立柱建物 (Fig. 33, PL. 22, Tab. 19)

第14号建物の南側に近接して在り、

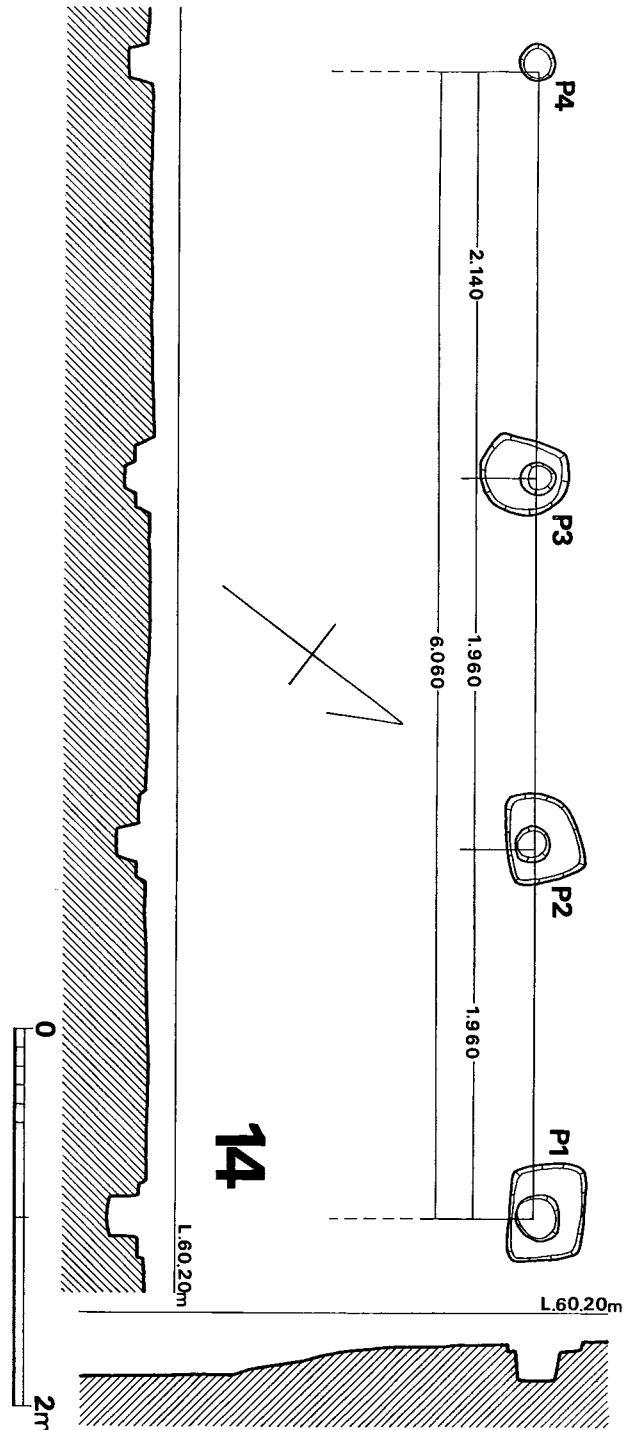


Fig. 32 都地遺跡第14号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

Tab. 17 都地遺跡第13号掘立柱建物計測表 (単位cm)

1間 × 3間		梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深	径	
P1	P2		214	P1	P3	※ 150	474	1	33	43
3	4	※ 235		3	5	※ 162		2	93	36
5	6	※ 228		5	7	※ 162		3	/	/
7	8	※ 212		2	4	150		4	43	30
				4	6	174	484	5	/	/
				6	8	160		6	24	47
平均		222						7	/	/
					159	479		8	14	39
※ 推定							平均	35.4	39.0	

Tab. 18 都地遺跡第14号掘立柱建物計測表 (単位cm)

3間		梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深	径	
				P1	P2	196	606	1	20	49
				2	3	196		2	16	46
				3	4	214		3	15	44
平均						202		4	13	19
							平均	16	39.5	

Tab. 19 都地遺跡第15号掘立柱建物計測表 (単位cm)

2間 × 3間		梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深	径	
P1	P2	190	390	P1	P4	176	524	1	32	48
2	3	200		4	6	168		2	42	53
4	5		383	6	8	180		3	40	23
6	7		400	2	9		533	4	34	40
8	9	197	397	3	5	172	531	5	26	33
9	10	※ 203		5	7	162		6	15	35
				7	10	※ 197		7	17	28
平均		197	392			175		529	8	15
※ 推定							9	32	38	
							10	/	/	
							平均	28	36.5	

P10は検出できない。第13号建物と桁行方向をほぼ同じにする。

2間×3間の建物で桁行方向をN52度Wにとり、長方形プランを呈する。平均桁行間529cm、梁間間392cmで、桁行柱間175cm、梁間柱間197cmを測る。柱穴掘り方は円形で素掘と二段掘りとがあり、径平均36.5cm、深さ28cmである。各柱穴のを見てみるとP1—P8の桁行方向は直

線的に並んでいるがこれに対応するP 3—P 7の桁行方向は直線的でなくP 5が内側に入り込んでいる。掘り方と柱穴内の関係では柱穴跡がいずれも掘り方の中心になく、どちらかに片寄っている。傾斜面のため南側のピット底面は北側のピットに比べて低い。

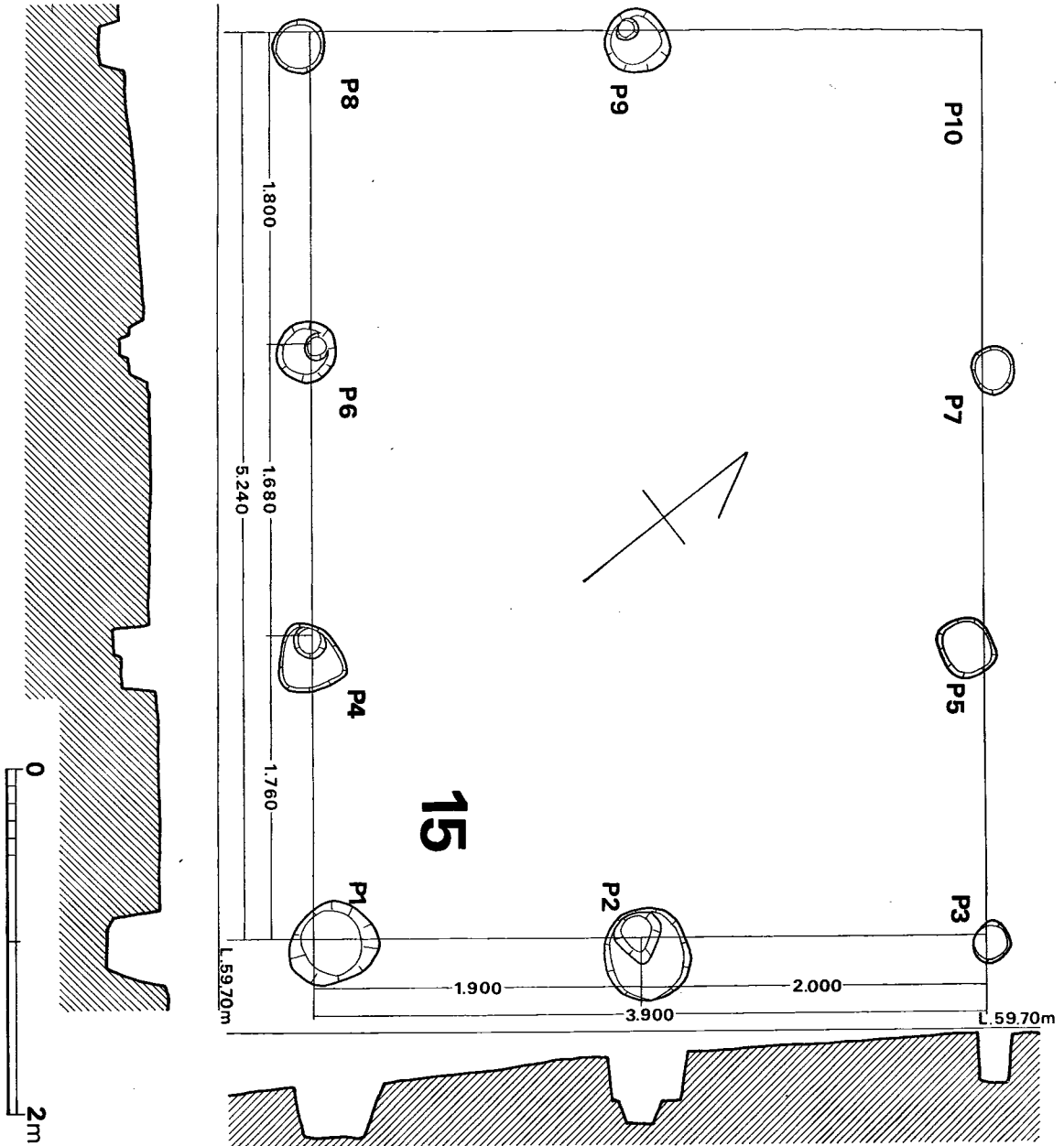


Fig. 33 都地遺跡第15号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

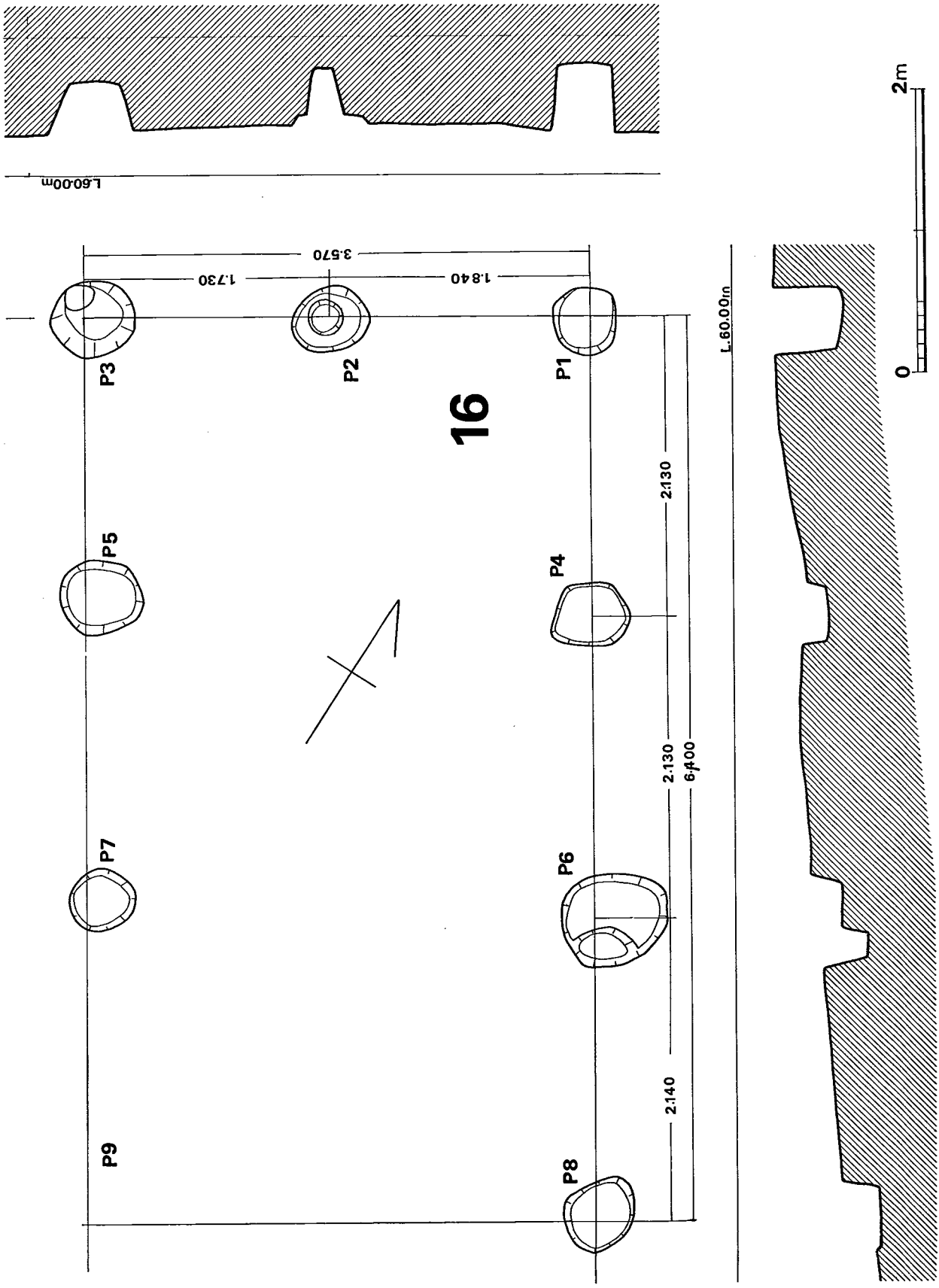


Fig. 34 都地遺跡第16号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

第16号掘立柱建物 (Fig. 34, PL. 22, Tab. 20)

この建物は南群でも最南に位置するもので、第15号建物の東側にも接近して在り、南方側は水田化のために削り取られているためにP9とP8—P9の間は検出できない。またP8、P9が南方に続くかどうか不明であるが一応2間×3間の建物と推定する。近接する第14号・第15号建物と桁行方向をほぼ直角に近く異にしている。

2間×3間の建物で桁行方向をN56度Eにとり、長方形プランを呈する。桁行間は641cm、平均梁間間は357cmで、桁行柱間213cm、梁間柱間178cmである。柱穴掘り方は円形で素掘りと二段掘りとがあり、径平均53.5cm、深さ35cmである。

Tab. 20 都地遺跡第16号掘立柱建物計測表

(単位cm)

2間 × 3間		梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深	径
P1	P2	184	357	P1	P4	213	1	50	49
2	3	173		4	6	213		2	41
4	5		346	6	8	214	3	45	57
6	7		365	3	5	198	4	23	51
8	9		※ 360	5	7	214	5	41	55
				7	9	※ 230	6	38	71
平均		178	357			213	7	16	44
							8	23	51
							9	/	/
							平均	35	53.5

※ 推定

(2) 遺物

表土層から遺構検出面の覆土中からと、柱穴内より発掘の面積に比べては少量の遺物が出土する。土器ばかりで、土師器、須恵器が圧倒的に多く弥生式土器（後期）、青磁、白磁、近世陶器が若干ある。ここでは一括して都地遺跡の遺物として扱う。

須恵器 (Fig. 35, PL. 24)

坏蓋 1は破片で、口径推定12.3cmで、天井部の器肉が厚い。天井部はほぼ水平で口縁端部へ直角に折り曲ってつづく。端部は尖る。胎土は微密であり、焼成は良好で内外面とも灰色を呈す。調整は内外ともナデである。

2は、口径推定13.2cmで天井部の中心部を欠く。天井部より体部にかけて段がつきほぼ水平に口縁部にのびてさらに口縁端部へ直に折れ下り口縁端部は尖る。胎土は小砂粒を若干含むも密であり、焼成は良で内外面とも明灰色を呈す。調整は天井部ヘラ削り、その他ナデである。

3は、2の大型と思われ口径15.8cmで、口縁端部はやや外反する。2に比べて口縁部が低い。

胎土は小砂粒を含むも微密であり。焼成はやや悪く内外面茶色を呈す。調整はナデである。

4は、口径16.6cmで、天井部より体部にかけて一段落ちすぐに口縁端部へつづく、口縁部はわずかにあるだけで天井部までが低い。胎土は微密であり、焼成は良好で内外面とも黒灰色を呈す。調整はナデである。

坏身 3は、小破片で推定底径8.4cmある。底部よりやや丸味をもって体部へつづく、胎土は砂粒塊を若干含むも密であり、焼成は良好で内外面とも灰色を呈す。調整は外面体部ナデ、底部はこまかいへら削りで、内面は雑な不整方向のナデである。

6は、推定底径8.2cmで、底部より丸く体部へつづく、胎土は微密であり、焼成は良好で内外面とも明灰色を呈す、調整は全体的に雑なナデである。内面の底部と体部の境に押え込みの沈線が巡る。

7は底部を一部欠くが、口径13.2cm、器高3.9cmである。底部に対して器高が高く、底部よ

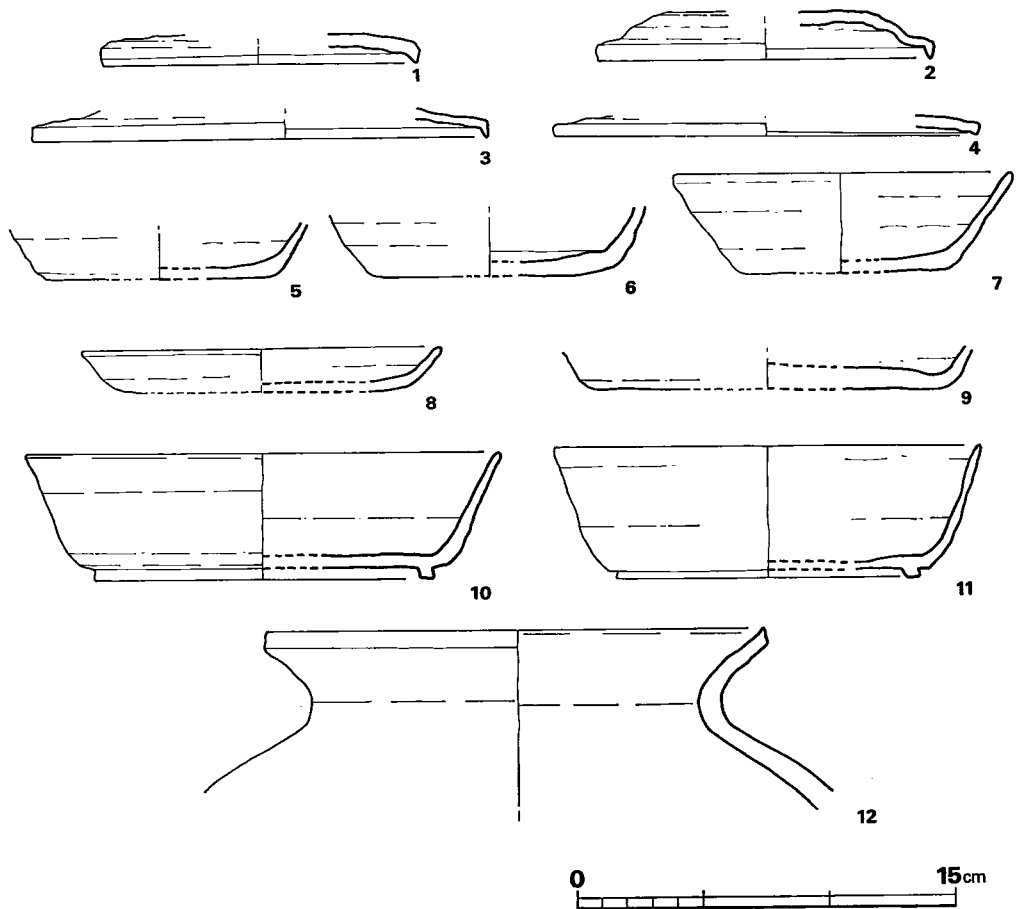


Fig. 35 都地遺跡出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

り口縁端部まで直線的につづき端部は丸い。胎土はやや粗い砂塊を少々含むも微密であり、焼成は良好で内外面とも明灰色を呈す。調整は外面の体部よこナデで、底部は粗いへら削り、内面の底部と体部の境に押え込みがある。

8は、復元口径13.8cm、同器高1.7cmであり、器高が低い。胎土は大砂粒を若干含んでいるが微密であり、焼成は良好で内外面とも灰色を呈す。調整は丁寧なナデである。

9は、小破片であるがやや大型の坏身と思われる、復元底径14.2cmである。胎土は大砂粒を若干含んでいるが精良かつ微密であり、焼成は良好で内外面とも灰色を呈す。調整はナデであるが底部外面は乱雑にナデている。

壺 10は大型の高台付きで復元口径18.4cm、器高25.0cmである。底部より体部にかけて直線的にのび、口縁端部へかけてやや外反する。高台は0.5cmで外反する。胎土は微密であり、焼成は良で内外面とも明灰色を呈す。調整はナデであり全体的に雑である。

11は、10とほぼ同じであるが立ち上りが10よりも直立に近い。底部より丸味を帯びて外反し、それが急に内傾して立ち上がる。胎土は微密であり、焼成は良好で外面黒灰色、内面灰色を呈す。調整は丁寧なナデである。

甕12は小型の甕片で、復元口径19.6cmである。口縁部は短かく口縁端部は三角形に尖る。胎土は微密であり、焼成は良で内外面とも灰色を呈す。調整は口縁部内外面ともナデ、胴部外面はタタキ目で、内面は青海波タタキ目である。

土師器 (Fig. 36, PL. 24)

1は、弥生式土器である。頸部から口縁部にかけて「く」の字口縁を呈す。胎土は白色の小砂粒を多量に含んでいて全体的にやや粗く、焼成は悪し。外面は明橙褐色で部分的に黒褐色の所あり、内面は灰橙褐色と灰黒褐色を呈している。器内は内外面とも剝落がひどく不明である。

2は、小型の甕片で口縁部のみである。胴部から頸部、口縁部にかけて「く」の字に立ち上り口縁端部は先細りであり尖る。胎土は大・小砂粒塊を若干含むも密であり、焼成は良好で内外面とも橙褐色を呈して外面の胴部には部分的にススが付着している。調整は外面に横方向のハケ目、内面は口縁部に横方向のハケ目、胴部は雑なへら削りである。

3は、2に比べてかなり大型の甕底部片である。底部は丸く胴は長い。胎土は大・小砂粒を含むも密であり、焼成は良好で内外面は橙褐色を呈しているが一部外面にススが付着している。調整は外面たて、斜めの雑なハケ目、内面は粗いへら削りである。

4は、こしきの口縁部と思われる5と対になるかも知れない。胴部より直線に延びて口縁部は細くなり先端部が尖って外反する。胎土は微密であり、焼成は良好で内外面とも茶褐色を呈して外面に一部ススが付着している。調整は横方向のハケ目、斜めのハケ目である。

5は、こしきの底部片である。底部は二孔であって多孔式のものでない。胎土は微密であり、焼成は良好で外面赤褐色、内面は黄褐色を呈す。調整は不明である。

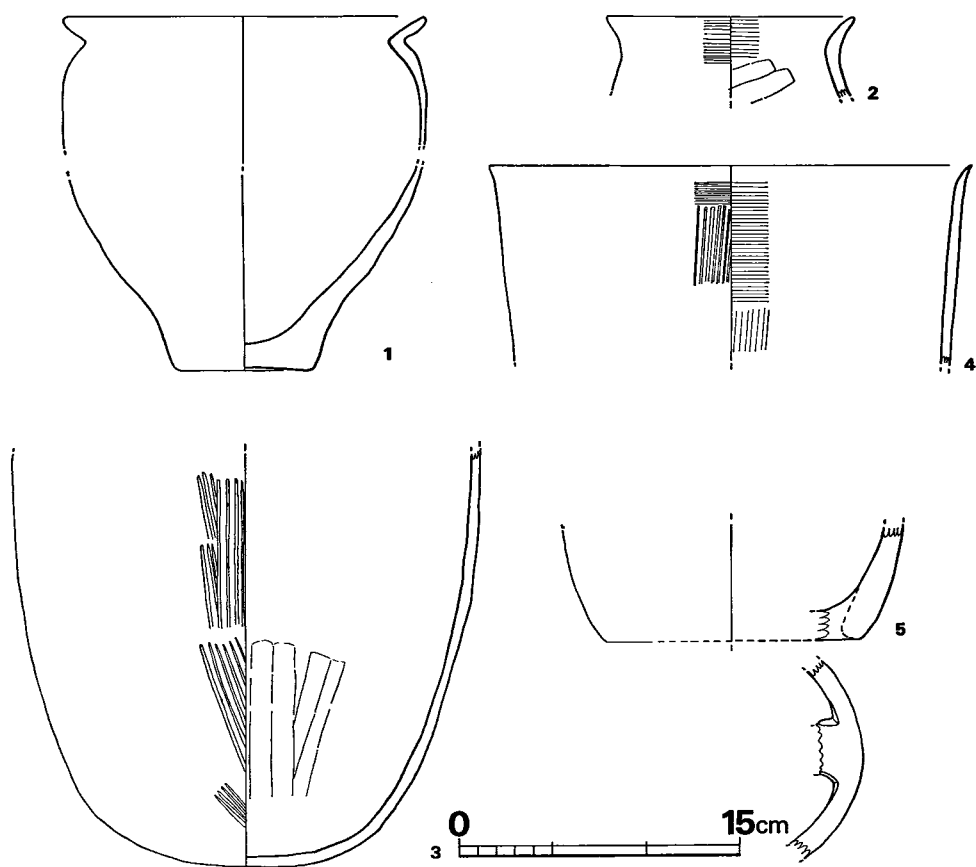


Fig. 36 都地遺跡出土土師器実測図（縮尺1/4）

3. 小 結

都地遺跡より検出された遺構は掘立柱建物跡16棟、他に大小ピット約200個で出土遺物には土師器、須恵器と若干の近世陶器、青・白磁類がある。

掘立柱建物については Tab. 21 のような規模であり各々の方位関係、面積についても Tab. 21 の通りである。方位については各建物跡を一つの建物と決定した後定規をあてて各々の柱穴を考慮して一番妥当と思われる所で直角に梁、桁行方向を決めたもので、これが実際とどれだけの誤差があるかは分からないことを付記しておく。

建物跡は大きく分けて北群（第1号より第9号）と南群（第10号より第16号）に位置関係より分けられ、さら南群は南群A（第10号）、南群B（第11号から第13号）、南群C（第12号から第16号）とに細分できるようである。最北の第2号跡と最南の第14号跡との距離は150mほどある。

北群の9棟は第1号と第9号は重複しているが第2号を除いて第1号と第7号、第8号。第3号と第6号は同じ、第4号は第5号と第9号と同じ関係で、前者と後者はほぼ直角に対している。第3・6号と第4・5・9号は僅か4度であり方向の決め方次第では同一になる可能性はある。

南群は第11号と第12号とが重複している。北群に比べて遺構の残りが悪いのがおしまれる

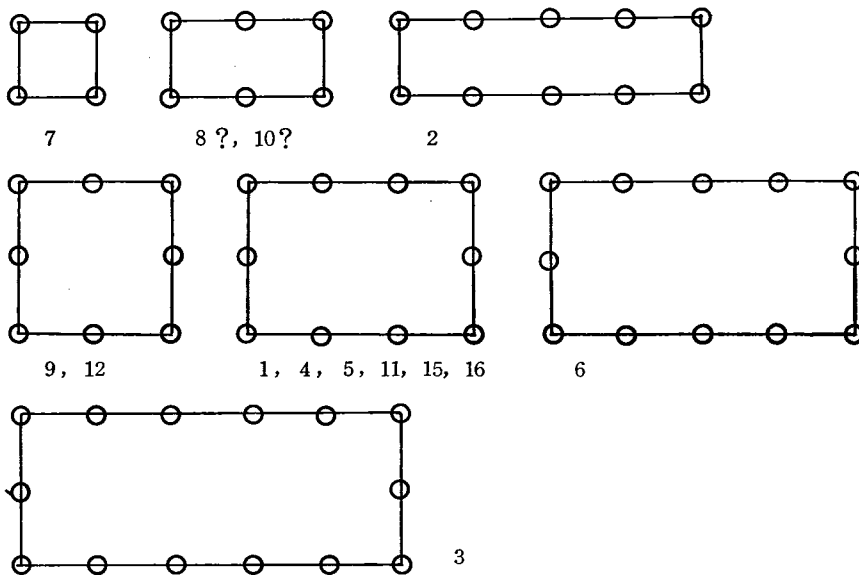


Fig. 37 都地遺跡掘立柱建物模式図

Tab. 21 都地遺跡掘立柱建物一覧表

(単位cm)

号跡	間	方位	平均 柱間	平均梁間	平均 桁柱間	平均桁行間	平均深	平均径	面積 (㎡)
1	2×3	N11度E	199	397	186	556	32.5	62.1	2,207.32
2	1×4	N5度W		347	165	662	14.8	29.2	2,297.14
3	2×5	N83度W	241	485	155	761	31	55.5	3,690.85
4	2×3	N80度W	197	396	195	590	20	50.0	2,336.40
5	2×3	N80度W	167	338	163	493	29	54.0	1,666.34
6	2×4	N84度W	212	429	159	646	22	48.8	2,771.34
7	1×1	N13度E		120		240	41	65	288.00
8	1×2	N10度E		268	156	312	33	63.3	836.16
9	2×2	N79度W	153	289	225	441	13.1	39	1,274.49
10	1×2	N10度E	173		161	323	15	62.4	558.79
11	2×3	N44度W	146	291	142	423	26	34.2	1,230.93
12	2×2	N68度W	107	219	138	277	20	26.7	606.63
13	1×3	N56度E		222	159	479	35.4	39.0	1,063.38
14	?×3	N37度W			202		16	39.5	
15	2×3	N52度W	197	392	175	529	28	36.5	2,073.68
16	2×3	N56度E	178	357	213	641	35	53.5	2,288.37

が、各々の方位に同一性はないようである。

各建物跡の柱穴掘り方を見ると素掘りと二段掘りがあるが、これらはいずれも整然とはしていなく不統一であり、これは梁間間や桁行間などについてもいえる。

出土遺物は調査範囲全域に渡って少量ずつではあるが、Fig. 35・36などの須恵器や土師器が出土しており、その他若干近世陶器や青・白磁類が出土している。したがってこの掘立柱建物跡群は須恵器、土師器の時期を考えざるをえない。須恵器については小田富士雄氏編年のⅦ-B^(註1)期に相当するものと思われる8世紀後半の時期である。

註1 43頁註5と同じ

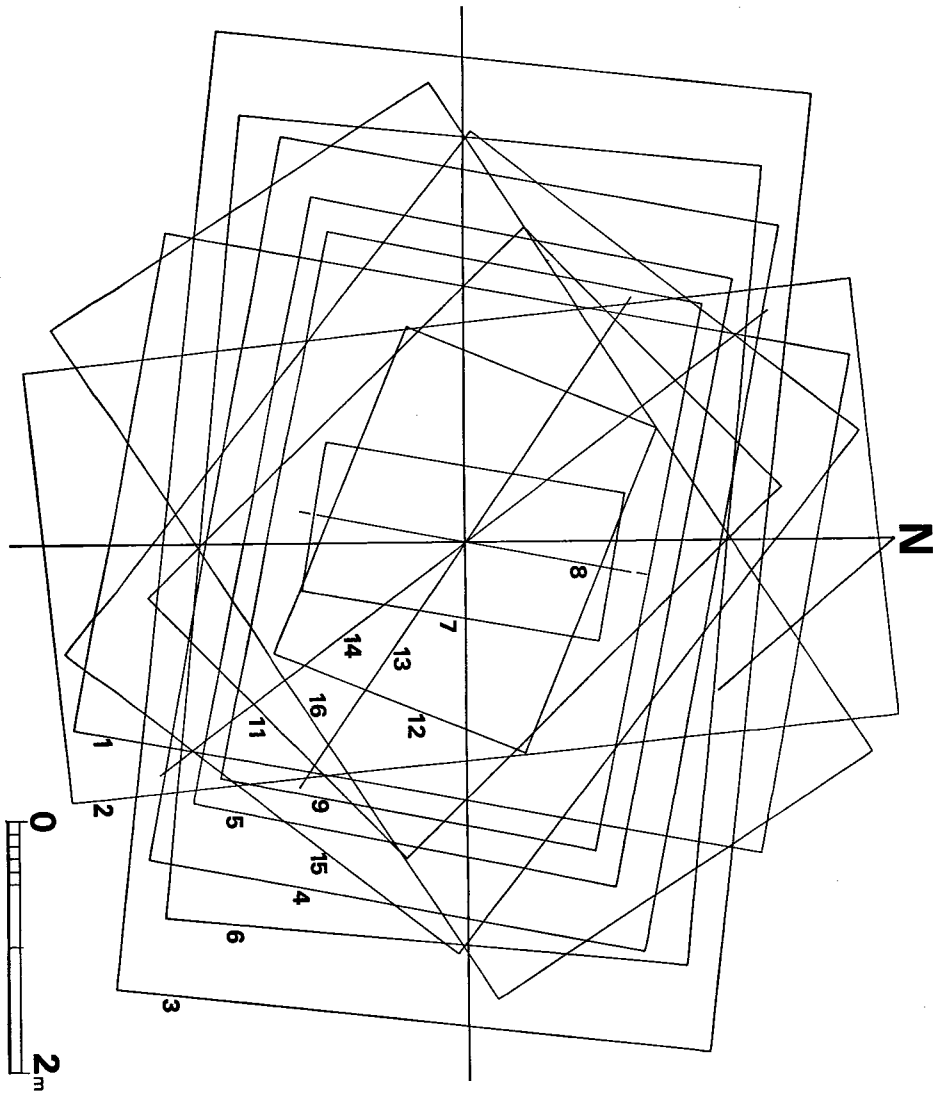


Fig. 38 都地遺跡掘立柱建物方位，面積比較図（縮尺1/60）

PLATES

都 地 遺 跡



(1) 都地遺跡遠景の航空写真(西から)



(2) 都地遺跡発掘前全景の航空写真(北から)



(1) 都地遺跡・汐井掛遺跡群の航空写真(東南から)



(2) 都地遺跡の航空写真(南西から)



都地遺跡全景の航空写真(北東から)



(1) 都地遺跡掘立柱建物群 (南東から)



(2) 都地遺跡掘立柱建物群 (北から)



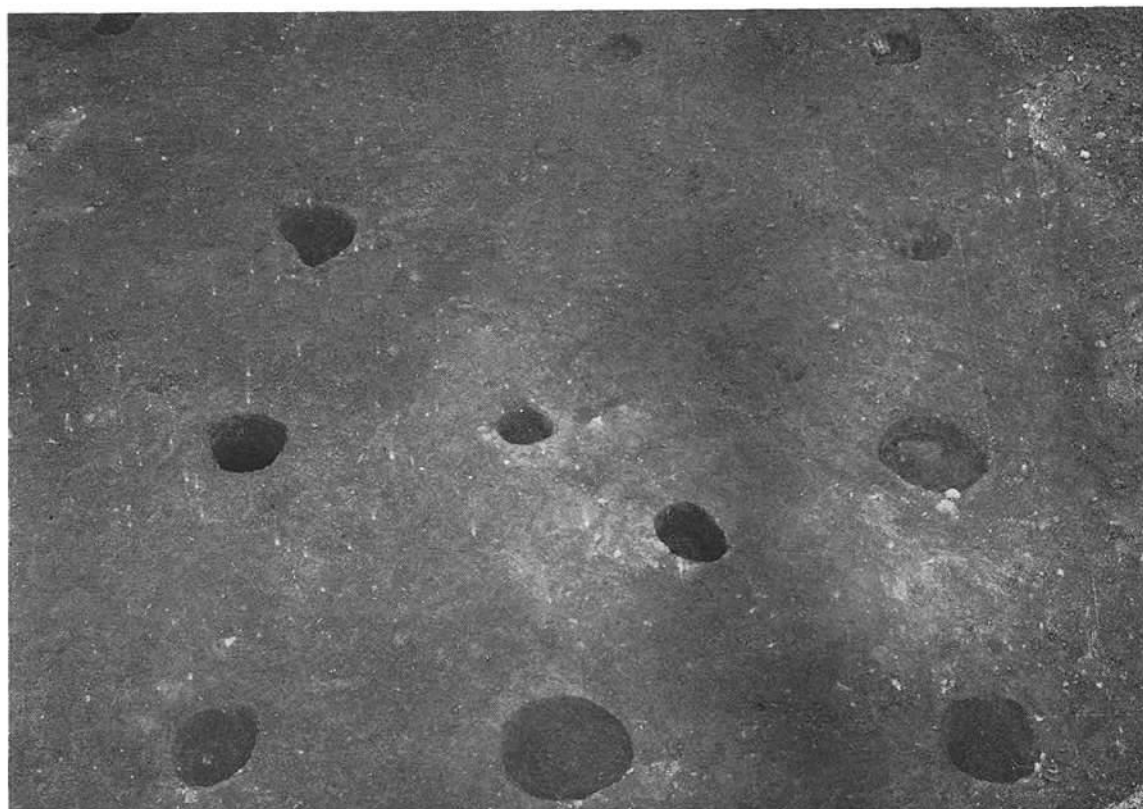
(1) 都地遺跡第1号掘立柱建物(東から)



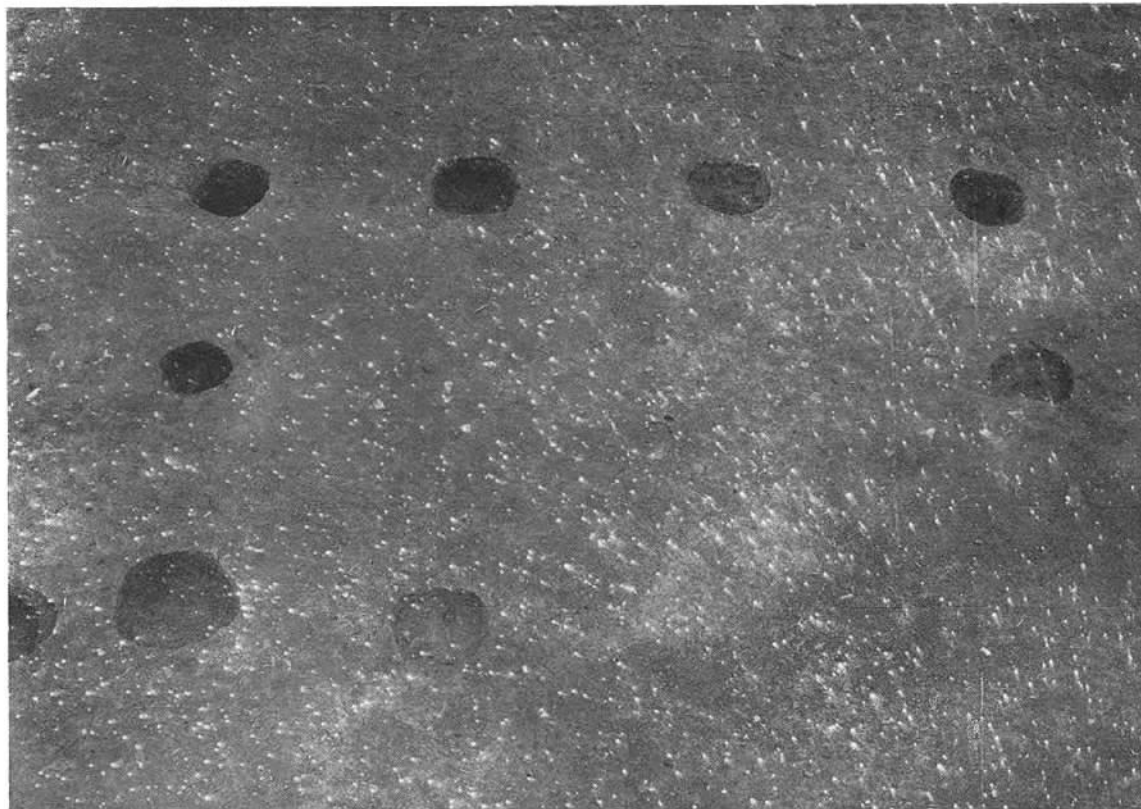
(2) 都地遺跡第2号掘立柱建物(東から)



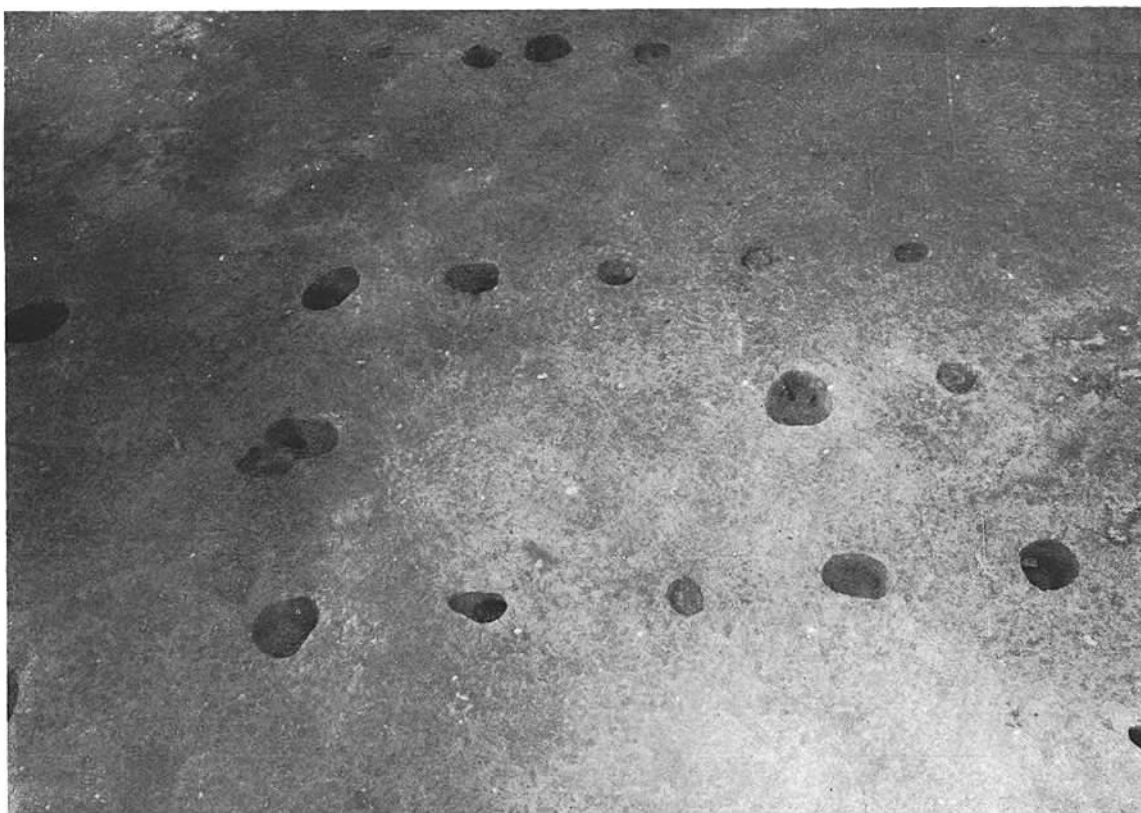
(1) 都地遺跡第3号掘立柱建物(東から)



(2) 都地遺跡第4号掘立柱建物(東から)



(1) 都地遺跡第5号掘立柱建物(南から)



(2) 都地遺跡第6号掘立柱建物(南から)



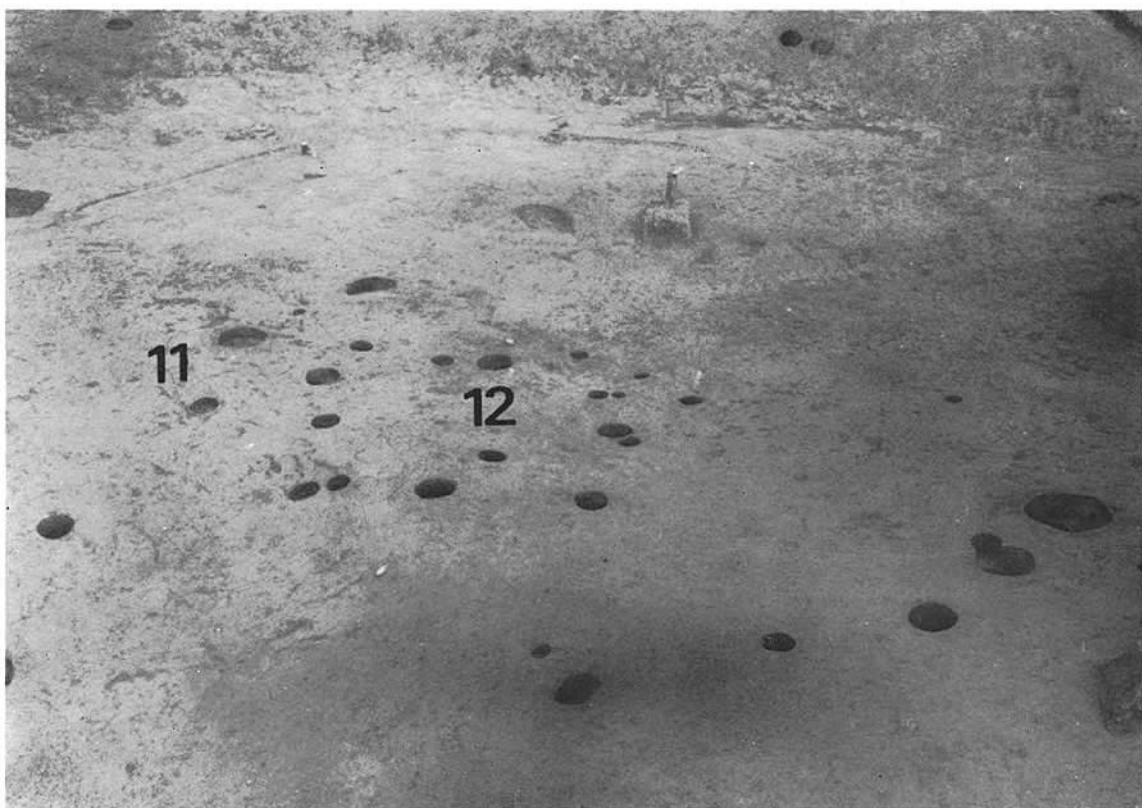
(1) 都地遺跡第7号掘立柱建物(南から)



(2) 都地遺跡第9号掘立柱建物(西から)



(1) 都地遺跡第8号掘立柱建物(東から)



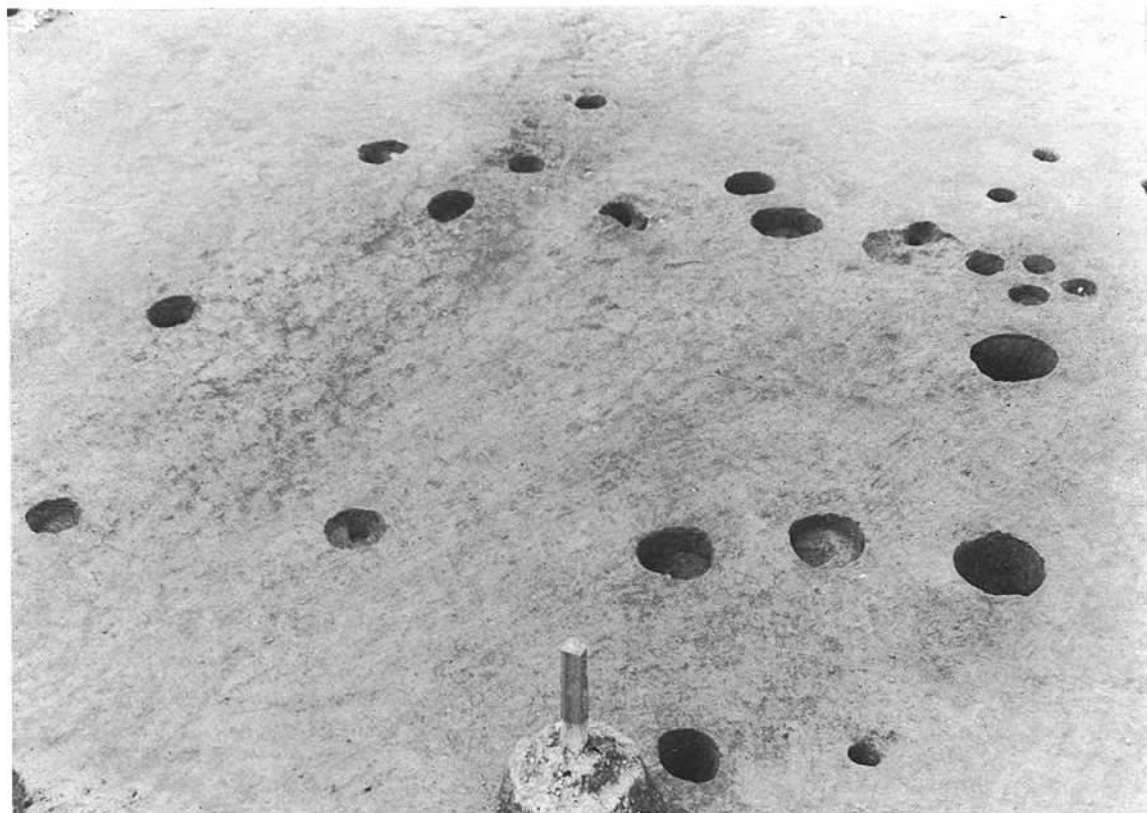
(2) 都地遺跡第11号・第12号掘立柱建物(南西から)



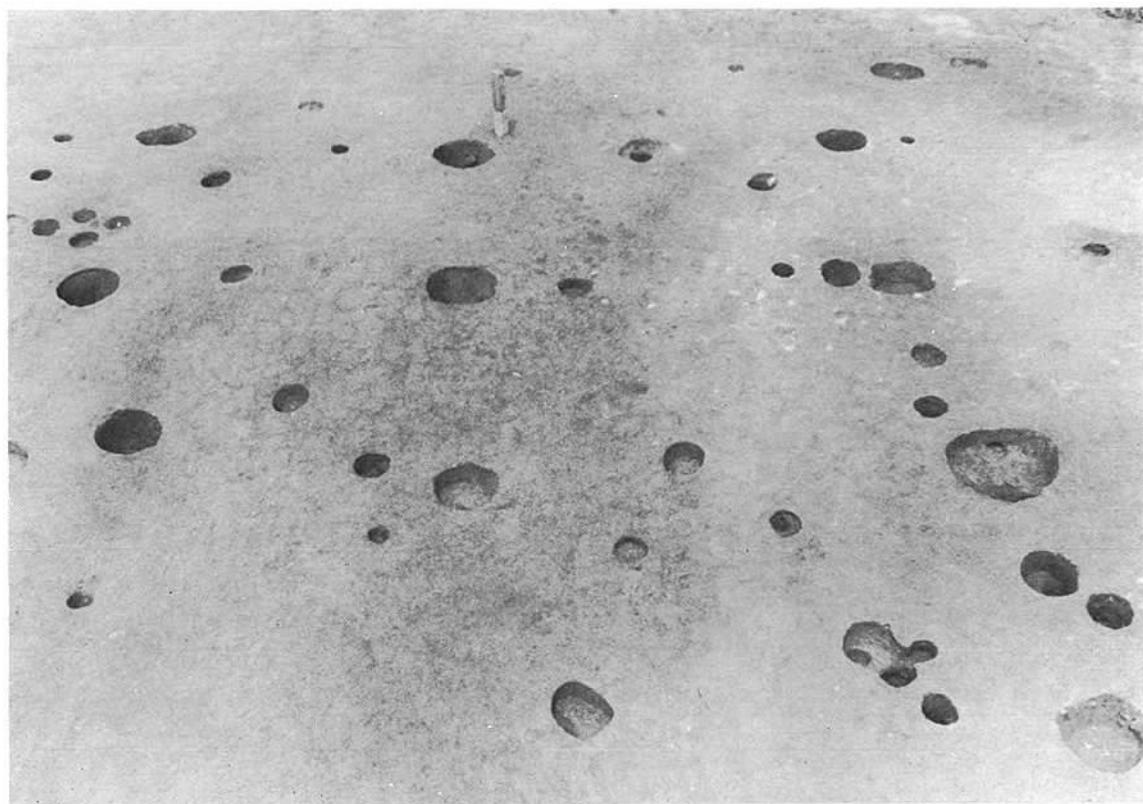
(1) 都地遺跡第14号・第15号・第16号掘立柱建物(北西から)



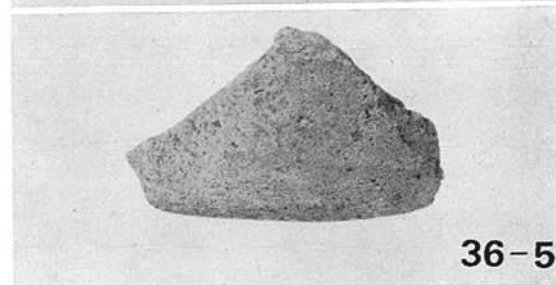
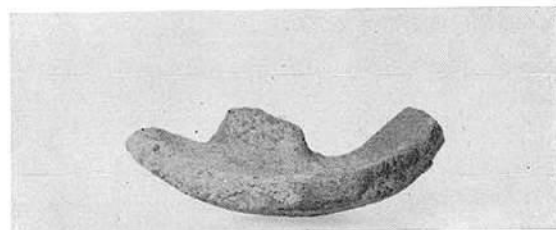
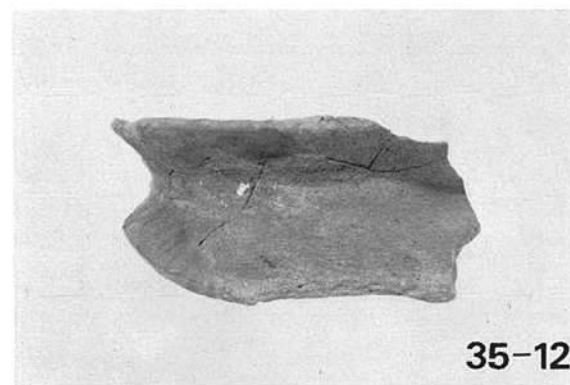
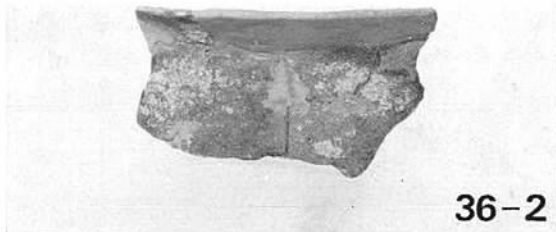
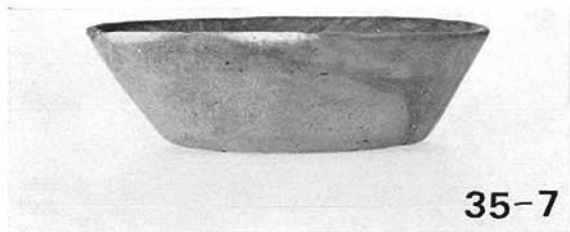
(2) 都地遺跡第14号掘立柱建物(南西から)



(1) 都地遺跡第15号掘立柱建物(北東から)



(2) 都地遺跡第16号掘立柱建物(南西から)



Ⅵ 汐井掛墳墓の調査

Ⅵ 汐井掛墳墓群の調査

1. 調査の経過

汐井掛墳墓群は昭和49年7月より開始され昭和51年3月までの3ケ年に渡って調査された汐井掛遺跡群の一つで、火葬墳墓群を汐井掛墳墓群とした。なお他に先土器時代、縄文時代の石器、弥生時代の住居跡、弥生時代から古墳時代にかけての木棺墓、石棺墓群、古墳時代の古墳群などが大量に検出されており、それらは先土器時代から弥生時代関係のものを1冊に、古墳群を1冊に、そしてこの墳墓群を本報告書にと三分冊にして報告することを断わっておきたい。以上のように複合遺跡である汐井掛遺跡群は木棺墓・箱式石棺墓・古墳群を主に調査を進行していった、その過程において墳墓群は発見されている。各墳墓発見のつどに調査を実施しているために各々まちまちであり昭和49年8月より昭和51年2月までの間に調査を実施したもので、各墳墓の番号は発見順に付けたものである。

第1号墳墓 1974年（昭和49年）

8月20日 汐井掛B地点遺跡の発掘調査中に偶然にも火葬骨の納った骨蔵器を発見したものである。

8月22日～8月24日 墳墓の掘り方や骨蔵器の器内など注意深く掘り進めるも器内に火葬骨のみしか認められず。発掘後、実測、写真撮影を行なう。なお、骨蔵器の蓋、身共に発掘作業中による破損が著しく一度取り上げて復元して元に戻して作業を実施した。

第2号墳墓 1974年（昭和49年）

8月29日～8月31日 汐井掛B地点遺跡の拡張の際に須恵器甕出土。発掘してみると器内に火葬骨が認められたので第2号墳墓とする。火葬骨の取上げ後、実測、写真撮影を行う。

第3号墳墓 1975年（昭和50年）

汐井掛遺跡群の発掘調査は、昭和49年11月15日をもって昭和49年度の調査を終了した。続いて昭和50年度は昭和50年4月より昨年度の継続である汐井掛古墳群と汐井掛木棺・石棺墓群の調査に入る。汐井掛第3号墳墓は昭和50年の夏に発見されたもので、汐井掛第5号古墳の西側汐井掛第4号石棺墓との丘陵緩傾斜面に発見されたもので、発見当時は、須恵器が骨蔵器とは判明しなかったが、石組の状況や須恵器の形態や出土状況より火葬墳墓と思い実測等を実施した。そして調査途中において須恵器の底部が穿孔されており、又器形が短頸壺であるという事などから、火葬骨は認められないものの火葬墳墓とする。

第4号墳墓 1975年（昭和50年）

汐井掛第5号石棺と第6号石棺の間に石組が発見され、その石組内より須恵器短頸壺が検出された。若干の火葬骨が認められた他に、底部に穿孔がみられ石組などからして火葬墳墓とした。

第5号墳墓 1975年(昭和51年)2月

汐井掛遺跡群、古墳群の調査も終了間近になった2月7日の冬に汐井掛第14号古墳の南側丘陵斜面の「ダメ押し」作業中にブルドーザーが、火葬骨を発見した。2月8日より本格的調査を実施し、実測図、写真撮影を2月10日までに終了する。

2. 調査の内容

汐井掛墳墓群は汐井掛遺跡群(木棺墓、石棺墓等)と汐井掛古墳群の在る同丘陵上で、複合遺跡をなしている。第1号墳墓と第2号墳墓は同丘陵上で50mしか離れていないが行政区分上では第1号墳墓は鞍手郡若宮町沼口に、第2号墳墓は鞍手郡宮田町上有木に在る。第3号から第5号墳墓は第1号、第2号墳墓の西方丘陵上から斜面にかけて位置しているが、第3号、第4号墳墓は鞍手郡宮田町上有木に第5号墳墓は鞍手郡若宮町沼口に在る。(Fig. ⑤, PL. 25)

(1) 遺 構

第1号墳墓 (Fig. 39, PL. 26・27)

汐井掛B遺跡の西寄りにおいて火葬骨を骨蔵器に埋納した火葬墳墓が検出され、西から東に延びる丘陵頂部よりやや下位の南側緩傾斜面にある。

埋葬状況

木棺墓、箱式石棺墓などの遺構検出時に確認されたもので、発掘前より墳丘や、墓標などの施設は認められないようで、すでに上部は近世の開墾により破壊されていて表土直下に蓋が検出される。

骨蔵器内には火葬骨と木炭片が充満しており、火葬骨が多量に埋納されている。骨蔵器、墓壇内に副葬品は見出せない。

骨蔵品 (Fig. 44, PL. 27)

骨蔵器は陶製の須恵器有蓋短頸長胴壺形土器で高台が付く。この壺形土器は器高20.2cm、口径10.0cm、底径10.5cm、最大胴部は底面より13.0cmで径19.6cm、高台の高さ1.1cm、口縁部立ち上り1.4cm、器高ほぼ0.6cmを測る。

高台は底部に貼り付けて底部より外反して下り外側端部ははね上る。底部は平坦で底部より胴部に直線的に最大胴部へとのびて丸くゆるやかに頸部へ続き、最大胴部は胴部の3分の2の

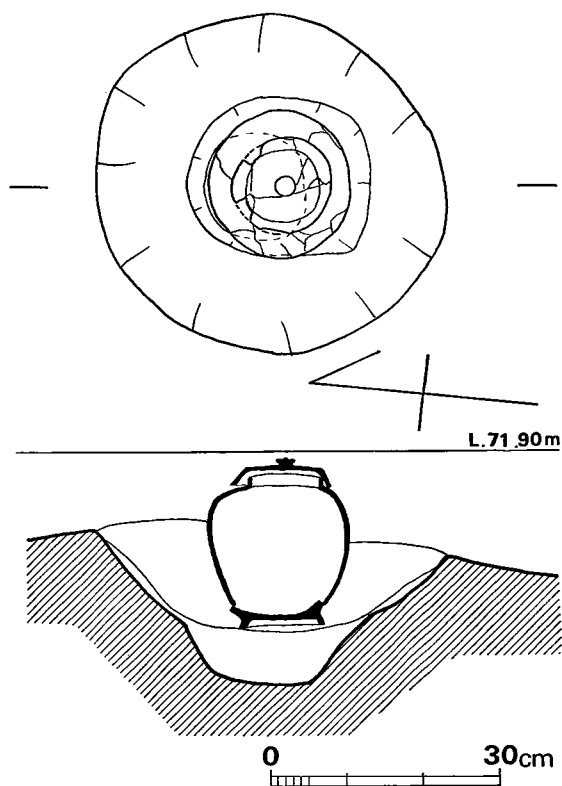


Fig. 39 汐井掛第1号墳墓実測図 (縮尺1/10)

蓋は須恵器のつまみ付き坏で、総高 3.9cm、口径12.9cm、器内ほぼ 0.6cmを測る。つまみは宝珠形で中央部だけが尖る。天井部はほぼ平坦で肩部から口縁部へ直線的に外反して下り、口縁端部は平坦でここだけ器肉が厚い。胎土は微密であり、焼成は良好で内外面とも黒灰色を呈す。調整は外面天井部は丁寧なヘラ削りで他はナデであり全体的に丁寧なつくりである。

第2号墳墓 (Fig. 40, PL. 28)

第1号墳墓の東方50m離れていて、汐井掛墳墓群中では最東端にあり、同丘陵上のほぼ頂部に位置する。さらに東方約 300m離れたところには同じ九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査で検出された都地原墳墓群がある。

埋葬状況

発掘前の表面観察時には何も確認できず、発掘調査開始後においてもすぐには発見が困難であって、出土した須恵器甕内に火葬骨が認められたので火葬墳墓としたものである。丘陵頂部付近は近世の開墾が進んでいて骨蔵器の甕は底部を残すのみである。

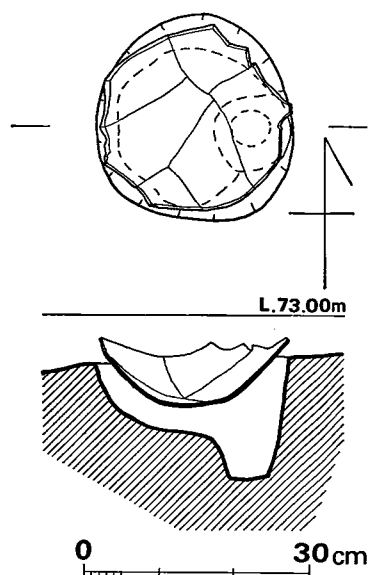


Fig. 40 汐井掛第2号墳墓実測図 (縮尺1/10)

ところにある。口頸部より口唇部へは直に立ち上がり、口唇部内面はない。胎土は密であり、焼成は良で内外面とも暗灰色を呈す。調整は全体的に丁寧なナデで、底部内面は雑な指頭状のナデである。

骨蔵器は、現存上面で径26cmのはぼ円形、深さ15cmの墓壇内に埋置されている。墓壇の床面東側には上径8cm、深さ6cmの小さなピットがあり、床面は平坦である。墓壇の床面は摺鉢状であり最初より骨蔵器である甕を意識して掘ったようである。骨蔵器は床面より4cm程浮いた状態で水平に埋置されていて、甕の口縁部があれば直立していたと思われる。

埋土にはやや黄色味を帯びた茶褐色土が用いられており木炭片、焼土塊などは見られない。骨蔵器内には若干の火葬骨と木炭や焼土塊がみられる。骨蔵器、墓壇内には副葬品はない。

骨蔵器 (Fig. 44, PL. 29)

陶製の須恵器甕形土器で底部のみであるが、本来は口縁部まで在ったものであろう。現存器高8.3cmで、丸底であり、内外面に凸凹面が残る。胎土は微密であり、焼成は良好で外面黒灰色、内面暗灰色を呈す。調整は外面平行線のタタキ目、内面は胴部に近い方は青海波文のタタキ、底部はナデと指頭押圧痕がみられる。

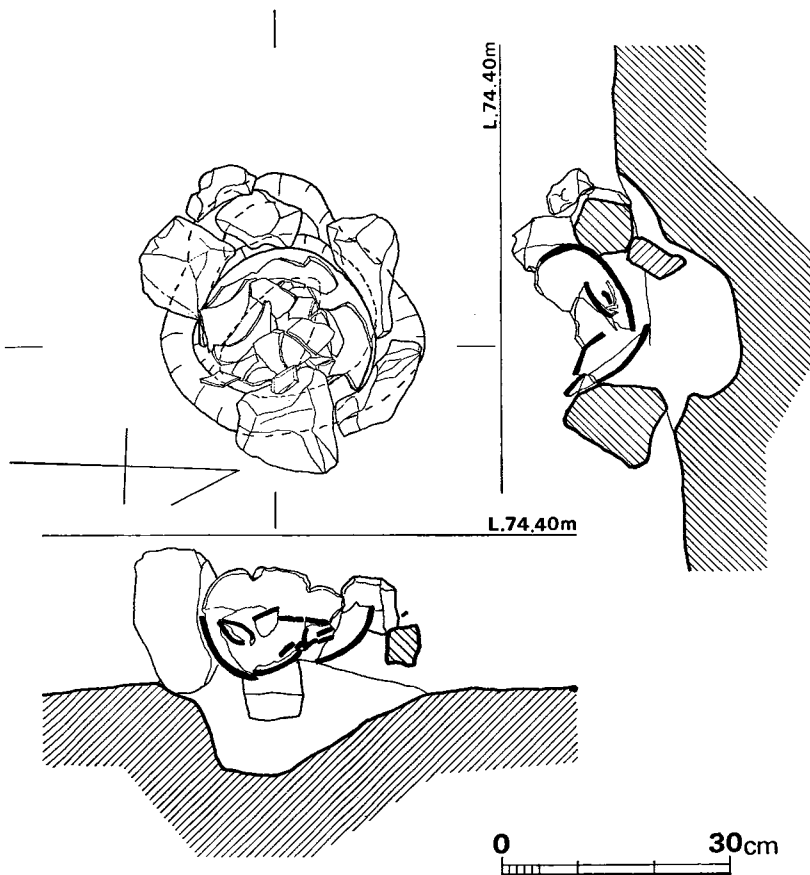


Fig. 41 汐井掛第3号墳墓実測図 (縮尺1/10)

第3号墳墓 (Fig. 41, PL. 29)

第1号墳墓の北西約110m離れてあり、汐井掛第11号古墳を頂点とする丘陵の南西斜面上の丘陵頂部よりの東側の緩傾斜面が急傾斜面に変わるところである。骨蔵器、石組施設の上半は破壊され、存在しない。

埋葬状況

汐井掛A遺跡の表土はぎの段階で確認されたもので、表面からの観察では一部分の石が露出していたようであるが、盛土や墓標などは確認されない。火葬骨は認められなかったが、出土した須恵器の底部に穿孔のあることや、埋葬施設などの検討より、火葬墳墓とした。

骨蔵器は、土坑を掘りその上に6個の石組を配して、その石組内に埋置されている。土坑は現存上面で34cm×36cmの不整形円で、西側に浅い掘り込みが付いている。深さは約15cm程を測る。土坑内の中位程までは埋め土ばかりで、上半より石組の石が見られる。石は長方体のもので、長さ15cmから10cm、幅10cm程、厚さ10cm位の川原石を用いていて、石組は円形・方形といった形ではなく、南側には石が存在しないが、ほぼ骨蔵器を取り巻くように石が配置されている。

骨蔵器は、現存上面で48cm×52cmのほぼ円形深さ現存20cmの墓坑内に埋置されている。二段掘りのようになっている。床面はほぼ平坦で、床面より上位に約8cm程までやや大きく立ち上がり、それより上位へさらに大きく立ちあがっている。そして骨蔵器は、下の小さな穴ともいえる墓坑を一度黄茶褐色土（少量の炭粒と小粒の焼土塊を含む）で埋めて、その上に骨蔵器の底部を安置して周りを異色土（木炭片と焼土塊）で埋めていて、骨蔵器は直立している。しかし、骨蔵器を円形の石組内に埋置したものではなく、石組の石は骨蔵器の安定を保つために設置されたようである。蓋と思われるものが周辺から検出されている。骨蔵器内や、墓坑、石組内よりの副葬品はない。

骨蔵器 (Fig. 44, PL. 29)

陶製の須恵器短頸壺形土器で、高台が付き口縁部を欠く。現存器高11.8cm、底径10.7cm、最大胴部は底面より9.3cmで径19.4cm、高台の高さ1cmである。

高台は底部貼り付けで、底部より大きく外反して下り、端部はほぼ水平であるが、外方がわずかにね上がる。底部は丸く、底部より胴部にかけて若干の丸味を持ち、最大胴部へ達し大きく内傾していく。底部が丸いために、中央部分に穿孔がしてあるが、ほぼ高台の端部と同じような線上にくる。底部中央に径1.2cmほどの穿孔がみられる。胎土は大小の砂粒や黒色の砂粒子を多量に含んで、やや密であり、焼成は良好で外面黒灰色、内面は灰色を呈す。調整は胴部外面はヨコナデであるが、胎土内に大小の砂粒子を含むため、ナデ痕の沈線が多く目立つ。高台を貼り付けるために、きれいに整えた痕が底部と胴部の境に見られる。内面は整ったヨコナデや不整方向の雑なナデや、さらに入り乱れたうすいこまかいナデなどが施されている。

蓋はつまみが付いていないため、坏の転用かと思われるが、器高3.6cm、口径14.0cmを測る。天井部はほぼ平坦で、肩部より口縁部へ直線的に外反して下がり、口縁端部は丸い。胎土は白色微砂粒を若干含むも微密であり、焼成は良好で外面青灰橙色、内面は黄灰色を呈す。調整は口縁部ヨコナデ、天井部は不整方向ナデである。

第4号墳墓 (Fig. 42, PL. 30)

第3号墳墓の西方、21m離れてあり、第2号墳墓とは対称的に丘陵の南西斜面上の丘陵頂部寄りの、西側の緩傾斜面が急傾斜面に変わるところにある。つまり、第2号墳墓と丘陵頂部に対してほぼ正反対の位置に立地している。標高は約50cmの差があり、第4号墳墓が高い。骨蔵器、石組施設の上半は破壊されていて、存在しない。

埋葬状況

第3号墳墓と同じように、汐井掛A遺跡の調査過程で、調査前に一部の石が露出していたようであるが、盛土や墓標などは見られなく、若干の火葬骨が認められる。

骨蔵器は土壇を掘り、その内部寄りと北側は土壇外に川原石を用いて石組とし、その内に骨蔵器を埋置している。土壇は現存上面で45cm×60cmの東西方向に長い楕円形を呈し、深さ13cm弱である。床面はほぼ平坦であるが、水平ではない。石組の石は第3号墳墓と同じような大きさで、土壇の床面に無造作とも思えるような状態で敷かれていて、骨蔵器は土壇内よりやや上面の敷石の上に安置されている。石組は骨蔵器の回りにも続いているが、第3号墳墓の石組とは違って、骨蔵器に接して在るのではなく、やや離れて丸く囲んでいる。さらに上方にも骨蔵器、石組も存在したと思われるが現存しない。骨蔵器はやや東側に傾斜して埋置されているようであるが、これが本来の形かどうかは上半が破壊されているために、判断できかねる。

骨蔵器の内には若干の火葬骨が認められた。副葬品は器内、土壇、石組のどこにも発見されない。

骨蔵器 (Fig. 44, PL. 31)

陶製の須恵器短頸の壺形土器で、高台は付かない。器高は16.3cm、口径10.5cm、最大胴部は底面より10cmで19.1cm、口頸部よりの立ち上がりは1.5cm、器肉はほぼ0.4cmを測る。底部は穿孔されているが丸く、さらに口縁部へ丸く続き、端部の内面は三角形状にはねる。底部の中心部を楕円形状に穿孔している。胎土は、大小砂粒をかなり含んでいるが密であり、焼成は良好で、外面黒灰色、内面青灰色を呈す。調整は外面胴部上半は、幅7cmから8cmを一つの間隔として、全体的に斜めのタタキ目、底部ではそれが交差して入り乱れたタタキ目となる。内面は青海波文状のあてを施している。

第5号墳墓 (Fig. 43, PL. 32)

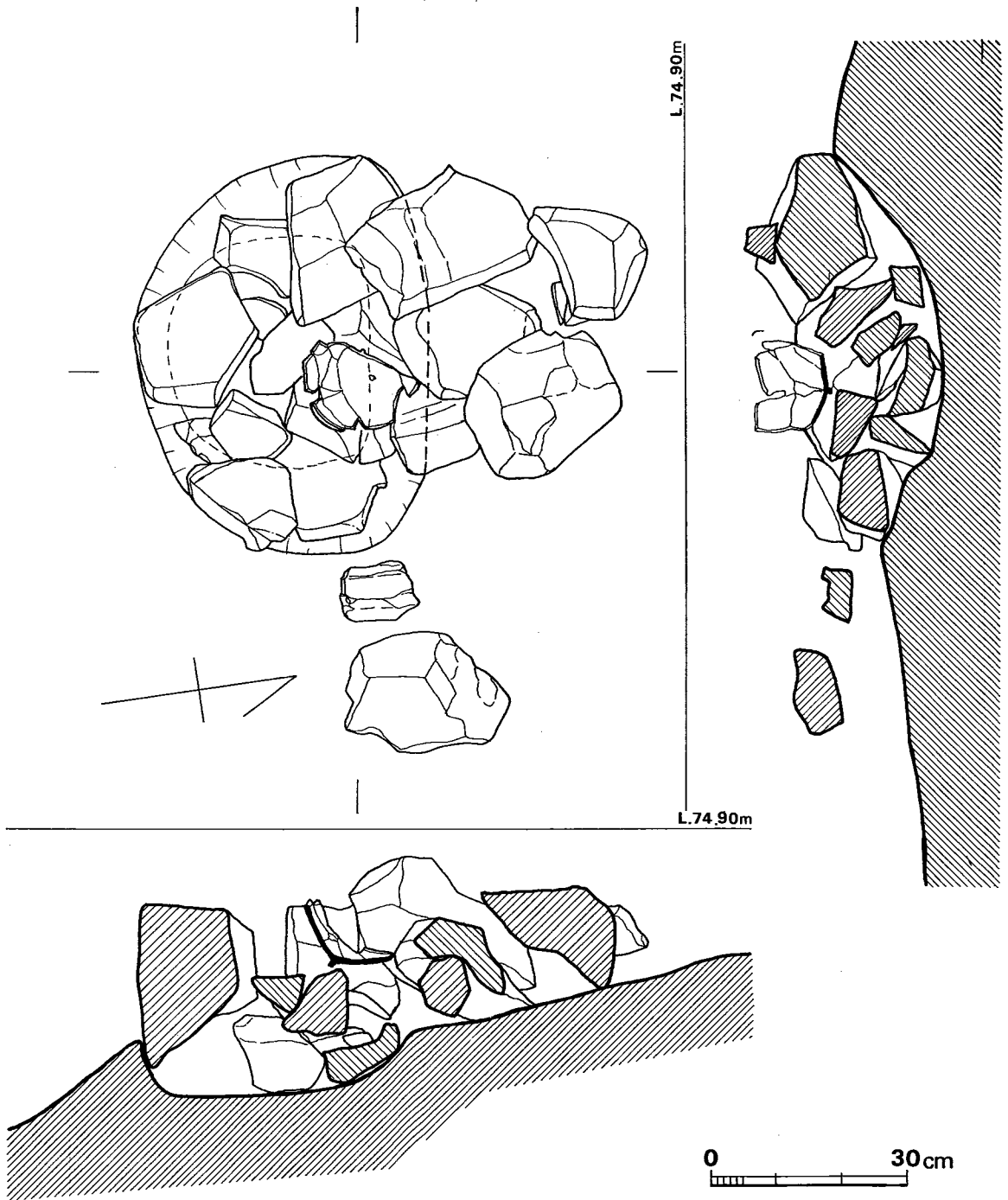


Fig. 42 汐井掛第4号墳墓実測図 (縮尺1/10)

第4号墳墓の南西55m離れた丘陵傾斜面上にあり、第4号墳墓に比べて標高66mであり9m程低い位置に在る。

埋葬状況

墳墓の西側周辺の傾斜面に弥生式土器と土塚が発見され調査された。その範囲を確かめるために周辺をブルドーザーにより表土を除去した際に発見されたもので、その時は骨蔵器の上半をほとんど破壊した状態であり、骨蔵器、火葬骨は周りに散乱する。

骨蔵器は、現存上面で52cm×55cmの不整形形で深さ現存12cmの墓塚内に埋置されている。墓塚はやや三角形を呈していて、北東側が長く、南西側が短い隅丸台形状ともいえる。床面はやや凹凸面があり、中央部がくぼむ。床面の上に骨蔵器が直立して安置してあり周りを木炭や焼土等で埋めて固定している。

骨蔵器内には多量の火葬骨と若干の木炭が見られる。骨蔵器内に副葬品は検出されないが、墓塚内より銅銭（皇朝十二銭）が出土する。

骨蔵器 (Fig. 44, PL. 33)

陶製の須恵器壺形土器で高台が付き口縁部を欠く、又胴部上半もほとんど欠いているが短頸壺形土器と思われる。現存器高19.3cm、底径11.7cm、最大胴部は底面より13.5cmで径24cm、高

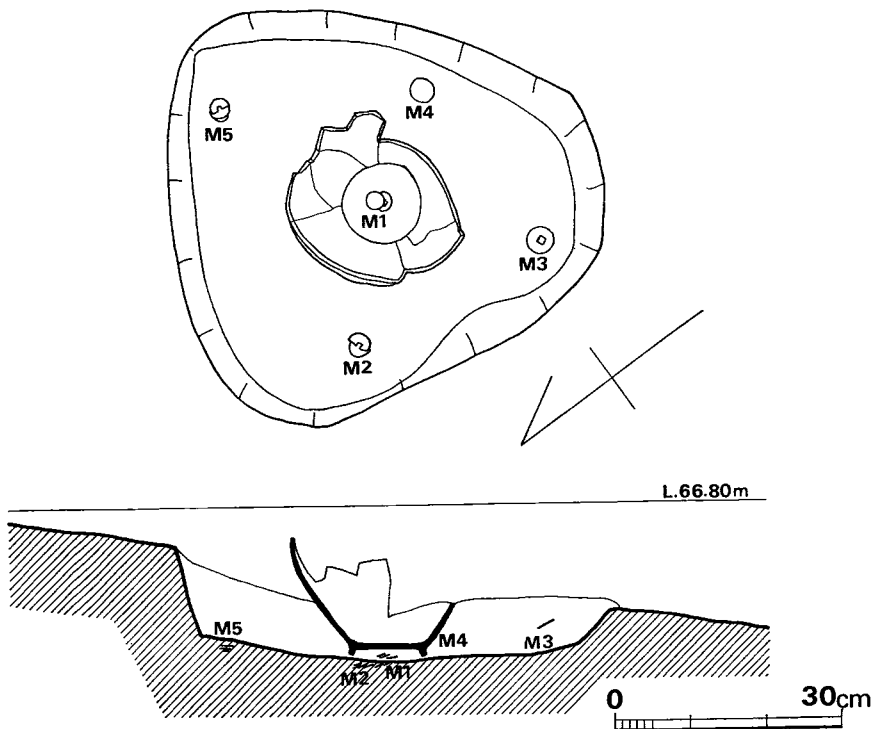


Fig. 43 汐井掛第5号墳墓実測図 (縮尺1/10)

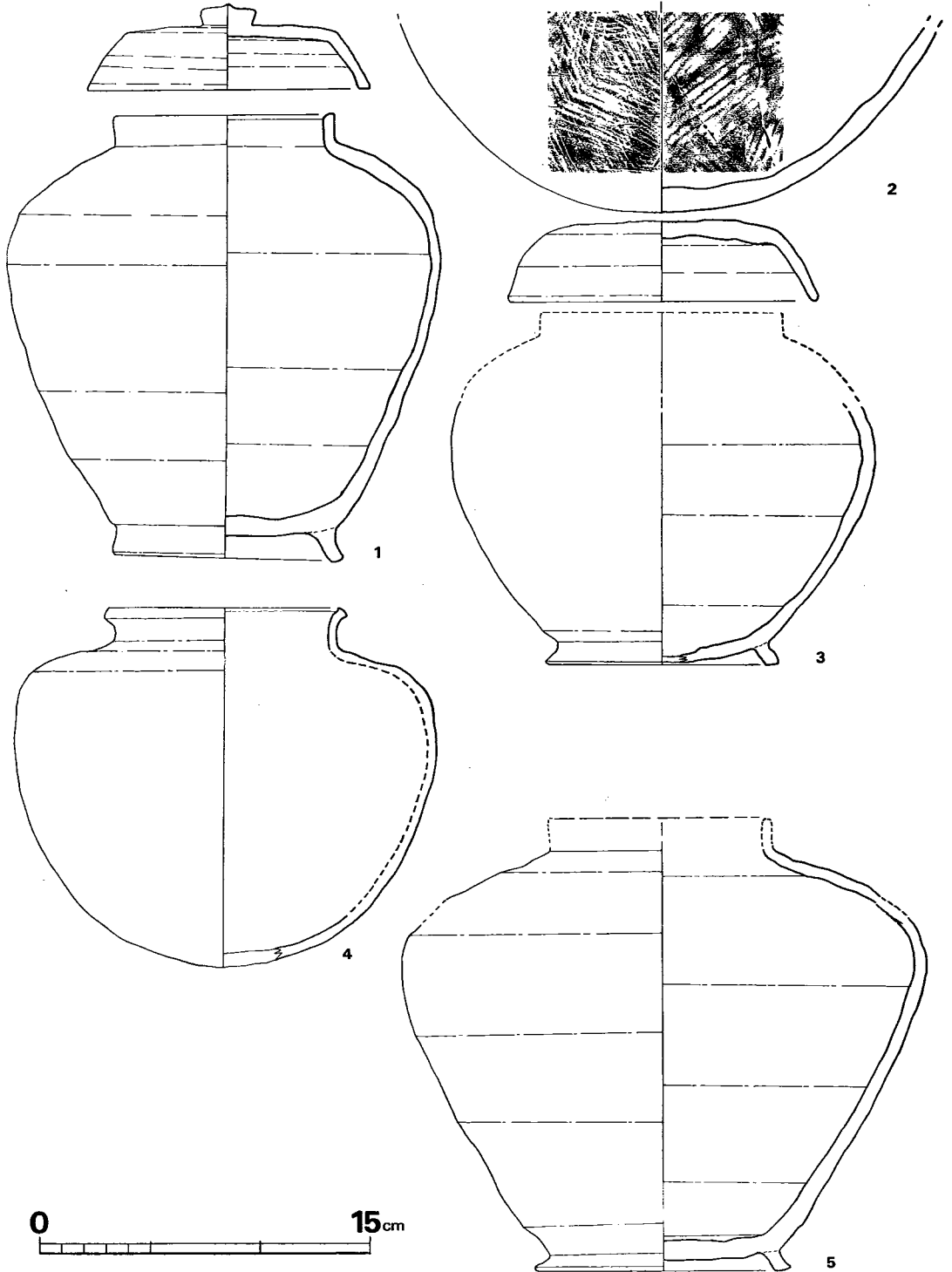


Fig. 44 汐井掛第1号・第2号・第3号・第4号・第5号墳墓出土骨蔵器実測図（縮尺1/3）

台の高さ0.8cmである。

高台は底部貼り付けで底部より大きく外反して下り、端部は外側が少しはねる。底部は平坦で、底部より直線的に最大胴部までのび大きく内反して頸部につづく。口縁部は欠損しているが1cm前後で直立するものであろう。胎土は大・小砂粒、黒色小粒を多く含んでいるが全体的に密であり、焼成は良好で外面の上半は黒灰色で胴部下半は灰色、内面は青灰色を呈している。調整は全体に雑なナデであり、凹凸が目立つ。高台の端部はやや歪んでいて平坦ではなく高台貼り付けの時に器面を整えるためにヘラ削を行なっている。

(2) 遺物

第5号墳墓の墓壇内より銅銭の出土があり、先ず、骨蔵器の底部を取り上げてみると、底部外面にほぼ接して銅銭3枚が重なって出土してありこれをM1とする。M1は3枚で上より萬年通宝で、2枚目3枚目は重なっているので判読できない。

さらに骨蔵器を取り巻くようにM1を中心に四方にほぼ「十字形」に配列して検出さる。北西方をM2、南西方をM3、南東方をM4、北東方をM5とする。

M2は5枚のようであるが1枚目は錆がひどく判読できない。以下重なり合ってこれも判読できない。

M3は5枚が重なっているが、これは一枚一枚剥ぎ取れたので一枚目より和銅開珎、神功開寶、3枚目は錆で判読できず4枚目は神功開寶、5枚目は和銅開珎である。

M4は3枚と思われるが1枚目は遺存が悪く〇〇〇宝だけで2枚目は神功開寶、3枚目は萬年通寶である。

M5は3枚重ねで3枚とも和銅開珎であり、以上M1からM5までの合計は19枚である。

(3) 小 結

汐井掛墳墓群は5基の火葬墳墓より成るもので、いずれも骨蔵器には須恵器の埋容器を用いている。埋葬方法は第1号・第2号・第5号は素掘りの土塚を墓塚としていて埋土には炭、焼土塊などを用いている。第3号・第4号は土塚の内に石を埋めてその上に骨蔵器を置いて周りを囲んでいて一程の石組みともいえる施設を有している。これらに蓋石が存在したかどうかは不明である。

骨蔵器は総て、須恵器であり、又正置法である。蓋のあるものと無いものがあるが、無いものについては当初より無いものかどうかは不明である。骨蔵器には第1号より高台付短頸長胴壺、甕、高台付短頸丸胴壺、短頸壺、高台付短頸長胴壺とがある。

これらの墳墓の内、副葬品が伴うのは第5号墳墓のみで墳塚内より九州では珍しい皇朝十二銭の内、一番目で708年初鑄の和銅開珎3枚以上、2番目で760年初鑄の万年通寶2枚以上、3番目で765年初鑄の神功開寶3枚以上が発見されて、大いに注目される。

各墳墓の年代等については後章Ⅶの考察に詳しいが、第1号墳墓は奈良時代後半、第2号墳墓は奈良時代、第3号墳墓は奈良時代前半、第4号墳墓は奈良時代、第5号墳墓は奈良時代後半も末に近い時期とされよう。

なお、銅銭は現在東京の東京国立文化財研究所に重なって連なっているため一枚一枚剥がして、判読できるように、又錆落しの調査をお願いしてありこの報告書に記載出来ないことを付け加えます。図版等は来年度刊行予定の木棺墓、箱式石棺墓を中心にした汐井掛遺跡の報告書に付篇として報告する予定であります。

PLATES

汐井掛墳墓



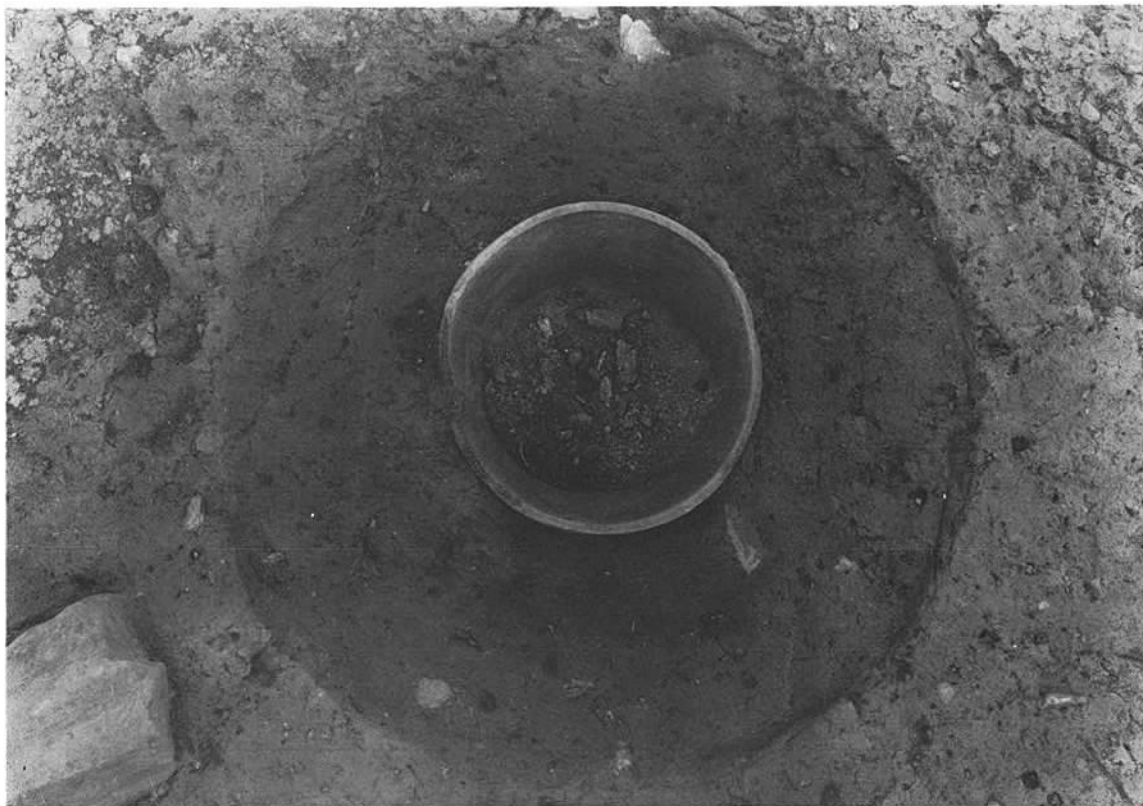
(1) 汐井掛第1号・第2号墳墓の航空写真(北から)



(2) 汐井掛第3号・第4号・第5号墳墓の航空写真(東から)



(1) 汐井掛第1号墳墓の骨藏器出土状況(西から)



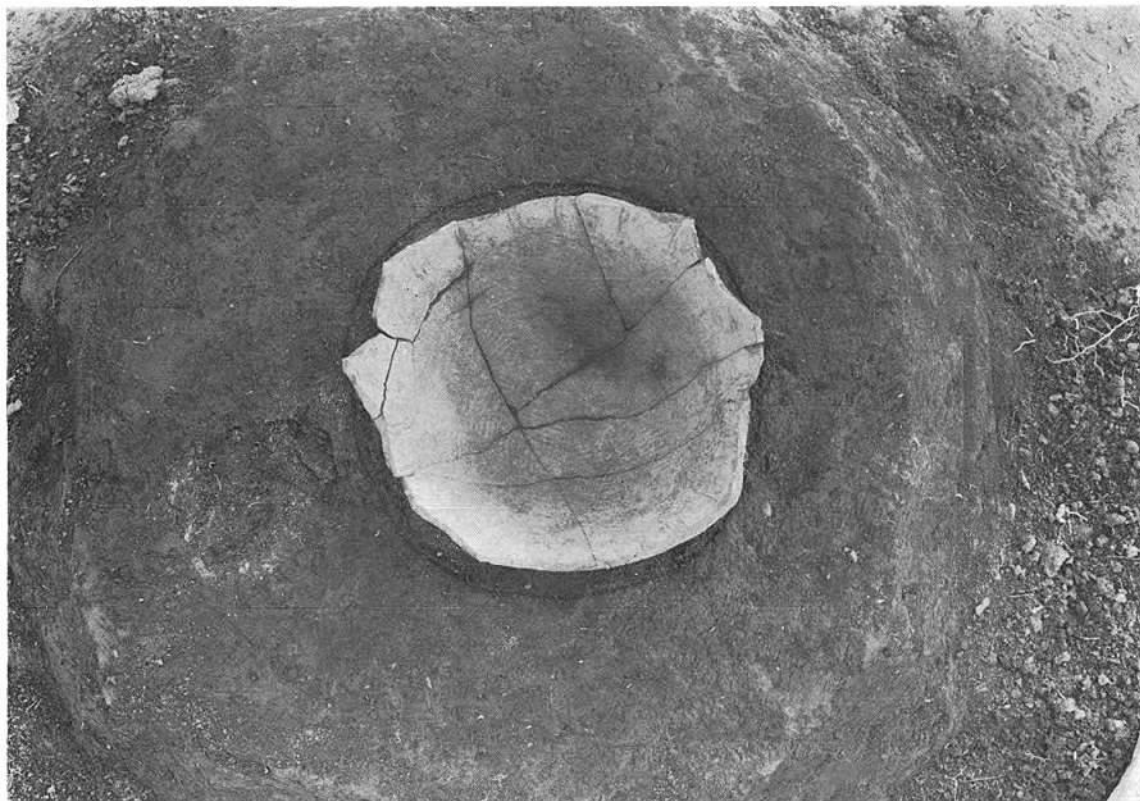
(2) 汐井掛第1号墳墓の骨藏器内火葬骨の状態(北から)



(1) 汐井掛第1号墳墓の墓坑(北から)



(2) 汐井掛第1号墳墓出土骨蔵器



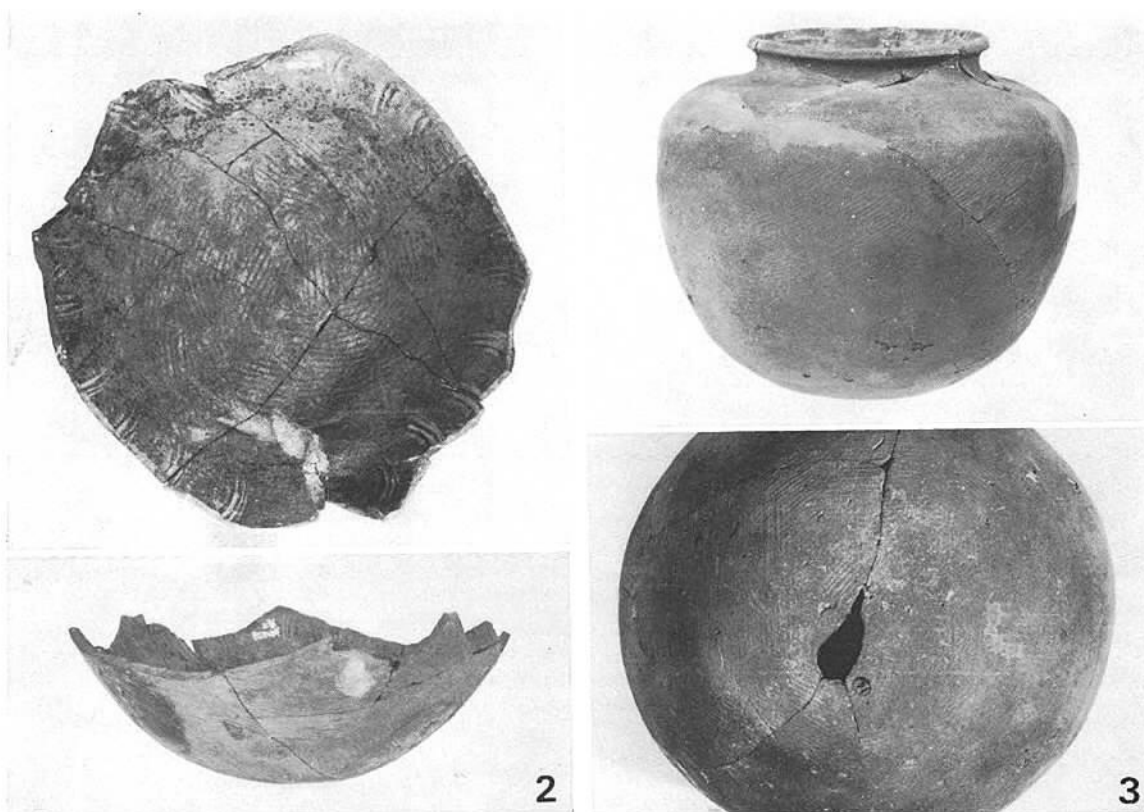
(1) 汐井掛第2号墳墓の骨藏器出土状況(北から)



(2) 汐井掛第2号墳墓の墓坑(北から)



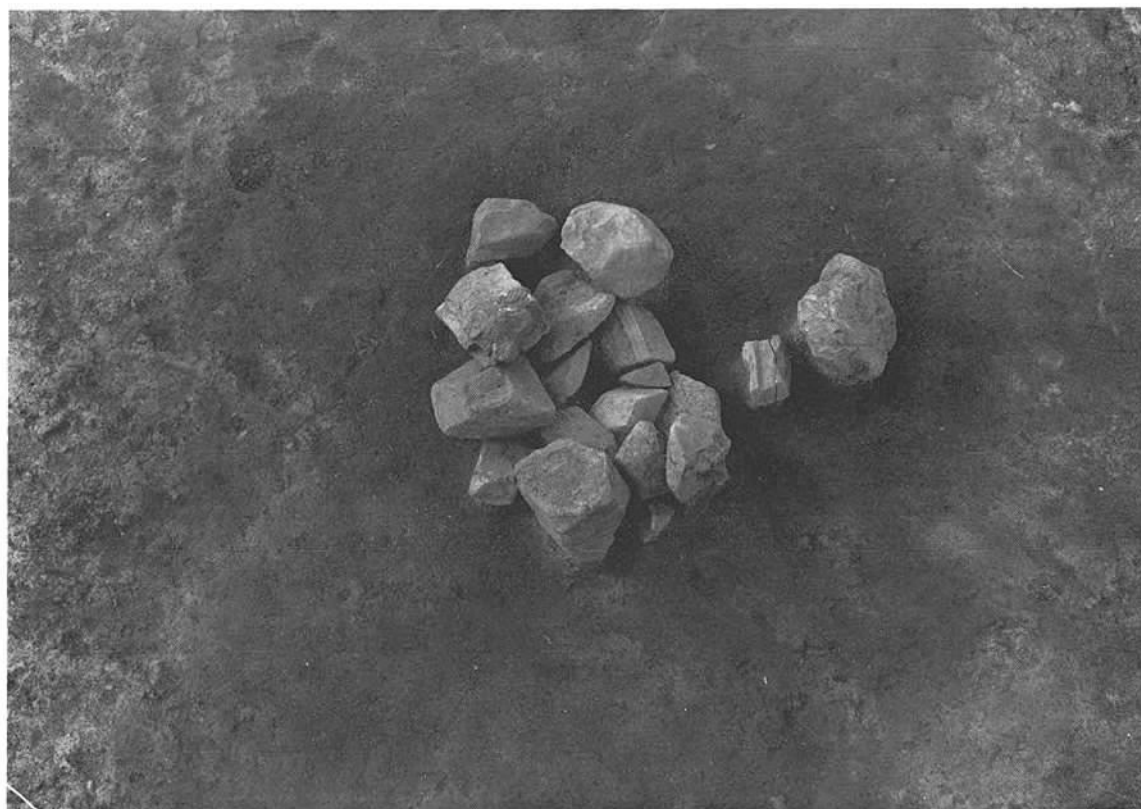
(1) 汐井掛第3号墳墓の骨蔵器出土状況(東から)



(2) 汐井掛第2号・第3号墳墓出土骨蔵器



(1) 汐井掛第4号墳墓の骨蔵器出土状況(北から)



(2) 汐井掛第4号墳墓の埋置石組施設(南から)



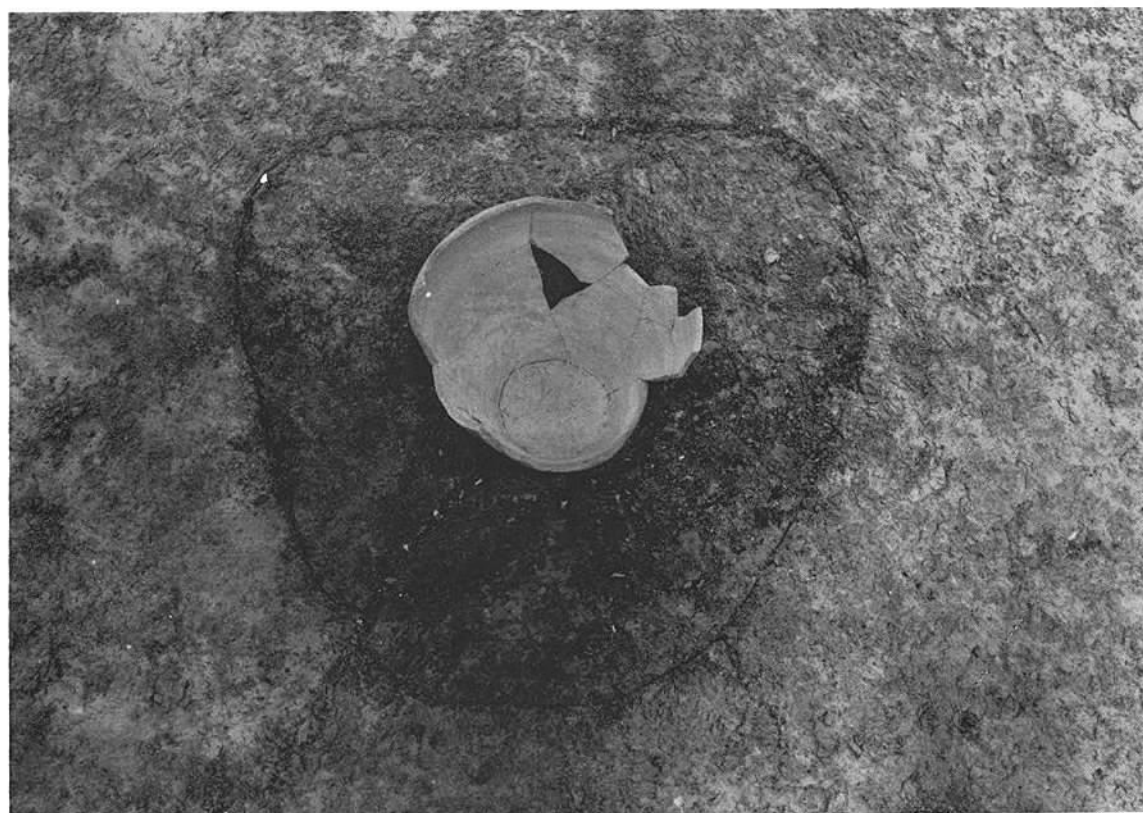
(1) 汐井掛第4号墳墓出土骨藏器



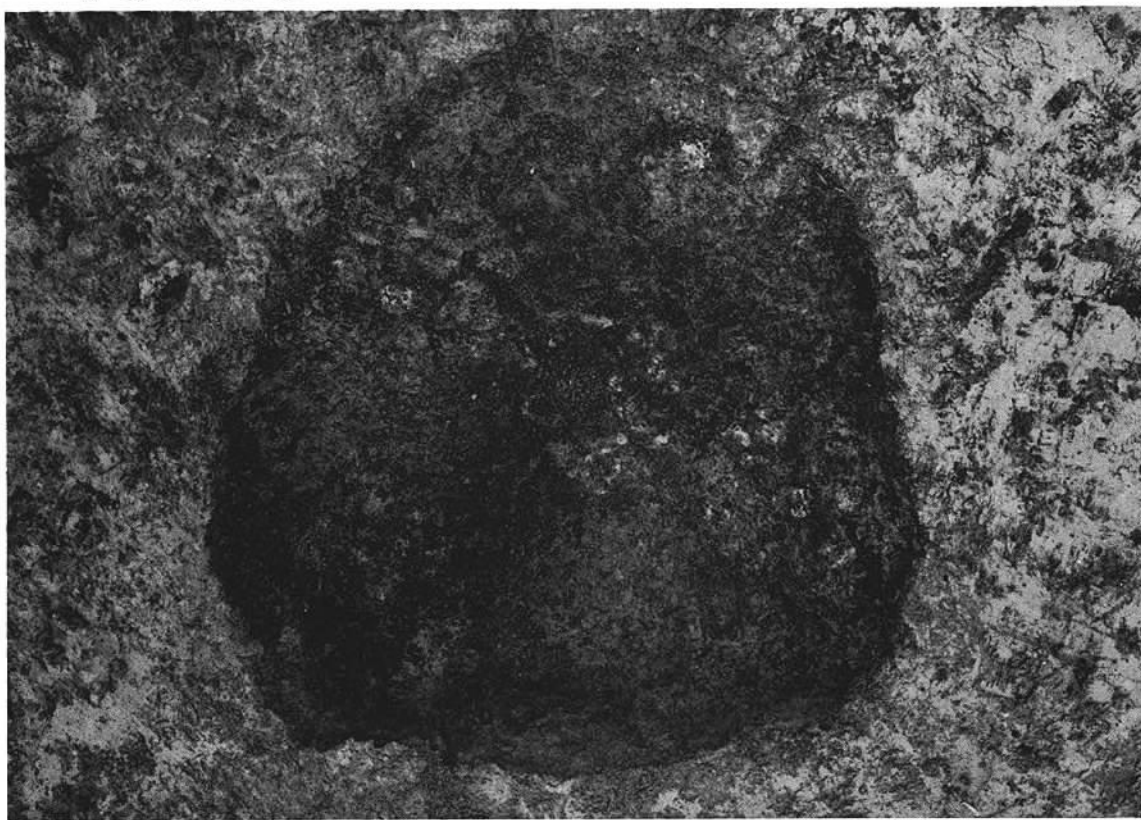
(2) 汐井掛第4号墳墓出土骨藏器の底部穿孔状態



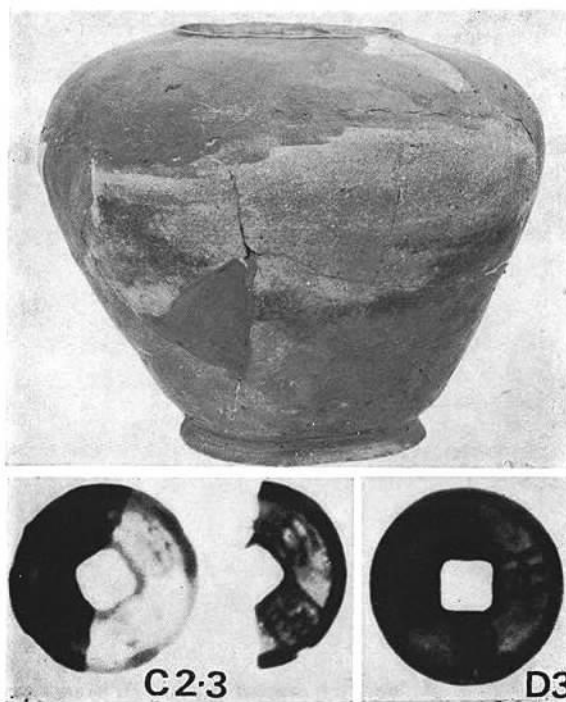
(1) 汐井掛第5号墳墓の骨蔵器出土状況(南から)



(2) 汐井掛第5号墳墓の骨蔵器内火葬骨の状態(南から)



(1) 汐井掛第5号墳墓墓壇内よりの銅銭出土状態(南から)



(2) 汐井掛第5号墳墓出土の銅銭

Ⅵ お わ り に

Ⅶ お わ り に

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査において、筑豊西インター用地内より、数多くの遺構、遺物が発見された。その内でも、新しい時代に属する咲花遺跡・北田遺跡・都地遺跡・汐井掛墳墓の各遺跡について、筑豊西インター内遺跡発掘調査報告全3冊の内1番目として歴史時代をまとめて取り扱い、報告した。そこで、汐井掛墳墓群や、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告Ⅷで報告した柳ヶ谷墳墓・都地原墳墓などの時期を明確にした上で、これらの各遺跡の存在したと想定される若宮町・宮田町の犬鳴川流域の奈良時代について16頁から27頁の若宮町・宮田町内遺跡地名表を見ても遺跡は非常に少ないが、この「くらて」周辺では、これだけまとめて遺構が検出されたのは犬鳴川流域だけであり、あえて少々触れてみたい。

1. 火葬墳墓について

既に、火葬墓でも主に埋容器を伴う墳墓について渋谷忠章氏（大分県教育委員会文化課）と共に「日本各地の墳墓—九州—」『新版仏教考古学講座』第7巻 1975年（昭和50年）9月に発表した^(註1)が、これにはいくつかの誤りがあり又、枚数等に限りもあり、さらにその後新しい発見や資料の発表もあり再度火葬墳墓について考えてみたい。特に不確実な資料であるが、京都国立博物館蔵の伝佐賀県銅製骨蔵器と熊本県出土の二例の墓誌についてもふれてみる。

日本に仏教が伝来したのは538年（一説552年）で、火葬の伝来は675年であって、開始は700年に僧道昭を火葬したのを始まりとする立場をとる。一部、700年以前に「カマド塚」^(註1)の火葬があるが、九州ではまだ発見されていないが、性格的に似ているものは在る。

古墳を見ると仏教的様相を帯びた古墳はなく、僅かに熊本県玉名市の穴観音横穴墓^(註2)において指摘されているぐらいである。九州における終末期古墳の研究は非常に遅れており古墳がいつまで築造され、そしていつまで追葬がなされたかについては現在のところ混沌としている状況である。古墳の使用が早く終了した地域と奈良時代まで追葬が認められる地域とがあるが、これら2つの地域とも、古墳の次に来る墓制については明らかにされておらず、直ちに火葬墳墓でも埋容器墓を当てるしかないのが現状である。

死体を火葬した後、埋葬する時、火葬骨をなんらかの容器に納め（骨蔵器）てそれを埋める場合と、単に火葬骨を、穴（土坑）を掘り直接埋める場合とがある。前者を埋納器墓、後者を土葬の土坑墓と混同しないために、火葬土坑墓と呼ぶ。火葬土坑墓は最近、特に福岡県内では数多く調査され報告されている。

なお、九州地方においては、火葬骨を納める容器を一般に、「蔵骨器」と呼んでいる。しかし、ここでは既に上記『新版仏教考古学講座』で用いた「骨蔵器」をそのまま使用する。それは坂詰秀一「骨蔵器」（『新版仏教考古学講座』第7巻 墳墓）1970年（昭和50年）9月に『骨蔵器ということばは、下道罔勝母の火葬骨を収容していた銅製容器の蓋に鏤刻された墓誌中に「銘 下道罔勝 弟罔頼朝臣 右二人母夫人之骨蔵器 故知後人明不可移破」「以和銅元年歲次戊申十一月廿七日己酉戌」と見えている。この資料によってここでは骨蔵器との用語を採ることとした。』による。この報告書では、総てこのことより「骨蔵器」を用いる。

(1) 墳墓の立地

古墳時代の古墳の立地は概略前期の古墳が丘陵頂部に位置するのに対し、後期は丘陵斜面や平野部にかけて数多く営まれるようになり、さらに終末期になると古墳はさらに丘陵斜面でも一番低い下位に位置するようになる。

火葬墳墓でも埋納器墓で、汐井掛墳墓の場合は Fig. 45 のように丘陵頂部よりやや下位の所謂九合目から八合目にかけての斜面上に位置する。若宮町内の茶臼山墳墓や、都地原墳墓、柳ヶ谷墳墓など似たような状況であり、ただ汐井掛第5号墳墓だけが丘陵斜面でもかなり下位に位置している。（各墳墓の註は Tab. 22の文献によらるたい。）

他の地域の埋納器墓について見ると墳墓の数が多い割には立地・位置等について報告されているものが少ないが、報告されているものを見るとやはり山頂や丘陵鞍部や平地などはなく、ほとんどが丘陵頂部よりやや下の周辺であり、例外として古墳・横穴墓を利用したものがあるが、丘陵斜面は古墳と同じように非常に展望の良い場所を選んでいる。

この丘陵頂部のやや下位周辺の選地・立地については既にいくつかの説が発表されているが、久保常晴氏^(註3)は墳墓の選地（平面的）を（A）一族の墓地、（B）交通に関係あるところ、（C）官衙に関係あるところ、（D）寺社の境内、あるいはその周辺。とされ、墳墓の立地（垂直的）については、斉藤忠氏の風水思想に基づく選地で丘陵先端あるいは斜面にあって、平野と川を臨む場所が多い、と紹介されている。やはり、古墳と同じような理由と思われる。それに、火葬墓の場合に付け加えなければならないのは、火葬場＝墓地の場合がいくつか検出されており、火葬する時の燃料の薪が問題となる。佐賀県の稲佐墳墓と、大分県の新田墳墓は火葬場即墳墓の例であるが、これらは墓坑内にかなり多量の灰や焼土が堆積しており、多くの薪を必要としたことが窺える。このように、薪が多量に見出されるのは丘陵地帯が一番手取り早く、又、火葬に適した場所でもあろう。

しかし、多くの場合は火葬場所即墳墓ではないものが圧倒的であり、一概には言えないようである。



Fig.45 沙井掛墳墓・都地原墳墓・柳ヶ谷墳墓地形図(縮尺 1/2,500)

これら九州における各墳墓の実態について、更に一層具体的にしてそれら各墳墓の所在・立地について検討しなければならないだろう。

(2) 骨蔵器と外容器

A 埋葬施設

骨蔵器を埋納する方法として種々の施設が見られるが、九州におけるこれらの埋葬施設を見ると、I—墓塚（石室）+外容器+骨蔵器，II—墓塚石室（組）+骨蔵器，III—敷石+骨蔵器，IV—墓塚+骨蔵器，V—石窟+骨蔵器，VI—古墳（石室内）・横穴墓+骨蔵器，などがあり，II，IIIはさらに墓塚内に，石室・敷石が在る場合 a と，ない場合 b とがある。

これらの施設は墓標などがなく単独に存在するケースが多いが，内には周溝を有して低い墳丘を持ち，その墳丘内に骨蔵器が埋納されている墳丘墓もある。

汐井掛墳墓を見ると，第1号，第2号，第5号墳墓はIVに，第3号，第4号はII—aである。茶臼山墳墓はIII—b？，都地原墳墓は総てIVに，柳ヶ谷墳墓もIVであり，若宮町内の墳墓ではIVが多くみられる。

他の地域でもIVが多く，I，V，VIは数例あるのみで，II，IIIも量的には少ない。

骨蔵器を直接に墓塚や石室に埋葬するのではなく，まず何かの容器に入れて，それを埋葬する例が九州でも発見されている。骨蔵器を納めた外容器として有名なものに，福岡県宮地嶽神社境内墳墓の銅製外容器があり，さらに陶製鉢が上下にあって銅製外容器を覆っており，二重の外容器を有する珍しい例でもある。銅製外容器は上下二つよりなる。他に鹿児島県嘉例川墳墓軽石製外容器等がある。

B 骨蔵器の種類

骨蔵器には，A—ガラス製，B—窯製，イ須恵器，ロ土師器，ハ陶磁器，ニ陶器，ホ瓦器，C—石製，D—木製がある。なお木製は，木質そのものが遺存した例は九州にはないが，畿内では木櫃が現存しており，骨蔵器に木製のものが存在したことは十分考えられる。さらに，伝佐賀県出土として京都国立博物館蔵に，銅製の骨蔵器がある。これを入れると，E—金属製が加わる。Fig. 47から Fig. 52 は九州出土の骨蔵器を各報告書より，機械的に4分の1に統一したものを更に2分の1して，できあがりをも8分の1にして転載したものである。一つ一つ出典をあげないので，それはTab. 22の九州地方火葬墳墓一覧表の文献欄を見られたい。又，8分の1に統一したため原図を転載できなく，形態を主にトレースしたので，一部原図と違う点をご容赦願いたい。

a ガラス製

ガラス製は，福岡県宮地嶽神社境内墳墓一例のみで，国内でも，奈良県宇陀郡内牧村大字八滝の文祢麻呂墓骨蔵器の二例のみであり，宮地嶽神社境内墳墓のガラス製骨蔵器については，

いくつかの論文が発表されている。

b 窯 製

窯製にはイ須恵器，ロ土師器，ハ陶磁器，ニ陶器，ホ瓦器とがある。これらの内には，イとロなどが蓋と身として組みあっている場合もある。

イ 須恵器 形態により，次のように分類する。1—把手付胴張り壺，2—短頸壺，3—凸帯付胴張り壺，4—瓶子形壺，5—甕形，6—鉄鉢形，7—球形壺，8—円筒形土器，9—その他とする。

1 把手付短頸壺 福岡県筑紫野市結浦墳墓出土のもので，九州ではこれ一点のみである。又，この把手付短頸壺は他の遺跡でも発見数が少なく，佐賀県東十郎古墳群より2点出土して^(註4)いて，九州では珍しい器形である。

2 短頸壺 正倉院^(註5)に菓の容器として用いられていることより，菓壺と呼ばれているもので，つまみ付きの蓋がともなうことが多い。骨蔵器としての身に用いられ，数多くみられる。底部に高台が付くものがほとんどで，肩部の高低，胴部の張り具合や高台の形などで，新旧の特徴があるようであり，以下a～fの種類に細分する。

2—a 短頸壺 高台が付き，底部より大きく丸くのび，器高のほぼ2分の1近くに，ゆるやかに丸い最大径がある。水平に近いくらい低く肩部へと続き，口径は高台径とほぼ同じ，口頸部は直立する。器高より最大胴部が大きく，底部は平底である。蓋は宝珠形つまみ付きの坏蓋がつく。これには福岡県若宮町柳ヶ谷墳墓がある。

2—b 短頸球胴壺 高台が付き，胴部は丸く球形で，最大胴部は器高の3分の2よりやや下にあり，高台径と口径とが同じか又は，口径の方が大きいものであり，底部は丸底である。器高より最大胴部の方が大きい。蓋はつまみ付きの坏蓋や坏，壘が付く。これには福岡県若宮町の金丸・茶臼山墳墓等がある。

2—c 短頸肩張り球胴壺 器高と最大胴部径は胴部径の方が大きく，底部より最大胴部まで丸く球形に立ちあがり，肩部が水平に近いものであり，肩部に特徴のある壺をいう。これには大分県山本第1号墳墓などがある。

2—d 短頸丸胴壺 器高と最大胴部径がほぼ同じで，胴部が丸いものである。高台が付き，高台端部が外反してはねるものが多く，底部より胴部へ丸くのび，胴部も，口頸部にかけて丸く続く。口頸部はやや外反して立ちあがる。最大胴部は器高の3分の2よりやや下位にくる。これには福岡県太宰府町内山墳墓や，佐賀県唐津市楼崎墳墓などがある。

2—e 短頸長胴壺 2—bに比べて胴部が長く，器高の方が胴部最大径より大きいもので，高台は太く，しっかりしたもので，底部より直線的に最大胴部に続き，最大胴部は器高の3分の2よりやや上位にある。口頸部へは丸く続き，口頸部は短かく直立している。底部は平底である。これには福岡県若宮町汐井掛第1号墳墓がある。

2-f 短頸くの字胴壺 2-bの短頸球胴壺と2-cの短頸長胴壺の中間的形態で、高台が付き、最大胴部へ直線的に伸びたものが肩部へ「くの字」状に曲がり、最大胴部は器高の3分の2よりやや上と、2分の1位にくるものがある。口頸部は短くやや外反して立ちあがる。器高が最大胴部より大きく、底部は平底である。これには佐賀県三日月町東分第1号墳墓などがある。

3 凸帯付胴張り壺 高台付きで、最大胴部が「くの字」形になり強く曲り、そこに三角形の凸帯が付き、肩部にも一条の凸帯が付く、頸部は打ち欠きである。これには福岡県夜須町八並墳墓、同県久留米市西谷墳墓、熊本県城南町阿高墳墓、御船町長塚古墳周溝墳墓と同町埴山古墳北墳墓、鹿児島県菱刈町荒瀬墳墓の例のみである。この形態の壺は九州でも他の遺跡より出土したものも少なく、福岡県内では上記2例の外に福岡市西区有田(3次-31画区)遺跡^(註6)太宰府町大宰府学校院跡の井戸^(註7)、同町御笠川南条坊遺跡S K 546土壇^(註8)、同町向佐野大字前田^(註9)、甘木市野田柿原D区6号竪穴^(註10)、八女市管の谷1号窯跡^(註11)、瀬高町大道端遺跡B区第1号溝^(註12)、熊本県内では上記以外に城南町益城国衙推定地などであり、これらの内、完形品は1つもなく、頸部が今まで出土していなかったが、大道端遺跡で初めて知ることができた。

4 瓶子形壺 これには丸胴壺と長胴壺とがあり、長胴壺には把手(耳)の付くものと付かないものがある。さらに瓶子形壺の口頸には二重口縁を呈するものもある。

4-a 瓶子形長胴壺 把手の付かないものをaとする。底部は平底で高台は付かないものがほとんどであり、内には上げ底もある。底部より直線的にのびるものとやや丸味をもつものがあり、最大胴部の肩部も強く曲折するものと丸味をもつものがある。口頸部は打ち欠きが多い。この例は非常に多く九州の全域にみられるようである。

4-b 把手付瓶子形長胴壺 4-aに把手が付いたもので双耳壺が多いようである。この例に福岡県若宮町宮永墳墓などがある。

4-c 瓶子形丸胴壺 高台が付き、胴部は丸く頸部は打ち欠きである。この例は今のところ福岡県若宮町出土のものだけのようである。丸胴壺としたが球形壺である可能性が高い。

5 甕 甕形土器を骨蔵器にしたもので、器高25cm前後のものが多く、須恵器の蓋を伴うものもある。この例に福岡県若宮町都地原第1号墳墓、同県宮田町汐井掛第2号墳墓などがある。

6 鉄鉢形 福岡県三輪町楠墳墓のみ1点である。底部はやや尖り口縁部へのび、口縁端部はやや内反する。この鉄鉢形は九州では他の遺跡より出土例が少なく、福岡県福岡市東区の高々良込田遺跡の4号溝より2点^(註14)が短頸壺などと出土している。

7 球形壺 熊本県城南町火葬場裏古墳北墳墓出土のもので、低い小さな径の高台が付き、胴部は球形を呈していて口頸部はない。

8 円筒形 熊本県城南町沈目墳墓出土のもので、底部は平たくやや外反して胴部へのび、胴部よりわずかに内反して口縁端部につづく、底径と、口径とが同じで、最大胴部はやや大き

い。

9 その他 骨蔵器とされないが、福岡県若宮町都地原第4号墳墓の坏がある。これは火葬骨は墓壇内に納めた後、その上に蓋として覆っていたものである。

□ 土師器 数は少ないが、いくつかの器形のものが用いられていて、1—甕、2—壺、3—皿、4—鉄鉢形、5—その他である。

1 甕 福岡県若宮町都地原第3号墳墓のもので、器高20.2cm、口径22.5cmの大きさでありこの甕は底部打ち欠きである。鹿児島県川内市屋形原墳墓の骨蔵器は同形の土師器甕を身・蓋に使用している。器高23.3cm、口径29cmである。

2 壺 福岡県久留米市西谷墳墓より、4基の土師器が検出されている。その内二つは壺形土器である。鹿児島県菱刈町小川添第2号墳墓の骨蔵器は、土師器の壺を中央にして上・下2つの坏を外容器としている。

3 皿 長崎県島原市礪石原墳墓の骨蔵器は土師器皿の盛皿形で、下甕に須恵器の壺、その内に土師器皿があり、上甕には土師器壺を覆せている。

4 鉄鉢形 福岡県久留米市西谷第2号墳墓の骨蔵器は鉄鉢形で、丸底の底部に小孔を穿っているという。

5 その他 福岡県久留米市西谷墳墓では、甕と片口の深鉢形土器を骨蔵器にしている。

ハ 陶磁器 福岡県内と他に大分県、熊本県で若干出土しているが、1—青磁、2—青白磁、3—褐釉陶器 4—施釉陶器がある。

1 青磁 越州窯の青磁骨蔵器が福岡県久留米市西谷第1号墳墓にある。これは身が長胴壺で、蓋は碗である。身は器高28.5cm、口径14.0cmで、蓋は器高5.7cm、口径16.4cmである。福岡県太宰府町立明寺の鍔形獸脚付壺は出土状況が不明であり骨蔵器とは直ちにできないが藤沢一夫氏が指摘されたように骨蔵器とみたい。

2 青白磁 福岡県太宰府町横岳墳墓と同県北九州市椎木山第15—1号墳墓のもので、横岳は四耳壺で口頸部打ち欠き、蓋に碗が覆る。椎木山15号第1主体部は胴部の最大より口径部打ち欠きである。水注の可能性が強いという。鹿児島県志布志町山宮神社墳墓は四耳付壺である。

3 褐釉陶器 福岡県朝倉町花園山墳墓、同県添田町英彦山と前記椎木山第14号、第15—2号墳墓のものである。花園山は長胴壺であり、椎木山第14号は長胴壺で底部を欠く。第15号第2の主体部は水注の完形品である。器高は21.9cmを測る。英彦山のもは四耳壺で蓋は滑石製である。

4 施釉陶器 福岡県久留米市永勝寺のもので、骨蔵器の身は施釉四耳付短頸壺、蓋は白磁碗である。身は器高26cm、口径13cmの平底である。

ニ 陶器 大分県佐伯市古市第8号墳墓の古瀬戸と宮崎県新富町越ノ馬場墳墓は常滑である。古市第8号は瓶子形長胴壺で口頸部打ち欠きで器高28.8cmであり、蓋は凝灰岩の相輪片で

ある。越ノ馬場は壺で口縁部は外に曲り下っている。

ホ 瓦器（質） 須恵器系瓦質なども含めて瓦質土器のものがいくつか点在する。福岡県北九州市椎木山第13号・第22号墳墓の骨蔵器は瓦質の壺である。第13号は器高20.8cm, 口径14.5cm。第22号は器高19.9cm, 口径14cmである。大分県佐伯市古市第2号, 第3号, 第5号, 第9号墳墓も瓦質のものであり, 第2号は二耳付壺で器高17.7cm, 口径8.3cmである。熊本県城南町尾窪第1号, 第2号墳墓は共に瓦器（須恵器系瓦質）の広口壺であり, 第2号は器高25.0cm, 口径16cmで底部は平底であり, 穿孔されている。同県同町の山ノ神墳墓にも瓦器質のものがある。鹿児島県内では大口市川西墳墓の瓦質広口壺があり上記尾窪と同じ形態のものである。

C 石製 石製の骨蔵器は, 出土例が少なく2例のみである。

福岡県二丈町唐原墳墓は滑石製であり, これは糸島郡前原町の支登支石墓収蔵庫へ展示してある。

鹿児島県大口市斧トキ第1号墳墓は三島格氏の大口市針持田原と同一で斧トキが正しいといひ, 軽石製で蓋も軽石製が存在したという。蓋と身は挿入式で身に削り出しが付いている。

なお, 骨蔵器の蓋が石製というのもいくつかある。熊本県菊水町江田墳墓の骨蔵器身は瓦器質の長胴壺で蓋は凝灰岩片である。鹿児島県大隅町鳥居段第1号墳墓のものは傘形で, 同県加世田市杉本寺墳墓の蓋も軽石製である。

D 木製 木質が遺存している例は九州では確認されていないが埋葬状況などからして木製骨蔵器（木櫃）と考えられる例がいくつかある。福岡県久留米市西谷墳墓では第4号, 第5号がそれで第4号は墓坑内に床石を敷き, 側石を立て石室としている。天井に2個の石を置いて蓋石としている。石室は約20cm×20cmであり, 天井石が埋葬時から比べて沈んだものようであるという。第5号も同じような状況で石室の大きさは15cm×15cmである。西谷火葬墳墓はかなりまとまった状態で検出されておりいずれも骨蔵器を伴っていて, この二基のみが石室があるにもかかわらず骨蔵器が存在しないこと。天井石がいずれも落込んでいゝなどから木製の容器を想定されている。

同県筑紫野市野田墳墓は正式報告書が刊行されていないが, 丘陵上に平均7~8mの方形で低い墳丘を有し, 周溝が在る墳丘墓が13基発見されされいくつか調査されている。第9号は一辺7.0~6.8m, 高さ0.8mで, 周溝は幅1.2~0.7m, 深さ0.6mで, ただし一辺の中央部に溝でないところがあり橋を呈している。墳丘内には7ヶ所のほぼ30cm方形墓坑がありその内に火葬骨が認められ, これは木製容器が存在したものと想定されている。なお, 周溝内より三ヶ所に集中して土師器が出土している。

これに似ている例として同県同市筑紫墳墓がありかなり墳丘墓が群集してあり墳丘内には木製骨蔵器の存在を伺わせる主体部が在る。

福岡県若宮町都地原第5号墳墓も木製骨蔵器の存在と思わせるものであり, 21cm×21cmの正

方形の墓塚のみが検出されたのでおそらく木製の埋納器を使用したと思われる。

E 金属製 京都国立博物館蔵の伝佐賀県の鑄銅製品がある。身・蓋共に球形で、蓋と身が半球形に分れている。銅製には合子形、壺形、深鉢形、円筒形、櫃形など多様であるが、この球形には奈良県北葛城郡二上村穴虫の威奈大村墳墓の骨蔵器が在るのみで、この威奈大村の球形は身と蓋が印籠蓋式に対して伝佐賀県は身のみ合せ目の合欠きがあるものである。器高23cm、口径23.1cmであり、身には高台が付く。

骨蔵器の身は以上のようなものが在るが、蓋については上記以外の変ったものが転用されている例がいくつかある。石製については石製容器の項で述べたので欠く。

宮崎県都城市マツラ迫墳墓では須恵器の身に胡州鏡が蓋として転用されていたと思われ、六花鏡で毛彫で承安五年(1175年)銘がある。又同県えびの市蓮華寺跡墳墓では須恵質の身に銅製仏餉鉢が蓋として用いられている。

(3) 副葬品

火葬墳墓に伴う副葬品は、弥生時代や古墳時代のお墓と違って副葬品を伴う例は非常に少ない。特に火葬土塚墓に伴う副葬品は数少く土師器がほとんどである。ここでも埋納器墓について分類してみるとA—墓誌、B—銅製品、C—鉄製品、D—土器、E—その他がある。

(A) 墓誌

我が国において現在確実に墓誌とされているものは15例で、これ以外に墓誌と考えられるものに熊本県菊水町出土の日置部公墓誌と奈良県大沢村出土の揚貴氏墓誌があり、さらに不確実なものに墳墓から出土する鉄板や骨蔵器などにみられる墨書かへら書き等がある。

九州では確実に墓誌とされるものは存在しないが、上記の日置部公墓誌と熊本県旭志村出土の鉄板がある。墨書土器とへら書き土器については副葬品の項で述べる。

a 日置部公墓誌 熊本県玉名郡菊水町瀬川字鶯原出土で現品は埋め戻されて現在では見ることができない。銅板2枚をあわせそのうち一枚の内面に銘文が墨書きしてあったらしいが全文は解読されていない。出土状況は骨塚之内より江戸時代の1794年(寛政6年)に掘出されたものであるという。銅板はたて一尺2寸余(約40cm)よこ八寸余(26.4cm)の二板合せであり、彫刻して銘は 開白七道西海通太宰府 玉名郡人権擬少領 外少初位下日置部公 また治地高野山。と銘記されていると伝えられている。この日置部については井上辰雄『火の国』1970年(昭和45年)10月に詳しい。

b 狐塚の鉄板 熊本県菊池郡旭志村麓字狐塚出土のもので、昭和36年開墾中に出土した。「表土より約40cm下に口縁約80cmの摺鉢形を呈する墓塚があり深さ約60cmである。墓塚底面に木炭末を敷き骨蔵器を納め、その東側に墓誌碑を並べ置き、更に墓塚内に木炭末をつめ、その

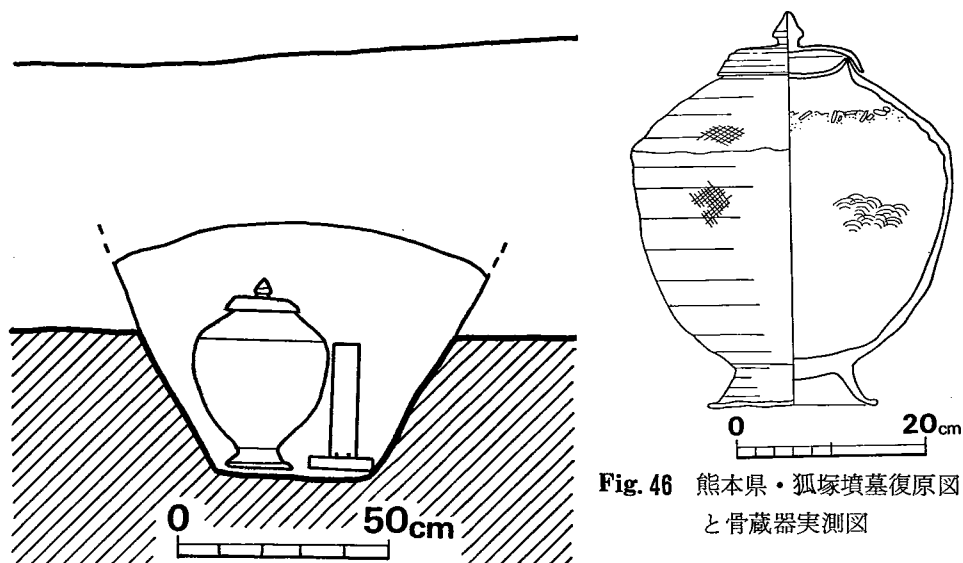


Fig. 46 熊本県・狐塚墳墓復原図
と骨蔵器実測図

上に盛土をしている。(Fig. 46)

骨蔵器は須恵器製の高台付の短頸壺で蓋は宝珠形つまみ付きである。なお、土師器坏が中蓋のような状態で身の須恵器壺の口頸部に底部を下に、口縁部を壺の口縁端部に掛けた状態で出土している。

墓誌牌は木製の台に座金具の脚を挿入して固定し、座金具の端を上にして挟みのなかに墓誌板を挟み立てたものである。鉄製の板状で高さ約28.5cm、厚さ0.3mmで、鉄板の錆で墓誌銘文は判読できない。

座金具は幅2.3cm、長さ6.3cm、厚さ0.83cmで、鉄板の両端をほぼ三等分して1.5cmの切込みを施し、中央を下に曲げて木製台に挿入して固定し、外側の両方を上に立てて挟みとして墓誌板を挟み立てたものである。」とある。

(B) 銅製品

これにはA—銅銭、B—銅鏡がある。

A 銅銭 皇朝十二銭の内のいくつかを副葬している例があり、1—和銅開珎、2—万年通寶、3—神功開寶、4—富寿神寶、5—その他がある。参考のため汐井掛第5号墳墓より出土した銅銭類の出土一覧表を Tab. 23 に示した。

1 和銅開珎（708年初鑄）古くは江戸時代に発見された、福岡県久留米市高良内町杉谷の杉谷墳墓より、須恵器の骨蔵器の内に和銅開珎一枚が副葬されていたようである。これは、現品は所在不明であるが、矢野一貞『埴厚遺物縮図』1852年（嘉永5年）に須恵器の埴の図に添えて説明文があるといい、その説明文によるものである。

福岡県筑紫野市京町字結浦の結浦墳墓より2枚+ α が出土している。大宰府郭内が一望で

きる丘陵の西南斜面に位置していて、1946年（昭和21年）頃に発見された。骨蔵器は墓壇内に須恵器の把手付胴張り壺が身で、蓋は須恵器のつまみ付きの坏が正置法で埋納してある。銅銭は骨蔵器内より発見され、合計7枚あったというが、現存するのは2枚で、共に和同開珎であるから、他の5枚もそうであろうと思われるが破棄されたようである。

福岡県鞍手郡宮田町上有木の本報告書Ⅵ章汐井掛第5号墳墓は Fig. 43 のように、墓壇内の5ヶ所より銅銭が出土しており、その内に和同開珎は5枚+αある。

2 万年通寶（760年初鑄）本報告書の汐井掛第5号墳墓より2枚+αが出土している。

3 神功開寶（765年初鑄）本報告書の汐井掛第5号墳墓より5枚+αが出土している。

4 富寿神寶（818年初鑄）福岡県大牟田市の大間山墳墓は、報告書が刊行されていないので、詳細は判明しないが富寿神寶が出土したという。

5 その他 大分県中津市相原の骨蔵器の下に、古銭1枚が敷かれてあったと伝えられる。

B 銅鏡 鹿児島県揖宿郡山川町福元墳墓より、銅鏡が出土している。

(C) 鉄製品

量的には少ないが、1—刀子、2—鑷子がある。

a 刀子 鉄製刀子が何点かあり、福岡県鞍手郡若宮町柳ヶ谷墳墓では、須恵器の骨蔵器内に火葬骨が充満していて、その中程に刀子1が検出される。

長崎県島原市三会礫石原第2号の骨蔵器は、須恵器壺の内に土師器皿があり、蓋は土師器である。壺内には刀子が納められていて、小刀状の鉄製である。全長12cm、幅1cm弱である。

熊本県八代市東片町の田平山第2号墳墓は須恵器の骨蔵器内に刀子1本が副葬されていて、全長14cm、幅1.6cmを測る。

鹿児島県曾於郡志布志町山宮神社墳墓よりは刀が出土しているようである。

b 鑷子 富寿神寶が出土した福岡県大牟田市の大間山墳墓より出土したとのことであるが、大間山墳墓は13基ほどあり、富寿神寶と共伴したかどうかは分らない。

熊本県八代郡宮原町立神字下溝口墳墓ではピンセット状鉄器が出土しており、これは鑷子と思われる。

鹿児島県伊佐郡菱刈町本城荒瀬墳墓では、須恵質の凸帯付胴張り壺の内に、タカラガイと共に銅製品2片が出土しており、銅製品は一個の鑷子とされている。鑷子については、この荒瀬墳墓の文献に詳しい。

古墳時代のみの鑷子については、石山勲「乙植木古墳群の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告一X一』1977年（昭和52年）3月に詳しいので参照されたい。

(D) 土器

土器の副葬も、何例かしかなく、A—土師器、B—陶磁器がある。

a 土師器 福岡県久留米市西谷第5号墳墓の石室内より、土師器坏・壺が出土している。

この墳墓の骨蔵器は木製容器と考えられていて、器内か器外かは不明である。

福岡県筑紫野市野田第9号墳墓は周溝を有する墳丘墓で、周溝内より土師器類が出土して、副葬品とされよう。

b 陶磁器 熊本県玉名郡菊水町江田の若宮古墳裾近くから発見された墳墓は、骨蔵器は瓦器質の壺で、蓋は凝灰質の石片2個である。これらは墓壇内に埋納してあるが、石蓋の横から磁器碗が出土している。

(E) 骨製筭

熊本県下益城郡城南町阿高墳墓より出土したものである。骨蔵器は墓壇内に須恵器身と土師器蓋があり、骨製品の四片は筭とされ、全長復元で16.5cmである。材質は判明しないようである。おそらく、着装のまま火葬されたのであると考えられているので、副葬品とは言えないかもしれないが、紹介しておく。

(F) その他

副葬品の特殊品とも言えるものに、a—金環・b—貝とc—土製品がある。

a 金環 古銭が出土した、大分県中津市相原墳墓で、骨蔵器内に1個出土したようである古銭と共に現在不明であるという。

b 貝 鑷子と共に、鹿児島県伊佐郡菱刈町本城荒瀬の骨蔵器内よりタカラガイ1個が出土している。そのタカラガイについては、荒瀬墳墓を報告された三島格氏の『貝をめぐる考古学』1977年（昭和52年）3月に詳しい。

c 土製品 熊本県熊本市蚕業試験所墳墓や、鹿児島県塞ノ神・津栗野・岡野墳墓より人形・馬形土製品が出土している。

(4) 墨書土器、ヘラ書き土器について

骨蔵器の身・蓋副葬品に墨で文字を書いた墨書土器と、ヘラ状工具により文字を書いた土器が、何点か出土している。

(A) 墨書土器

長崎県島原市三会礫石原第2号墳墓は皿形で、土師器の皿に火葬骨を盛って、それが須恵器壺の内に納まり、土師器壺を蓋としている。土師器皿の底部外面に「大弓」と墨書きがされている。鹿児島県牧墳墓では副葬品の坏に「大」の字、同県大迫墳墓では蓋と副葬品の土師器坏に「盈」の字がみられる。

(B) ヘラ書き土器

佐賀県佐賀郡大和町川上字小隈第2号墳墓は、須恵質壺が身で蓋は土師質であり、身の壺の底部外面に「大」の字がみられる。

熊本県八代市東片町田平山第5号墳墓の須恵器骨蔵器の底部に近い内面には「松」の字がある。

(5) 火葬墳墓の年代について

これまでに九州地方出土の火葬墳墓でも骨蔵器を伴う埋納器墓の特徴などについて述べてきたが、これらの年代について考えてみたい。

A 埋納器墓の年代

埋納器としての骨蔵器やそれに伴う副葬品により時期を推定するが、いちばん確実なものは年記銘の墓誌によりその年代を求むればよいが、九州には「墓誌」の項のように年記銘を有するものはない。そこで骨蔵器では須恵器が多く、ついで、土師器があり、陶磁器が続いているので、須恵器と特殊品についてみていく。

九州における歴史時代の土器研究も最近特に進んでいて須恵器、土師器、陶磁器、瓦器など研究が盛んに行なわれている。それらの内には骨蔵器と同形の土器も発見されているので、それらを参考にして試案としたい。

a ガラス製

福岡県宗像郡津屋崎町宮地嶽神社境内出土のもの1点であり、国内でも他に1例を数えるのみで奈良県宇陀郡内牧村大字八滝出土の文祢麻呂墓骨蔵器がある。この文祢麻呂墓は墓壇内にガラス製骨蔵器を納めた金銅製の壺と、墓誌を入れた銅箱が出土していて、墓誌には慶雲四年(707年)の銘がある。

宮地嶽神社境内出土のガラス製骨蔵器の出土状態は不明であるが巨石墳で著名な宮地嶽大塚古墳より約15m離れた所より出土したようである。骨蔵器は銅製の蓋付壺の内にあり銅製壺はさらに須恵器質の鉢上・下に覆われていて二重の外容器を有している。ガラス製骨蔵器は文献目録59・70の小田幸子・由水常雄氏の論文に詳しい。小田幸子氏は唐時代のものの可能性を説き、由水常雄氏は我が国独自のもので8世紀初頭頃のものとしてされている。宮地嶽大塚古墳では同質のガラス板が石室内より出土していて、関連性がうかがえる。最近このガラス製骨蔵器について森貞次郎氏の論考がありやはり8世紀の初め頃とされている。銅製壺については文祢麻呂墓の外容器にあり、その他奈良に多く検出されている。宮地嶽大塚古墳との関係、そしてガラス製の骨蔵器、銅製の外容器などからしてやはり諸氏が説かれているように8世紀の初頭頃のもので九州では最古の火葬墳墓とされよう。

b 窯製(イ 須恵器)

火葬墳墓出土の須恵器骨蔵器のみで時期を知ろうとするには資料が数点しかなく、当然同じ形態で他の遺構より出土していて比較的年代の知られているものに対比せざるをえない。たとえそれらの年代観をそのまま同形態の骨蔵器に当てようとしても墳墓という性格もあり、一概にはいえないようである。火葬墳墓の場合前にも述べたようにあくまでも我国における火葬の

始まりは700年の僧道昭をもって最初とする立場である限り7世紀の骨蔵器は存在しない。又須恵器の内でも一番形態的に多くみられる短頸壺は畿内において火葬墓の骨蔵器や他の遺構より又、九州や奈良県正倉院、平城京跡で多く出土しており年代を探る資料にはなる。

畿内において、火葬が始まり、九州に仏教文化がすでに伝播していたと思われるが、畿内から死者を仏教的行事として火葬にする火葬墳墓が導入された時期には、当然時間差があると思われる。又、九州でも、より仏教文化の発展した地域に火葬の風も伝わるが、それが九州各地に広まるには、さらに、ある程度の時間を考慮しなければならない。

九州地方における畿内よりの仏教文化の伝播とその発達、展開と火葬墳墓との関係は不可欠なものであり、とくに火葬墳墓は一般的に九州各国の国府や国分寺、国分尼寺、さらに奈良時代から平安時代以後の寺院跡の知られていない地域にもみられることは問題をさらに複雑化している。

火葬墳墓についてはとくに須恵器の骨蔵器によりある程度の年代観を求めることができるのであるが、あくまでも形態変化にたよらざるをえないということであり、上限はとらえやすいが下限については全く不明と言わざるをえない。手許にある資料のみにて述べているので、今後、さらに検討すべき点が多いことと思うが、それは又、後日のこととする。

1 把手付胴張り壺 福岡県筑紫野市結浦墳墓出土の骨蔵器1点のみである。九州では、佐賀県鳥栖市の東十郎古墳^(註5)から2点出土して、この土器に共伴する須恵器類を検討すると、奈良時代の前半期とされよう。この器形の年代の確実なものに、奈良県天理市岩屋町出土の僧道薬墓骨蔵器があり、この墳墓の骨蔵器は、把手付胴張り壺で、和銅7年(714年)銘の銀製墓誌を伴っている。他にも、畿内地方ではいくつかの例品が知られている。結浦の骨蔵器は、和銅開珎を2枚以上伴うので、708年(和銅元年)より古くはないが、他の骨蔵器では、和銅開珎と万年通寶や、神功開寶を共伴するものもあるが、結浦では和銅開珎だけであるから、奈良時代の前半とするのが妥当であろう。しかし、和銅開珎の分析結果では、もっと新しくなる可能性がある。

2 短頸壺 この類が、骨蔵器として数が多く、種類も豊富である。先に『新版仏教考古学講座』第7巻81頁において、九州の須恵器製骨蔵器の年代を試案したが、その際に、年代の比定に参考となる福岡県大宰府政庁南門出土の短頸壺について、「地鎮具の短頸壺は、調査結果より奈良時代中葉とみられている。」とし、このことより、短頸壺を奈良時代後半、A類はB類よりも古い時期とした。上記奈良時代中葉としたのは誤りで、ご教示を賜った時の聞き違いか、メモの書き違いであり、前半とすべきであった。このことで、大宰府の発掘調査に従事している方々に多大な迷惑をおかけしたことを、深くお詫び申し上げます。

ここでは再度、この大宰府政庁出土の短頸壺にふれて、前記の誤りを正したいと思う。

須恵器高台付短頸壺は墳墓以外でも数点出土しており年代比定に参考になるものは福岡県筑

紫郡太宰府町の太宰府政庁の南門^(註15)、中門、北門の周辺出土のものや福岡県福岡市東区多々良込田遺跡第4号溝出土の土器^(註14)、同県筑紫野市唐人塚第6号古墳石室内出土の土器^(註17)、さらに窯跡遺跡の須恵器窯跡から同県鞍手郡宮田町宮崎窯跡の土器^(註17) (Fig. 2参照)、同県北九州市小倉南区宇土の御祖窯跡^(註18)、同所の洗子窯跡^(註18)、同区朽網のトキバ窯跡^(註18)、大分県中津市のホヤ池窯跡^(註18)などで出土している。この内、最も有力な資料は、太宰府政庁南門、中門の短頸壺であろう。

石松好雄・高橋章氏は、註2で「南門および中門からは地鎮のために埋めたと考えられる水晶の入った須恵器の短頸壺が発見されている。この須恵器はその形態からみて8世紀初頭頃のものと考えられる。」とされている。

藤井功・亀井明德氏は、中門出土の長頸壺^(註15-5)、南門の短頸壺を、「いずれの須恵器も7世紀末から8世紀初葉の形式をもち」とし、また「三つの、地鎮のための須恵器の形式が、700前後の年代を示している。」とする。「そして、朝堂院形式の建物配置に造りかえた時期はいつであろうか。地鎮に使用された三個の壺は、8世紀初頭という幅のある年代である。考古学的には、現段階ではこれ以上、その幅をつめることはできない。」「大宝二年(702年)以降は、太宰府が西海道の総督として機能を果たすことに関連した内政関係の記事が、大部分を占めるようになる。大宝律令(正確には養老律令であろうが)の制定によって、太宰府の職制が決められ、組織として整備されたのが大宝初年である。組織の整備は、建物施設の整備拡充と相ともなうと考えられるので、第Ⅱ期の朝堂院形式の成立を大宝初年に考えてよいのではないだろうか。…略…出土品を勘案しながら第Ⅱ期の成立の時期を求めると、8世紀初葉、大宝初年(701年)と考えている。」としている。少々長く引用したが、要するに、南門・中門の地鎮具である三個の須恵器は、少なくとも8世紀初頭(701年)には埋められたものとされる。

森郁夫氏は「短頸壺は、形態から8世紀前半に位置づけられるものである。」とされている

その後の、太宰府政庁の後殿地区調査の内、第41次調査で北門想定地域を発掘調査した時にも、雨落溝を覆う灰層から、須恵器短頸壺が出土している。この短頸壺は、8世紀初頭までの土器や炭化物を包含した整地層の上層にあり、また後殿地区は正殿地区より整備はかなり遅れたのではないかと推定されていることより、大宝初年(701年)よりは新しい時期と思われる。

次に、福岡県唐人塚第6古墳石室内出土の短頸壺(火葬骨壺の?)単に、8世紀前半一森田勉教示とあるだけである。

窯跡出土の短頸壺については、福岡県宮崎窯跡の短頸壺は、最大胴部以下がないが、高台付き?、やや肩が太く上がることから、b類のものと思われる。灰原出土であり、他の出土した須恵器より、小田富士雄氏編年のⅦ-B期^(註18)が多いようである。

豊前国の各窯跡については、註18に詳しい編年図が示されている。大分県中津市の、伊藤田窯跡群のホヤ池窯跡の壺は「無頸直口の、いわゆる葉壺形をなすものである。底部には、おそらく付高台が見られるものとなるであろう。」とされている、胴部以下がないものである。こ

れはVI—B期で、7世紀後半とされている。

以上、骨蔵器以外の短頸壺について、大宰府と小田富士雄氏編年で、年代を求めてきた。最も古く比定されているものに、ホヤ池窯跡の土器で7世紀後半、新しいものは、トギバ窯跡の土器で9世紀代である。

さらに、九州地方ではないが、最も短頸壺や瓶子形壺、鉄鉢形土器などが多く出土し、年代も求められている奈良県平城宮跡出土の須恵器を参考のためにみていくと、奈良時代の年号を示す土器や木簡などが出土しており、奈良時代から、平安時代の土器編年がこまかく検討されている。目を通した報告書類が手許にあるものだけなので危惧を抱くが、目安としたい。

短頸壺で参考になるのにS D 485^(註19)出土のものがあり、「S D 485は4層に大別できる水路で共伴した木簡のなかに和銅6年(713年)、霊亀3年(717年)、養老7年(723年)の紀年をとどめる貢進付札があり、須恵器にも和銅の墨書があることなどから、この溝が8世紀の初期に存続したことはあきらかである。」「さらに溝は4層に大別できるが溝のため層位ごとの適切な土器区分が容易でなかった。ただ形式的に新古を識別することは可能であり」とされている。なお、このS D 485には後述の須恵器鉄鉢形も存在する。

平城京の羅城門跡の東、約500m^(註20)のところ、ほぼ九条大路上にあたる前川遺跡では、井戸などが検出され、井戸2より短頸壺が出土して「平城京跡6 A A B区で検出したS K 820出土土器と共通している。これらから、前川遺跡出土土器の年代については、天平末年頃ということが出来る」とある。

平城京右京五条四坊3坪^(註21)の調査では、火葬墓(S X 030)が検出され、「蔵骨器は葉壺形の須恵器で平城宮第四期(750年頃)に該当する。器内には微小な骨片と絹織物を含む沈殿物と、墨筆管、和同開珎4枚が入っていた。」とある。

奈良市奈良阪町の奈良山丘陵から出土した葉壺形の須恵器蓋付蔵骨器は^(註22)「時期は型式からみて奈良末頃とみられる。」とされ、「銅銭5枚は、器底に付着した鏽から、器底中央に1枚置きこの四方に、文字面を上にして並べてあったようである。」とされていて、銅銭5枚は万年通寶2枚、神功開寶3枚である。この銅銭の出土状況は前記文面からすると、本報告の汐井掛第5号墳墓よりの銅銭の出土状況と似ていて興味深い。

S K 234・238、S D 236・246^(註23)出土の短頸壺は、どの遺構から出土したかはわからないが、これら4つの土壇はすべて同じ層位から発見されたもので、壺の説明文はないが、「S K 234他は平城宮の遺構としては、層位的に最上層に位置しており、いづれも平安時代初期に属するものである。」とされている。

S D 650A・S D 650Bにも^(註19)短頸壺が1点あり、S D 650Aの土器は、「さきに平安時代初期の土器として、かつて平城宮の平城上皇時代の遺構にもともなうS E 311B、S E 272B、S K 234土器の報告をおこなった。今回報告するS D 650A、S D 650B土器は、時期的にそれらに後続

するものである。」とされ、S D650Aは9世紀前半に、S D650Bは9世紀後半に比定されている。

以上、管見による平城宮出土の短頸壺を8世紀前半より9世紀後半まで見てきたが、それを一列に並べれば、

S D485 (平城宮土器2期=724年頃)

前川遺跡 (平城宮土器3期=749年頃)

五条四坊3坪の火葬墓 //

奈良山火葬墓 (平城宮土器5期=780年頃)

S K234・238, S B236・246 (平安初期)

S D650A (9世紀前半)

S D656B (9世紀後半)となる。

短頸壺について、大宰府政庁跡や九州の窯跡など、そして奈良県平城京跡出土のものなどをあげてきたが、さらに檜崎彰一氏の(『世界考古学大系』第4巻)1961年の須恵器編年やその後の発表された編年図、田辺昭三(『陶磁大系』第4巻)1975年や、田中琢、田辺昭三(『日本陶磁全集』4)1977年など他、田辺昭三(『陶邑古窯址群』I)1966年や、中村浩(『陶邑』I)1976年・(『陶邑』II)1977年なども参考にする。

a 短頸壺 短頸壺でも、古いものはホヤ池窯跡^(註12)出土のものである。しかしこれは上半部のみであるのが惜まれる。大宰府政庁の朝堂院形式の建物に伴う南門、中門の地鎮具に用いられた短頸壺は701年頃にはすでに使用されていた土器で、この土器によく似ているものに、福岡県柳ヶ谷墳墓がある。平城京S D485出土のものでは、肩が張り強く「く」の字状に屈曲するものが古い形態で(イ-2-a)、短頸球胴壺(イ-2-b)は新しい形態であり、短頸球胴壺(イ-2-b)はさらに前川遺跡や奈良山火葬墓まで続いており、奈良全般にわたって広く利用されたようである。

一概に、短頸球胴壺のみを以って、時期決定は困難であるが、土器の形態変化を見ると、短頸壺(イ-2-a)の特徴を、より強く有するものより、短頸球胴壺(イ-2-b)でも短頸壺(イ-2-a)に近いものから、典型的な短頸球胴壺を経て、短頸球胴壺でもやや短頸長胴壺(イ-2-c)に近いものへと変化していることは知られる。

短頸壺(イ-2-a)とした福岡県柳ヶ谷墳墓は、奈良時代前半とされ、前半でも古い方に属するものと思われる。

b 短頸球胴壺(イ-2-b)は年代の幅が広いが、最大胴部が器高の3分の2より上にあるものを古く、それ以下のものを新しいとすれば、福岡県都地原第2号墳墓や、同県金生原墳墓のものが古く、同県茶臼山墳墓、同県西谷墳墓を経て同県清水谷墳墓へと新しくなる。清水谷墳墓は奈良時代末期とするのが適当であろう。

c 短頸肩張り壺は、福岡県トギバ窯跡から好資料が出土しており、奈良時代後半と見られ大分県山本の各墳墓がある。

d 短頸丸胴壺は、短頸球胴壺の大形化とも見られ、奈良時代後半とされよう。これには福岡県内山墳墓の類があてはまる。

本報告書の福岡県汐井掛第5号墳墓の骨蔵器についてであるが、これは短頸球胴壺でも福岡県清水谷墳墓にやや近く、又d—短頸丸胴壺に近く、さらにe—短頸長胴壺にも似ており、いづれともしがたいが、副葬品に皇朝十二銭の和同開珎（初鑄708年）、万年通寶（初鑄760年）、神功開寶（初鑄765年）が出土しており、765年より古くはならない。当時の「くらて」における流通機構や、貨幣経済などは全く不明であり、どれだけ銅銭が重んじられたか分からない。皇朝十二銭の第1番目の和同開珎は、後世まで使用価値が残るものであることは、既に知られている通りだが、第2番目、第3番目の万年通寶、神功開寶も、後までの伝世を十分に考慮する必要があると思われる。このように、骨蔵器の形態や銅銭より、汐井掛第5号墳墓の時期については、奈良時代後半（765年）以降にするしかないが、形態からして平安時代の前半以降まで下ることはないと思われる。

最近、和同開珎、万年通寶などはこまかく検討されて、材質、大きさや各部測定、字体など研究されており、これら汐井掛第5号墳墓出土の銅銭については、東京国立文化財研究所に分析など調査を依頼している関係もあり、その結果などを待って、後日項を改めたい。

e 短頸長胴壺（イ—2—c）や、短頸くの字長胴壺（イ—2—d）は類例に乏しいが、正倉院の例等より奈良時代末期から平安時代前期としておく。

3 凸帯付胴張り壺 B—3の項のように、何点かこの種の壺が出土しており、年代については、亀井明德氏^(註7)はこの、突帯を胴部にめぐらす壺の年代を、9世紀とされている。これは福岡県大宰府学校院跡井戸埋土より出土した凸帯付壺と須恵器高杯と共伴しており、その高杯が奈良県平城宮S B316出土品と対比され、「高杯は、平城宮S B316出土品と形態はやや異なるが、端部の成形において共通したものを持っている^(註16)。このS B316は、8世紀末ないし9世紀初頭と考えているが、学校院井戸埋土もほぼ近接した時期と思われる。」として、註16に奈良文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告Ⅱ』1962年^(註8)があげられている。

骨蔵器を見ると、熊本県阿高墳墓の骨蔵器は平安時代でも古い前期に仮定されていて、蓋は土師器碗であり、この土師器は平安時代でも中頃のものとされよう。他に骨蔵器では、単独出土のものばかりである。有田（3次—31画区）遺跡^(註9)では、溝から1点のみ出土しており、溝内共伴遺物の須恵器をみると、奈良時代末～平安初めの特徴を有していて、凸帯付胴張り壺もこの時期とされている。太宰府町大宰府学校院跡の井戸出土のものは、上記亀井報告により、「9世紀を中心に盛行したタイプと考えておきたい。」とある。

太宰府町御笠川南条坊遺跡のS K546土塚^(註8)より、1点出土しており、平安時代のものとされ

ている。

八女市管の谷1号窯跡の灰原より小破片が出土していて、骨蔵器と窯跡を結びつけるものとして、小田富士雄氏を主体とする八女古窯跡調査団の『管の谷窯跡群』1971年（昭和46年）3月に詳しい。管の谷1号窯跡は、これまで調査された八女古窯跡群中の窯跡では、須恵器の形式上、最も新しい時期のもので、北九州市小倉南区の瓦塔や、短頸壺が出土したトギバ窯跡よりやや古い様相を持ち奈良時代後半期に属する須恵器を生産し、胴張り壺は熊本県阿高墳墓と対比され、平安時代的な要素を示す資料を有し、奈良時代以後の須恵器に続いて、新しい知見を得ることができたとされている。

福岡県大道端遺跡B区第1号溝^(註12)のものは9世紀前半とされている。

以上のように、凸帯付胴張り壺は奈良時代後期から平安時代前半の古い方に比定されている。このように、凸帯付胴張り壺は、骨蔵器以外では、奈良時代後半から平安時代前期に用いられており、骨蔵器の凸帯付胴張り壺もこの時期と考えたい。大宰府学校院跡井戸埋土層のものが奈良時代後半阿高墳墓のものを平安時代中期とすると、若干の形態変化が見られ、胴部の器高が高く、最大胴部が胴部の器高の3分の2以上にある方が古く、胴部の器高があまり高くなく、最大胴部も低いものが新しいとされる。福岡県八並墳墓、同県西谷第F号墳墓も、その中間に比定され、平安時代の初頭と試案しておく。

4 瓶子壺形 瓶子形長胴壺には把手無し（イ-4-a）と、把手付き（イ-4-b）とがある。把手無し瓶子形長胴壺は、凸帯付胴張り壺が出土した益城国府推定地^(註13)や窯跡関係で熊本県小袋山麓窯跡群中の北山浦A窯跡^(註24)や、同県平原第3号窯跡^(註13)、宮崎県延岡市の苺田第1号窯跡^(註25)などより出土していて、平安時代に比定されている。その後、福岡県内でもいくつかの出土例が報告された。短頸壺を出土した北九州市小倉南区のトギバ窯跡群、同区御祖窯跡がある。

トギバ窯跡では、第1・2号窯跡出土遺物で灰原より出土したもの、第3号窯跡上層よりと表採資料とあり、表採資料には把手付きもある。これらは小田富士雄氏編年のⅦ期で、奈良時代も終末近くに比定されている。

御祖窯跡では、大形胴長瓶と小形扁球状の2種があり、大形は把手付、小形は把手無しである。小田富士雄氏編年のⅧ期で、9世紀から10世紀前半とされている。

以上のように、九州地方でも奈良時代のものが明らかになった。奈良県平城宮跡では、第3期の天平末年（749年頃）に比定されている前川遺跡で把手付大形長胴壺、小形扁球形壺が出土している。

（イ-4-c）の瓶子形丸胴壺 球形壺の方が良いかもしれないが、前記平城宮の前川遺跡より瓶子形長胴壺を出土しており、奈良時代中葉にはすでに存在するようであるが、福岡県若宮町の墳墓骨蔵器の年代では試案できない。

6 鉄鉢形 福岡県福岡市東区多々良込田遺跡の4号溝^(註14)より、2点出土していてこの溝は、

出土の共伴遺物より、奈良時代のものと言えよう。

奈良県平城宮跡では、奈良時代の前半にはすでに見られる。福岡県楠墳墓のものも、奈良時代としておく。

7の球形壺，8の円筒形土器は，資料が少なく，時期は分らない。

9 その他の福岡県都地原第4号墳墓の坏は，小田富士雄氏編年のⅦ期に比定でき，8世紀でも後半とされよう。

最後に若宮町，宮田町内より検出され火葬墳墓より出土した骨蔵器について時期を取りまとめると次のようになる。

一番古いものは若宮町の柳ヶ谷墳墓のものであり奈良時代前半。次に同町茶白山墳墓や金丸墳墓，宮田町汐井掛第3号墳墓が奈良時代前半から後半にかけて，若宮町都地原墳墓群は須恵器甕，短頸壺。土師器甕，木製容器(?)など骨蔵器の種類が多いがほぼ奈良時代後半から平安時代前半に比定される。汐井掛第1号，第4号，第5号墳墓，水原第1号墳墓は奈良時代後半でも末期から平安時代前半にかけて，宮永墳墓と若宮町墳墓，水原第3号墳墓は平安時代のものでされよう。

B 火葬土塚墓の年代

骨蔵器を伴う火葬墳墓の埋納器墓の年代を記してきたが，火葬土塚墓の年代についても若干述べてみたい。なお，火葬土塚墓の詳細は後日項を改めて述べるつもりである。

福岡県筑紫野市塔の原墳墓は「火葬墓とするには疑問の点も残るが，一応墓と考えた。」とされ，160×80cmの不整長方形の土塚で，床面には炭化木材，藁，焼土が散布していて，床面より約10cm浮いた状態で，須恵器高坏が出土していて，奈良時代のものとされている。

福岡県八女郡広川町の鈴ヶ山第2号古墳の墳釐に検出されたものは，長さ約80cm，幅約50cm深さ約20cmの楕円形の土塚内に木炭が充満していて，火葬墓と推測されている。土塚内の上面に須恵器碗が出土し，奈良時代でも前半のものである。

このように，すでに奈良時代において，いくつかの火葬土塚墓が発見されていて，その後中世になると，福岡県筑紫野市剣塚遺跡や，同県福岡市博多区諸岡遺跡，同県嘉穂郡穂波町日上遺跡のように，群をなして存在する。又，熊本県下益城郡城南町尾窪墳墓は，室町時代中期で，80数基の内2基だけが火葬土塚墓で，他は土葬墓といった例もある。

(6) 被葬者の性格と位置づけ

奈良時代以前より火葬が始まるがこれら火葬されて埋葬された人々はどのような人達であったらうか，畿内などでは墓誌が発見されて具体的に判明している。九州では不確実であるが墓誌の項のように熊本県玉名郡菊水町にて日置部公墓の銅板墓誌が発見されていて銘文も判読

されている。それによると玉名郡人、権擬少領外少初位下 日置部公 とあると伝えられ現在の熊本県玉名市一帯、旧玉名郡日置郷を本拠とした日置氏の火葬墓とされよう。

このように九州地方においても全国的な例や規定などより火葬が僧侶、高級官人、豪族層であったことは例外ではないだろう。

福岡県宮地嶽神社境内墳墓の骨蔵器は全国でも 2 例しかない逸品であり、他の一例や諸々のことからして被葬者は身分の高い人と思われる。この被葬者に対して以前より『日本書紀』の大海人皇子（天武天皇）の妃尼子姫が宗形君徳善の娘であることより宗形君と朝廷との強い結びつきが指摘されていたが、森貞次郎氏はさらに『続日本紀』の元明天皇の平城遷都の前年の和銅 2 年（709 年）5 月に「筑前国宗形郡の大領である外従五位下の宗形朝臣等杼に外従五位上を授ける」の記事に注目され、「年代的にこの人物に最も近い関係があると考えらる。」とされる。

古墳時代終末期の 7 世紀後半に比定される宮地嶽古墳に近接して営まれた墳墓であり、宮地嶽古墳と遜色がないもので火葬が中央で上層階級の指導者層に用いられたものをいち早く九州の地に伝播せしめたものと思われ、横穴式石室に遺体を埋葬する土葬より火葬して墳墓設営と変化する好例であろう。九州地方においては未だ古墳や横穴墓に埋葬が営まれている時期であり火葬墳墓の採用は革新的なことといえよう。

しかしこの宮地嶽神社境内墳墓の火葬された火葬場が畿内であるか地元九州であるかはさだかでない。大宰府官人で大宰大貳小野老の場合は大宰府で死亡し、遺骨は骨送使により都へ送られた例などがあり、この逆のことも考えられるからである。

以上二つの例はほぼ具体的に被葬者を知る例であるが他の墳墓についてはどうであろうか。墳墓の発見された場所をみると圧倒的に古代官衙や、寺院跡に近いところが多い。筑前国では奈良時代・平安時代において九州の総督府である大宰府周辺にもいくつか墳墓があり、筑紫野市結浦墳墓や、太宰府町内山墳墓などがそれである。両方とも奈良時代のものとしたが、これ以外には古代の火葬墳墓の報はほとんどなく、中世の火葬墳墓（火葬土塚墓を含めて）や土葬墓の土塚墓や木棺墓が数多く検出されている。

九州においておそらく最初に仏教文化が導入されたところであり、遠の朝廷ともされたところである。九州の初期火葬墳墓がここを中心に各地へ伝播したとしても過言ではなからう。しかし大宰府周辺において現在まで知られている初期の火葬墳墓は上記 2 例のみであり今後発見される可能性は大いにあるがただ問題となるのは「骨送使」である。正倉院文書の天平十年周防国正税帳にみえる大宰府で死亡した大宰大貳小野老の遺骨は骨送使によって都へ送られており、他にも紀男人の例があって九州より中央へ帰国している。

文献によりこのような骨送使の存在は大いに注目されるところで朝廷や九州各地よりかなりの官人が大宰府に赴任しており多くは帰国したがこちらで死を迎えた人々もいて、これらの人

々の遺体は地元で火葬され遺骨が骨送使によって運ばれたものである。このような場合は地元
に墳墓は営まれない。これらの理由によるものかどうかは分からないがとにかく現在のところ大
宰府周辺には墳墓の発見は少ない。

筑後国の中心地である福岡県久留米市内には高良山を中心に多くの火葬墳墓が発見されてい
て西谷墳墓群のように奈良時代の墓地として利用された場合もあり、杉谷墳墓では和銅開珎が
出土している。

豊後国をみると山国川流域の福岡県築上郡と大分県宇佐郡内で多く発見されておりこの地域
は古代寺院が宇佐市内を主に多くあり、これらとの関連が重要視される。なお国府や国分寺の
存在する豊津郡周辺には今のところ発見されていない。

肥前国では圧倒的に鳥栖市から佐賀市の背振山地南側の山麓に発見されていて、この地域は
肥前国府や古代寺院が在り既に一部松尾禎作氏により被葬者の問題も説かれている地域であ
る。

肥後国でも既に松本雅明編『城南町史』において墳墓群と窯跡、寺院跡、官衙遺跡との関係
が論じられている。

薩摩国、大隅国の場合も最近新東晃一氏により精力的に研究が進められている。

さて、本報告の汐井掛墳墓や前に報告した柳ヶ谷墳墓、都地原墳墓などの被葬者はどのよう
な人々であったのだろうか、『倭名抄』によると筑前国は十五郡に分けられていて怡土、志
摩、早良、那珂、席田、糟屋、宗像、遠賀、鞍手、嘉麻、穂浪、夜須、下座、上座、御笠であ
る。鞍手郡若宮町・宮田町はこれらの内「鞍手」にあたる。郡の下には里がある。里は靈龜元
年（715年）郷に改め、その郷の下に大体一郷三里ぐらゐの割合で里を付属させた。しかし天
平年間にはこの里をやめて郷のみとしたのである。

鞍手郡内には金生一加奈生、二田一布多多、生見一伊無美、十市一止布地、新分一爾比岐多
粥田一加都多の六郷がある。

国の役所が国府であり、郡の役所が郡衙である。筑前国の十五郡の内、今日まで考古学的に
郡衙の明らかにされたのはなく、筑後国三井郡の郡衙跡が数年の発掘調査により福岡県小都市
の小郡遺跡に比定されている。もちろん鞍手郡内は場所の見当もついていないのが現状であ
り、郡内には古代寺院跡も検出されていない。

周辺の郡をみると遠賀郡に浜口廃寺と永犬丸北浦廃寺、宗像郡には津丸廃寺、神興廃寺、穂
浪郡には大分廃寺、又豊後国田河郡には天台寺廃寺があり一郡一寺院的な分布をしているが鞍
手郡内には現在のところ古代の瓦類が発見されているところはない。

汐井掛丘陵の火葬墳墓群の周辺には官衙や古代寺院の発見はなく周辺の奈良時代から平安時
代にかけての遺跡をみると本報告の咲花遺跡、都地遺跡、宮田町の平原遺跡、宮崎窯跡、塔ノ
峯遺跡ぐらゐであり、他に条里が在る。

さて、前記の鞍手郡内の六郷については古くより研究がなされていて主に地名によって比定されている。金生郷は若宮町金生に、二田郷は旧木屋瀬町深田[?]に、生見郷は宮田町生見に、十市郷は若宮町都地に、新分郷は鞍手町新北に、粥田郷は宮田町の香井田にそれぞれ比定されている。十市郷に比定されている若宮町都地は汐井掛丘陵の墳墓群がある丘陵から南方の都地八幡神社が在るあたりが郷の中心地とされている。

しかし、墳墓と郷を直接結びつけるものは何もない。逆に火葬墳墓群や都地遺跡の存在により、官衙や古代寺院の存在がうかがわれるものである。

なお、大神邦博「筑前鞍手郡若宮町出土の蔵骨器」一昭和33年度西日本史学会春季大会考古学関係研究発表要旨一（『九州考古学』5・6）1958年（昭和33年）11月に若宮町水原出土の骨蔵器片と思われるものには「二田」のヘラ書がみられたことがあり、墳墓群と郷の関係を論じられている。この「二田」の土器を探し求めたが実見できなかった。水原墳墓として3個の骨蔵器が出土したとのことで3基としたが、その内第1号がTab. 22の45で、第2号が「二田」の骨蔵器にあたると思われ、第3号は瓶子形長胴壺でありこれは実見したが実測図を作成していない。又、ヘラ書き土器の項でも省いた。

確かに「二田」のヘラ書きは興味あるものであり郷との関連性が考慮されよう。

その他、立地からみると鞍手郡内では最も西寄りのところでありさらに西に行くと見坂峠があって宗像郡と通じている。古代の道を考えると犬鳴峠が奈良時代に通じていたとは思わずこの見坂峠越しの道と若宮町の鶴ヶ谷を経て宗像郡に通じる道、さらに宮田町の上有木から宗像郡に通じる赤木峠越しの道が想定されるがこれらは古墳時代にも想定させていて当時宗像に通じるにはこれらが最も安易に通行できるものと思われる。この山口川を見下す丘陵上に都地遺跡、咲花遺跡、茶臼山墳墓、汐井掛墳墓、都地原墳墓、柳ヶ谷墳墓の奈良時代から平安時代にかけての遺跡が集中していることは注目される。

以上のように、汐井掛の丘陵附近において古代寺院は確認されていなく、都地遺跡の発見や郷の存在又、交通に便利の良い所である点などが、被葬者の性格を暗示しているようである。

しかし、九州地方における火葬墳墓の被葬者の性格と位置づけについては、なお入念な地域地域における古代史の内での研究の必要性が痛感される場所である。

- 註1 大阪府和泉市陶器千塚21号墳を始めとする例で窯塚を指す。森浩一「大阪府泉北郡陶器千塚」(『日本考古学年報』9)1961年(昭和36年)1月 他
- 註2 松本雅明他(『熊本県の歴史』1)
- 註3 久保常晴「墓地と火葬場」(『新版仏教考古学講座』第7巻 墳墓)1975年(昭和50年)1月
- 註4 木下之治『東十郎古墳群』1966年(昭和41年)3月
- 註5 藤岡一編「正倉院の陶器」(『日本の美術』No.128)1977年(昭和52年)1月
- 註6 井沢洋一編『有田周辺遺跡調査概報』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集)1977年(昭和52年)3月、遺跡で、たまたま筆者が現場を見学に行った際に、溝より凸帯付の壺が出土していた。詳細は井沢洋一氏(福岡市教育委員会文化課)の御教示による。
- 註7 亀井明德「向佐野,長浦窯跡の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—VI—)1975年(昭和50年)3月
- 註8 前川威洋「御笠川南条坊遺跡(1)」(『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集)1975年(昭和50年)3月
- 註9 註7に同じ
- 註10 馬田弘稔・小田雅文・川村博編『柿原野田遺跡』1976年(昭和51年)5月
- 註11 真野和夫『管の谷窯跡』1971年(昭和46年)3月
- 註12 森田勉「大道端遺跡の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XIV—)1977年(昭和52年)3月
- 註13 松本雅明『城南町史』1965年(昭和40年)7月
- 註14 塩屋勝利,折尾学「多々良・津屋地区の遺跡」(『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第32集)1975年(昭和50年)3月
- 註15-1 九州歴史資料館編『大宰府の文化財』1974年(昭和49年)3月
- 註15-2 石松好雄,高橋章「大宰府出土の瓦について」(『九州歴史資料館研究論集』2)1976年(昭和51年)3月
- 註15-3 石松好雄,横田賢次郎,高倉洋彰,倉住靖彦,森田勉,高橋章,山本信夫,沢田康夫,松沢直子「大宰府史跡,昭和50年度発掘調査概報」1976年(昭和51年)3月
- 註15-4 亀井明德「大宰府外交と唐宋商人の活躍」『北部九州の古代文化』1976年(昭和51年)5月
- 註15-5 藤井功・亀井明德『西都大宰府』1977年(昭和52年)3月
- 註15-6 石松好雄「福岡県大宰府跡」(『日本考古学年報』28)1977年(昭和52年)4月
- 註15-7 森郁夫「奈良時代の鎮壇具埋納」(『研究論集』Ⅲ奈良国立文化財研究所学報第28冊)1976年(昭和51年)3月
- 註16 石松好雄,高倉洋彰,倉住靖彦,横田賢次郎,森田勉,高橋章,山本信夫,沢田康夫,松沢直子,伊藤かの子『大宰府史跡 昭和51年度発掘調査概報』1977年(昭和52年)3月
- 註17 川述昭人「唐人塚遺跡の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—XVIII—)1977年(昭和52年)11月
- 註18 小田富士雄編『天観寺山窯跡群』1977年(昭和52年)9月
- 註19 町田章編『平城宮発掘調査報告』VI(奈良国立文化財研究所学報第23冊)1975年(昭和50年)1月

- 註20 黒崎直編「前川遺跡発掘調査」『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974年（昭和49年）3月
- 註21 須藤隆・清水真一「平城宮跡と平城京跡の調査」（『奈良国立文化財研究所年報』1977）1977年（昭和52年）8月
- 註22 佐藤興治「奈良山出土の蔵骨器と墨」（『奈良国立文化財研究所年報』1977）1977年（昭和52年）8月
- 註23 榎本亀治郎編『平城宮発掘調査報告』Ⅳ（奈良国立文化財研究所学報第17冊）1966年（昭和40年）11月
- 註24 坂本経堯「熊本県荒尾市北山浦A竈址」（『日本考古学年報』2）1954年（昭和29年）4月
- 註25 石川恒太郎『宮崎県の考古学』1968年（昭和43年）4月
- 註1 補記 福岡市西区油山の山崎古墳群で、『古墳時代火葬墓1（伴出遺物は須恵器V型式）、…火葬墓は長さ約1.8m、幅0.8mの隅丸長方形土壙中に、鉄釘を使用した組合式木棺を収めており、これを焼いていた。本墓は畿内地域中心に発見されている窯塚古墳（カマド塚）とはやや趣の異なるものであったが、性格的には通じるものと推察される。時期は須恵器V型式、ほぼ7世紀初頭を前後しており、カマド塚の推定年代とほぼ一致する。』大川清「山崎古墳群」（『福岡平野の歴史』—緊急発掘された遺跡と遺物—）1977年（昭和52年）2月

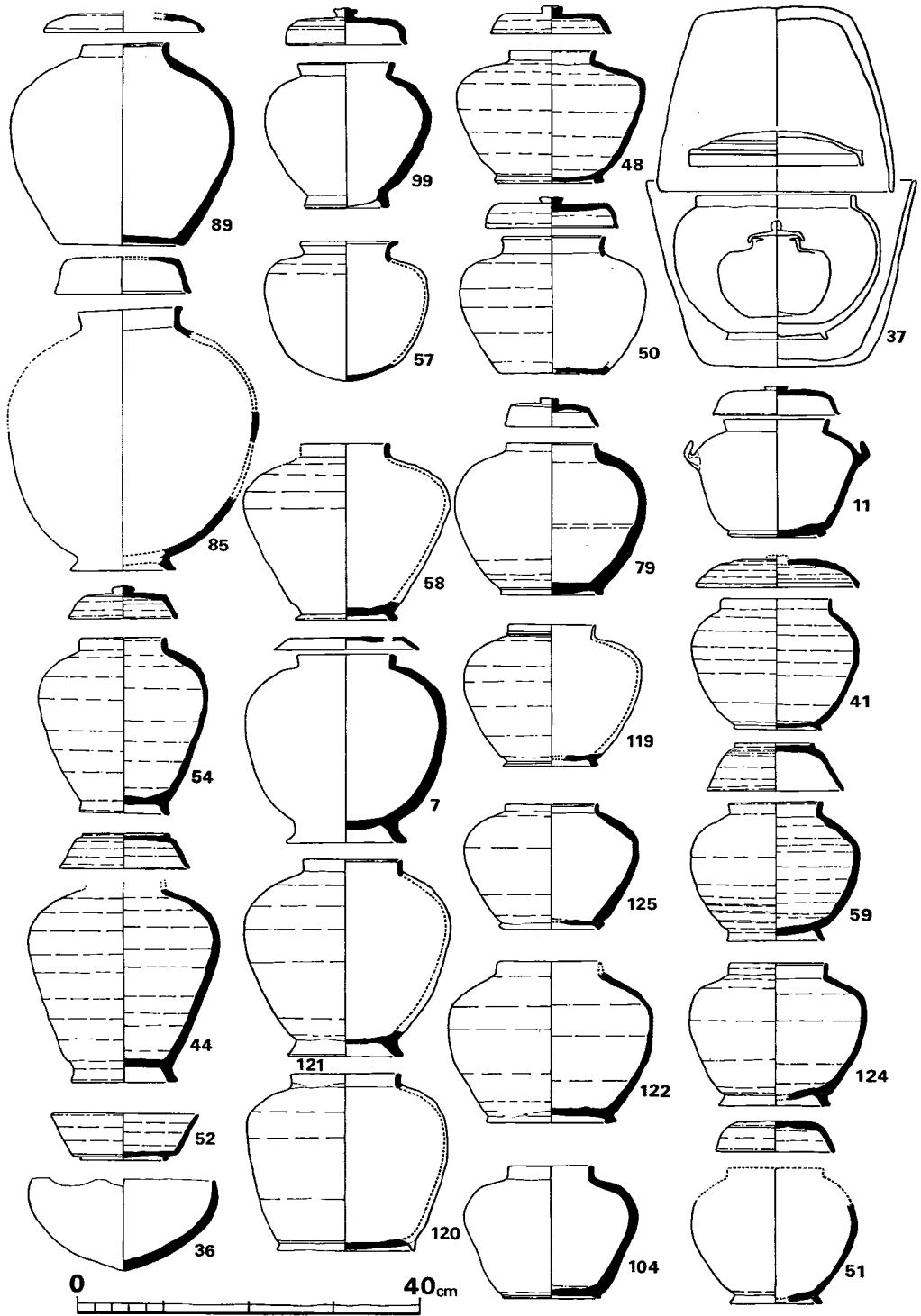


Fig. 47 福岡県内出土骨蔵器集成図 (縮尺1/8)

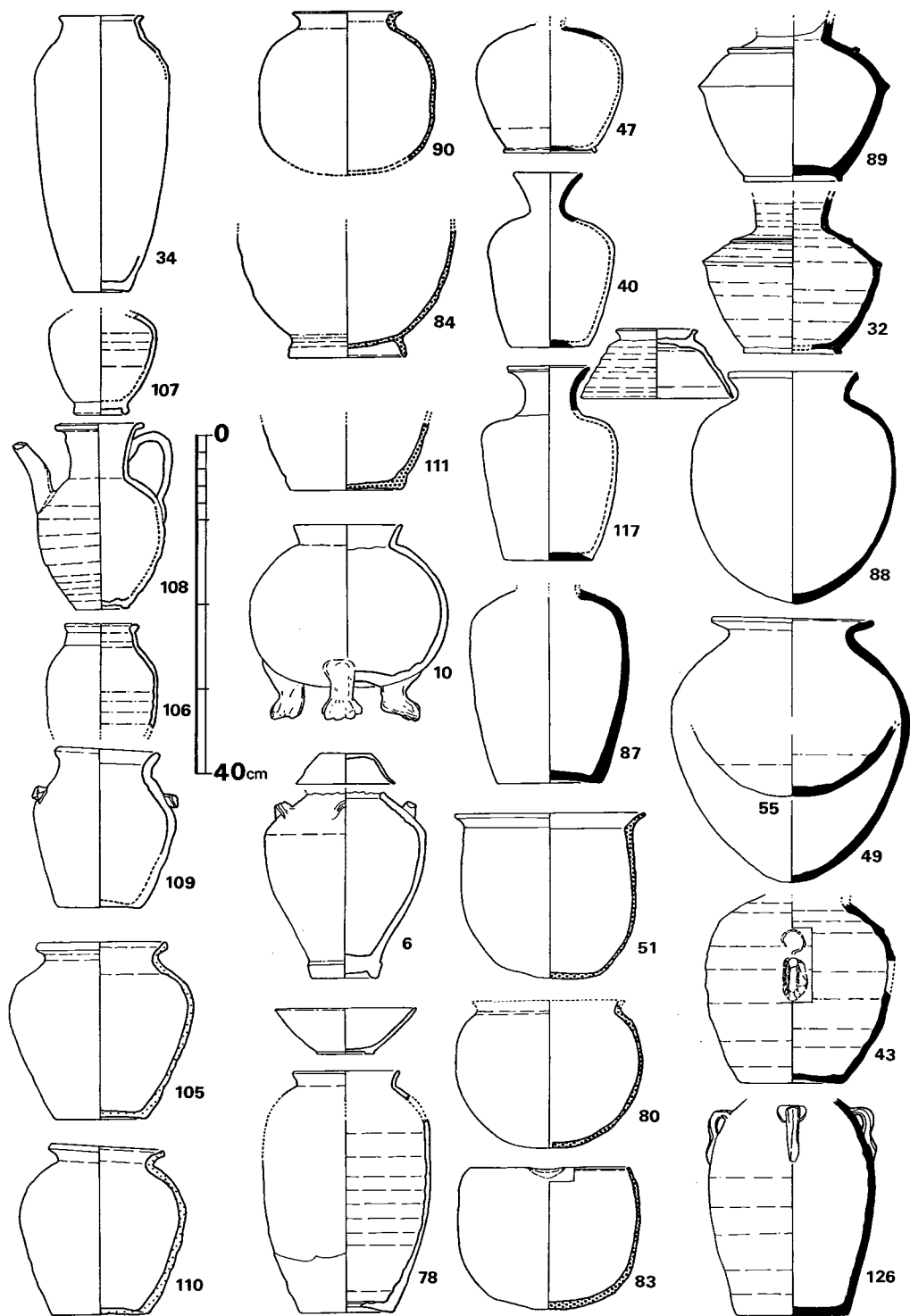


Fig. 48 福岡県内出土骨蔵器集成図 (縮尺1/8)

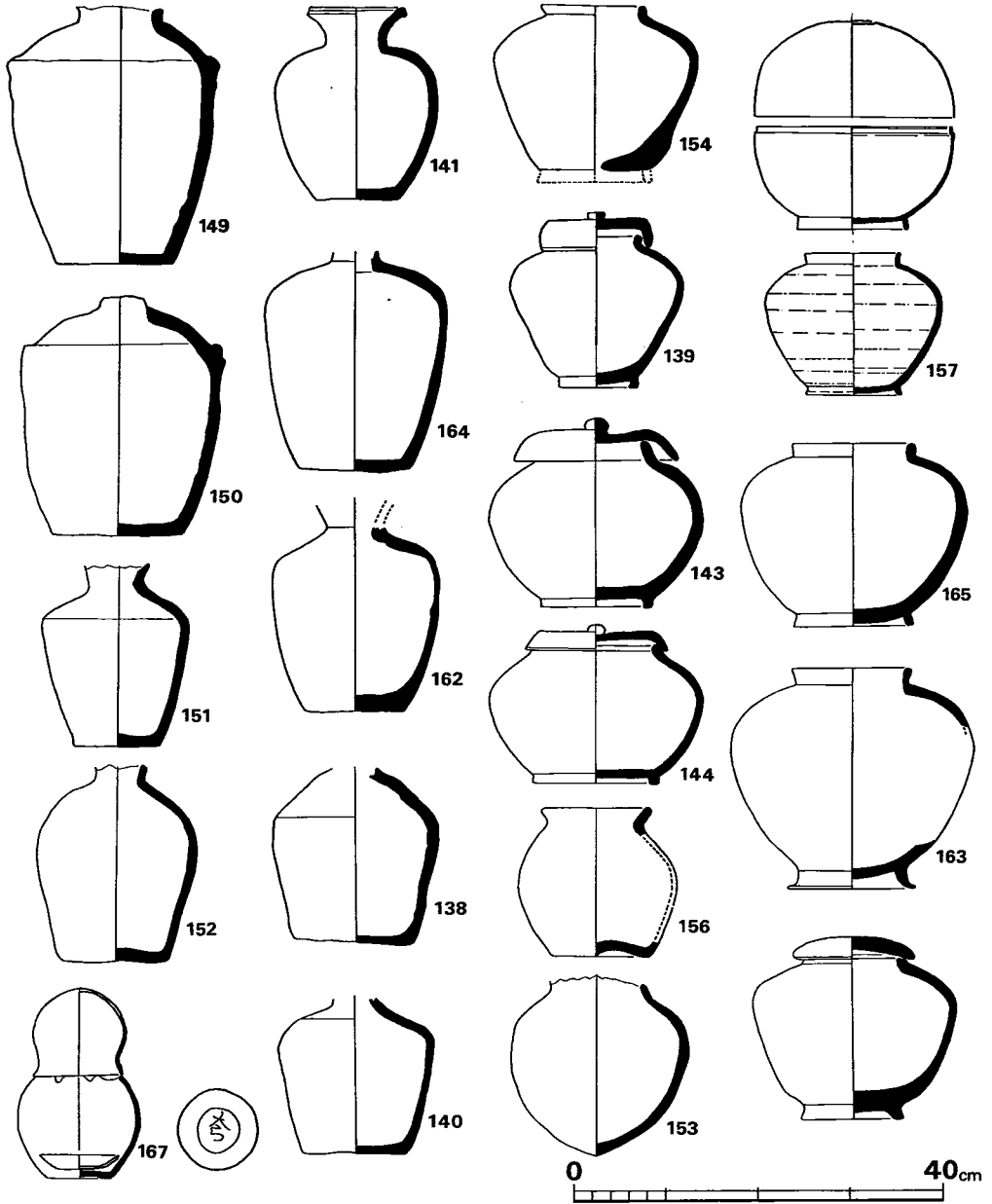


Fig. 49 佐賀県・長崎県内出土骨蔵器集成図 (縮尺1/8)

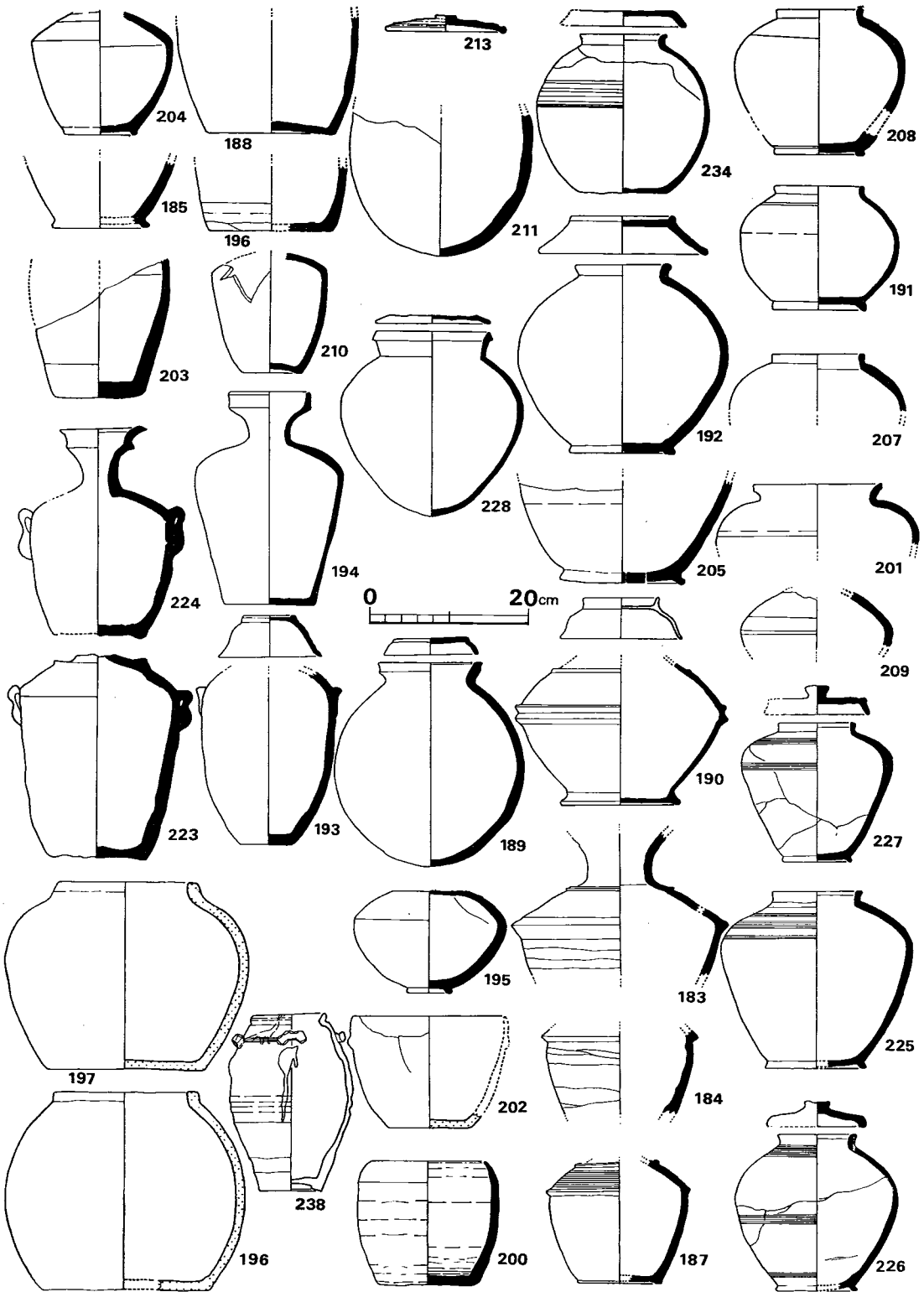


Fig. 50 熊本県内出土骨蔵器集成図 (縮尺1/8)

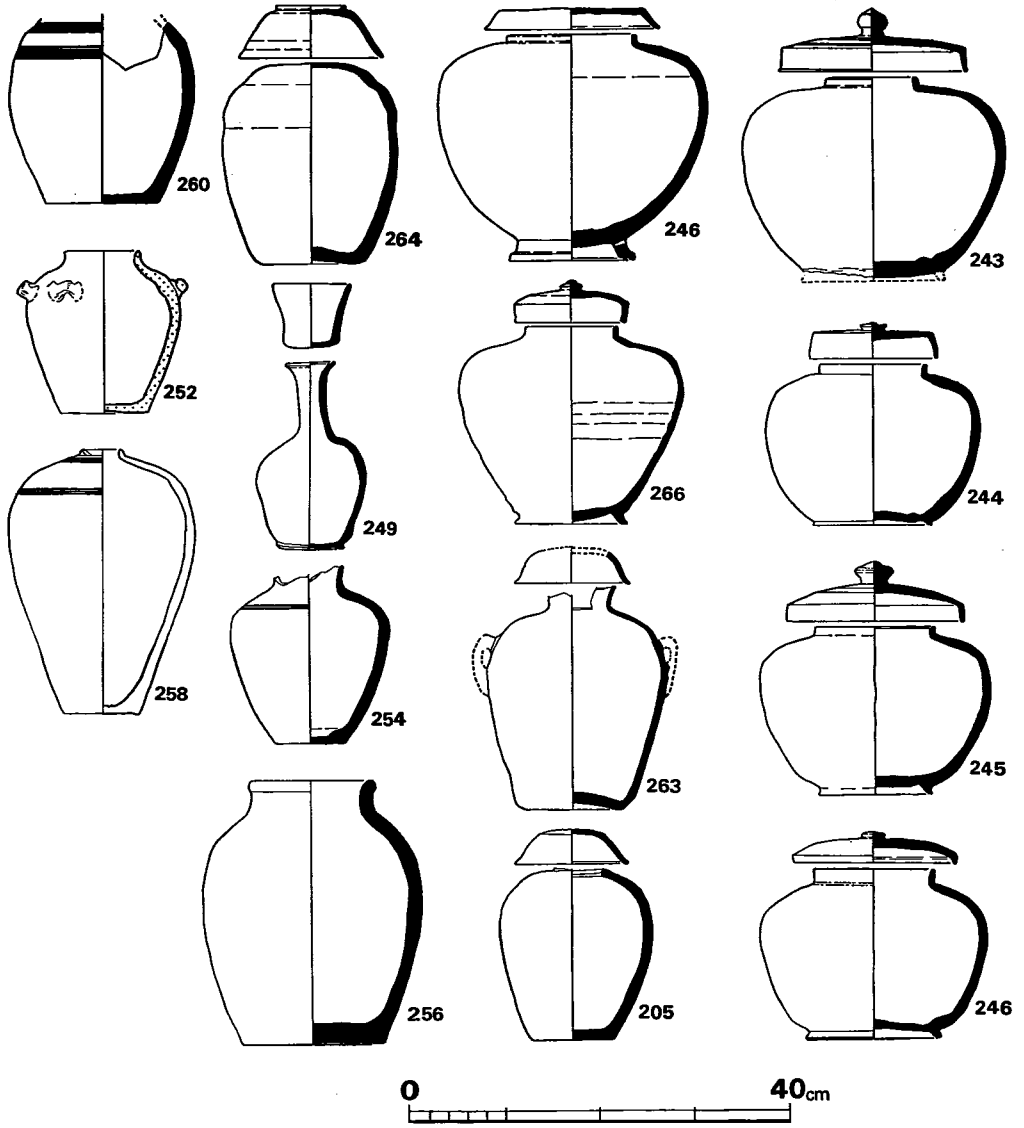


Fig. 51 大分県内出土骨蔵器集成図 (縮尺1/8)

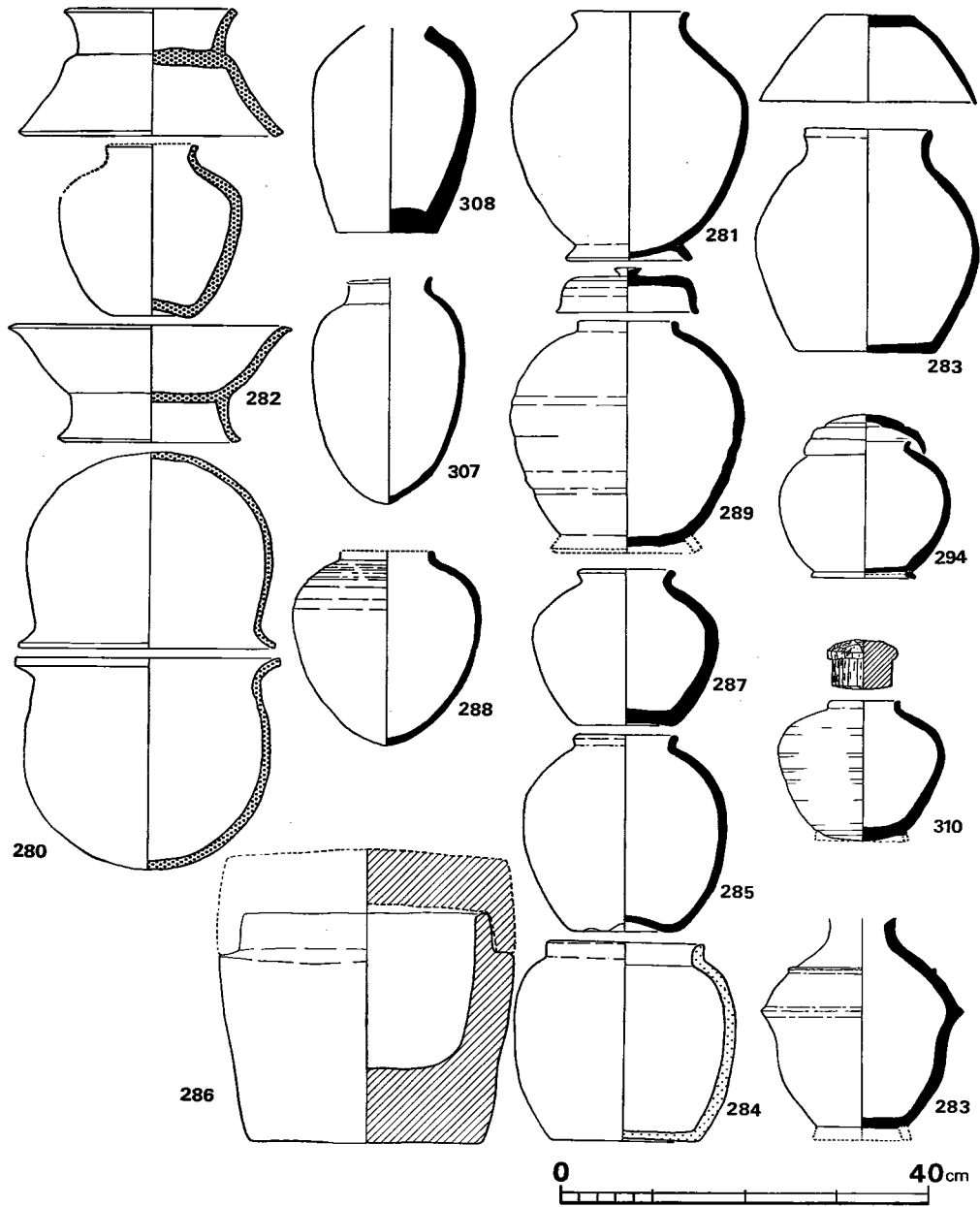


Fig. 52 宮崎県・鹿児島県内出土骨蔵器集成図 (縮尺1/8)

Tab. 22 九州地方火葬墳墓一覽表

	墳墓名	所在地	施設	骨蔵器身	骨蔵器蓋	副葬品	時期	文献
福岡県								
1	諸岡	福岡市博多区	火葬土塚	方形	70×50	青磁片1 土師器皿 3,糸切り底		88
2	飯氏馬場3号	福岡市西区飯氏字馬場	火葬土塚	不整円形	45×47×5			66
3	唐原	糸島郡二丈町満吉字唐原	不明	滑石製容器			鎌倉	註1
4	山陽新幹線 (第32地点)	筑紫郡那珂川町中原字浦田	火葬土塚					74,82
5	宗石	筑紫郡那珂川町	火葬土塚					註2
6	横岳	筑紫郡太宰府町横岳	不明	青白瓷一把手付 壺形	?			57
7	内山	筑紫郡太宰府町内山	墓塚	須恵器一短頸壺	須恵器一皿 形		奈良	24
8	四王寺	粕屋郡宇美町四王寺	墓塚十葺 石?	須恵器		(烧骨)		9
9	江牟田	筑紫郡太宰府町江牟田	火葬土塚					註3
10	通古賀?	筑紫野市通古賀字立明寺	不明	越州窯有蓋獸脚 付壺				14,38 91
11	結浦	筑紫野市京町字結浦	墓塚	須恵器一把手付 短頸壺	須恵器一坏	和同開珎 2個,他 銅銭	奈良前 半	19
12	劍塚1号	筑紫野市杉塚	火葬土塚			土師器皿	鎌倉	註4
13	劍塚2号	筑紫野市杉塚	火葬土塚					
14	劍塚3号	筑紫野市杉塚	火葬土塚					
15	塔の原	筑紫野市塔の原	火葬土塚			須恵器	奈良	81
16	山の口	筑紫野市古賀字山の口						89
17	立明寺	筑紫野市立明寺町	火葬土塚				奈良	75
18	野田1号	筑紫野市針摺	墳丘墓塚	木製?				34,註5
19	野田2号	筑紫野市針摺	墳丘墓塚	木製?				84
20	野田3号	筑紫野市針摺	墳丘墓塚	木製?				84
21	野田4号	筑紫野市針摺	墳丘墓塚	木製?				84
22	野田5号	筑紫野市針摺	墳丘墓塚	木製?				84
23	野田6号	筑紫野市針摺	墳丘墓塚	木製?				84
24	野田7号	筑紫野市針摺	墳丘墓塚	木製?				84
25	野田8号	筑紫野市針摺	墳丘墓塚	木製?				84

26	野田9号	筑紫野市針摺	墳丘墓塚	木製?		土師器		84
27	野田10号	筑紫野市針摺	墳丘墓塚	木製?				84
28	野田11号	筑紫野市針摺	墳丘墓塚	木製?				84
29	野田12号	筑紫野市針摺	墳丘墓塚	木製?				84
30	野田13号	筑紫野市針摺	墳丘墓塚	木製?				84
31	筑紫1号	筑紫野市筑紫	墳丘墓塚	木製?				83
32	八並	朝倉郡夜須町三並字八並	墓塚	須惠器—凸帶付 胴張壺			奈~平	89
33	焼の峠	朝倉郡夜須町	墓塚?	須惠器—短頸壺				註6
34	花園山	朝倉郡朝倉町花園山	墓塚	陶器—長胴壺	須惠器—坏		平安後 半	66
35	日配山	朝倉郡三輪町日配山		須惠器—短頸壺	須惠器—坏		奈良後 半	5
36	楠	朝倉郡三輪町大塚字楠	墓塚	須惠器—鉄鉢形			奈良末 ~平安 初	63
37	宮地嶽神社境内	宗像郡津屋崎町宮司	墓塚	ガラス—壺	ガラス—坏		奈良初	15, 58, 59 60, 70, 96 98
38	田熊上ノ畑南地区	宗像郡宗像町田熊字上ノ畑	火葬土塚			青磁		55
39	遠賀川川底	直方市中泉	不明	須惠器—短頸壺				実見
40	法華寺	直方市下新入字法華寺	墓塚?	須惠器—長胴壺			平安	実査
41	金丸	鞍手郡若宮町金丸	不明	須惠器—短頸壺	須惠器—坏		奈良	95
42	上金生	鞍手郡若宮町上金生	不明	須惠器				26, 95
43	宮永	鞍手郡若宮町宮永字福田	不明	須惠器—把手付 長胴壺	須惠器—坏		平安	95
44	水原1号	鞍手郡若宮町水原	不明	須惠器—長胴短 頸壺	須惠器—坏 ?		平安	26, 95
45	水原2号	鞍手郡若宮町水原	不明	須惠器				26
46	水原3号	鞍手郡若宮町水原	不明	須惠器—長胴壺			平安	26
47	若宮町	鞍手郡若宮町	不明	須惠器—長胴壺			平安	26
48	柳ヶ谷	鞍手郡若宮町沼口字柳ヶ谷	墓塚	須惠器—短頸胴 張壺	須惠器—坏	刀子	奈良前 半	95, 99
49	都地原1号	鞍手郡若宮町沼口字都地原	墓塚	須惠器—甕			奈良?	95, 99
50	都地原2号	鞍手郡若宮町沼口字都地原	墓塚	須惠器—短頸壺	須惠器—坏		奈良	95, 99
51	都地原3号	鞍手郡若宮町沼口字都地原	墓塚	土師器—甕			奈良	95, 99
52	都地原4号	鞍手郡若宮町沼口字都地原	墓塚	須惠器—坏			奈良	95, 99
53	都地原5号	鞍手郡若宮町沼口字都地原	墓塚	木製?			奈良?	95, 99
54	汐井掛1号	鞍手郡若宮町沼口	墓塚	須惠器—短頸長 胴壺	須惠器—坏		奈良	95

55	汐井掛 2号	鞍手郡宮田町上有木字高平	墓塚	須恵器—甕			奈良?	95
56	汐井掛 3号	鞍手郡宮田町上有木字高平	石室?	須恵器—短頸壺			奈良	95
57	汐井掛 4号	鞍手郡宮田町上有木字高平	石室?	須恵器—短頸壺			奈良	95
58	汐井掛 5号	鞍手郡宮田町上有木字高平	墓塚	須恵器—短頸長 胴壺	須恵器—環	和銅開珍 神功開寶 万年通寶	奈良末 期~平 安前	95
59	茶白山	鞍手郡若宮町山口	石室?	須恵器—短頸壺	須恵器—環		奈良	95,107
60	英彦山	田川郡添田町英彦山		褐釉四耳壺	滑石蓋			実見
61	日上A	嘉穂郡穂波町彼岸原	火葬土塚	長方形	95×65	骨・配石・ 炭・土師 器環		65
62	日上B	嘉穂郡穂波町彼岸原	火葬土塚	長方形	103×97			65
63	日上C	嘉穂郡穂波町彼岸原	火葬土塚	長方形	155×115			65
64	日上D	嘉穂郡穂波町彼岸原	火葬土塚	長方形	107×97			65
65	日上E	嘉穂郡穂波町彼岸原	火葬土塚	円形	104×97	骨		65
66	日上F	嘉穂郡穂波町彼岸原	火葬土塚	長方形	100×60	骨		65
67	日上G	嘉穂郡穂波町彼岸原	火葬土塚	長方形	100×65			65
68	日上H	嘉穂郡穂波町彼岸原	火葬土塚	長方形	×			65
69	日上I	嘉穂郡穂波町彼岸原	火葬土塚	長方形	×			65
70	日上J	嘉穂郡穂波町彼岸原	火葬土塚	長方形	90×60			65
71	日上K	嘉穂郡穂波町彼岸原	火葬土塚	長方形	90×60			65
72	日上L	嘉穂郡穂波町彼岸原	火葬土塚	楕円形	105×85			65
73	日上M	嘉穂郡穂波町彼岸原	火葬土塚	楕円形	95×65			65
74	碓井	嘉穂郡碓井町						
75	杉谷	久留米市高良内町杉谷					和銅開珍	奈良 1,68
76	小寺 1号	久留米市山本町豊田字小寺 西山		須恵器—卍			奈良末 ~平安 初	68
77	小寺 2号	久留米市山本町豊田字小寺 西山		土師器—鉄鉢形				68
78	西谷 1号	久留米市山本町豊田字西谷	石室	越州窯系—壺	越州窯系— 鉢			68
79	西谷 2号	久留米市山本町豊田字西谷	墓塚	須恵器—短頸壺	須恵器—環		奈良	68
80	西谷 3号	久留米市山本町豊田字西谷	石室	土師器—壺形甗	土師器—皿			68
81	西谷 4号	久留米市山本町豊田字西谷	石室	木製?				68
82	西谷 5号	久留米市山本町豊田字西谷	石室	木製?		土師器環 塚		68
83	西谷 6号	久留米市山本町豊田字西谷	石室	土師器片口				68

84	西谷A	久留米市山本町豊田字西谷	墓塚	土師器—大形の 高台付壺	不明			68
85	西谷B	久留米市山本町豊田字西谷	墓塚	須恵器—高台付 壺	須恵器—坏 ?		奈良	68
86	西谷C	久留米市山本町豊田字西谷	墓塚					68
87	西谷D	久留米市山本町豊田字西谷	石室	須恵器—瓶子形 長胴壺	土師器—皿		平安前	68
88	西谷E	久留米市山本町豊田字西谷	墓塚	須恵器—甕	須恵器—高 台付塚			68
89	西谷F	久留米市山本町豊田字西谷	墓塚	須恵器—短頸壺	不明			68
90	西谷G	久留米市山本町豊田字西谷	石室	土師器—甕				68
91	西谷採集	久留米市山本町豊田字西谷	不明	須恵器—凸帯付 胴張壺			平安前	68
92	永勝寺境内	久留米市山本町豊田字柳坂	墓塚	施釉四耳付短頸 壺	陶器—白磁 碗		平安末 —鎌倉	45
93	かぶと山	久留米市						68
94	礫山	久留米市御井町礫山		須恵器—埴				6
95	放光寺1号	久留米市山川町放光寺	火葬土塚					76
96	放光寺2号	久留米市山川町放光寺	火葬土塚					76
97	西山田	浮羽郡吉井町富永字西山田	墓塚	須恵器—短頸壺	?		奈良	7,8
98	鈴ヶ山2号古 墳裾	八女郡広川町新代字鈴ヶ山	火葬土塚	隅丸長方形	82×48×20	須恵器	奈良	71
99	清水谷	山門郡瀬高町本吉清水谷ダ ゴサマ		須恵器—短頸壺	須恵器—坏		奈良	106
100	女山1号	山門郡瀬高町女山		須恵器—短頸壺				106
101	女山2号	山門郡瀬高町女山		須恵器				106
102	禅院	山門郡瀬高町禅院		須恵器				106
103	大間山 計13基	大牟田市		須恵器		富寿神寶 毛抜き		註7
104	白岩	北九州市八幡西区香月	墓塚	須恵器—短頸壺			奈良	92
105	椎木山1号	北九州市若松区蛸住椎木山		瓦質土器				105,110
106	椎木山2号	北九州市若松区蛸住椎木山		褐釉陶製長胴壺				105,110
107	椎木山3号	北九州市若松区蛸住椎木山		白磁				105,110
108	椎木山4号	北九州市若松区蛸住椎木山		褐釉陶製長胴壺				105,110
109	椎木山5号	北九州市若松区蛸住椎木山						105,110
110	椎木山6号	北九州市若松区蛸住椎木山		瓦質土器				105,110
111	椎木山7号	北九州市若松区蛸住椎木山		土師質土器				105,110

112	屏賀坂1号	北九州市小倉北区金鷄町	火葬土壇	円形	150×30	土師質碗 白磁碗		104
113	屏賀坂2号	北九州市小倉北区金鷄町	火葬土壇	円形	150×15			104
114	山門	北九州市門司区	火葬石室			糸切り土師 瓦器?	室町	93
115	百合ヶ丘	京都府菊田町						註8
116	黒田	京都府勝山町黒田	不明	須恵器一長胴壺			平安	註9
117	中黒田	京都府勝山町中黒田		須恵器一長胴壺			平安	註9
118	中桑野	築上郡新吉富村	墓塚	須恵器一長胴壺	土師器		平安	註10
119	平山1号	築上郡大平村土佐井字平山		須恵器 短頸壺			奈良	註9
120	平山2号	築上郡大平村土佐井字平山		須恵器 短頸壺			奈良	註9
121	東山1号	築上郡大平村東下字東山茶畑		須恵器一短頸長 胴壺			奈良	註9
122	東山2号	築上郡大平村東下字東山茶畑		須恵器一短頸壺			奈良	註9
123	東山3号	築上郡大平村東下字東山茶畑		須恵器				註9
124	下唐原	築上郡大平村下唐原		須恵器 短頸壺			奈良	註9
125	金生原	築上郡大平村下唐原字金生原		須恵器一短頸壺			奈良	註9
126		築上郡大平村		須恵器一長胴壺			平安	註11
佐 賀 県								
127		佐賀県	不明	金銅	金銅		奈良	113
128	宮脇	三養基郡基山町宮浦字宮脇	不明	不明				48
129	四本谷 5~6基	三養基郡上峰村堤字切通四本谷	石室	須恵器, 土師器			奈良	37.48
130	堤	三養基郡上峰村堤					平安	109
131	千塔山1号	三養基郡基山町宮浦字宿	火葬土壇	隅丸長方形	92×57×18		中世	100
132	千塔山2号	三養基郡基山町宮浦字宿	火葬土壇	隅丸長方形	115×75×35		中世	100
133	千塔山3号	三養基郡基山町宮浦字宿	火葬土壇	不整形	$108 \times 60 + \alpha$ $\times 49$		中世	100
134	千塔山4号	三養基郡基山町宮浦字宿	火葬土壇	長方形	100×56×20		中世	100
135	五本谷1号	三養基郡					平安	109
136	五本谷2号	三養基郡						109
137	二塚山							109
138	白石	三養基郡北茂安村白壁字白石	不明	須恵器一長胴壺		人骨	平安	12.48
139	山田	三養基郡中原村養原字山田	不明	須恵質一短頸壺	須恵質一坏		奈良	12.48
140	笛吹山	鳥栖市麓町立石字笛吹山	不明	須恵質一長胴壺		人骨	平安	12.48
141	道庵山1号	鳥栖市麓町山浦字道庵山	不明	須恵質一長胴壺			平安	12.48^{13} 48

142	道庵山 2号	鳥栖市麓町山浦字道庵山	不明	不明					12.48
143	小隈山 1号	佐賀郡大和町 川上字小隈	墓壇十上 下石	須惠質—短頸壺	須惠質—環				12.48
144	小隈山 2号	佐賀郡大和町川上字小隈	墓壇十上 下石	須惠質—短頸壺	須惠質—環	「大」の ヘラ書			12.48
145	一本杉山	神埼郡東背振村西石動一本杉山	石室	須惠質—壺	土師質?				12.48
146	西石動 1号	神埼郡東背振村石動字西石動	不明	須惠器系—壺				奈良	23.48
147	西石動 2号	神埼郡東背振村石動字西石動	不明	失					23
148	西石動 3号	神埼郡東背振村石動字西石動	不明	失					23
149	峰山 1号	小城郡小城町栗原字峰	墓壇	須惠器—把手付 長胴壺		人骨	平安		22.48
150	峰山 2号	小城郡小城町栗原字峰	墓壇	須惠器—長胴壺		人骨	平安		22.48
151	峰山 3号	小城郡小城町栗原字峰	墓壇	須惠器—長胴壺		人骨	平安		22
152	峰山 4号	小城郡小城町栗原字峰	墓壇	須惠器—長胴壺		人骨	平安		22
153	峰山 5号	小城郡小城町栗原字峰	墓壇	須惠器—甕		人骨	平安		22
154	東分 1号	小城郡三日月町織島字東分 鞍投	不明	須惠器質—短頸 壺				奈良	12.48
155	東分 2号	小城郡三日月町織島字東分 鞍投	不明					奈良	12
156	稲佐	杵島郡有明町辺田字稲佐	墓壇 (火葬場)	須惠器質—広 口壺		人骨			12.14 18
157	稲佐神社境内	杵島郡有明町辺田字稲佐	不明	須惠器—短頸壺				奈良	実査
158	西宮裾	杵島郡北方町大崎字西宮裾	不明	須惠器質—把手 付長胴壺			平安		48
159	中峰	藤津郡太良町字中峰	墓壇	須惠器質—壺	土師質—皿		平安		48
160	水梨 1号	鹿島市能古見町山浦字水梨		須惠器質—四耳 付長胴壺			平安		48
161	水梨 2号	鹿島市能古見町山浦字水梨					平安		48
162	恵日寺	唐津市鏡字山添	不明	須惠器—長胴壺		人骨			44.48
163	楼崎 1号	唐津市半田字楼崎	墓壇	須惠器—短頸壺		人骨	奈良		44
164	楼崎 2号	唐津市半田字楼崎		須惠器—長胴壺			平安後		44
165	楼崎 3号	唐津市半田字楼崎		須惠器—短頸壺			奈良		44
長 崎 県									
166	礫石原 1号	島原市三会礫石原甲		須惠器—壺	土師器				25.43

167	礫石原 2 号	島原市三合礫石原甲	不明	須恵器—長胴壺	土師器—壺	刀子・ 瓦の破片		25.43
熊 本 県								
168	伝習農場所	山鹿市白石伝習農場跡		土師器—広口丸 底壺	土師器—皿			
169	東福寺	菊池市隈府字亘				青・白磁		46
170	木柑子	菊池市木柑子		須恵器				46
171	陣塚	菊池郡泗水町田島字陣塚						46
172	村吉	菊池郡泗水町吉富字村吉						46
173	城山	菊池郡泗水町住吉北住吉城 山狐塚		土師器				46
174	狐塚	菊池郡旭志村麓字狐塚	墓塚	須恵器—壺	須恵器—坏	墓誌?		46.49
175	群山	菊池郡合志村群山		須恵器				46
176	南様ヶ水	菊池郡旭志村高柳字南様ヶ 水						46
177	西の山	玉名市築地西の山						46
178	四十九	玉名市築地四十九						46
179	辻	玉名市青野字辻						46
180	若宮古墳裾	玉名郡菊水町江田		瓦器質—長胴壺	凝灰岩質石 片 2	磁器碗— 葬送用	鎌倉	
181	江田	玉名郡菊水町江田	墓塚	瓦器質—長胴壺				79
182	福田寺跡	上益城郡益城町福原字内寺		須恵器				
183	長塚古墳周溝 1 号	上益城郡御船町豊秋字久保		須恵器—凸帯付 胴張壺				90
184	長塚古墳周溝	上益城郡御船町豊秋字久保		須恵器—凸帯付				90
185	長塚古墳周溝	上益城郡御船町豊秋字久保		須恵器—凸帯付				90
186	長塚	上益城郡御船町		須恵器—凸帯付				90
187	帰帆山古墳北	上益城郡御船町豊秋		須恵器—凸帯付 胴張壺				90
188	山後	上益城郡御船町豊秋字山後						
189	宮山	下益城郡富合村木原字宮山		須恵器—丸底甕	土師器—坏	人骨	平安前	30.46 51
190	阿高	下益城郡城南町阿高字東原	墓塚 (倒置)	須恵器—凸帯付 胴張壺	土師器器	骨製斧 女性人骨	平安前	29.30 32.33 51.89
191	一の字山 1 号	下益城郡城南町阿高一の字 山山頂		須恵器—短頸壺	欠失		平安前	30.46 51
192	一の字山 2 号	下益城郡城南町阿高一の字 山山頂		須恵器—短頸壺	土師質—坏		平安前	30.51

193	日焼塚封土裾 (1号)	下益城郡城南町塚原日焼塚		須惠器—短頸長 胴壺耳付	土師器—坏	人骨	平安中	30.33 46.51
194	日焼塚封土上 (2号)	下益城郡城南町塚原日焼塚		須惠器—瓶子形 壺	須惠器	人骨	平安中	30.51
195	火葬場裏古墳 北	下益城郡城南町塚原字丸山		須惠器—扁球形 壺	欠失	人骨	平安前	30.46 51
196	尾窪1号	下益城郡城南町尾窪		瓦器—広口壺	欠失		鎌倉	30.46 51
197	尾窪2号	下益城郡城南町尾窪		瓦器—広口壺	欠失		鎌倉	30.46 51
198	尾窪47号	下益城郡城南町尾窪	火葬土墳					77
199	尾窪62号	下益城郡城南町尾窪	火葬土墳				室町中期	77
200	沈目	下益城郡城南町沈目		須惠器—円筒形				85
201	山ノ神A1号 (ホ)	下益城郡城南町鰐瀬字山ノ 神	不明	須惠器—短頸壺			平安前	51
202	山ノ神A2号 (ニ)	下益城郡城南町鰐瀬字山ノ 神	墓塚	瓦器質—鉢形壺 耳付き		人骨	平安後	51
203	山ノ神A3号 (ハ)	下益城郡城南町鰐瀬字山ノ 神	墓塚	須惠器—長胴壺		人骨	平安中	51
204	山ノ神A4号 (口)	下益城郡城南町鰐瀬字山ノ 神	墓塚	須惠器—肩張り 形壺?		人骨	平安前	51
205	山ノ神A5号 (イ)	下益城郡城南町鰐瀬字山ノ 神	墓塚	須惠器—球形壺 ?	須惠器	人骨	平安中	51
206	山ノ神A6号	下益城郡城南町鰐瀬字山ノ 神	不明	須惠器—長胴壺			平安前	51
207	山ノ神B1号	下益城郡城南町鰐瀬字山ノ 神	不明	須惠器—短頸壺			平安前	51
208	山ノ神B2号	下益城郡城南町鰐瀬字山ノ 神	不明	須惠器—短頸壺			奈良	51
209	山ノ神B3号	下益城郡城南町鰐瀬字山ノ 神	不明	須惠器—扁球形 壺			平安前	51
210	山ノ神B4号	下益城郡城南町鰐瀬字山ノ 神	不明	須惠器—長胴壺		人骨	平安前	51
211	山ノ神B5号	下益城郡城南町鰐瀬字山ノ 神	不明	須惠器—球形壺			平安前	51
212	山ノ神B6号	下益城郡城南町鰐瀬字山ノ 神	不明	瓦器質—球形壺			平安中	51
213	山ノ神B7号	下益城郡城南町鰐瀬字山ノ 神	不明	土師器—不明			平安	51
214	吉野山1号	下益城郡城南町吉野山		須惠器—球形壺			平安前	51
215	吉野山2号	下益城郡城南町吉野山		瓦器—球形壺			平安後	51
216	浦山	熊本市黒髪町宇留毛字浦山		須惠器—甕	須惠器—坏 ?		奈良末 ~平安初	46.67
217	蚕業試験所構 内	熊本市出水町		須惠器—壺	人形・馬形 土製品			31.
218	陣の内	宇土郡三角町波多字陣の内					奈良	46

219	南請	宇土郡不知火町小曾部字南請						46
220	三官1号	八代市敷川内町三官字大竹原		須恵器質			平安初	34.46
221	三官2号	八代市敷川町三官字大竹原		須恵器	欠失		平安中	34.46
222	三官3号	八代市敷川町三官字大竹原		陶質			平安末 鎌倉初	34.46
223	田平山1号	八代市東片町片野川字田平山	墓墟	須恵器一短首長 胴壺?把手付		人骨	平安	46.78
224	田平山2号	八代市東片町片野川字田平山	墓墟	須恵器一短首長 胴壺把手付		人骨	平安	78
225	田平山3号	八代市東片町片野川字田平山	墓墟	須恵器一短頸壺		刀子1	奈良	78
226	田平山4号	八代市東片町片野川字田平山	墓墟	須恵器一短頸壺	須恵器一つ まみ付坏			78
227	田平山5号	八代市東片町片野川字田平山	墓墟	須恵器一短頸壺		「松」ヘラ		78
228	田平山6号	八代市東片町片野川字田平山	墓墟	須恵器一球形甕	須恵器一坏			78
229	田平山7号	八代市東片町片野川字田平山		土師器一球形甕	土師器一皿	人骨		78
230	下溝口	八代郡宮原町立神字下溝口				ピンセツ ト状鉄器		34
231	平原	八代郡宮原町平原						
232	養野	人吉市養野						46
233	廻り迫	球磨郡免田町吉井字廻り迫		須恵器?				46
234	東小原A	球磨郡上村上字東小原		須恵器?				46
235	東小原B	球磨郡上村上字東小原		須恵器?				46
236	栩登	球磨郡上村字栩登		須恵器?				46
237	宇土谷	球磨郡岡原村宮原字宇土台		須恵器?				46
238	蓮花寺	球磨郡多良木町黒肥地字蓮花寺				鎌倉		108
239	樋合島	天草郡松島町樋合島						46
大 分 県								
240		中津市相原	石室	陶器		金環1 古銭1		24
241	大日廃寺	下毛郡三光村八面山		須恵器一短頸壺	須恵器一坏			102
242	後山	下毛郡耶馬溪町柿坂字後山	石窟					102
243	山本1号(虚空藏寺)	宇佐郡駅川町山本	石室	須恵器一短頸壺	須恵器一坏			24 102
244	山本2号	宇佐郡駅川町山本	石室	須恵器一短頸壺	須恵器一坏			24
245	山本3号	宇佐郡駅川町山本		須恵器一短頸壺	須恵器一坏			24
246	山本4号	宇佐郡駅川町山本		須恵器一短頸壺	須恵器一坏			24

247	一鬼手	宇佐郡四日市町一鬼手	石室	須恵器—短頸壺	須恵—皿形			24
248	倉成	速見郡山香町倉成	横穴墓内	瓦器質	瓦器質			
249	小山	杵築市狩宿字小山	石室	須恵器—瓶子形	須恵器—コップ形			23
250	新田	直入郡直入町新田	石室					40
251	古市1号	佐伯市上岡字古市	石塔内	陶器—円柱状四耳付	素文鏡			24
252	古市2号	佐伯市上岡字古市		瓦器質—耳付壺				24
253	古市3号	佐伯市上岡字古市		瓦器質				24
254	古市4号	佐伯市上岡字古市		須恵器質—長胴壺				24
255	古市5号	佐伯市上岡字古市		瓦器質				24
256	古市6号	佐伯市上岡字古市		須恵質—短頸長胴壺				24
257	古市7号	佐伯市上岡字古市						24
258	古市8号	佐伯市上岡字古市		古瀬戸—長胴壺	相輪片		鎌倉	24
259	古市9号	佐伯市上岡字古市		瓦質				24
260	古市10号	佐伯市上岡字古市		須恵質				24
261	古市11号	佐伯市上岡字古市		須恵質				24
262	古市12号	佐伯市上岡字古市						24
263	白濁1号	佐伯市城山	不明	須恵器—短頸長胴耳付壺	土師器—坏		平安前 ~中	24.69
264	白濁2号	佐伯市城山	不明	須恵器—短頸? 長胴壺	土師器—高台付埴		平安	24
265	白濁3号	佐伯市城山	墓塚	須恵器—長胴壺	土師器—坏		平安	24
266	白濁4号	佐伯市城山	墓塚	須恵器—短頸壺	須恵器—坏		奈良	24
宮 崎 県								
267	山の後	西都市鹿野田字山の後 (霧島?)		須恵器—壺	須恵器—坏			54
268	下那珂1号	宮崎郡佐土原町下那珂		須恵器質				
269	下那珂2号	宮崎郡佐土原町下那珂		須恵器質				
270	下那珂3号	宮崎郡佐土原町下那珂		須恵器質				
271		宮崎郡佐土原町?						
272	新木	宮崎郡佐土原町新木	不明	須恵器質				
273		延岡市		陶器—壺				
274		宮崎郡高岡町		須恵器質—壺	須恵器質—鉢		平安中	35
275	寺山1号	宮崎市福島町寺山		須恵器—長胴壺			平安末 鎌倉初	

276	寺山 2 号	宮崎市福島町寺山						
277	越の馬場	児湯郡新富町越の馬場八幡神社境内		陶器一常滑壺	土師質一蓋			
278	蓮華寺	えびの市蓮華寺跡		須恵器質	銅製仏備鉢			
279	マツラ迫	都城市中郷マツラ迫		須恵器一壺	胡州鏡		平安後	61
鹿 児 島 県								
280	屋形原	川内市高城町屋形原 4 8 4 2		土師器一甕	土師器一甕			94
281	小川添 1 号	伊佐郡菱刈町南浦小川添		須恵器一短頸壺				50
282	小川添 2 号	伊佐郡菱刈町南浦小川添		土師器一壺	土師器一鉢			50
283	荒瀬	伊佐郡菱刈町本城荒瀬	不明	須恵器一凸帯付胴張壺		鎌子1,子安貝 1	平安前	35.36
284	川西	大口市曾木川西		瓦質一広口壺				35.36
285	原田	大口市原田		須恵器一広口壺				35.36
286	斧トキ 1 号	大口市曾木斧トキ		軽石(凝灰岩製)				94
287	斧トキ 2 号	大口市曾木斧トキ		須恵器一短頸壺				94
288	萩原	大口市曾木字萩原		須恵器一甕				35.36
289	鳥巢 1 号	大口市羽月字鳥巢		須恵器一短頸壺	須恵器一坏			94
290	鳥巢 2 号	大口市羽月字鳥巢		須恵器				94
291	白木	大口市羽月字白木		土師器				94
292		大口市平出水				合子	中世	94
293	牧	鹿児島郡吉田町宮之浦礼谷牧	墓塚	須恵器一短頸壺		坏「大」の墨書		11.50
294	阿多	日置郡金峰町阿多		須恵器一壺			奈良	10.13
295	高橋	日置郡金峰町高橋		須恵器				94
296	杉本寺	加世田市杉本寺		須恵器	軽石製傘形蓋	人骨		94
297	小坂ノ上	川辺郡知覧町下郡字小坂ノ上		須恵器一壺	坏	人骨		50.94
298	揖宿	揖宿郡山川町福光		須恵器		銅鏡		27.97 94
299		国分市城山		須恵器				94. 112
300	嘉例川	始良郡隼人町嘉例川		須恵器		軽石製外容器		50.94 112
301	弓削丘 1 号	始良郡隼人町小田字弓削丘		須恵器一長胴壺				50.94
302	弓削丘 2 号	始良郡隼人町小田字弓削丘		須恵器				94
303	木場佃	始良郡栗野町木場佃		須恵器			7C~ 8C	50.94
304	川西	始良郡吉松町川西		須恵器				94

305	永山	始良郡吉松町永山		須恵器				
306	曲田	始良郡加治木町西別府字曲田		土師器			平安	50.94
307	篠ヶ迫 1号	曾於郡末吉町屋敷寺篠ヶ迫		須恵質一甕				16.50 94
308	篠ヶ迫 2号	曾於郡末吉町屋敷寺		須恵器一長胴壺				16.94
309	荒神免	曾於郡末吉町南之郷		須恵器				21.97
310	鳥居段 1号	曾於郡大隈町字鳥居段5 5 8 0		須恵器一短頸壺	軽石製傘形蓋			94
311	鳥居段 2号	曾於郡大隈町字鳥居段		須恵器一瓶子形				94
312		曾於郡大隈町中の内北部落 おろのうしろ		須恵器一瓶子形				
313		曾於郡輝北町成双子塚		須恵器				94
314	水ヶ迫横穴内	曾於郡志布志町		須恵器			奈良	94
315	山宮神社	曾於郡志布志町安楽山宮神社		四耳壺		鏡、刀・ 合子		72.97 94
316		曾於郡志布志町田之浦牧野					中世	72.97
317		肝属郡高山町後田		須恵器				94
318		西之浦市現和					中世	94
319		種子島						
追 加								
320	唐人塚第 6号 古墳 1号	福岡県筑紫野市杉塚		須恵器一短頸壺			8 C 前	114
321	唐人塚第 6号 古墳 2号	福岡県筑紫野市杉塚		土師器一甕				114
322	力丸	福岡県北九州市八幡西区本城						注12
323	塞ノ神	鹿児島県伊佐郡菱刈町下市山		須恵器一壺		全製品・馬形	奈良?	115
324	津栗野	鹿児島県伊佐郡菱刈町田中		須恵器一壺		全製品・馬形	奈良	115
325	岡野	鹿児島県伊佐郡菱刈町田中	石室	土師器一甕		全製品・馬形	奈良	115
326	大迫	鹿児島県伊佐郡菱刈町徳辺		土師質一甕	土師質一坏	土師器坏 壺、人形	平安末 鎌倉初	115
327		鹿児島県川辺郡大浦町		須恵器				115
328	雙岫学校	鹿児島市草牟田町		土師器				115
墓 誌								
	いっちょう塚	熊本県玉名郡菊水町江田		銅板墓誌				2.3. 4.64

火葬墳墓文献目録

- 1 矢野一貞（『帰厚遺縮』四）1852年（嘉永5年）
- 2 高木慶蔵「日置鄭公墓誌銅板考」（『史籍集覽』第17冊）年（ ）月
- 3 佐々豊水「熊本県肥後国玉名郡江田村の字鶯原の古墳より発見せし銅板につきて」（『考古学会雑誌』第3号第4号）1899年（明治32年）
- 4 黒川直道「本邦金石文に関する書籍に就きて」（『考古学雑誌』第5巻第12号）1915年（大正4年）8月
- 5 坂本真鈴「朝倉通信」（『考古学雑誌』第18巻第5号）1928年（昭和3年）5月
- 6 川上市太郎「高良山、礫山枕付舟形磐棺」（福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書第9輯）1934年（昭和9年）3月
- 7 宮崎勇蔵「筑後国浮羽郡福富村西山田古墳地帯の遺跡」（福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第9輯）1934年（昭和9年）3月
- 8 浅田芳朗「福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第9輯紹介」（『史観』7）1934年（昭和9年）12月
- 9 島田寅次郎「福岡県に於ける中世の墳墓」（福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書第12輯）1937年（昭和12年）3月
- 10 藤森栄一「奈良時代の火葬墓—蔵骨器の形態学的研究—」（『古代文化』第12巻—第3号）1931年（昭和16年）3月
- 11 重盛重二、東才二「吉田村先史時代遺跡について」（『鹿児島県考古学会紀要』第3号）1953年（昭和28年）12月
- 12 松尾禎作「東肥前出土の奈良時代乃至平安初期の蔵骨器について」（佐賀県文化財調査報告3）1954年（昭和29年）3月
- 13 坂詰秀一「横浜市出土の二つの蔵骨器について」（『古代学研究』13）1956年（昭和31年）3月
- 14 藤沢一夫「墳墓と墓誌」（『日本考古学講座』6）歴史時代（古代）1956年（昭和31年）8月
- 15 梅原末治「日本古代のガラス」（『ミュージアム』第68号）1956年（昭和31年）11月
- 16 石部正志「大隅半島の骨壺」（『古代学研究』15・16）1956年（昭和31年）11月
- 17 齊藤時男「蔵骨器の底部穿孔について」（『若木考古』43）1956年（昭和31年）11月
- 18 松尾禎作「佐賀県杵島郡稲佐古墳群と火葬址」（『日本考古学年報』5）1957年（昭和32年）3月
- 19 渡辺正気「和同銭副葬の一蔵骨器」（『九州考古学』1）1957年（昭和32年）5月
- 20 佐藤次男「蔵骨器三題」（『銅鐸』13）1957年（昭和32年）7月
- 21 高木秀吉『末吉郷土史』1957年（昭和32年）3月
- 22 小城高校郷土部「佐賀県小城郡小城町出土の蔵骨器」（『九州考古学』3・4）1958年（昭和33年）4月
- 23 入江英親「平安時代墳墓の一例」（『九州考古学』3・4）1958年（昭和33年）4月
- 24 賀川光夫・小田富士雄『白瀉遺跡』1958年（昭和33年）5月
- 25 古田正隆「長崎県島原市三会礫石原出土の蔵骨器」（『九州考古学』5・6）1958年（昭和33年）11月
- 26 大神邦博「筑前鞍手郡若宮町出土の蔵骨器—昭和33年度西日本史学会春季大会考古学関係研究発表要旨—」（『九州考古学』5・6）1958年（昭和33年）11月
- 27 山川町教育委員会『山川町誌』1958年（昭和33年）

- 28 木下之治「佐賀県における埋蔵文化財の発掘発見の覚書」（『郷土研究』第9号）1959年（昭和34年）3月
- 29 三島格「骨製并副葬の蔵骨器について」（『古代文化』第3巻第6号）1959年（昭和34年）6月
- 30 小林麟也，三島格「骨製并副葬の蔵骨器について」（『古代文化』第3巻第7号）1959年（昭和34年）7月
- 31 三島格「肥後荒尾市境崎貝塚発見の岩隅」（『九州考古学』7・8）1959年（昭和34年）7月
- 32 三島格「熊本県下益城郡における蔵骨器について」—昭和33年度西日本史学会秋季大会考古学関係研究発表要旨一（『九州考古学』7・8）1959年（昭和34年）7月
- 33 三島格，小林麟也「骨製并副葬の蔵骨器について」（『古代文化』第3巻第8号）1959年（昭和34年）8月
- 34 藤岡法竜「熊本県八代市出土の蔵骨器」（『古代文化』第4巻一第1号）1960年（昭和35年）1月
- 35 寺師見国，三島格「鏝及びタカラガイ副葬の蔵骨器について」（『人類学研究』第7巻一第1～2号）1960年（昭和35年）4月
- 36 寺師見国，三島格「薩摩大口市伊佐郡における蔵骨器—昭和34年度西日本史学会秋季大会考古学関係研究発表要旨一」（『九州考古学』9）1960年（昭和35年）6月
- 37 木下之治「佐賀県における埋蔵文化財の発掘発見の覚書」（『郷土研究』第10号）1960年（昭和35年）10月
- 38 安井良三「日本における古代火葬墓の分類—歴史考古学的研究序論—」『西田先生頌寿記念日本古代史論叢』1960年（昭和35年）12月
- 39 松尾禎作『続佐賀県考古大観』1961年（昭和36年）8月
- 40 佐藤満洋「土師器使用の火葬墓について（直入郡新田における）」（『大分県地方史』26）1971年（昭和36年）12月
- 41 松下正司編『古代火葬墓発見地名表』1961年（昭和36年）
- 42 松下正司編『古代火葬墳墓研究文献目録』1961年（昭和36年）
- 43 長崎県教育委員会編『長崎県遺跡地名表』1962年（昭和37年）3月
- 44 唐津市史編纂委員会（松岡史）「奈良・平安時代」『唐津市史』1962年（昭和37年）8月
- 45 小田富士雄，霧久嗣郎「筑後柳坂永勝寺の遺物」（『史迹と美術』第33輯2）1963年（昭和38年）2月
- 46 熊本県教育委員会編『熊本県埋蔵文化財遺跡地名表』1963年（昭和38年）3月
- 47 松尾禎作「佐賀県下における奈良時代および平安初期の蔵骨器出土遺跡」（『日本考古学年報』6）1963年（昭和38年）10月
- 48 佐賀県教育庁社会教育課編『佐賀県の遺跡』1964年（昭和39年）3月
- 49 熊本県教育委員会編「墓誌牌をともなった狐塚の蔵骨器」（熊本県文化財調査報告第5集）1964年（昭和39年）3月
- 50 鹿児島県教育委員会編『鹿児島県遺跡地名表』1964年（昭和39年）3月
- 51 松本雅明編『城南町史』1965年（昭和40年）7月
- 52 原口長之「火葬としての小型横穴」（『熊本史学』第29号）1965年（昭和40年）9月

- 53 原口長之「小型横穴は火葬墓ではないか」(『九州考古学』25・26)1965年(昭和40年)10月
- 54 宮崎県立博物館編『図説宮崎の歴史』1967年(昭和42年)3月
- 55 波多野皖三, 春成秀爾『東郷遺跡群』1967年(昭和42年)3月
- 56 小林久雄「祝部土器を蓋とした蔵骨器」『九州縄文土器の研究』1967年(昭和42年)7月
- 57 小田富士雄「九州窯業—古代・中世における手工業の発達」(『日本の考古学』VI歴史時代(上)1967年(昭和42年)7月
- 58 山崎一雄「古代・中世における手工業の発達 工芸技術ガラス」(『日本の考古学』VI歴史時代(上)1967年(昭和42年)7月
- 59 小田幸子「宮地嶽神社境内出土の緑色ガラス製骨壺」(『月刊文化財』53)1968年(昭和43年)1月
- 60 福岡県教育委員会編『福岡県の文化財』1968年(昭和43年)3月
- 61 石川恒太郎『宮崎県の考古学』1968年(昭和43年)7月
- 62 石村喜英「古代火葬墓の研究と2・3の問題点」(『日本歴史考古学論叢』2)1968年(昭和43年)7月
- 63 高山明『埋もれていた朝倉文化』1969年(昭和44年)11月
- 64 井上辰雄『火の国』1970年(昭和45年)3月
- 65 宮小路賀宏『日上遺跡』(福岡県文化財調査報告第48集)1971年(昭和46年)3月
- 66 副島邦弘「飯氏馬場遺跡」(『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集)1971年(昭和46年)3月31日
- 67 熊本市文化財調査会(熊本市文化財調査報告書Ⅱ(北部地区))1971年(昭和46年)3月
- 68 宮小路賀宏編『西谷火葬墓群』(久留米市文化財調査報告書第3集)1971年(昭和46年)3月
- 69 賀川光夫『大分県の考古学』1971年(昭和46年)6月
- 70 由水常雄「文禰麻呂の緑ガラス骨壺と宮地嶽神社境内出土の緑ガラスの骨壺の問題」(『考古学雑誌』第57巻第2号)1971年(昭和46年)11月
- 71 西谷正編「鈴ヶ山古墳群の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—Ⅲ—)1972年(昭和47年)1月
- 72 小田富士雄「大隈山宮神社発見の蔵骨器」(『志布志町誌』上巻)1972年(昭和47年)
- 73 上村俊雄「田之浦の蔵骨器」(『志布志町誌』上巻)1972年(昭和47年)
- 74 井上裕弘編「第32地点の調査」『昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1973年(昭和48年)3月
- 75 石山勲「立明寺遺跡」(『日本考古学年報』24)1973年(昭和48年)3月
- 76 石山勲「放光寺古墳群」(『日本考古学年報』24)1973年(昭和48年)3月
- 77 隈昭志, 野田拓治編「尾窪」(熊本県文化財調査報告第12集)1973年(昭和48年)3月
- 78 江上敏勝「熊本県八代市東片町田平山火葬墓遺跡調査概報—熊本県蔵骨器出土地名(遺跡)集成表—」(『夜豆志呂』32・33)1973年(昭和48年)10月
- 79 桑原和憲「熊本県の文化財10 火葬蔵骨器」(『教育くまもと』№53)1973年(昭和48年)

- 80 白木原和美「類須恵器集成」（『南日本文化』第6号）1973年（昭和48年）
- 81 石山勲，酒井仁夫『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—Ⅳ—（本文編）塔ノ原遺跡』1974年（昭和49年）3月
- 82 井上裕弘「山陽新幹線（第32地点）遺跡」（『日本考古学年報』25）1974年（昭和49年）3月
- 83 鈴木重治「筑紫1号古墳」（『日本考古学年報』25）1974年（昭和49年）3月
- 84 宮小路賀宏「野田遺跡」（『日本考古学年報』25）1974年（昭和49年）3月
- 85 隈昭志，江本直，西町圭子編「沈日」（熊本県文化財調査報告第13集）1974年（昭和49年）3月
- 86 亀井明德他『朝倉橘廣庭宮跡伝承地第1次発掘調査報告』1974年（昭和49年）月
- 87 小田富士雄他（『宇佐市史』上巻）1975年（昭和50年）3月
- 88 横山邦継，後藤直編『板付周辺遺跡調査報告書』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集）
- 89 亀井明德「向佐野，長浦窯跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—Ⅵ—）1975年（昭和50年）3月
- 90 高木正文，緒方勉編『久保遺跡』（熊本県文化財調査報告書第18集）1975年（昭和50年）3月
- 91 向田裕始「広島県府中市中須出土の獣脚付骨蔵器」（『考古学ジャーナル』第111号）1975年（昭和50年）7月
- 92 山手誠治「白岩遺跡」『北九州市の埋蔵文化財』（北九州市文化財調査報告書第16集）1976年（昭和51年）3月
- 93 小田富士雄「山門遺跡」『北九州市の埋蔵文化財』（北九州市文化財調査報告書第16集）1976年（昭和51年）3月
- 94 新東晃一『放光寺遺跡（附曾於郡大隅町鳥居段遺跡・川内市屋形原発見蔵骨器報告）』（鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(2)）1976年（昭和51年）3月
- 95 福岡県教育委員会編（『くらてのむかし』その3）1976年（昭和51年）3月
- 96 奈良国立博物館編（『仏教美術』九州—（福岡）1976年（昭和51年）3月
- 97 新東晃一「隼人における共同体社会の崩壊期について 大口盆地の仏教文化（蔵骨器）とその意義」（『隼人文化』第2号）1976年（昭和51年）7月
- 98 森貞次郎「古墳文化にみられる古代氏族の盛衰」（『北部九州の古代文化』）1976年（昭和51年）5月
- 99 池辺元明，上野精志「柳ヶ谷遺跡・都地原遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—Ⅷ—）1977年（昭和52年）2月
- 100 基山町遺跡発掘調査団編『千塔山遺跡調査概報』1977年（昭和52年）2月
- 101 熊本県教育委員会編『熊本の文化財調査』（『九州自動車道と文化財』第1号）1977年（昭和52年）2月
- 102 桑野陽吉「九州の奈良・平安の陶磁」（『日田文化』第20号）1977年（昭和52年）3月
- 103 三島格『貝をめぐる考古学』1977年（昭和52年）3月
- 104 上村住典編『屏賀坂遺跡』（北九州市文化財調査報告書第23集）1977年（昭和52年）3月
- 105 木太久守編『椎木山遺跡』（北九州市文化財調査報告書第24集）1977年（昭和52年）3月
- 106 関晴彦編「大道端遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—ⅩⅣ—）1977年（昭和

- 和52年) 3月
- 107 栗原和彦, 松村一良「茶臼山城跡の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』—XVI—
1977年(昭和52年) 3月
- 108 松本健郎他『蓮花寺跡・相良頼景館跡』(熊本県文化財調査報告書第22集) 1977年(昭和52年) 3月
- 109 佐賀県教育委員会編『二塚山遺跡群』1977年(昭和52年) 4月
- 110 山手誠治「椎木山遺跡」(『日本考古学年報』28) 1977年(昭和52年) 4月
- 111 島津義昭「平原瓦瓦窯遺跡」(『日本考古学年報』28) 1977年(昭和52年) 4月
- 112 新東晃一「国分平野の遺跡」(『隼人文化』第3号) 1977年(昭和52年) 7月
- 113 田中義恭, 星山晋也, 東野治之, 大脇潔, 西口寿生, 津村広志編『日本古代の墓誌』1977年(昭和52年)
9月
- 114 川述昭人編「唐人塚古墳」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報』—XVII—) 1977年(昭和
52年) 11月
- 115 新東晃一「南九州における人形・馬形土製品の祭祀形態」(『古代文化』第30巻第2号) 1978年(昭和
53年) 2月

Tab. 22の文献註

- 註1 福岡県糸島郡前原町の志登支石墓収蔵庫に展示
- 註2 福岡県教育委員会調査 井上裕弘氏の御教示による。
- 註3 東京教育大学調査
- 註4 福岡県教育委員会調査
- 註5 福岡県教育委員会が調査し, 詳細は宮小路賀宏氏の御教示による。
- 註6 福岡県教育委員会調査
- 註7 小田富士雄, 宮小路賀宏氏ら調査, この骨蔵器は九州大学考古学研究室に展示してある。
- 註8 1977年12月現在福岡県教育委員会が発掘調査を実施
- 註9 福岡県築上郡大平村教育委員会蔵であり大平村郷土史会会員の大森勝留氏の御協力により実測図を作成させて頂く。
- 註10 福岡県教育委員会調査
- 註11 福岡県文化財指導委員の宮本工氏蔵で, 実測図を作成させて頂く。
- 註12 北九州市教育委員会の調査, 木大久守氏のご教示による。

Tab. 23 和銅開珎・万年通寶・神功開寶出土一覽表

遺跡名	所在地	和開 銅珎 銀銅	万 年 通 寶	神 功 開 寶	遺 跡 の 種 類	共伴遺物	文 献
福岡県							
汐井掛5号墳墓	鞍手郡若宮町沼口	5 + α	2 + α	3 + α	火葬墓	須恵器骨蔵器	上野精志「汐井掛墳墓の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XX-) 1978
結浦	筑紫郡太宰府町	2			火葬墓	須恵器骨蔵器	渡辺正気「和銅銭副葬の一蔵骨器」(『九州考古学』1) 1957
杉谷	久留米市高良内杉谷	1			火葬墓	須恵器骨蔵器	矢野一貞「埴厚遺物縮図」1852宮小路賀宏編「西谷火葬墓」(久留米市文化財調査報告書第3集)1971
	粕屋郡久山町中久原2515			1		五銖銭・寛永通寶	『東京国立博物館収蔵品目録』
高知県							
八王寺古墳	香美郡土佐山田町八王寺山西麓						岡本健児「高知県の考古学」1967
	高知市東久万西山		1	1		富寿神寶1、他中国銭多	岡本健児「高知県高知市東久万古銭埋蔵地遺跡」(『日考古学年報』12) 『高知県の考古学』1967
山口県							
	柳井市安行大字濡田	8				銭形銅製品、銭形土製品、刀片、鉄器片	弘津史文「和銅開珍並に伴出遺物に就いて」(『考古学雑誌』12-2) 1922
	下関市長府町豊浦字覚苑寺	?			鑄銭遺跡	和銅開寶、銭茫、鞆口、埴塙	入田整三「長門国の鑄銭司について」(『山口県史蹟名勝天然記念物調査報告』4-5)
見島56号古墳	萩市見島大字本村字横浦	1		2	古墳群	隆平永寶1、承和昌寶1、貞観永寶	『見島総合学術予備調査概報』1960

						1, 金銅製釵子, 石帯, 青銅ヒ	『見島綜合學術調査報告』
	柳井市大蔵	数十					
広島県							
草戸干軒	福山市草戸干軒	?	?			隆平永寶	
	安芸郡音戸町瀬戸島 亀ヶ首	?					石田茂作『天平の地寶』 1961
	芦品郡網引村			(1)			西村貞次『置賜盆地の古代文化』(『東置賜郡史』上)
岡山県							
	児島市水島	?	?	?			入田整三『和銅開珎, 万年通寶, 神功開寶の三錢貨の分布に就いて』(『寧楽10』付表) 1928
	小田郡矢掛町	1			火葬墓	碑製墓誌, 土器	梅原末治『備中国小田郡に於ける下道氏の墳墓』(『考古学雑誌』7-5)1917
	笠岡市大飛鳥洲	?	?	?	祭祀7, 8層	隆平永寶, 富寿神寶, 饒益神寶, 貞觀永寶, 延喜通寶, ガラス片, 和三彩, 緑釉, 須恵器, 土師器, 鈴, 銅鏡	鎌木義昌『岡山県笠岡市大飛鳥遺跡』(『日本考古学年報』15) 1967 鎌木義昌・間壁忠彦『大飛鳥遺跡』『倉敷考古館』1964
島根県							
出雲国庁	松江市大草町宮の後	2					松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1970
兵庫県							
	川辺郡西谷村切畑長尾山 2-11	6 +1)	10 +(1)	23 +(1)			角田文衛, 梅原末治『摂津川辺郡長尾山に於ける古銭の出土』『西宮・3』
	宝塚市北米谷	6			火葬墳墓	骨蔵石櫃, 金銅骨蔵器1, 横口平壺1	末永雅雄『宝塚市北米谷出土の火葬蔵骨器』『日本歴史考古学論叢』1966

	伊丹市外崎	3	21	4		隆平永寶 1	山田美成(『海録』巻13)	
堂坂遺跡	宝塚市西谷大原野	1		1		隆平永寶 1, 壺 7 鉢 4, 中国銭	宝塚市教育委員会「堂坂遺跡発掘調査報告書」(宝塚市文化財調査報告書 3) 1971	
	氷上郡山南町谷川生田	6				和三彩壺	広瀬武夫「土中の郷土氷上」(『兵庫県史』1) 1974	
	城崎郡	1			墳墓	蔵骨器	大阪市立博物館「但馬の歴史と文化財展目録」	
播磨国分寺	姫路市	?					浅田芳朗「播磨国分僧寺上」(『考古学ジャーナル』88) 1973	
大 阪 府								
	大阪市淀区長柄	?		?		隆平永寶, 延喜通寶	甲賀宣政「古銭分析表」(『考古学雑誌』9-7) 1919	
	大阪市淀川毛馬閘門	?		?		隆平永寶, 延喜通寶	甲賀宣政「古銭分析表」(『考古学雑誌』9-7) 1919	
四天王寺講堂	大阪市天王寺区	?					柴原永遠男「続日本史研究」	
郡家今城遺跡	高槻市今城町 1 - 782	10	1		井戸 溝	土師器, 灰釉, 曲物, 土鈴	高槻市教育指導部社会教育課(『昭和49年度現地説明会資料』1) (『高槻市』史考古篇) 1973	
上田部遺跡	高槻市城北町~桃園町	2				木筒, 井戸枠, 砧下駄, 馬鍬	高槻市教育委員会「上田部遺跡調査概報」(『高槻市史』考古篇) 1973	
百濟寺跡	枚方市宮之坂三丁目	1			寺址	瓦, 埴, 鉄釘 隆平永寶 1, 須恵器, 土師器	『河内百濟寺跡発掘調査概報』1965	
陵南遺跡	堺市百舌鳥陵南町		1		河川状遺構	寛平大寶 1	『百舌鳥陵南遺跡発掘調査概要』	
	南大阪町ドンズルボウ				?	窯跡	平瓶, 皿	森浩一「和泉河内窯の須恵器編年」(『世界陶磁全集』1)
	堺市土師新田	508					鉄函	『銭録』
和泉国府	泉市府中	1	1	2		須恵器, 土師器 土馬, 屋瓦	山本博(『大阪府南河内郡大和川川床の窯址の廃寺址』年報 4) 1956 大阪府教育委員会「和泉国府発掘調査概要」1966	
横尾山経塚	和泉市横尾山施福寺境内		1			経塚	貞観永宝, 経筒和鏡, 青磁, 白磁合子	秋山進午「大阪府和泉市横尾山経塚群の調査」

						銅製花瓶, ガラス小壺	(『日本考古学年報』15) 1967
	東大阪市石切辻子谷	1			火葬墓	蔵骨器	元興寺仏教民俗研究所「墓制の歴史」1973
金剛輪寺観音堂	南河内郡	1				五鈴付杏葉2, 三鈴付環1, 四鈴付環1 曲玉1, 金環2	(『観古集』第1冊)
鹿谷寺	南河内郡太子町山田金山谷1065	?				土師器, 須恵器	
	南河内郡道明寺船橋	14	1	4	井戸, 窯跡付近	富寿神寶1, 饒益神寶1, 隆平永寶3, 延喜通寶1, 開元通寶, 元豊通寶 他	森浩一「大和川川床出土の古銭」『古代学研究15・16』1956 山本博「船橋大和川川床の窯址と廢寺址」(『古代学』6-2)
	北河内郡四條町		40				入田整三「和銅開珎. 万年通寶. 神功開寶の三錢貨の分布について」(『寧楽10』付表) 1928
和歌山県							
	和歌山市関戸	1		1	火葬墓	蔵骨器, 古瓦	宮田啓二「和歌山県関戸出土の蔵骨器」(『熊野路考古』4) 1964
	田辺市稲成町荒光	2		18	火葬墓	小形壺1, 環3 蓋3, 青銅板残片2	浦宏「南紀伊九橋丘発掘の一奈良朝墳墓」(『考古学』11-4) 1940
奈良県							
平城宮	奈良市佐紀町	13 +(α)	15	22	北一条		「原田淑人氏報」
平城宮東大溝	奈良市佐紀町	15 +(4)	12 +(3)	22	東大溝	土師器, 須恵器, 瓦, くし, 鏡片	岸熊吉(奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告12) 1934
平城宮	奈良市佐紀町	2			朝堂院北方新道路側溝開墾中		(『埋蔵文化財発掘調査報告』5) 1957
平城宮	奈良市佐紀町	?			第2次大極殿東外郭		(『奈良国立文化財研究所年報』1970) 1971
平城宮	奈良市佐紀町	49	23	29	東三坊大 路側溝下	隆平永寶65, 富寿神寶82, 永和昌寶	(『奈良国立文化財研究所年報』1970) 高島忠平「平城京東

					層	52. 長年大寶63. 鏡 益神寶19. 貞觀大 寶18. 施釉陶器. 土師器. 須惠器. 瓦. 土馬. 木簡	三坊大路東側溝出土の施釉 陶器」(『考古学雑誌』57 - 1) 1971
平城宮	奈良市佐紀町		1		東三坊大 路側溝中 層	隆平永寶 5. 富寿 神寶 1. 永和昌寶 2. 長年大寶 4. 鏡 益神寶 4. 貞觀永 寶13. 寛平大寶67	高島忠平「平城京東三坊 大路東側溝出土の施釉陶器」 (『考古学雑誌』57 - 1)1971
平城宮	奈良市佐紀町		3	3	SE311 A第1次 井戸礫敷 面上	土器. 木製品	「奈良国立文化財研究所編」 (『平城宮発掘調査報告』IV) 1965
平城宮	奈良市佐紀町		5	4	SD573		(『平城宮発掘調査報告』IV) 1965
平城宮	奈良市佐紀町		2	9	G群第2 次盛土中 一条通北 佐紀池東	不明錢 1	田中琢「昭和34年平城宮跡 第2次発掘調査概要」 (『奈良国立文化財研究所年 報』1960) 1961
平城宮	奈良市佐紀町					鉄釘. 麻布片. 木製品	(『日本考古学』Ⅶ歴史時代 下) 1967
平城宮	奈良市佐紀町		?	?	宮城東南 隅宮外	隆平永寶 160以上 土馬, 土錘, 木簡	(『奈良国立文化財研究所年 報』1966) 1967
平城宮	奈良市佐紀町		?	?	東院南接 宮外他	麻布. 漆漠片. 瓦 木簡. 堅櫛. 斎串 木印.	『平城宮第59・63・68次発掘 調査概報』
平城左京2条2 坊6坪	奈良市法蓮寺町		?	?		麻布. 堅櫛. 斎串 墨書土器. 三彩. 緑釉瓦. 木簡	横田拓実・石松好雄・田 辺征夫「平城宮跡・飛鳥藤 原宮跡発掘調査」(『奈良国 立文化財研究所年報』1971) 1972
平城京左京三条 二坊	奈良市佐紀町		2		SB970 柱掘形の 礫板下面		町田章編「平城京左京三条 二坊」『奈良市庁舎建設地 発掘調査報告』1975
平城宮朱雀大路	奈良市六条町183~5		1 2	2	西側溝 東側溝東 方鍛冶工 房跡周辺		『平城京朱雀大路発掘調査報 告』1974 黒崎直編「平城京朱雀大路 発掘調査報告』1974

平城宮左京八条三坊	奈良市佐紀町	23 14		5	S D1155 S D1300		佐藤興治編『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976
平城宮	奈良市佐紀町		2	11	S B145 西妻中央 附近	木簡・瓦・埴土器。	奈良国立文化財研究所編(『平城宮発掘調査報告』Ⅳ) 1962
平城宮一条三坊	奈良市佐紀町	119	32	59	6 A F B区		町田章編(『平城宮発掘調査報告』Ⅸ) 1975
平城宮	奈良市佐紀町		8	7	6 A B O区		榎本亀治郎編(『平城宮発掘調査報告』Ⅳ) 1975
右京五条四坊三坪	奈良市佐紀町	4			S X030 火葬墓	墨・筆管・絹織物 を含む沈澱物	奈良国立文化財研究所編『奈良国立文化財年報』1977
正倉院	奈良市雑司町	15		3	染織品中 より		『正倉院柵別目録』
西山	奈良市秋篠町西山1191-1	2			火葬墓	土師器製骨壺	小島俊次「奈良県奈良市西山古墳」(『日本考古学年報』8)1959「大和出土の二例の骨壺」(『古代学研究』15・16)1956
興福寺須弥壇下	奈良市登大路町	134				開元通寶1, 砂金 金塊, 金延板 銀梳, 玉	保坂三郎「興福寺金堂鎮壇具」(『国華』796) 『世界考古学大系』3
興福寺	奈良市登大路町	11			寺院	金塊, 砂金	『奈良県史蹟名勝天然記念物調査会抄報』
春日大社	奈良市春日神社前	1					『多聞院日記永祿2年5月1日条』
元興寺塔址	奈良市平芝新屋町元興寺	12 +4片	24 ?	40 ?		銀腕, 硬玉, 勾玉 ガラス玉, 金延板 水晶片	稲森賢次(奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告11) 1930
東大寺西塔址	奈良市水門町	1片	10	3	西塔址東 第1トレン チ	瓦, 銅片, 泥塔 瓦器, 土師質土器	(奈良県文化財報告8)1965
西隆寺址	奈良市西大寺町藤の森	6		1			黒崎直「西隆寺発掘調査報告」1976
薬師寺	奈良市西ノ京町	4			薬師仏台 座下		『薬師寺国宝薬師三尊修理工事報告書』
薬師寺西塔址	奈良市西ノ京町	1	1			塑像破片, 勾玉, 土 塔, 珠数玉, 古瓦 寛永通寶, 唐床銭	(『日本古文化研究所報告』5) 1937
新薬師寺	奈良市高畑福井町	1					佐藤虎雄「和銅開珎発見地名表」(『古代学』11-4)
法華寺	奈良市	2	6	2			(『日本考古学年報』7) 1958

法華寺	奈良市	13		6		金板. 銀板	
西大寺	奈良市西大寺町	1			寺域	土器	入田整三
西大寺西塔址	奈良市西大寺町	?	?	?		開基勝 1	『奈良市史』考古編
西大寺東塔址	奈良市西大寺町	2					佐藤虎雄「和銅開珎発見地名表」(『古代学』11-4)
	奈良市杏家片地中	1	15	98			『東京国立博物館収蔵品目録』
唐招提寺	奈良市五条町	1	1		薬師如来立像左手掌	隆平永寶 1	倉田文作『像内納入品』
唐招提寺	奈良市五条町			1	盧舎那仏台座蓮弁の間		
	奈良市古市町	201				須恵器	(『大阪古泉会報告』57号) 入田整三(『寧楽10』付表)1928
	奈良市五条町五条山(赤肌山)	?					(『東京古泉会報告』3号) 入田整三(『寧楽10』付表)1928
大安寺	奈良市大安寺町			?		施釉陶器.瓦.青磁鏡片.ガラス片.土師器.須恵器	『奈良国立文化財研究所年報1967』1967
	奈良市法蓮寺町	1 (19)	20 (22)	35 (105) 5 (115)		金板2. 銀板2. 水晶念珠玉大1. 小42. 開元通寶3	柏木貨一郎「上代板金考並京目田舎目説」(『学芸志林』5-25) 福山敏男「日本建築史の研究」
	奈良市茗荷町1025付近	313				素焼壺	柴原永遠男『続日本史研究』
山村廃寺	奈良市横井藤原ドドコロ	5	1			隆平永寶.刀装具. 刀身断片.唐式鏡. 金銅菩薩立像	榎本亀次郎「大和国添上郡発見の金銅仏等について」(『考古学雑誌17-5』) 1927
羅城門跡	大和郡山市	13			朱雀大路 西側溝南 延長部		『平城京羅城門跡発掘調査報告』1972
	生駒郡平群村久安寺銭 沈山	52					(『大阪古泉会報告』63号) 入田整三(『寧楽10』付表)1928
法隆寺	生駒郡斑鳩町大字法隆寺	1			法隆寺五 重塔上成 基壇西側 葛石脇の 土中		『法隆寺国宝保存工事報告書』

	生駒郡谷田乾神山	1			陶業遺跡	碗。蓋。埴。把手	上田三平「奈良県生駒町の古代陶業遺跡」(『考古学雑誌』16-1)1925
	生駒郡南生駒村小平尾東明岳	1					聖蹟史蹟保存南生駒顕彰会報。佐藤虎雄「和同開珎発見地名表」(『古代学』11-4)
	生駒郡平郡村信貴山高安城字出城	3		?		元豊通寶1.壺1.蓋破片1	『和同開珎発見地名表』。佐藤虎雄「日本考古学」。(『奈良県抄報』5)1955
法輪寺旧境内	生駒郡斑鳩町三井字井垣	?			井戸址	墨書土器。須恵器。	小野真一「皇朝十二銭の出土地」(『沼津考古学研究所研究報告』4)1971
	山辺郡都介野村白石大坪	2				須恵器。瓦器。木製品。	『都介野村史』1935
	山辺郡都介野村針小西	(?)			墳墓	土師藏骨器	『都介野村史』1955
	山辺郡都介野村	80					(『大阪古泉会報告』57号)
	山辺郡都介野村蘭生高塚	1	2			三彩土師片	『奈良総合文化調査報告書』都介野地区,(『大和考古資料目録』2)1973
	天理市竹ノ内ノ谷	5	1			長年大寶1.土器2	『東京国立博物館収蔵品目録』
小治田朝臣万呂墓	天理市甲岡字西畑	10			火葬墓		東野他「日本古代の墓誌」1977『都介野史』
	天理市勾田畑地	2				土器	入田整三(『寧楽10』付表)1928
別所占墳	天理市別所町	?					『丹波市町史』
	大和郡山市富雄村一ノ谷観音山	1	1			土馬2	大場磐雄「神通考古学論攷」
山口神社鳥居南	北葛城郡当麻町	1					『当麻村誌』1956
当麻寺西塔九輪	北葛城郡当麻町	1	6	3			入田整三(『寧楽10』1928)
達磨寺	北葛城郡王子町字門前達達磨寺境内	7	6	3	寺域		入田整三(『寧楽10』1928)
	北葛城郡当麻町染野	?					『当麻村誌』1956
稻荷西古墳	磯城郡桜井町谷松本	1				土師器。須恵器鉄釘10	『桜井町史』1954
	磯城郡田原本町伴堂	8			火葬墳墓		石田茂作「天平地宝」1937
	桜井市笠字横枕	2 (1)		(1)	火葬墓	碧玉製石帯。須恵器。土師器	(『大和誌』2-4)。(『奈良県抄報』五)1955

檀原遺跡	檀原市畝傍町	1			5号井戸	土師器皿	(奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告17) 1961
坂田寺	高市郡明日香村			2			『鬼頭清明氏報』
	高市郡明日香村奥山	?			墳墓	把手付土師質藏骨器	(『大和考古資料目録』2) 1973
	高市郡明日香村豊浦甘樞丘	1			墳墓	須恵器壺	網干善教「奈良朝火葬墓の一考察」『日本考古学論叢』1966
	宇陀郡室生村大野緑川丘陵地帯	64	64	?		壺	『室生村史』
室生寺	宇陀郡室生村室生寺如意山	189			石塔地下	琥珀玉、水晶製舍利容器、銅碗、観音像珠玉1、瑠璃玉11	(奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報5) 1965
靈安寺塔址	五条市靈安寺802			1		隆平永寶2、開元通寶1、銅鏡4、銅碗2、瓦器、須恵器	小島俊次「靈安寺塔跡の調査」(『大和文化研究』9-3) 1964(『日本考古学年報』16)
	桜井市小夫瓦毛原	1				鈴柄1、祝部土器土師器破片	岸熊吉「和銅開珎発見地名表」(奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報5) 1965
如意輪寺境内	吉野郡吉野町吉野山如意輪寺敷地	3			寺域		『奈良時代文化雑攷』1944
京 都 府							
	綴喜郡田辺町	数十					佐藤虎雄(『古代学』11-4)
京都大学北部構内	京都市左京区北白井	1		1			柴原永遠男『続日本史研究』
	相楽郡和束町	5					佐藤虎雄「和同開珎発見地名表」(『古代学』11-4)
	京都市下京区壬生	9	15	28			(『東京古泉会報告』17号) 入田整三(『寧楽10』1928)
花園山頂	京都市左京区花園町	30				土器	(『東京古泉会報告』17号) 入田整三(『寧楽10』1928)
	京都市伏見区稲荷山	1					佐藤虎雄「和同開珎発見地名表」(『古代学』11-4)
	京都市伏見区桃山	?					甲賀宜政「古銭分析表」(『考古学雑誌』9-7) 1919
	京都市右京区	300				土器	入田整三(『寧楽10』1928)

上加茂神社	京都市北区上賀茂	?	?	?	社域	合計 782枚	「日本紀略永延元年3月16日条」「百練抄」
福西4号古墳	京都市右京区大枝東長町	1				須恵器, 土師器 瓦器, 刀子, 直刀, 釘馬具	「洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査」
	乙訓郡己訓村井ノ内 回向場7	1 (1)	1 (3)	18			時野谷勝(「京都府史蹟名勝天然記念物調査報告」18) 角田文衛「京都府長岡町出土の骨壺」(「古代文化」5-5)
尼塚5号古墳	久世郡城陽町寺田	1				木炭	高橋美久二(「埋蔵文化財発掘調査概報」1969) 1969
	綴喜郡田辺町善賢寺慶照 寺境内の裏山	5				土師器の中より 5枚	「埋蔵文化財発掘調査概報」 1964(「古代文化」12-5)
	綴喜郡宇治田原村郷之口 向畑	1					「宇治田原発掘の古銭と土器」(「史迹と美術」)
茶臼山古墳	綴喜郡八幡町	1					梅原末治「山城綴喜郡茶臼山古墳と其発掘物」(「考古学雑」6-9) 1916
	相楽郡加茂町高田大木屋	70 +20				木炭片	時野谷勝(「京都府史蹟名勝天然記念物調査報告」18) 1938
	相楽郡加茂町銭司	?			鑄銭所	軒丸瓦, 銅滓, 埴塼, 韃口, 砥 石, 木炭	「日本考古学」. 梅原末治(「京都府史蹟名勝天然記念物調査報告」4-7)1922
	乙訓郡大枝村中山夷山	?	?	?		兜	「考古図聚」
	亀岡市北ノ庄	約 20	約 10	約 40			(「東京古泉会報告」23号)
上津遺跡	相楽郡木津町宮ノ裏上津	○	○	○	「泉津」		考古ニュース(「考古学ジャーナル」第136号) 1977
中堂寺	京都市		?	1			甲賀宣政「古銭分析表」 (「考古学雑誌」9-7)
	乙訓郡大山崎村山 崎観音堂奥ノ谷		1	?		隆平永寶	入田整三(「寧楽10」) 1928
上御霊社	京都市北区小山			40 余		社地	(「東京古泉会報告」21号)
滋 賀 県							
崇福寺	大津市南滋賀町長尾	1	1	4	弥勒堂址		

		15	9	82	寺院堂内陣東端近く。		(『滋賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』2)。肥後和男『大津京址の研究』1929
		1		2	白子善七所蔵。		
		2	1	5	塚本権右衛門所蔵		
		1	2	4	弥勒堂東方		(『滋賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』5)
宮遺跡	高島郡マキノ町姪口宮	25				須恵器壺	琵琶湖文化館『奈良時代の文化』
浅井中学校校庭	東浅井郡浅井町内保	6				土師器壺 『古代文化』は4枚とする	佐藤宗男「大戸の湖南遺跡出土の皇朝十二銭について」(『滋賀県文化財研究月報』4)(『古代文化』13-1)
南滋賀町廃寺	大津市南滋賀町	5			墳墓	骨蔵器	柴原永遠男『続日本史研究』
南滋賀遺跡	大津市南滋賀町	5			壺中より	須恵器壺	大津市教育委員会編「大津市南滋賀遺跡調査概報」
伝崇福寺址	大津市南滋賀町	7	12	49			(『日本考古学講座』7)1956
祇園遺跡	大津市祇園町一町田	?	?	?		土師器、須恵器	(『滋賀県遺跡目録』1)
鋳物遺跡	大津市瀬田町南大萱鋳物	?					(『滋賀県遺跡目録』2)
青江遺跡	大津市瀬田町神領青江	?					(『滋賀県遺跡目録』1.2)
桐生辻遺跡	大津市瀬田町桐生辻	?					(『滋賀県遺跡目録』1.2)
	大津市瀬田町橋本在野々原	2	15	45		行基焼土器	(『東京古泉会報告』18号)中川近礼「齋襲に入りたる古銭」(『考古学雑誌』2-6)1911
			又	は			
				83			
沖島赤崎遺跡 (赤崎湖底遺跡)	近江八幡市沖島	197	238	810	湖中		(『日本考古学講座』1・7)1956(『滋賀県遺跡目録』1・2)(『帝室博物館年報』S7)佐藤虎雄『日本考古学』
	蒲生郡安土町～神崎郡能登川町地先	5	1	6		隆平永寶(91).富寿神寶(125).承和昌寶2.長年大寶(31).	佐藤宗男「大戸の湖南遺跡出土の皇朝十二銭について」(『滋賀県文化財研究所年報』4)

						鏡益神寶4(1).貞観 永宝8.延期通寶10. 乾元大寶1(2)	(『滋賀県文化財研究 月報』4)
森西遺跡	高島郡マキノ町森西	?				骨壺	(『滋賀県遺跡目録』2)
	大津市石山在堤防	1	2	9			(『東京古泉会報告』21号)
	大津市稲津	?					甲賀宣政「古銭分析表」
	坂田郡米原町	3		1			佐藤宗男「大中の湖南遺跡 出土の皇朝十二銭について」 『滋賀県文化財研究所月報』
琵琶湖底			○				古代史通信(『東アジアの古 代文化』14) 1978
服部遺跡	守山市服部町		○	○			考古ニュース(『考古学ジ ャーナル』第119号)1976
中多良入江湖辺遺跡	坂田郡米原町中多良入江湖辺						(『滋賀県遺跡目録』2)
	大津市滋賀里	16	9	82			
三 重 県							
	度会郡南勢町道瀬浜	1				須恵器片 1	考古ニュース(『考古学ジ ャーナル』第122号)1976)
	松坂市船江	1	1			五銖銭	(『東京古銭会報告』7・21)
贗遺跡	鳥羽市安楽島半島	8				帯金具16.銅鐵8 磁器片	(『考古学ジャーナル』79) 1973
	度会郡山田久留町篠尾山	?	?	?		須恵器 2	(『観古集』第9冊)
岐 阜 県							
不破関址	関ヶ原町小関	3			Fトレン チ土墨版 築直下	土師器	野村忠夫「律令三関の称呼 をめぐって」(『日本歴史』 314)(『考古学ジャーナル』 93) 1974
	不破郡垂井町宮代四ッ辻	10			古墓	骨壺 2 骨片 骨壺に各 5 枚づつ 分納,	『美濃国不破郡宮代村学四ッ 辻発掘墳墓』(『考古図集』 11),後藤守一『墳墓の変遷』
国分寺	不破郡垂井町国分寺 南大門ノ西	?			南大門の 西より出 土		石田茂作「奈良時代遺物出 土地名表」『奈良時代文化 雑攷』1944
	勝比郡山県山麓			1			(『東京古銭報告』15号)

愛 知 県						
	海部郡佐織村諸桑中江 128-1			1		隆平永寶1. 前漢 ~ 錢85貫. 甕 壺 (『愛知県史蹟名勝天然記念 物』16)
	東春日井市小牧町北外山 神田1566-1	3		4		富寿神寶2. 大徳 通寶. 古瀬戸 (『愛知県史蹟名勝天然記念 物』16)
福 井 県						
野々宮廃寺	福井県武生市五分市町 の場22-34	9				※『古代文化』は 和銅開珍2枚とす る 須恵器. 瓦. 博仏 礎石. 鉄釘 斎藤優「福井県武生市野々 宮廃寺址」(『日本考古学年 報』12). 斎藤嘉造「福井武生 市野々宮廃寺址出土品」 (『古代文化』4-5)
阿納塩浜遺跡	小浜市阿納	1				須恵器坏. 土師 器珎 小浜市教育委員会「阿納塩 浜遺跡」
石 川 県						
能登国分寺	七尾市国分町	6				(『七尾市史資料編』4)
末松廃寺	石川郡野々市町末松	1			金堂西側 にて採集	野々市町教育委員会 「史跡末松廃寺跡」
笹原新A遺跡	加賀市笹原新町	5			土師器. 須恵器 鉄刀子. 紡錘車. 土錘	「石川県北陸自動車道埋蔵文 化財分布調査報告書」
	加賀市宮地	13			骨蔵器. 須恵器蓋 坏に包蔵	上野与一(『石川考古学研究 会会誌』9)
	金沢市三小牛町三小牛山	545			土師器. 銅製小鈴 鉄片	石川県埋蔵文化財包蔵地台 帳. 京都国立博物館蔵
富 山 県						
高瀬遺跡	井波町	1		4	表採	隆平永寶2 『富山県井波町高瀬遺跡発掘 調査概報』
	井波町穴田地区		1	1		墨書土器
静 岡 県						
	富士宮市北山字峯山6227	1				開元通寶. 洪武通 寶. 甕 『東京国立博物館収蔵品目 録』
	掛川市栗本		1			『東京国立博物館収蔵品目 録』(『日本考古学講座』 7) 1956

	引佐郡細江町下気賀		1			五銖錢. 洪武通寶	佐藤虎雄「日本考古学」
伏見第5号古墳	駿東郡清水町			1		隆平開寶3. 土師器. 須恵器	(「沼津考古学研究所研究報告」4) 1971
長野県							
	塩尻市洗馬		1			貨泉. 五銖錢	(「東京古泉会報告」3号) 入田整三「和銅開珎. 万年通寶. 神功開寶の三錢貨の分布に就いて」(「寧楽10」付表) 1928
乞食塚古墳	諏訪郡茅野市高部		1 (3)	(1)	古墳	勾玉. 小玉. 玻璃小玉. 金銀 金銀. 轡	宮崎紀「信濃宮川村の一古墳」(「考古学雑誌」26-1) 1936
ミサモリ塚古墳	上伊那郡朝日町平出					勾玉. 直刀 馬具	宮崎紀「信濃宮川村の一古墳」(「考古学雑誌」26-1) 1936
	下高井郡長丘村田麦		1			隆平永寶2. 前漢 ~明錢. 朝鮮錢 木箱(?)	日比野丈夫(「長野県埋蔵文化財調査報告」1)
上の越遺跡	佐久市			1		把手付椀	(「歴史手帖」2-2) 1974
新潟県							
	北浦原郡紫雲寺町真野代		1				入田整三「和同開珎. 万年通寶. 神功開寶の三錢貨の分布に就いて」(「寧楽10」付表) 1928
	中頸城郡下池田新田			1			(「大日本貨幣研究会報告」21号)
神奈川県							
	川崎市管生		1		古墓	骨壺2	(「埋蔵文化財要覧」2)
森戸原遺跡	横浜市港北区日吉本町182		1		A-地区 H-17号 住居跡	土師器. 須恵器	榊原松司. 石川和朗「和同開珎を出土した住居」(「考古学雑誌」59-1) 1973
東京都							
浅草寺	台東区		?			瓦. 鉄鉢形土器 花瓶. 緑釉花瓶	稲垣坦元「東京浅草寺境内の発掘物」(「日本考古学年報」2) 1953

武藏国分寺	国分寺市西元町	?			北院裏 崖下	隆平永寶. 富寿神 寶	長支博. 們国男「八王寺市大 目町甲の原平安時代竪穴住 居址調査報告」(『多摩考古』 7) 1965
中田遺跡	八王子市		?			住居跡	
船田遺跡	八王子市船田			(1)	SB02 住居跡	鉄鏃. 鉄鋤. 土師 器. 木器. 須恵器	『船田Ⅱ次調査』1972
群馬県							
白山古墳	勢多郡宮城村苗ヶ島字 白山166-1	8			古墳	葦手大刀. 銅鍔片. 飛燕形鉄鏃. 直刀	尾崎喜左雄「群馬県勢多郡 白山古墳」(『日本考古学年 報』7) 1958
弁天塚16号古墳	山田郡毛里田村矢田 堀北原	?				埴輪	(『群馬県史蹟名勝天然記念 物調査報告』5)
	勢田郡荒砥村二ノ宮字前 原2310-1					宋銭多数. 唐~明 銭. 朝鮮銭	『東京国立博物館収蔵品目 録』
山形県							
二色塚2号古墳	東置賜郡赤湯町二色 塚南京	2			古墳 玄室床面	帯金具. 鉄鏃. 直 刀. 刀子. 須恵器 片	斎藤忠「日本古代遺跡の研 究」西村真次『置賜盆地の 古代文化』1937 (『山形県文化財調査報告』4)
立林古墳	東置賜郡高島町立林	1			古墳	炭屑	川崎利夫「日本考古学の諸 問題」『山形県遺跡地名表』 (『山形県文化財調査報告』 4)
茨城県							
正宗寺	久慈郡増井村			?		富寿神宝. 唐~元 銭. 朝鮮銭	『銭録』 『新安手簡4』
岩手県							
猫谷地遺跡	和賀郡江釣子村猫谷地	4			68号住居 跡		菊地郁雄「江釣子村猫谷地 遺跡の調査から. 特に竪穴 住居群について」(『北上市 立博物館だより』1-2)
	花巻市上根子熊堂	10 (1)			古墳	土器. 勾玉. 直刀 練玉	小笠原迷宮「和同銭を出土し た陸中国熊堂の古墳群」 (『考古学雑誌』14-7)1924

西根遺跡	胆沢郡金ヶ崎町西根 縦街道南	1				刀子1. 直刀. 蕨手刀. 鉄鎌. 鉄斧. 玉類. 土器類. 鍔帯金具	伊藤信雄・伊藤玄三・草間 俊一「岩手県金ヶ崎町西根 古墳と住居址」1968伊藤玄三 「末期古墳の年代について」 『古代学』14-3・4)
秋 田 県							
秋田城跡	秋田市寺内字焼山	○			堅穴住居 跡		考古ニュース(『考古学ジャーナル』第139号)1977
青 森 県							
	南津軽郡尾上村猿賀池上 3-2	1				前漢～元銭 10,501枚	工藤正「津軽平賀郡出土古 銭の一考察」(『東奥文化』 40)
北 海 道							
	函館市志海苔町247	1	1	4		隆平永寶2. 富寿 神寶4. 承和昌寶 1. 貞観永寶1. 延喜通寶1. 大甕	函館市立函館博物館「函館 志海苔古銭の流通史」白山 友正「志海苔古銭の流通史的 研究(『日本歴史』283) 1971
恵庭遺跡	千歳郡恵庭町茂漁地区	8				馬具	恵庭町教育委員会「恵庭 遺跡」1966
追 加							
恒川遺跡	長野県飯田市座光寺	1				富寿神寶1 緑釉陶器30片	考古ニュース(『考古学ジャーナル』第144号)1978
愛宕山遺跡	群馬県碓氷郡松井田町松 井田		○			巡方1. 石製九輪 2	阿部義平「鍔刀と官位制に ついて」『東北考古学の諸問 題』1976

この表は、小野真一、秋本真澄『駿河伏見古墳群』(沼津考古学研究所報告第4冊)と栄原永遠男「日本古代銭貨出土一覧表および附表、同その2」(『続日本紀研究』第169号・第178号)を基にして、若干付け加えて一覧表にしたものである。

2. 都地遺跡の掘立柱建物について

都地遺跡周辺は古くより鞍手郡の十市郷に比定されている地域であり、又近くより火葬墳墓など検出されていて官衙遺構であるかも知れないとも想定して発掘調査に務めた。結果は掘立柱建物跡16棟で出土土器より奈良時代後半頃のものと思われる。

遺構は全面発掘でないためまだ拡がりをもつと思われる南北は約 150 mであるが東西の範囲が分らない。建物の配置や方向をみると北群には明らかに統一性が認められるが南群は認められないようである。北群は直角に対応する建物があり、又柵か垣根と想定されるピット列もある。柱穴をみると建物総ての柱穴が二段掘りはなく、部分的に二段掘りの柱穴もあるがそれらは整然としていない、又素掘りの柱穴もまちまちである。

福岡県内でもいくつか奈良時代の建物跡が検出されており、大宰府関係を除いた他の比較的大規模なものに小郡市の小郡官衙遺跡や干潟遺跡、福岡市西区下山門敷町遺跡、粕屋郡篠栗町の和田部木原遺跡、近くでは鞍手郡宮田町の平原遺跡などがあり小郡遺跡は三井郡衙に比定されている。他に国内をみると各地に郡衙に比定されているが少なくとも都地遺跡よりは整然とし、柱穴もしっかりしている。都地遺跡の場合現状では総合的に郡衙とするには躊躇せざるをえない。しかし今後遺跡の東寄りが発掘調査される予定でありその結果では郡衙の可能性もでてくるかもしれない。他に官衙として駅や軍団、牧などがあるがそれらに想定することもできない。

しいて想定するならば前提に十市郷をこの周辺とする説に立つと、郷関係の遺跡として関連づけられる可能性はつよい。

3. 犬鳴川流域の奈良時代

汐井掛遺跡群の内、歴史時代の遺跡について報告し、火葬墳墓や掘立柱建物について述べてきたが最後に犬鳴川流域の奈良時代について概観して結語としたい。

既に奈良時代から平安時代にかけての遺跡として犬鳴川流域には（Y49）咲花遺跡、（Y57）都地遺跡、（Y9）柳ヶ谷遺跡、（Y2）若宮条里遺跡、（M51）平原遺跡、（M53）塔ノ峯遺跡、墳墓関係では（Y4）茶臼山墳墓、（Y53）都地原墳墓、（Y9）柳ヶ谷墳墓、（Y7, M1）汐井掛墳墓、その他水原、金丸、金生墳墓などが存在している。これらの内骨蔵器を伴う火葬墳墓が若宮町に集中していて、しかもそれらの骨蔵器の須恵器は奈良時代前半から平安時代にかけてのものでも火葬墳墓は総数で約20基も見られることは特筆される。又副葬品に皇朝十二銭の和銅開珎、万年通寶、神功開寶や刀子があり被葬者の身分的階級がしのばれる。

この骨蔵器である須恵器窯跡に宮崎窯跡があり灰原資料であるが短頸壺の上半が出土していて関連づけられるものである。

竪穴式住居跡が柳ヶ谷遺跡で3（？）基検出されており、都地遺跡、平原遺跡では掘立柱建物が検出されて特に都地遺跡では方向性をもつものもあり16棟ある。

塔ノ峯遺跡は石帯の出土したところで、石帯は丸軻である。

若宮平野の条里制については発掘調査も二度に渡り調査され、調査者の齋久嗣郎氏より復原案が提示されている。

以上のように犬鳴川流域における奈良時代から平安時代の遺跡について概観したが、律令体制の下の様相がうかがえる一方、今後郡衙や一郡一寺制とするならば寺院跡の発見や、墳墓群の解明、又皇朝十二銭の価値や流通社会、基本的な集落の発見など種々重要な多くの問題をかかえているというのが現状である。

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XX—

昭和 53 年 3 月 31 日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲 6 番 29 号

印刷 栄光印刷株式会社

福岡市東区大字箱崎下入道 800

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—XX—

付 図

1 9 7 8

福岡県教育委員会

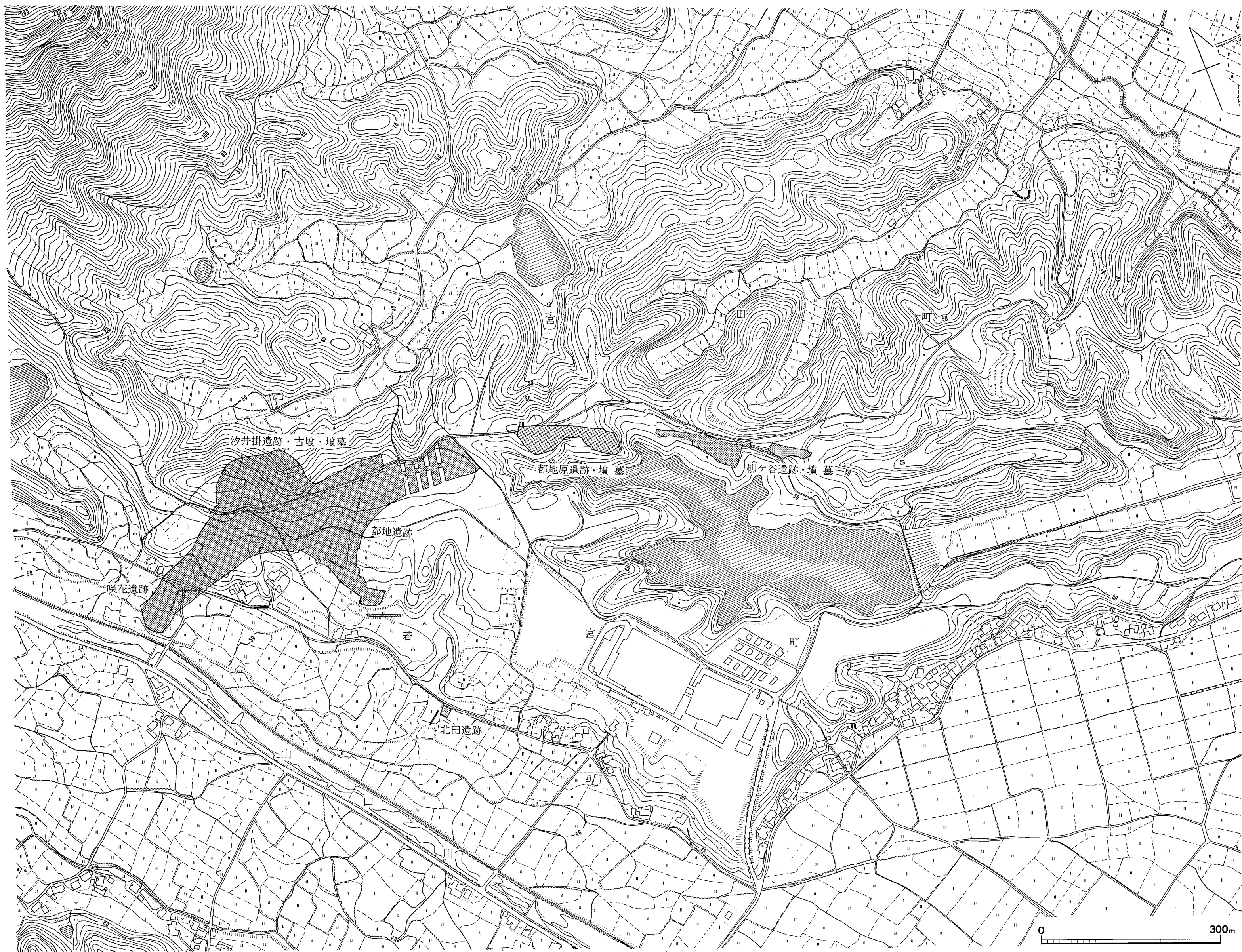


Fig.① 咲花遺跡・北田遺跡・都地遺跡・汐井掛遺跡群周辺地形図(縮尺 1/5,000)



Fig.② 咲花・都地・汐井掛遺跡群地形図(縮尺 1/1,000)

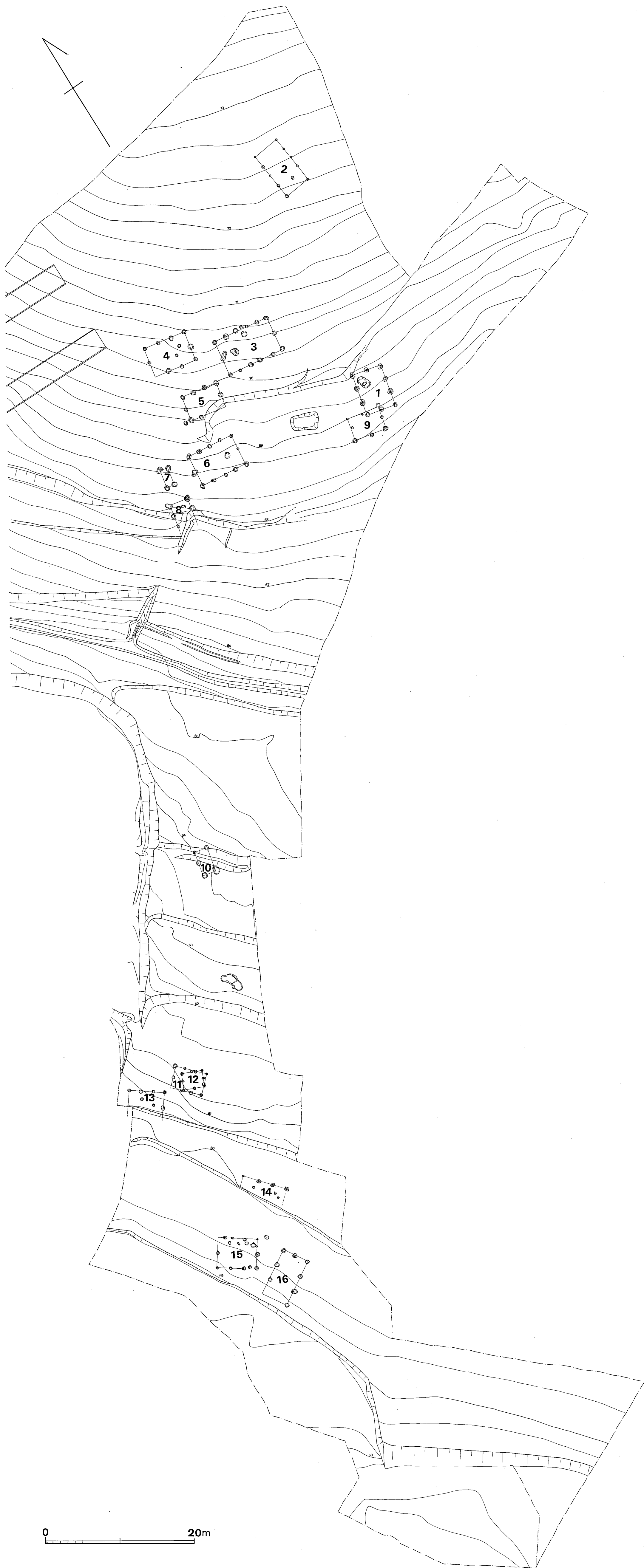


Fig.③ 都地遺跡地形図(縮尺 1/300)



Fig. ④ 都地遺跡遺構配置図(縮尺 1/300)



Fig ⑤ 沙井排遗址群地形测量图 (缩尺 1/400)

奈
良
時
代

平
安
時
代

鎌
倉
時
代

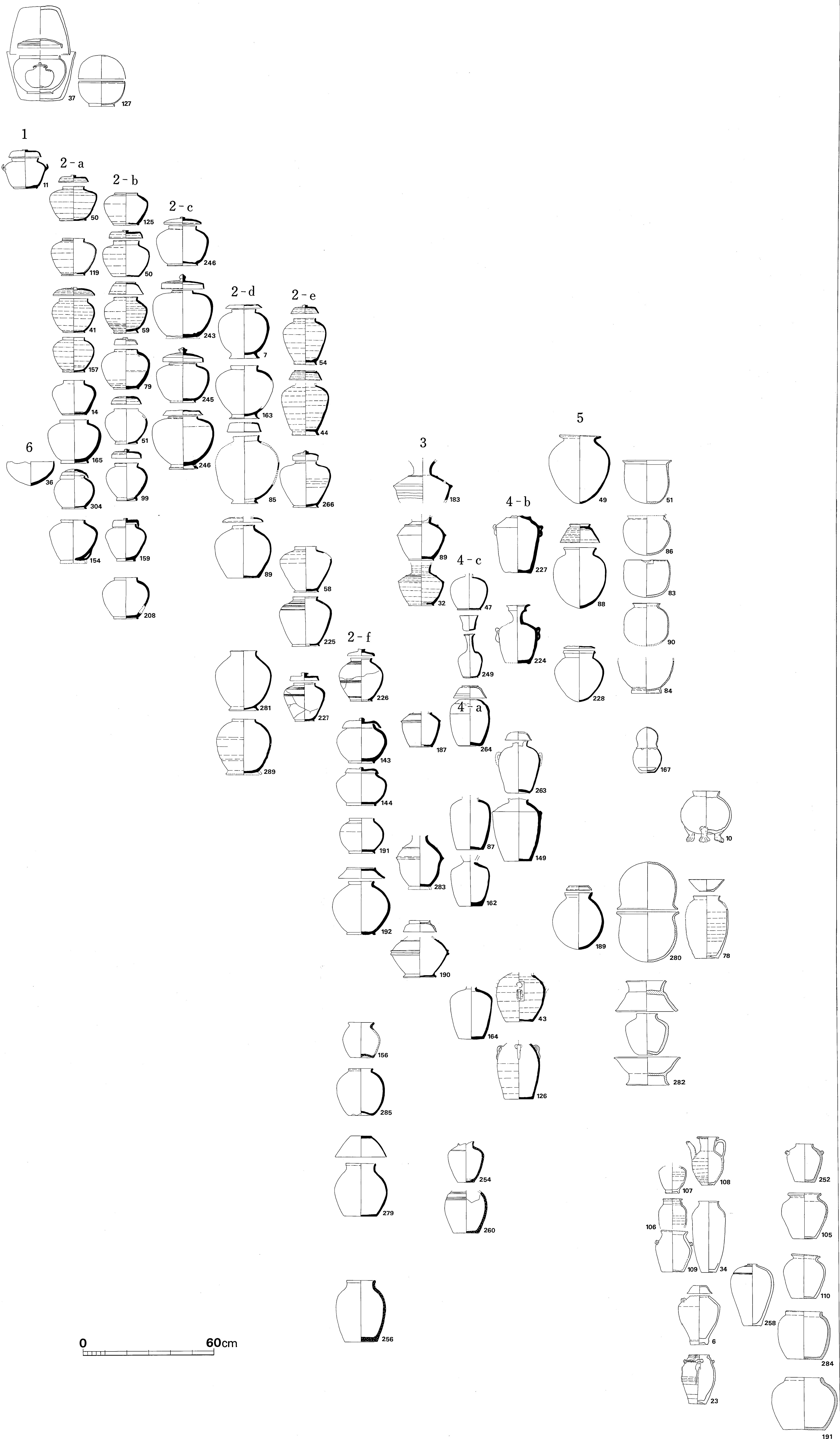


Fig. ⑥九州地方出土骨蔵器編年試案(縮尺 1/8)